

大成殿（孔子廟をいふ。孔子は群聖の道を集大成した聖人である爲にこの名がある。宋史、禮志「熙寧七年、詔、辟雍文宣王殿、以大成爲名。」）

(五) 君子事親孝。故忠可移於君。事兄悌。故順可移於長。居家庭。故治可移於官。是以、行成於内、而名立於後世矣。（孝經）

(註) 孝經（前出。本課は第十四廣揚名章の抄録。）

君子（一）高位高官の人。（二）德行ある人。（三）妻が夫を指していふ稱。ここは（二）の意。）

忠可移於君（君に仕へる上に移せば、忠義の道を盡すことが出来る。以下故…可移…の形はこれに準じて譯す。尙これは同じく「忠孝一本」を説く日本・支那の思想上の根本的相違で、即ち彼に於ては「孝」が「忠」に先立ち、我にあつては「忠」が「孝」の先である。）

可（可能・推量・當然・命令を表す助動詞。ここは可能。願讀する性質の文字。）
悌（兄に事へて柔順なること。）
長（長上。めうへの人。）

居家庭（家庭にあつてはよく家庭を治めていく。「理」は筋道を正しく治めること。治め整へること。）
治可移於官（役人となつては、家を理める道を移せば、よく天下を平に治めることが出来る。）

内（家内をいふ。）

是以（ココヲモツテ「ヲ」の送假名がある願讀しない古來の慣例である。）

八句例(四)

要旨

未・將・當等の文字を用ひて再讀する句法を授けて、これに習熟せしめる。

解説

【再讀文字】

漢文には「副詞」と「助動詞」との用を兼ねる文字を用ひて、これをそれぞれ副詞と助動詞とに再讀する。これを再讀文字と呼ぶのである。漢文「雌雄未決」は、國文では「雌雄未ダ決セズ」となる。即ち漢文中「未」の文字は「イマダ」（副詞）と「ズ」（助動詞）との兩様の用を兼ね、且これを再讀する。従つて再讀文字には右（副詞）左（助動詞）の兩傍下に送假名を施し、而も必ず願讀するのである。

【再讀文字の種類及び意義】

「未」 まだ……しない。」と譯す。

「將」 「欲然也。」と註し、これから（今にも・やがて）……せんとする。」と譯す。「既」の反語。

漢文初歩

且 「將」と殆んど同意。

「猶」 「依舊之辭也。」と註す。比較の場合に用ひ、「恰も（ちやうど）……のやうである。」と譯す。

「盍」 「どうして……しないのか。」と譯す。

「盍」は音「カフ」で何不（カフ）の二字に當る所から、此の文字を以て「何不」の意に代用したのである。

「宜」 「……するのがよろしい。」（奨慫）……しない。」（命令）二様の意味がある。

「當」 「……するのが當然である（……答である。……ねばならぬ。）」と譯す。「當然」の助動詞にあたる。

「應」 「料度之辭也」と註す。將に然らんとするを

はかる意で「やがて（恐らく）……するだらう。」と譯する。未來・推量の助動詞にあたる。

釋義

【雌雄】 シイウ (一)本來主として鳥獸のめすをす。(二)轉じて勝・負の意。史記・項羽紀「願與漢王一挑戰決雌雄。」ここは(二)の意。

【過猶不及】 スギタルハナホオヨバザルガゴトシ 論語・先進篇にある語。「子貢問曰、師(子張)與商(子夏)也孰賢。子曰、師也過、商也不及。曰、然則師愈與。子曰、過猶不及。」

度を過ぎたものはちやうど度に及ばないものと同様であり、何れも中庸をはづれて、これを正道とは言ひ得ないこと。

【尙志】 ココロザシヲタカクス 志を高尙に持つこと。孟子・盡心篇に「何謂尙志。曰、仁義而已矣。」とあり、朱註に「尙高尙也。志者心之所之也。」とある。熟して「シヤウシ」といふ。

「須」^{スベキカク}「用也。待也。求也。」と註す。「……するの」が必要である。……するのが大切である。」と譯す。

【勤勉】 キンベン つとめはげむこと。國語「勤勉以勸之。」

【芳名】 ハウメイ (一)芳しき譽。令名・令聞・名譽。

(二)他人の名の敬稱。尊名。ここは(一)の意。

【千載】 センザイ 千歳とも書く。千年。「千」は多い意で、「傳千載。」は、永遠の後まで傳へる、長く後世に残すなど譯す。

「載」は年の意。堯舜時代に「載」夏の時代に「歲」商の時代に「祀」周の時代に「年」を用ひたといふ。書經・堯典「朕在位七十載。」

【反覆】 ハンブク (一)本へもどすこと。くりかへすこと。史記・屈原傳「欲反覆之、一篇之中三致意。」(二)ひるがへす。言行に定りのないこと。漢書・韓信傳「齊夸詐多變、反覆之國。」ここは(一)の意。

【講習】 カウシフ 學問技藝などの講義を學習すること。

指導上の注意

本句例は初めて漢文を學ぶ生徒には、全く新しい知識であつて、奇異の感をさへ抱かしめるのではないかと思ふ。従つ

て一方に漢文の粗し難さを感じしめると同時に、他方好奇的な感情を喚起しやすいであらう。かゝる好奇心を巧みに把へて、漢文學習への自發的興味を誘發するやうにする、そこに漢文初歩教授の工夫が存し、またそれが教授の成功不成功の鍵である。此の爲には、すべて理窟はこれを廢し、多くの練習題等を課してこれに習熟せしめ、かゝる規則の習得によつてかゝる漢文を讀み得るに至つたといふ、彼等自身の自負心を助長して、自然に自得せしめるやうに導いてゆくべきである。

練習題

- (一) 我未通漢文。一鳥未去。一鳥更來。吾未遊海外。
- (二) 敵將來攻。我將上京修業。吾且親行訪友。
- (三) 臣事君。猶子事父也。人之一生猶行旅。我之有孔明、猶魚有水。兄弟猶兩手。
- (四) 諸子盡言其志。汝盡勵其業。平替源興。盡降木曾。
- (五) 學者宜以修身爲本。遊兵宜擊敵背。宜慎言敬行。
- (六) 中軍當破敵中堅。及時當勉勵。歲月不待人。
- (七) 學生當須勵學業。須讀書明道。立志須爲天下第一等之人。

九 毛利元就幼時

頼 山 陽

要 旨

前句例の應用として再讀文字を含む漢文であり、これが習得を主眼とすべきは勿論であるが、本課は殆んど既習の全形式を具へた漢文であるから、句讀點・訓點等全般に互つて整理的に學習を進め、本書採録の練習題等をも補充して、これを徹底的に會得せしめて、漢文初歩の前期を完了したい。これを内容的には、名將毛利元就の非凡なる少年時代の立言を味はひ、立志の切要なる所以を知らしめて、以て生徒自身の立志の機縁たらしめる。

解 說

【作者】 頼 山陽 ライ サンヤウ

江戸時代の文學者・歴史家。名は襄、字は子成、通稱は久太郎、山陽又は三十六峯外史と號した。安藝國加茂郡竹原郷の人。父は頼春水である。幼にして俊敏、學を好み詩文に長じた。十八歳の時叔父に伴はれて江戸に出で、尾藤二洲の門に入つて大いに頭角をあらはし、文化七年菅茶山に招かれて備後に下り、その塾生を監した。三十三歳歸洛して此處に止り、家塾を開いて子弟を教へた。此の間屢々諸侯に聘せられたが、一切これを辭して仕へ

ず、専ら母に事へて孝養を致した。天保三年九月歿。享年五十三。

人となり忠孝信義に篤く、勇壯にして慷慨の氣魄に溢れてゐた。其の學は黨派に偏せず、活眼を以つて時勢を達觀し、その著「日本外史」は全國津々浦々の人に愛誦せられ、尊王の精神を鼓舞する上に力があつた。また中年全國を歴遊して文をなし、大いにその文名を轟かした。著書には前記「日本外史」の他に「日本政記」「日本樂府」「通議」「山陽文集」「山陽詩鈔」等がある。

出典 日本外史 全二十二卷

我が國の武家の歴史で、源平二氏に筆を起し、以來徳川氏に至るまでの武家の興亡を各家別に記し、其の間史論を挿んで名分を明かにした漢文書。漢の司馬遷の史記世

釋 義

【毛利元就】 マウリモトナリ 戰國時代の名將。安藝國郡

山城主毛利弘元の次子に生れ、宗家を襲いだ。初め尼子氏に後大内氏に従つた。天文二十年陶晴賢がその主大内義弘を弑するや、元就は起つて晴賢を嚴島に討つて主家の仇を報じ、遂に大内氏の地を併せて次第にその勢威を張り、大友氏・尼子氏等をも漸次これを滅して、山陽山陰の十ヶ國を領有して中國に覇を唱へた。尊王の志に篤く、永祿三年正親町天皇御即位大禮の資を献じた。また歌をよくし、家集「春霞集」の一著がある。元龜二年歿。享年七十五。明治四十一年正四位を追贈せられ、別格官幣社豐榮神社に祀られた。

【小字】 セウジ 幼小の時の呼び名。幼字・幼名・小名ともいふ。「字」は「アザナ」と訓じ、實名の外の呼び名をいふ。曲禮に「男子二十、冠而字。」とあり、「小字」に對しこれを「且字」(シヨジ)といひ、更に五十歳にして

改めるものを「正字」といふ。

【比】 コロ「頃」に同じ。顧讀する性質の文字である。

【髻髻】 テウシン 上下顛倒して「髻髻」とも熟す。垂髮して齒の脱げ代る七八歳の子供のこと。

【髻】 は俗に「鬮」に作り、(一)男女兒の垂髮。(二)轉じて幼少の子供。「髻」は別に「亂」とも書き、(一)齒の脱げ代ること。説文「男子八月生齒、八歲而髻。女子七月生齒、七歲而髻。」(二)轉じて幼少の子供。

【詣】 マウヅ (一)神社佛閣に參詣すること。(二)「イタル」と訓じて「ゆく」「すむ」の意。こは(一)の意。

【嚴島神社】 イツクシマジンジャ 官幣中社。安藝國の一の宮。市杵島姬命・田心姫命・湍津姫命の三女神を祀る。推古天皇の御代、三女神の神託があつて創建されたと傳へられてゐる。平家一門の尊信する所となり、神社の基礎はこの時に成つた。龜山天皇文永七年火災に罹つて燒

失したが間もなく改築造営され、嚴島の戦にも幸に炎上を免れて今日に至つた。神社は嚴島の北端海邊に鎮座し、前に聳える大鳥居は、満潮時には海中にあつて、参詣者は白帆を掲げて通ることが出来る。拜殿左右の回廊、その前の平舞臺・高舞臺の百八の鐵燈籠など、社殿の美觀は周囲の風光と相映帯して、まことに日本三景の一たる名に背かぬ景觀を呈する。

「嚴島」は廣島縣佐伯郡に屬し、宮島とも呼ぶ。全島悉く花崗岩よりなり、島中彌山(御山)は海拔五三五米。日本三景の一として、また嚴島神社及び毛利元就義戰の地として、古來その名を知られて居る。

【神祠】 シンシ 神の社。ほこら。

【既】 スデニ 「ニ」の送假名があるが、副詞であるから顧讀しない。(四・徳川光圀、参照)

【從者】 ジユウシヤ 主君のともびと。論語・八佾「從者見之。」

【汝輩】 ナンチガハイ 汝等。「輩」はともがら・やからの意。

【何祈】 ナニヲカイノレル 何を祈つたか。最も簡單な疑問法。(六・人、参照)

【郎君】 ラウクン (一)令息。若様。若だんな。通鑑綱目の註に「今世俗多呼其主爲郎主。又呼其主之子爲郎君。」とある。

郎君。」とある。(二)妻が夫を呼ぶ稱。(三)唐代新に進士に及第したものの稱。ここは(一)の意。

【安藝】 アキ 今の廣島縣の西半部の地。

【霸】 ハ (一)正道に對し、武力又は謀術を以て治國の政策とすること。(二)諸侯の長。はたがしら。(三)ある範圍内又は部内で頭首となるもの。ここは(三)の意。

【天下】 テンカ 日本國內の意。(六・人、参照)

【夫】 ツレ 發語の辭。

他に「カノ」と訓じて指示の辭となり、また「カナ」と訓じて感歎の意を表す。論語・憲問「告夫二三子。」は前者、同子罕「逝者如斯夫。」は後者。

【一方】 イツバウ 半分にした片一方。即ちここでは天下を兩分したその片一方の意。

【矣】 四・徳川光圀、参照。

【所成】 ナルトコロ 成就する所。

所は「顧讀する性質の文字」ヲ・ニ・ト・ヨリ」の送假名がなくて顧讀する所以である。

【可知已】 シルベキノミ 大方知ることが出来る。

「可」は可能の助動詞。顧讀する性質の文字であるから、「知」といふ動詞から顧讀する。「已」はここでは意味を強めて、「大方」位の副詞に譯す。詳しくは四・徳川光圀参照。

【奇】 キ (一)くすし。不思議。(二)並々ならずすぐれてゐること。奇才・奇童など熟す。(三)めづらしいこと。

ここは(一)の意。

【之】 コレ 元就を指す代名詞。四・徳川光圀、参照。

指導上の注意

本課を以て漢文初歩教授の前期を終るのであるが、既に屢々繰返した如く、反復練習して専ら漢文口調に習熟せしめることを主眼とする初歩教授に於ては、そのために出来る限り多くの實例に即かねばならない。本課の如く漸く複雑な文に至るに及んでは、特に類例に就いての學習が要求せられる譯である。次に掲げる練習題など利用せられて、整理的に、總復習的に十分の練習を希望するものである。

練習題

(一) 酒井忠勝、好讀書、每夕使儒臣侍講、限以乙夜。雖公事繁劇、未嘗廢懈。每語人曰、坐而知數萬里之外、數千載之上。何樂加焉。(昭代記)

(註) 昭代記(鹽谷世弘著。十卷。徳川累世の政績を記して國恩に報ぜんとして稿を起したが、秀忠・家光の事蹟を記述したのみで病歿した。)

酒井忠勝(忠利の子。十四歳秀忠に従つて關ヶ原の戦に初陣す。寛永四年川越の城主となり、以來幕府の大政に參し、十五年大老職となる。)

儒臣(儒者の臣。儒者は儒學を修めた人。)

侍講(側近く侍して講義すること。君側侍して書を講ずること。)

漢文初歩

乙夜（イツヤ）今の午後十時。漢以來甲乙丙丁戊を以て夜間を分ち五夜といつた。甲夜（午後八時）乙夜（午後十時）丙夜（午後十二時）丁夜（午前二時）戊夜（午前四時）である。

繁劇（いそがしいこと。多忙。）

未嘗——（まだ一度も……しない。）

廢懈（やめたりなまけたりすること。）

上（カミ。昔。古。）

焉（コレ。「於之」の合字。）

(一) 衆人居_レ富、多忘_レ貧。須_ニ節儉_ニ而無_ニ奢侈_ニ。歲長_ニ多忘_ニ父母_ニ。須_ニ終身_ニ思慕_ニ。病癒_ニ多忘_ニ慎_ニ。須_ニ常思_ニ病苦_ニ時_ニ。凡自_レ修者_ハ當_ニ以_レ忘_レ初爲_レ誠_ニ。（慎思錄）

(註) 慎思錄 貝原益軒著。六卷。宋儒の語録に擬して、益軒が其の道德的思想の斷片を集録したもの。我が邦に於ける語録中の白眉といはれてゐる。

當以忘初爲誠（初のことを忘れないやうに誠めねばならない。）

(三) 臬逢_レ鳩。鳩曰、子將_ニ安_ニ之_ニ。臬曰、我將_ニ東徙_ニ。鳩曰、何故。臬曰、鄉人皆惡_ニ我_ニ。以_レ故_ニ東徙_ニ。鳩曰、子能_レ更_レ鳴_ニ。不_レ能_レ更_レ鳴_ニ。東徙_ニ人猶_ニ惡_ニ子_ニ之_ニ聲_ニ。（說苑）

(註) 說苑（ゼイエン）漢劉向の著。二十卷。逸事の法戒とすべきものを集録した書）

安（イツクニ）

之（ユク）

鄉人（里人。村人。）

鳴（唯聲。）

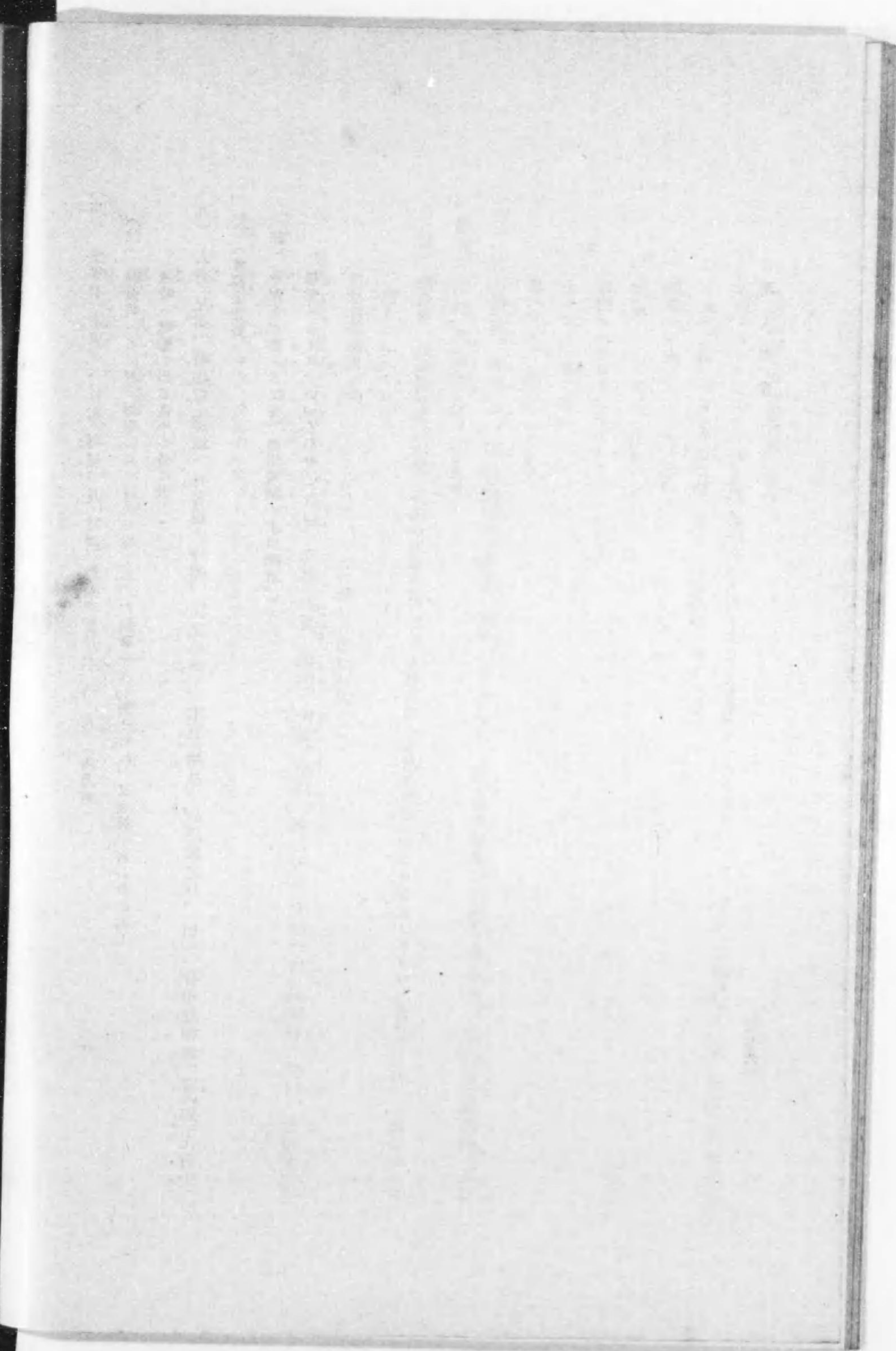
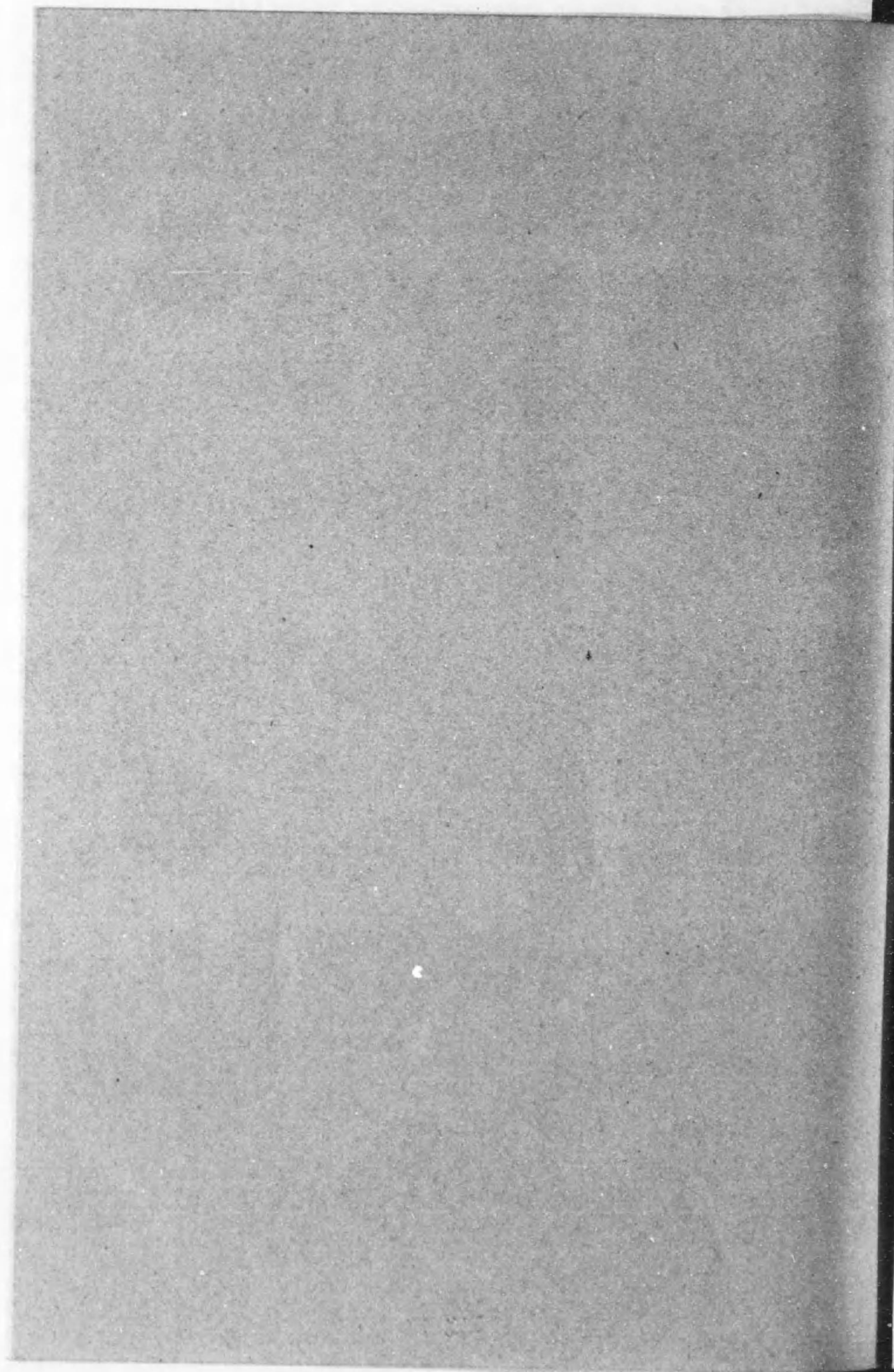
(四) 盛年不_ニ重來_ニ。一日難_ニ再晨_ニ。及_レ時當_ニ勉勵_ニ。歲月不_レ待_レ人_ニ。（陶淵明）

(註) 陶淵明（名は潛。博學にして詩文を能くし、六朝第一人と稱せられ、又高節の名一世に高し。）

(五) 人有_ニ兄弟_ニ、則必有_ニ長幼_ニ。身者親_ニ之分體_ニ。而兄弟猶_ニ一木_ニ有_ニ兩枝_ニ。故恩愛_ニ之意_ニ、如_ニ一身_ニ相助相救_ニ。當_レ如_ニ左右手_ニ矣。（會澤正志齋）

(註) 會澤正志齋（名は安。徳川末期の水戸學者。）

恩愛（なさけ。いつくしみ。）



醇正國語 教授參考書 卷二

目次

一 明治節唱歌	(文部省撰定)	一
二 明治神宮	溝口白羊	九
三 岡に立つて	長塚節	三五
四 渡り鳥	松本亦太郎	五
五 相模灘の落日	徳富蘆花	六
六 宿か	志賀直哉	六
七 猫の垣巡り	夏目漱石	六
八 山陽と法海	南條文雄	一九
九 秋草の原	若山牧水	二四
一〇 良寛さま	北原白秋	二八
一一 毛毯つきつつ	良寛	二九

目次

一 野	長尾宏也	二六
二 落葉	島崎藤村	二八
三 茶の花	薄田泣菫	二九
四 峠の回想	藤木九三	三〇
五 新年山	千葉胤明	三一
六 伊勢参宮	五十嵐力	三二
七 旅愁	前田夕暮	三三
八 湖畔の冬	島木赤彦	三四
九 吹雪	村井弦齋	三五
一〇 安井息軒	森鷗外	三六
一一 土の歡喜	河井醉茗	三七
一二 櫻井驛	松居松翁	三八
一三 國史に還れ	徳富蘇峯	三九

漢文初步……………三六〇

一 明治節唱歌

一 解題

1 文部省撰定に就いて

昭和三年三月三日、明治節が國家大祭日に定められ、學校諸官衙等に於て舉式せられることとなるに及んで、同年十月三日文部省告示第三百六十九號を以て本唱歌は撰定せられた。當時の文部次官栗屋謙氏を委員長として撰定委員會を設け、懸賞募集した時一等に當選したものに相當修正を加へたのがこの歌詞である。随つて原作者はあるのであるが、審査規定によりこの著作権は文部省の所有となつてゐる。文部省撰定の名を以て發表し、作詞者の名を表さないのは此の爲である。尙本唱歌の歌曲も同じ委員會で懸賞募集して、一等に當選したものに修正を加へたものであつて、これも原作者の名前は發表しない事になつてゐる。

2 主眼及び採擇の趣旨

卷一を學習し終つて本卷に移るのは、恰も明治節に間もない頃であらう。随つて此の唱歌練習の機会も多い筈である。此の際これが檢討考究の意義深きことを思つてこれを卷頭に配した。明治天皇の聖德鴻業を偲び奉り、大帝に對し奉る欣仰敬慕の念を深め、大帝の聖恩に報へ奉るべき國民の覺悟を促し、以て日本精神の涵養に資すべき國民的教材である。

二 解釋

一 明治節唱歌

1 語釋

【明治節】メイヂセツ 四大節（四方拜・紀元節・天長節・明治節）の一。明治天皇御誕辰の日（十一月三日）を記念し奉る大祭で、昭和三年三月三日勅令を以て設定せられた。これより先、明治大帝の聖德鴻業を追慕欽仰し奉る全國民誠意の結晶は、大正八年明治神宮の建設となつて現はれた。（次課明治神宮參照）爾來御祭神明治天皇御誕辰の日を例祭日とし、神宮に對し奉る全國民の尊敬崇拜の念は年と共に篤きを加へたのであるが、而も尙國民の大帝を欽慕し奉る念はこれを以て満足せず、此の例祭の日を以て國家の大祭日とせらるべしとの輿論が漸く世上に高く、終に昭和三年帝國議會に臨時動議として提案せられ、貴衆兩院一致の協賛を以てこれが設定を請願し奉つた。今上天皇はこれを喜納あらせられて、此處に同年三月三日詔書を以て公布せられるに至つたのである。

【唱歌】シャウカ（一）歌を歌ふこと。（二）教育學上、聲樂曲の一形式。品性の陶冶・感情の融和を目的とする小學校の教科目の一。こゝは（二）の意。

【亞細亞】アジア Asia 亞細亞洲のこと。六大洲の一で東半球の東北部を占め、面積は約四千四百平方千方。世界陸地の約三分の一に當る。我が日本を始め中華民國・シヤム・ベルシャ・アフガニスタン・ネパール・滿洲國等の

獨立國があり、その他は歐米諸國に分領されてゐる。

【日出づる處】ヒイづるトコロ 我が日本帝國の別稱。日本書紀纂疏に「日本吾國之大名、在於日所出也」とある如く、此の語は、もと東半球の極東に位する帝國の位置から生まれたものであらう。隋書・倭國傳に「大業三年（中略）遣使朝貢（中略）其國書曰、日出處天子致書日沒處天子、無恙。帝（隋煬帝）覽之不悅」とある。これは我が推古天皇の隋に遣はれた國書で、爾來「日出づる國」は我が國の美稱の如く用ひられ、「日本」の國號もこれに基づく呼稱である。

【聖の君】ヒジリのキミ 聖天子。聖德の高い君子。こゝは勿論明治天皇を指し奉る。

【聖】は（一）日の吉凶を知るの意より聖天子・天子のこと。（二）學德具足した聖人。（三）聖僧。高僧。又その尊稱。（四）清酒の雅稱。こゝは（一）の意。

【現れまして】出現遊ばされて。「ます」は尊敬の助動詞。

【天地】アメツチ（一）天と地。（二）宇宙。（三）世の中。（四）かみしも。うへした。こゝは（三）の意。

【古き天地】開闢以來悠遠なる歴史を有する日本國の意。「天地」の下には「を」といふ格助詞が省かれてゐる。

【霧】キリ 天下を毒し民を苦しめ世を暗くする失政弊風惡俗などを「霧」に譬へた。

【古き天地とさせる霧】明治維新前、特に徳川時代を指してゐる。當時國政を壟斷してゐた徳川幕府は、畏くも皇室を無みし奉るが如き不敬をすらも敢てし、また鎖國政策を固守して外來文明の輸入を杜絶したのみならず、國民の海外發展の進取的氣象を消磨して、徒らに國內に踞せしめる結果を招いた。一方地方行政に至つては、これまた封建諸侯の専恣に委せられ、且士農工商の階級制度は嚴として堅く、士は生殺の權をすら掌握して、一般庶民階級の榮達の道の如き全くとざされてゐた。殊に官職世襲の結果は暗君愚役人の暴政となり、民を塗炭の苦に陥れる事も屢々であつた。かゝる時世にあつては、一般國民はまことに濃霧に閉ざされたる如き暗澹たる生活に甘んぜざるを得なかつたのであつた。

【大御光】オホミヒカリ 天子の御威光。天子の御稜威。「大御」は、或語に冠して尊敬の意をあらはす接頭語。大御燈・大御歌・大御食・大御門など、主として神・天子に關する語に添へ用ひる。

「光」はこゝでは、いきほひ・威光・みいつなどの意。

【限なし】クマなし（一）曇がない。陰がない。（二）へだて心がない。かくす心がない。（三）行きとどかぬ所がない。こゝは（三）の意。

【大御光に限なくはらひ】

明治維新の大業を樹立せられた事をいふ。徳川慶喜より大政奉還を嘉納あらせられるや、親しく萬機を總攬せられ、まづ五ヶ條の御誓文を公布せられて國是の大本を明にせられ、廢藩置縣を行つて中央集權の緒を開き、また徵兵制度を設けて國民皆兵の實を上げ給ふなど、諸の官制を一新して國民の爲に光明希望の世を招來せしめ給うた。御寶算二十に満たぬ御若年にましまして此の大業を果させ給うた事は、もとより現人神にまします御威光の自ら然らしめた事は勿論であるが、後代、不世出の聖天子と内外等しく仰ぎ奉る偉大なる御天賦にも依存するこゝとも思はざるを得ない。

形式的には前句の「霧」に關聯して御稜威を「大御光」とし、また「はらひ」と縁語を以て歌ひ續けたものである。

【教あまねく】教育が津々浦々まで普及するやうに。「教あまねく——治め給へる」とかゝる。

教育の普及如何は一國文化を測る尺度ともなるものであり、その振不振は國運の消長に關する所が極めて大である。明治大帝には夙に御心を此處に止めさせられ、教育の振興には特別な御關心を抱かせ給うた。即ち明治四年には既に文部省を設置して教育の事を掌らしめ、翌年には學制を頒布し、十二年これを廢して教育令を制定し

て義務教育制度を確立し、十四年には中學校師範學校規則の大綱を頒たれ給ふなど、近々五十年に滿たぬ間に、世界に比類を見ぬ教育の普及を致したものは、誠に大帝の大御心に依るものと言はねばならない。

【道明らけく】ミチアキラけく 國家の據つて立つ道、國民の從つて履踐すべき道、その道を闡明にせられて。

「道明らけく——治め給へる」とか、「明らけく」と「治め」とには「明治」の年號を分ち詠み、明治天皇の御名前を表し、同時に「明治」の御代のよく治まつた事を併せ述べたものである。

畏くも教育勅語に「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス 之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と宣はせ給うた如く、その時々々に宣布せしめ給うた詔勅・詔書等は、すべてこれ我が帝國と國民との當爲の大道を諭示し給ひ、またあまねく天下の公道を明示せられたものであつた。明治の大御代は實に此の大道の上に立つて、正々堂々、内、國力を充實し、國威を四海に宣揚し來つた時代であつたと言へよう。

【尊】タフト 「タ」は發語「フト」は「太」でほめる語といふ。「尊し」と同じ。

【惠の波】メグミのナミ 行きわたらざるなき御仁慈。「八洲」の「洲」に縁をもとめて「波」と譬へた。

【八洲】ヤシマ 「八島」とも書く。「八洲國」の略。大八洲

敬語の助動詞で「寄す」の未然形に續いてゐる。聞かす。知らすなどと同類の語である。寄せ任せて執り行はしむ。任せ給ふ。

【御業】ミワザ 「御」は美稱。「業」は(一)爲すこと。仕事。事業。(二)つとめとすること。職とすること。(三)しかた。方法技術。(四)法事。佛事。こゝは(一)の意。

【神の依させる御業】天孫降臨の御神勅に明示されて、以來御歴代の相承け給ひ來つた御事業。寶祚を天壤無窮に傳へ、國威を宇内に宣揚し給ふべき御事業で、所謂八紘一字の建國の大精神に立脚した事業を指す。

【榮行く】サカユク 「榮え行く」の古語。次第に榮え行く。益々榮えて行く。

【外つ國】トツクニ 外國。

【史】フミ 歴史。

【著し】シルシ いちぢるしい。きはだつてゐる。

【畏】カシコ 「畏し」の略。恐れおほい。勿體ない。

【よき日】めでたい日。「よし」は、ここでは「めでたい」の意。

【ことほぐ】「言祝ぐ」「壽ぐ」と書く。(一)ことばで祝ふ。喜びを述べる。(二)轉じて喜び祝ふ。こゝは(二)の意。

【定めましける】御定めになられた。「まし」は尊敬の助動詞。「ける」は過去の助動詞。

國、即ち「日本國」の一種。古事記上に伊邪那岐・伊邪那美の御二柱の神が御合ひまして、淡道嶋・伊豫之二名嶋(四國)隱岐嶋・筑紫嶋(九州)伊伎嶋・對島・佐渡嶋・大倭豊秋津嶋(本州)の八嶋を生みなし給ひ、よつて「大八國」といふ、と記してあり、日本書紀には「大八洲國」の文字が用ひられてゐる。以來公式令・詔書式・朝廷の大事に用ひる詔等には「明神御宇大八洲天皇」と記し、「八洲國」「大八洲國」は日本の別稱となつた。

【御稜威】ミイツ 「御」は敬稱。「稜威」は(一)嚴靈な威光。強い勢。神代紀上「奮稜威之雄叫發稜威之噴讓」(二)忌み淨めること。こゝは(一)の意。

【御稜威の風】は「惠の波」と對にした譬喩である。

【海原越えて】ウナバラコえて 海外にまで行き互つて。「海原」はひろびろとした海。滄海。

【御稜威の風は海原越えて】

日清・日露の兩戰爭に大勝を博して臺灣・樺太の新領土を加へ、朝鮮を併合して舊に倍する國土を領有するに至つたことはもとより、かうした具體的事實により世界の耳目を聳動せしめ、日本の存在を確認せしめて、遂に一等國の列に加はらしむるに至つた發展ぶりは、眞にこれ御稜威の然らしむる所であつた。

【依さす】ヨサす 「寄さす」「任さす」とも書く。「す」は

【御憲】ミノリ 「御」は敬語。「のり」は「法」「則」とも書く。(一)一定の道理。一定の教理。(二)のつとるべき物事。法則。法令。(三)模範。規範。(四)佛語として(イ)佛法。佛教。(ロ)佛事。法事。こゝは(二)の意。

【定めましける御憲】大日本帝國憲法を治めとし、國民生活の規範たるべき萬般の法令規則は全く明治時代に於て整備した。これに據れば即ち國民の生活は安定し、これに従へば即ち天下の公道に合する。眞にこれ國民の崇敬遵法すべき御憲である。

【詔勅】ミコト 「みこと」はもと「言」の敬稱。おほせ。みこと。こゝで「詔勅」の字を當てたのは、詔書・勅語・勅諭等すべてを含んでゐるのである。

【諭しましける詔勅】教育勅語・成中詔書或は軍人勅諭など、諸々の詔勅は國民として、また更に廣く「人」として、古今中外に施して悖らざる公道であつた。これを守り奉れば、内、國にあつては忠臣孝子たるべく、廣く天下に施しては至公至平眞に有爲有能なる人材たるを得るものである。

【代々木の森の代々長へに】ヨヨギのモリのヨヨトコシへに「代々木の森が明治神宮鎮座の地として永久に絶えることがない如く、末々の世まで」の意。

「代々木の森は」東京市南豊島の御料地(次課明治神宮

参照「代々木の森の」は、明治神宮鎮座の場所を申上げると同時に、下の「代々長へに」の「代々」を歌ひ起さん爲の序詞となつてゐる。随つて「森の」の「の」は、ここでは「の如く」の意を表す助詞。

【大帝】 オホミカド 明治大帝を指し奉る。
「大」は敬稱。「みかど」は、(一)門の敬稱。(二)皇居の門。宮門。禁門。(三)皇居。(四)轉じて天皇の尊稱。ここは(四)の意。

2 文の構成

第一節 明治天皇が維新の大業を成就せられてよく天下を平治遊ばされた事を稱へ奉る。

第二節 御稜威を八紘四海に輝し給うた御事業を稱へ奉る。

第三節 明治節を祝ふ日に當つて天皇の遺し給うた御憲詔勅を尊崇遵守し、御聖恩に報ひ奉るべき國民の覺悟を述べる。

3 文意

第一節には、よく維新の大業を達成し、文明開化を致し給うた明治天皇の洪業聖徳を稱へ奉つたものであり、専ら内治の方面に就いて歌ひ、第二節には、眼を國外に轉じ、御仁慈御稜威を八紘四海に遍漫せしめて、建國の大理想を具現し給うた事業を讚美し奉つた。かくて第三節に於て、此の聖帝の御誕辰の日を祝し奉るに當つての國民の覺悟を示して結語としてゐる。

4 鑑賞批評

一般歌曲の歌詞が、その本來の性質上飽くまで藝術的たらん事を要求されるに對して、祝祭日唱歌の歌詞は、専らその祝祭日の意義を闡明ならしめる事に重點を置く。のみならずこれはまた一般國民大衆の唱和に適ふべき要求も忘れられてはならない。随つて此の目的要求の爲に、藝術的要素は屢、第二義的地位に甘んぜざるを得ないであらうし、時にまた時代の國民大衆の文化水準にまで引下げられねばならないのである。

成程明治節唱歌の歌詞は、他の祝祭日唱歌のそれに較べて遙かに藝術的である事は認められるであらう。これはこの製作の時代の國民文化のより高い水準を示すものであると同時に、莊重雄大な歌格は、眞に明治大帝の聖徳鴻業を稱へ奉るにふさはしいものである。而も尙これを藝術的觀點に立つて評するならば、餘りにも類型的で、作爲の跡があらはである事を否み得ないであらう。寧ろ此の歌詞の勝れた點は、その整然たる結構にあるのであつて、この點祝祭日唱歌の本義に添ひ得たものであると言ひ得るのである。初節に内治を歌ひ、次節に外交に轉じ、これを結ぶに國民の覺悟を以てする、その運びにいささかの弛みもなく、要所要所をしつかりと抑へて、鴻大無邊なる明治大帝の御仁慈御稜威に對する新なる認識を呼びさまし、自ら國民の覺悟を促してゐるのである。稍、語句が難解に失するといふ巷間の批評は、一般國民大衆の唱歌を目的とする立場からすれば、一應肯定される所ではあるが、これは藝術的たらんとする要求の爲に止むを得ない結果であり、その藝術的高度の爲に、無意無識の間に民衆の精神に及ぼす影響といふ事を考へれば、巷間の批難を償うて足るものがあるのではあるまいか。

三 備 考

1 指導研究

(一)本課は次課「明治神宮」と直接關係する教材であり、二者配列取扱の先後に就いては多少の異議があらう。或は「明治神宮」の創立の由來に就いて學び、豫備的知識を豊富にして、然る後、此の唱歌を配することにより多くの便宜があるといふ考へ方も成立する。編者は取扱の時期及び書物の體裁等を考慮して、これを巻頭に置いたのであるが、教材の進度或は生徒の豫備知識等の考慮のもとに、これが取扱を前後せしめる事は、教授者の機宜の處置に俟つものである。

(二)祝祭日唱歌が全く形式的に唱和せられて、その歌詞の持つ意義の如き何等意にも留めなかつたのが從來の傾向であ

る。これは自然主義・個人主義的な象牙の塔に閉ぢこもつてゐた唱歌教育にもその責があるのではあるが、同時にこれに對する自覺の眼を開かせなかつた國語教育にもその責の一端はある。本課は明治節唱歌の意義を闡明にするは勿論、更に一般祝祭日唱歌に對しても明瞭な自覺と關心とを持たしめたい。

(三)唱歌には歌詞と同時に歌曲がある事は言ふまでもない。而してまた歌曲あつての歌詞であり、歌詞あつての歌曲であり、互に對等の意義を持つもので、一方を君主的に、他を從屬的關係に於て考へる事は出来ないものである。併しながらこゝではその歌詞が國語教材として取扱はれるのであるから、隨つて歌曲を離れる事は已むを得ないであらう。唯此の場合音楽教育の領域を侵害しないやう細心の注意が拂はれる必要はある。

二 明治神宮

溝口 白羊

一 解題

1 作者

溝口白羊 ミゾグチハクヤウ 名は駒造。明治十四年六月大阪市に生まれた。三十八年早稻田大學法律科を卒業。既に十七歳の頃から詩作を始め、文庫・新小説・中央公論・早稲田文學等の諸雜誌に發表し、後、雜誌「女子文壇」を編輯した。詩人としては文庫派詩人に終始した人で、三十九年詩集「ささぶえ」を上梓して後は殆ど詩筆を斷つた。

著書には前記詩集「ささぶえ」の他、文集に「明治神宮記」「赤い火の舟」及び「新譯萬葉集」「譯註徒然草」「増鏡新講」「平家物語解義」「源氏物語講義」等の古典研究の書がある。

2 出典

「明治神宮記」から採つた。「明治神宮記」は内容を「神域大觀」「社殿と林泉」「外苑一斑」「明治神宮と明治天皇」の四綱目に分つて詳述し、これに對する作者の敬虔な感想を述べたもので、明治神宮に關するあらゆる記事は略この中に完備されてゐる。内閣總理大臣原敬・内務大臣床次竹二郎・明治神宮造營局長塚原清治等の序文を添へて大正九年十一月日本評論社から出版された。

本課はその中、「神域大觀」中の一節「森嚴美と幽邃美とを兼ね併せたる明治神宮」と題する一文を採録したのである。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課「明治節唱歌」によつて、明治天皇の御聖徳を偲び、明治節の由來する所に就いて學んだ後、こゝに明治神宮參拜記を掲げる。作者はその御造營を回顧し、更に御造營を完成せしめた原動力としての明治天皇の御聖徳と昭憲皇太后の御懿徳とに思を致し、更に祭神二柱に對する全國民の赤誠とを思ふ事によつて、神城の森嚴優雅幽邃なる特質を敘し、その特質はつまり、我が國體の精華の發揚に外ならぬことに強い感激の情を躍らせてゐる。作者のこの感激に同感せしめる事によつて、明治神宮建設の遠い由來に思を致さしめ、以て國體の精華を會得させるべき國民的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【明治神宮】 メイヂジングウ 官幣大社。東京市澁谷區代々木外輪町に鎮座。明治天皇・昭憲皇太后を奉祀する。大正四年起工、九年に竣成、同年十一月一日盛大な御鎮座の大祭を擧げさせられた。例祭は十一月三日。皇室の尊崇篤く、一般國民の參拜者が絶えない。境内内苑の總面積は二十二萬八千九百餘坪、樹林・泉石の景趣は幽邃を極める。外に内苑の東方、舊青山練兵場を中心とする一帯の地域に、主として國民奉讀の赤誠の資によつて建設された外苑がある。總面積十五萬五千坪、苑中には、憲法記念館・聖徳記念繪畫館・競技場・野球場・相撲場・水泳場等の諸建造物があり、その殘地は新しい公園設備を施した近代的庭園をなしてゐる。

【快美な色彩】 クワイビナシキサイ 目に快く美しい色どり。「快美」は、快感を催させるやうな美しさ。見て氣持のよい美しさ。
【感觸】 カンシヨク (一)外界の刺戟に觸れて起る感じ。(二)手ざはり。氣持。こゝは(二)の意。
【陽光】 ヤウクワウ (一)日光。(二)太陽。こゝは(一)の意。
【代々木の森】 ヨヨギノモリ 明治神宮御造營前の南豊島御料地の森。代々木一帯の地は古く「代々木野」と呼ばれ、廣漠たる武蔵野の一部であつたと傳へられる。明治神宮の地域は寛永の頃から彦根藩井伊家の屋敷となつてゐたものを、明治七年御買上になつて南豊島御料地と名づけられ、二

十二年世傳御料に編入された。域内には黒松・赤松の大樹を始め、檜・榎・椴・樺等の老木が多く、自ら林苑をなしてゐた。

【快美な色彩の反射と、柔かい感觸とをもつ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森】

神々しい別天地として、常にこれを仰ぎ懐かしんでゐた作者の平生の氣持が、自づからこの清新な觀照をなし得たのであらう。代々木の森は當然明治神宮の造營せらるべき地域であつた——作者のさういふ深い感激のこもつた冒頭である。

【高く匂ふ】 タカクニホふ 強くにほふ。

「高く」はこゝでは強く・烈しくの意。「高く匂ふ」「高い匂」などいふ時は、「にほひ」は大概芳香を意味し、惡臭などの時は「高い」とは形容しない。

【檜】 ヒノキ 杉科の常緑喬木。樹高三〇内至四〇米。周圍五米に達する。樹皮は赤褐色で堅に片裂する。葉は小鱗片状で枝に密接して殆ど開出ししない。夏日枝上に單性の小花を雌雄同株に開き、後稔果を結ぶ。材は帯黄白色、緻密で光澤があり、耐水力が強いため、橋梁・舟船・機械・器具・車輛等用途が極めて廣く、樹皮はまた屋根を葺き、或は附木繩の材料とするなど廣く利用される。本州・四國・九州・臺灣の山地に産し、木曾山と臺灣阿里山の檜

は最も著明である。

【石を切る】 イシをキル 石を割る。

【金屬的の響】 キンゾクテキのヒビキ 金屬を打ち、或は金屬の觸れ合ふ時に發するやうな鋭い響。

【調子】 テウシ (一)音樂上、音律の高低。しらべ。(二)音樂上、聲の高低。(三)字句のいひまはし。口調。(四)ほどあひ。ぐあひ。(五)はすみ。いきほひ。(六)こころもち。きもち。こゝは(一)の意。

【獻木】 ケンボク 神社佛閣に獻納寄進する樹木、又は木材。こゝは「木材」を指す。

【牛車】 ギウシャ・ウシグルマ (一)牛のひく車。牛にひかせる荷車。

「ギウシャ」とも讀む。この場合は、我が國中古以來貴人乗用の牛の牽く屋形車。官位によつて乗用に制限があり、唐廂車・兩眉車・檳榔毛車・網代車・八葉車等の種類があつた。

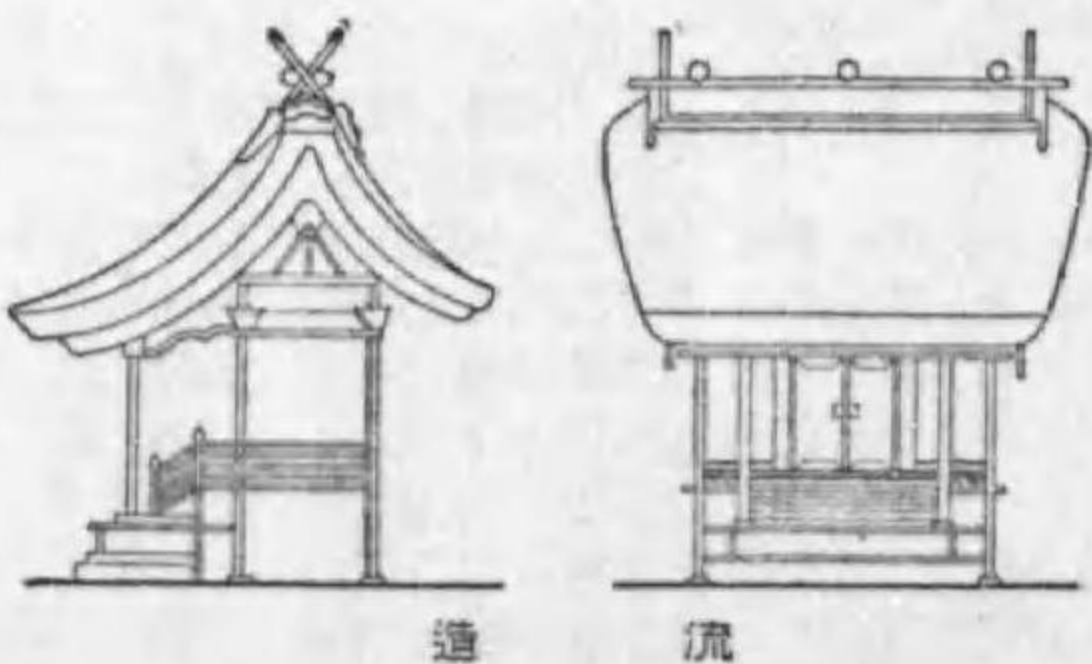
【人夫】 ニンブ (一)公使に使用せられる人民。夫役を課せられた人民。(二)荷物運搬などに使はれる勞働者。こゝは(二)の意。

【汗みどろ】 アセみどろ 汗にまみれた様。汗びつしより。「みどろ」は「まみれる」「まぶれる」意を表す接尾語。
【曳々】 エイエイ (一)力を入れる時の掛聲。(二)関の聲。

【(三)笑ふ聲。こゝは(一)の意。
 【莊嚴】 サウゴン 尊くおごそかなこと。おごそかで美しいこと。神々しいこと。
 【衝動】 ショウドウ 心理學上 Impulse の譯語。目的觀念を排除した意識。又は觀念の不明瞭な運動を誘發する意識。本能活動・習慣的動作等に見られるやうな、先天的或は後天的な身體的、若しくは精神的傾向が意識的強迫的に吾人の動作を促すこと。
 こゝでは「無意識的な精神的激動」位に解すればよい。
 【あの中に明治神宮が建つのだ！さう思ふと私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、強い懐かしさで充たされた】建設は希望であり、光であり、嬉しくも亦たのしい事業である。而も今は日毎懐かしく仰いだ代々木の森の「あの中に」明治神宮が建設されんとしてゐるので、「莊嚴な衝動」といひ、「強い懐かしさ」といひ、「たまらない程嬉しく(同頁七行)と結ぶ作者の希望と歡喜と、それを貫く敬虔な感動との躍如たるものが感ぜられる。
 【工程】 コウテイ (一)仕事のはかどり方。仕事の出來上りの程度。(二)仕事。工事。こゝは(一)の意。
 【捗つて】 ハカドつて はかが行つて。進捗して。
 【基礎工事】 キソコウジ 建築物を支持すべき最下の構造を工作すること。土臺の工事。

【小屋組】 コヤグミ 屋根を受ける爲に組立てた骨組。
 【殿舎】 デンシヤ ヤカタ。ごてん。
 【工程が目に見えて捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舎の形の次第に整つていく】
 大正四年地鎮祭、五年三月廿五日新始祭、これから實際の造營が始められ、同年六月には木曾御料林・臺灣阿里山の檜材合せて約三千四百本の搬入を終り、殿舎基礎工事の設計も完了した。工事は着々と進捗して七年十二月には本殿以下主要建築の基礎工事・盛土工事は全部これを終り、石材の加工工事も殆ど終つて、同八年五月二十七日立柱祭、七月十二日に上棟祭を行つた。(參考欄參照)
 【竣工】 シュンコウ 「竣工」とも書く。工事の落成すること。仕事の出來上ること。
 【露出】 ロシユツ (一)あらはれ出ること。(二)あらはし出すこと。こゝは(一)
 【切石】 キリイシ (一)用途に従つて種々の形に切つた石。(二)規則正しい形に切つた石。(三)割れてかどだつた石。(四)いしだたみ。敷石。こゝは(一)の意。
 【小砂利】 コザリ・コジヤリ 小石。小さい石。
 【參道】 サンダウ 神社に參詣する道。
 明治神宮の參道は南・北・西の三面にある。南方赤坂區青山から澁谷區原宿の南縁を経て、神宮橋に至るものを

「表參道」と言ひ、幅員三六米餘、延長一二〇〇米。橋を渡つて境内に入り幅員一四米餘、延長七八八米餘の「南參道」となる。北方澁谷區千駄ヶ谷からの「北參道」は幅員一米、延長五八〇米餘。西方代々木練兵場に面する代々木山谷町方面からの「西參道」は幅員七米餘、延長五四五米餘である。入口には各々木造の大鳥居、所謂一の鳥居がある。(五頁挿圖參照)
 【常緑の森】 ジャウリヨクノモリ 常緑樹の森。ときは木の森。「常緑」は、年中落葉せずして緑色を呈すること。こゝは「常緑樹」の意と解してよい。
 【展開】 テンカイ (一)のび開くこと。擴がること。(二)自動)のべ開くこと。ひろげること(他動) (二)軍隊用語で、密集部隊の散兵となること。(三)數學上、函數を級數の形に改めること。こゝは(一)、「ひろがること」の意。
 【御料地】 ゴレウチ 皇室御所有に屬する土地。こゝは「舊南豊島御料地」を指す(「代々木の森」の項參照)
 【神域】 シンキキ 神社の境内。
 【森嚴】 シンゲン 身がひきしまるやうに嚴かなこと。「森」は、おごそかでぞつとする貌。
 【幽邃】 イウスキ 奥深くもの靜かなこと。
 【鬱蒼】 ウツサウ 「鬱葱」とも書く。(一)樹木の青々と茂



つてゐるさま。(二)氣の盛んなるさま。こゝは(一)の意。
 【流造】 ナガレヅクリ 「流破風造」といふ。神社建築の一樣式。側面は破風造とし、屋根の前面は後方よりも遙かに長く、向拜をも併せ覆ふやうに造つたもの。屋根に反りを有するから千木は別にこれを置か、又はこれを省く。この様式は平安朝初期に創成されたものであらうといはれ、上・下加茂神社・平安神宮等はその代表的建築である。反りを有する屋根が長く前方に流れる形は、如何にも自然であり、變化に富み、且莊嚴な感じを與へるので、現在神社建築はこれを採用するのが多い。
 【素木】 シラキ 「白木」とも書く。あら皮を去り、白く削つたまゝで塗り飾らぬ木地のまゝの材。社殿建築等には素木を用いたものが多く、これを「素木造」といふ。
 【神々しい】 カウガウしい 「カミガミしい」の音便。おごそかでたふとい。ものさびてたふとい。
 【嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つ

も列んで烈しい日に光つてゐるのを見た處——今清らかな小砂利を敷きつめた参道の白い線……】

【その以前疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地——いつの間にやら……流造・素木の神殿の見えつ隠れつしてゐる】

前者は、「鋭く尖つた切石が烈しい日に光つてゐる」といふ粗々しい感と「清らかな小砂利」とを對照させ、後者は廣漠たる御料地の景觀に對して、神宮造營による變化を描いてゐる。この前後の對照によつて神々しい神宮の相が如實に浮び上つて來てゐる。つまり作者が竣工前の實際を見てゐたことの強みで、それが内なる敬虔な感情を背景にして、なにか迫力を示して居る所以である。修辭の上に於ても、「嘗て——今」に對し、「それ以前——いつの間にやら」と變化を與へて文をあやなすなど、作者の周到な苦心の窺ひ得るものがある。

【「まじ給ふ」 あらせられる。おいで遊ばす。鎮ります。」「します」は「在す」と書く。(一)「在す」に同じく、在り・居りの敬語。居たまふ。おいでになる。おはす。おはします。「は」は主として動詞に冠する發語で「居」ではない。(二)行く・來るの敬語。行きたまふ。來たまふ。こゝは(一)の意。

【静寂】 セイジャク 静かでもの寂しいこと。

【幽雅】 イウガ おくふかくみやびやかなこと。
【領土】 リヤウド 國の國法的主權を行使し得る地域。即ち一國統治權の及ぶ範圍。
「莊嚴と静寂と幽雅との領土」は、莊嚴・静寂・幽雅を擬人化して、それ等の占めてゐる土地といつたので、勿論「莊嚴・静寂・幽雅なる地域」の意である。特に「領土」といふ語には、神域がそれだけとして、明治大帝の神靈の鎮ります神域だといふ、深い作者の感慨がこもつてゐるかに思はれる。

【神域、眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と静寂と幽雅との領土】

完成された神域に立つた作者の氣持である。莊嚴と静寂と幽雅との融合した境地、そこに作者は神靈の存在を感じ、そして強烈な感激(次行)に打たれてゐるのである。【私は始めて……】この始めては「完成した」に係るのでなく、下の「立つた」を限定する副詞。

【完成】 クワンセイ 完全にできあがること。

【神苑】 シンエン 神社の境内にある庭園。

【感激】 カンゲキ 深く感じて奮ひたつこと。

【建設】 ケンセツ 新につくり設けること。

【何者の力がこの新しい「建設」の事業を完成させたのだらう】

【起工】 キコウ 工事をはじめること。

【延人員】 ノベジンキン 工事に従事した總人員を、一人の割合に換算した人数。

【尺メ】 シヤクジメ 木材の體積を計る單位。一尺角(切口一尺四方)長さ二間の木材を尺メ一本といふ。

【細密】 サイミツ こまかくはしいこと。精密。詳密。

【超越】 テウエツ (一)こえすぐれること。(二)世俗を離れること。(三)とびこえること。超躍。(四)哲學上、認識經驗の外に存在すること。こゝは(一)の意で、「数字を高く超越して」は下の「強い力」といふ語に對應して、「数字に現れた外面的な力よりもつとつと有力に」位に解するがよい。

【部面】 ブメン 部分。方面。

【基礎】 キソ (一)土臺。いしずゑ。(二)根定。もとゐ。こゝは(一)の意。

【千載不動】 センザイフドウ 永久に動かないこと。

「千載」は千年、即ち極めて長い年月の意。永久。とこしへ。「載」は、爾雅釋天に「載、歲也」とあり、註に「載始也。取、物終、更始之義」とあり、又唐虞堯舜時代には「載」夏の代には「歲」商の代には「祀」周の代には「年」を用ひたといふ。

【明治天皇】 第一百二十二代。御諱睦仁。孝明天皇の第二皇

工事の進捗を見つゝたまらない嬉しさで完成の日を待ちつゞけた作者は、今現實に、かくも莊嚴に完成された建設を目前にして「強烈な感激(前行)に打たれたのである。そして数字や統計を超越したかくれた力が神域に満ち溢れてゐることを感ぜざるを得なかつたのである。この言葉はその「強烈な感激(前行)の自らなる吐露であつた。修辭上には疑問を提示して置いて、それに解答を與へつゝ筆を進めて行く一方法で、讀者に強く感銘せしめる効果がある。

【造營局】 ザウエイキョク 正しくは「明治神宮造營局」大正二年十二月廿二日勅令第三百八號を以て神宮奉祀調査會官制が公布せられ、同令が明治天皇奉祀に關する一切の事項の審議に當つたが、ついで第三十五帝國議會で神宮奉建の豫算案を可決し、同四年四月勅令を以て明治神宮造營局官制が公布せられ、伏見宮貞愛親王殿下を總裁に仰ぎ、内務大臣床次竹二郎を副總裁とし、局長堀本清治以下諸官の任命があつて、以後一切の造營の事務に當つた。

【記録】 キロク (一)書きつけること。(二)物事を書きしるした文書、又は帳簿。こゝは(二)の意。
「造營局の記録」とは同局編纂の「明治神宮造營誌」をさす。

子。嘉永五年九月二十二日（陽曆十一月三日）未半刻御降誕。祐宮と御命名。尊王攘夷に國論沸騰し國事多端の間に御成人遊ばされ、萬延元年七月十日立太子、九月二十八日親王宣下、睦仁と宣せられた。慶應三年正月御歳十六にして御踐祚。十月十日には將軍徳川慶喜の大政奉還を御嘉納あらせられ、十二月九日王政復古の大令を發し給ひ、翌年八月二十七日南殿に御即位の大典を擧げられ、ついで年號を明治と改め、東京に御遷都あらせられた。爾來萬機を親裁し給ふこと四十有五年、明治四十五年七月十四日以來御不豫、萬天下臣民の至誠を盡せる御平癒祈願も效なく、終に七月三十日崩御あらせられ、九月十三日伏見桃山に葬り奉つた。御寶算六十一。

天皇は天資御英邁、古今東西に卓絶し、聖徳四海に普く、夙に維新創業多難の時局に當られて、内に國是を定め皇謨を恢弘し、國運伸張の基を築かれ、外に日清・日露等數次の大戦によく大勝を博し、僅々四十年にして帝國の面目を一新し、堂々世界列強に伍するに至らしめ給うた。誠に新日本建設の大皇帝にましまし、その御偉業は東西史上稀に見る所である。又天皇は和歌に秀で給ひ、御歌人としても國民の欽仰し奉つてやまぬ所である。

【御聖徳】 ゴセイトク (一)天子の御徳。(二)最もすぐれた知徳。こゝは(一)の意。

【昭憲皇太后】 セウケンクワウタイゴウ 明治天皇の皇后。御名は美子。御父は左大臣一條忠香、御母は新畑大膳種成の女民子。嘉永三年四月十七日（陽曆五月二十八日）京都烏丸の桃華殿に御誕生。勝子と御命名。慶應三年五月十八日女御に内定、六月二十八日女御宣下を蒙り、明治元年十二月美子と御改名、同月二十八日に御入内、皇后に冊立あらせられた。御貞徳殊に勝れさせ給うて、よく明治大帝の大業を内助し奉り、御坤徳の洪大なるは内外の仰慕しまつる所で、其の御仁慈は天下萬民に及び、或は産業の奨励に、或は女子教育の振興に、又社會事業の發達に御心を注がせ給うた。又歌文の道に御造詣深く渡らせられ、御歌の數は三萬六千餘首に及ぶ由で、磨かずば玉も鏡も「水は器」等の如き千古の御教訓を垂れたまうた御歌も少くない。尙古文學に深く通曉あらせられ、雅樂の復興の如き、その御奨励に俟つ所が多かつた。明治天皇御崩御あらせられて皇太后とならせられ、青山御所に移られ、大正二年沼津御用邸に御避寒中御發病、翌三年四月東京御還啓、同月十一日崩御遊ばされた。寶算六十五。同月二十四日大喪儀、京都市伏見區桃山の明治天皇御陵の東隣に葬り奉つた。伏見桃山東陵と申す。明治神宮に合祀し奉つたのは大正九年である。

「皇太后」は先帝の皇后。敬稱は陛下。御身位は太皇太

后につき、崩御の御時謚號を奉つて皇太后に冠稱し奉る。
【懿徳】 イトク 醇美なる徳、うるはしい徳。詩經・大雅・蒸民「民之秉彝好是懿徳」
「懿」はうるはし、美し、あつし等の意がある。溫柔聖善をいふ故に、多く女徳の稱とする。

【二柱】 フタハシラ 二神。

「柱」は神・佛又は高貴の人を數へるに用ひる語。

【對へ奉る】 コタヘタマツる 御報ひ申上げる。

「對ふ」はこゝでは、むくいる、報ずる等の意。

【至純】 シジュン 此の上もなく清らかなこと。全くまじりけのないこと。

【陰に陽に】 インにヤウに 陰になり日向になり。或は裏面にかくれ、或は表面にあらはれ。

【この二つのものが陰に陽に工程を抄らせ】

「陽」なるものは「青年團の造營奉仕」「献木」等目に見える方面であり、陰なるものは目に見えない精神的方面、即ち青年團の造營奉仕献木等の事實の動機たる「國民の燃えるやうな熱誠」(八頁六行)がこれである。

【純粹】 ジュンスキ (一)まじりけのないこと。(二)もつばらなこと。專一。(三)至きこと。完全。邪念私慾のないこと。(五)雜駁な知識の存しないこと。こゝは(一)の意。

【動機】 ドウキ 英語 motive の譯語。心理學・倫理學上の用語で、(一)心理學上、意識内に於て意志動作の原因として之に直接に先行する目的表象と之に伴なふ感情・情緒との結合態。(二)倫理學上行動の最も直接なる原因。こゝは(二)の意。

【青年團】 セイネンダン 義務教育完了後の十四・五歳より二十五歳前後に至るまでの青年の修養團體で、人格の修養、體育の奨励、産業の開發、學藝の向上、及び各種社會奉仕等を目的として、青年等自身組織してゐる自治團體である。

元來氏神を中心とした町村青年の集團から次第に發達して、組織化された共同團體となり、明治末年頃までは「青年會」の名を以て呼ばれ、その後一般に「青年團」と改稱した。爾來漸次發達して府縣的に統一ある組織團體として普及した結果、大正十三年大日本聯合青年團の創立を見、翌年明治神宮外苑に日本青年館が建設され、遂に全國的統一を見るに至つた。

【奉仕】 ホウシ (一)つかへまつる。(二)他の爲に自己を捨ててつくすこと。(三)待遇すること。サーヴィス。こゝは(一)の意。

【全國青年團員の造營奉仕】

青年團の奉仕は、大正八年十月、靜岡縣安倍郡有度村の

青年團員五十人を選抜して、試験的に十日間奉仕せしめた所誠意奉仕して良好な結果を得た。これを傳聞した地方青年團の奉仕申込が殺到し、爲に造營局は奉仕青年團の區域を郡市以上とし、一團體六十人を限り、期日を十日間と定めてこれら申込に應じた。かくて大正八年十月以降同九年九月中旬に至る間、奉仕した青年團は二府二十八縣、六十三團體を數へ、人員は約三千八百人に及んだ。尙奉仕申込の採用されなかつたもの百六十餘團體、中には北海道、沖繩よりの申込すらあつた。

工事成績は普通人夫の労働成績に比して、殆ど平均一人二・三分の成績をあげ、最も優秀なものは一人六・七分の好成績を示し、その奉仕振りは、造營局員をして過勞せんことを憂慮せしめる程であつたといふことである。

【献木】こゝは「献納の樹木」を指す(四頁七行参照) 造營局は大正四年十二月を期限として、團體及び有志の植樹の献納を許可し、明治神宮建設の決定と同時にその出願の受理を始めた。締切期限までに既に十萬本を越え樹種百五十種に達したが、其の後も續々献木があつて、大正八年十二月までには實に十二萬二千二百餘本に及んだ。内地はもとより朝鮮・樺太より、遠く海外在留の同胞よりの献木すらあり、現在明治神宮の樹の數は十二萬餘本、その中十一萬五千餘本は献木で、我が國全版圖の樹

種を網羅してゐるといふことである。

【これらは何事を語つてゐるか】

「何者の力が——(六頁末行)」と同じく疑問提示の修辭法であるが、それに比べて更に強い疑問を表明してゐる。作者は一株の樹木、一本の柱にも國民の熱誠を見、更にその至誠のよつて来る根源に思を致してゐる。「明治神宮の特色」(同頁十行)それは延いては我が國民精神の特色であり、君臣一如の國體の特質を如實に物語るものである。作者の感激はこゝにかゝつて、この強い疑問の提示となつたのであらう。

【形成】ケイセイ 形づくること。形をなすこと。

【組織】ソツキ (一)くみたて。つくりかた。(二)個々の物件・人員が集合し、秩序ある一體を構成すること。こゝは(二)の意で「組立てる」位に解すればよい。

【熱誠】ネツセイ 熱情から迸り出た誠心。赤誠。丹誠。

【結晶】ケツシヤウ 化學上の術語。數個の平面を以て限られた規則正しい立體で、天然に成生し、その組織の一

【誠意の結晶】は「誠意の凝結したもの」位の意。

【宮居】ミヤキ (一)神の宮のある所。(二)皇居。こゝは(一)の意。

【崇敬】スウケイ あがめうやまふこと。うやまひたつと

ぶこと。「崇」の音は元「シユウ」「ソウ」「スウ」は通音。今普通「本音」は用ひられず、「通音」が用ひられてゐる。

【標的】ヘウテキ (一)めじるし。めあて。また。(二)てほん。こゝは(一)の意。

【神靈】シンレイ (一)神のみたま。(二)靈妙な徳。こゝは(一)の意。

【鎮まります】シヅまります 鎮座します。神靈が其の地におとどまり遊ばす。

【鎮まる】は(一)しづかになる。騒動がやむ。おだやかになる。おちつく。ねいる。ねむる。(三)勢力が衰へる。

(四)鎮座する。こゝは(四)の意。

【特色】トクシヨク 他よりすぐれたところ。他に異るところ。

【神宮橋畔】ジングウケウハン 神宮橋のほとり。神宮橋のたもと。

「神宮橋」は表參道と南參道との間、省線山手線の上に架けられた陸橋。長さ二〇米、幅約二九米、鐵筋コンクリートで、左右の勾欄に芝生の小堤を築き、松樹が列植されてゐる。

【第一鳥居】ダイイチトリキ 一の鳥居。神社の一番外の鳥居。この鳥居は本文一〇頁一〇行以下の説明の通り、

明治神宮の鳥居八基中の一で、明神鳥居中我が國最大のものである。

【刹那】セツナ 「劫」の對語。梵語 *Kṣāra* の譯。極めて短い時。一彈指の間。ちよつとの間。瞬間。

【直感】チヨクカン 説明や證明を経ないで、物事の真相を心で感じとること。

【肅然】シユクゼン (一)つしんでかしまるさま。つしんでおごそかなさま。(二)静かなさま。こゝは(一)の意。

【襟を撮合はせた】エリをカキアはせた 身を正した。態度服装を正して端然とする場合にいふ。

【神橋】シンケウ (一)神殿にかけわたした橋。(二)神社の境内にある橋。この「神橋」は南參道中部に在る「御橋」。長さ一〇米、幅約一四・五米。橋臺は日光大谷産の自然石である。(挿繪参照)

【鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく水の落ちる音が聞えて來る】

一步一步小砂利の上を踏んで神域の奥に歩いて行く作者と共に、讀者も亦靜かに密林の間の參道を進み行くかの如き氣持に引きこまれる敘述である。そして作者と共にさらさらと流れる細流の音に耳を傾け、神々しい静けさに身も心もすみ清まるを覺える感である。

【岡山縣萬成産の石】 岡山縣岡山市西北隅にある萬成山から産する御影石(花崗岩)のこと。「萬成石」と呼ぶ。岡山縣は全國に冠たる花崗岩の産地であるが、特に萬成石は「桃色御影」で裝飾石材として多量に使用される。

【勾欄】 コウラン 宮殿・堂社・橋等のらんかん。てすり。【凭つて】 ヨつて もたれて。よりかゝつて。

【摸す】 モス「摸す」摹すとも書く。似せる。まねる。【風致】 フウチ おもむき。あちはひ。ありさま。

【筑波山】 ツクバサン 茨城縣の筑波・眞壁・新治三郡に跨る山。海拔八七六米。北は所謂筑波山塊(雨引・加波)に連り、その盡くる所に聳立するので、關東平野野る所からこれを望むことが出来る。頂上は男體(西)女體(東)の二峰に分れ、全山森林に蔽はれて、緑葉紅葉の美觀に富むのみならず、山上の四望闊大で、山河襟帯の大觀を恣にし得る。男體には伊弉諾尊を祀る男體祠及び中央氣象臺附屬測候所があり、女體山には伊弉册尊を祀る女體祠があり、兩峰の中央鞍部(一名御幸原)からは水無川が源を發する。山腹に筑波町があり、その上方に縣社筑波神社(男體祠女體祠は當社奥宮である)がある。山色は朝は藍、晝は綠、夕は紫に變ずるといひ傳へられ殊に紫の山は最も美しく、別に「紫山」の異稱があり、古來關東一の名山として萬葉以來の歌枕である。近く筑

波鐵道及び登山ケーブルカーの設置と共に、東京近郊の遊覽地として四時訪客が絶えない。又山麓山頂の間に暖帶林・溫帶林の林相の變化が見られ、且まうせんごけ・つくばね等異色ある植物に富んで居り、植物學上の研究資料が頗る多い。

【國有林】 コクイウリン 國の所有に屬する森林。狹義には國有林野法の適用を受ける農林省林野局所管の國有財産を言ひ、廣義には陸軍用地等の如き各官省用地等をも併せていふ。内地の國有林は明治維新の際に幕府諸藩の奉還した林野で、全國森林の約五割(二千三百町歩)を占め、此の他北海道及び殖民地の國有の森林は國有林野法の適用はうけないが、特別の法規があつてこれを取締つてゐる。

【楓】 カヘデ 槭樹科の落葉喬木。樹幹は平滑、葉は掌狀裂で對生し、長柄を具し、裂片は鋭尖頭で縁邊に鋭鋸齒を有する。霜にあつて紅葉して美觀を呈し、今紅葉の名を獨占してゐる。

【今しも】 イマしも いま。丁度いま。「しも」は強意の助詞。

【紅於】 コウオ 楓の異稱。杜牧「山行」の詩(頭註参照)中の一句「霜葉紅於二月花」の「紅於」より出た語。こゝでは紅に色づいた楓、紅葉の意を表してゐる。

【美しい秋の錦を織り成してゐる】 「錦の如き絨爛たる秋の景觀を呈してゐる」の意。楓の紅、常磐木の綠等のあやなすあでやかな秋の景色を錦に譬へた譬喩法。

【錦】 は絹紋織物の一。金銀はじめ種々の彩絲を紋緯として、華麗な模様を織出した厚地の絹織物の總稱。【今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織り成してゐる】

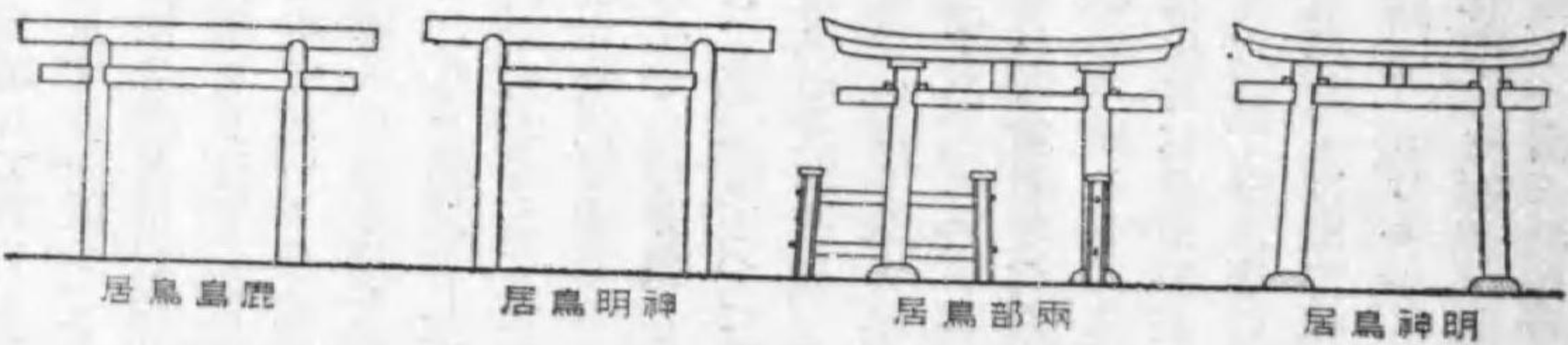
周囲の風趣がこの一點に集注された如き焦點的な描寫である。繊細優雅な庭園趣味のあたりの景觀が、細流に映する紅於の影を中心に眼のあたり浮んで來る。

【人工味】 ジンコウミ 人間の手で作つた趣。人爲的な趣向。

【繊細】 センサイ こまかいこと。「織」はこまかい・細い等の意。

【技巧】 ギカウ (一)細工のたくみなこと。技術のたくみなこと。たくみなわざ。たくみ。(二)文藝美術の表現製作上の手腕又は手段。こゝは(一)の意。

【自然的大觀を呈す】 シゼンテキのタイクワンをテイす 自然のまゝで人工を加へない大きな眺めをあらはす。「大觀」は(一)廣く見通すこと。全局を通觀すること。達觀。(二)大きな景色。偉大な眺め。こゝは(二)の意。「呈す」はこゝではあらはす・しめす等の意



【發揮】 ハツキ (一)あらはし示すこと。(二)ふるひおこすこと。こゝは(一)の意。

【樹齡】 ジュレイ 樹木の年齢。

【臺灣産の檜】 タイワンサンソのヒノキ 臺灣阿里山産の檜。阿里山は臺灣臺南州にあり、新高山の西方に聳える山衆で、海拔二六〇〇米に達し、全山密林を以て蔽はれ、殊に檜・紅檜が多く、一千米以上の高地はすべてこれらの樹木よりなり、樹齡千年を越えるものが尠くないといふ。紅檜(たいわん檜)は心材紅色を呈し、古來神木として尊ばれ、明治神宮・櫻原神宮等の鳥居は何れもこの紅檜材である。

【明神鳥居】 ミヤウジントリキ 鳥居の一形式。柱は圓くして傾斜し、笠木・鳥木共に反りを有し、額東・楔のあるもの。鳥居中最も多く見受けられる形で、京都八阪神社・賀茂神社等のものはこの代表的な

もの。

尙鳥居には兩部鳥居（別に四脚鳥居とも云ふ、嚴島神社の鳥居）神明鳥居（笠木・柱・貫共圓く、柱に傾斜なく、笠木は水平。靖國神社の鳥居）鹿島鳥居（笠木・柱は圓く、笠木は水平。貫は直角で、柱の外に出てゐる。鹿島・鹿取神社の鳥居）等がある。

【幅員】 フクキン はば。ひろさ。

【接合點】 セツガフテン つながりあふ地點。おち合ふ場所。

【眼界】 ガンカイ 眼の及ぶかぎり。視界。

【亭々】 テイテイ (一)樹木等の高く聳え立つさま。太公兵法「高山磐石其上亭々」。(二)遠く浮んでゐるさま。魏文帝詩「西北有浮雲、亭々如車蓋」こゝは(一)の意。

【疎林】 ソリン 木立のまばらな林。

【背景】 ハイケイ (一)美術上、一箇の肖像又は一群の人物周囲の餘地、或は靜物の背後の部分をいふ。(二)舞臺の正面などに書いた畫。書割。(三)轉じて背後の光景、又は或人・物などの周囲の事情・條件等に譬へる。(四)うしろだて。後援者。こゝは(三)の意。

【土佐繪】 トサエ 土佐派の繪。大和繪の一派で、優美典雅な趣を特色とする。

土佐派は、唐畫の手法を採つて渾成醇化し、我が風俗畫

外院廻廊に連つてゐる。(十二頁挿繪参照)

【拜殿】 ハイデン 拜禮を行ふ爲に設けた神社の前殿。

明治神宮拜殿は廻廊で區切られた中央にあり、一般參拜者はその石階に到つて拜する。建坪五十九坪。その兩側は複廊に連なる。

【本殿】 ホンデン 神社で御神體を奉祀する社殿。

明治神宮御本殿は、透垣を以て圍まれた一郭の中央に位置する。建坪二十九坪半。(一四頁挿繪参照)

【木曾御料林】 キソゴレウリン 長野縣西筑摩郡内の所謂木曾谷にある御料林。木曾川支流玉瀧川を中心として面積一二〇〇方疋に亘り、木曾森林の大部分を占めて、日本三大美林（木曾・津輕・阿里山）の一と稱せられる。

見積材積一億二千石といはれ、樹種は名高い「木曾の五木」檜・さはら・櫟・あすなろ・高野槲の外、縦・梅・唐檜・赤松等が知られ、殊に檜はその質全國一といはれ、樹齡二百年を越える大木が鬱蒼として連つてをり、伊勢神宮御造營用の御神木の伐採地である。もと尾州藩の所領として經營保護が加へられてゐたが、明治二十二年御料林に指定、帝室林野局木曾支局の管理下に置かれたものである。「御料林」は帝室御所有に屬する森林、帝室林野局が皇室財産制によつて管理經營する。

【芳しい】 カンバしい「馨しい」「香しい」とも書く。「カ

に應用して純日本様式を生んだかの「大和繪」の主流を繼承する一派で、その始祖藤原基光が土佐守になつた爲、土佐派の名が起つたとも、また鎌倉初頭藤原經隆が父祖の業をうけて土佐權守になつた爲とも言はれ、その出所は明でない。隆能筆と傳へられる源氏物語繪卷・光長筆と傳へられる伴大納言繪卷等はこの派の代表的傑作で、これらを源流として隆信・信實等に傳承せられ、室町時代光信が現れて更に支那畫の手法を採入れて新様式を生み、土佐派中興の祖と稱せられた。その後狩野派に壓倒されて一時衰頽したが、徳川初期名手光起が出て復興し、幕末に至つて浮田一蝶・冷泉爲恭等によつて大いに畫風の復古を見、今日に及んでゐる。光長・光信・光起を土佐派三筆と稱する。

【椀皮葺】 ヒハダブキ「ヒワダブキ」と發音する。椀の立木から剥ぎとつた皮を適當に切りそろへ、これを重ね合せて屋根を葺くこと。又その屋根。

椀皮葺は日本特有な屋根の葺き方で、その色調の優雅さと、勾配・軒先等の自由な形に従ひ得る便利さとの爲に古來神社・宮殿等に多く思ひられた。

【樓門】 ロウモン 二階造の門。やぐら造の門。こゝは「南神門」を指す。所謂正門で建坪十二坪半の八脚樓門造である。南玉垣鳥居中にあり、拜殿の正南に位し、兩側は

ダハしいの音便。かほりのよい。にほひのたかい。

【中門】 チュウモン (一)貴人の邸内の表門と寢殿との間に設けた門。(二)社寺の樓門と拜殿又は本堂との間にある門。こゝは(二)の意で、明治神宮の中門は拜殿と本殿との間にあつて、透塀の中央正面に開かれてゐる。建坪十坪。

【内内院】 ナイナイエン 内院のまたその内に當る一郭。

「内院」は(一)殿舎の建ち並ぶ一郭の中、その内側の一區をいふ稱、その外側を中院、外院などいふに對する語、明治神宮に於ては社殿正面南鳥居の内、南神門内の一郭を外院、拜殿内の一郭を内院といふ。「内内院」は更にその奥中門内の一郭を指し、こゝに本殿・神庫等がある。

【衆庶】 シュウシヨ もろもろの人。一般人民。

【窺ふ】 ウカガふ こゝはのぞく・ひそかにのぞくの意。

【神聖】 シンセイ 清淨でけがれないこと。たいそう尊いこと。尊嚴で犯し難いこと。

【何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる】

西行法師が伊勢神宮に詣でて詠んだ歌。異本山家集・内閣文庫本西行歌集に載つてゐるが、普通の山家集には見えない。

【おはします】 御座します。おはすの鄭重語。「おはす」

はあり・をり・くる・行くの敬語。

「かたじけなさ」形容詞かたじけなしの語幹に「さ」のついた名詞。(一)かしこさ。もつたいなさ。(二)ありがたさ。よろこばしさ。(三)恥しさ。面目なさ。こゝは(一)の意。

一首の意は「神宮の前にひさまづく」と唯々勿體なさで涙がこぼれる」と言ふのである。「なにごとのおはしますか
は知らねども」は「如何なる尊い神様が鎮座しますか
は知らないが」といふ風に解釋される傾があるがそれは
誤である。西行が祭神を知らぬ筈はない。たゞ「何とい
ふわけかはしらぬが」とか、「どうした原因かしらぬが」
とかいふ漠とした疑問的表現を敬語を以て示したのであ
る。敬語的表現をとつたのは、神宮の森嚴さを示さんが
爲である。更に端的にいへば、なにごとなどと心を動か
す餘地がないのである。餘りに嚴肅な餘りに壯嚴な感に
打たれて唯々わけもなく頭が下つてしまふ。その感が「な
にごとのおはしますかは知らねども」である。いみじく
も言ひ得た句である。これだけの中に、かたじけなさに
涙をこぼして頷いてゐる西行の姿の髣髴たるものがあ
る。

【黙禱】モクタウ 無言のまま心の中で祈禱すること。

【私は黙禱を終へて始めて向うを見上げた。まあ、何といふ

は(一)の意。

【排除】ハイジヨ おしのけ除くこと。はらひのけること。

【接觸】セツシヨク ちかづきふれること。さはること。
接すること。

【新文明】シンブンメイ 新しい文明。

「文明」は(一)あやがあつて美しく明かなこと。(二)英語
Civilization の譯語。人類が自然物を加工・改良・教化
して招來する外部生活の發達した状態。即ち人知が進歩
して百般の事物がよく整備した状態。近時「文化」に對
して物質的方面の發達を指す。

【吸收】キフシウ 吸ひとること。吸ひこむこと。こゝは
「とりいれる」など譯す。

【活動的】クワツドウテキ いきいきと動くさま。敏活に
働くさま。活動性に富んでゐるさま。

【進取的】シンシユテキ 進んで事をなすさま。進取の氣
象に富んでゐるさま。「保守的」の對語。

【潤達】クワツタツ 「裕達」とも書く。度量が廣く物事に
濫帯しないこと。度量がひろく融通のきくこと。「潤」は
「闊」の俗字。

【氣象】キシヤウ (一)生れついた心だて。氣質。氣性。
(二)精神。意氣。(三)けしき。おもむき。(四)地理學上、
寒・暑・晴・曇・雨・風などの大氣中に生ずる物理的變

明るい快い感じをもつた社殿だらう】

默禱の間に澄み清まつた至純の心に映じた社殿の感
ある。明快そのものとも言ふべき印象を作者は端的に表
現してゐる。そして其處に明治神宮の特色を見出して自
然に頭の下がる敬虔な感情につままれてゐる。蓋し神
社・佛閣の建築美はかういふ心にのみ、その眞の姿を露
呈してみせるのであらう。

【光波】クワウハ 光の波動。こゝは單に「光」の意。

【陰鬱】インウツ 陰氣で鬱陶しいこと。氣がむすばれて
晴々しくないこと。

【解放】カイハウ (一)ときはなす。(二)ゆるしはなすこ
と。捕縛監禁を解いてはなちやること。(三)一切の因襲
的束縛をとりて自由になること。こゝは(一)の意。

【露呈】ロテイ 「呈露」とも熟す。あらはし示すこと。

【淺薄】センバク あさはかなこと。

【滲透】シントウ しみとほること。

【威力】キリヨク 人を威服せしめる力。人をして畏敬さ
せる力。

【奉祀】ホウシ 神をまつること。

【ふさはし】 適當する。相應する。似つかはし。

【舊弊】キウヘイ (一)舊來の弊害。昔からの悪いしきた
り。(二)在來の風俗・習慣・思想等に拘泥すること。こゝ

化の現象。こゝは(一)の意。

【呼吸を合はす】コキフをアはす 調子を合はせる。調和
する。

「呼吸」は、こゝでは調子・工合などの意。

【均齊】キンセイ (一)二つ以上の物事のひとしいこと。

(二)美術上 Symmetry (英語)の譯語。繪畫・建築・装
飾・圖案等で、左右に同じ形の對立してゐること。左右
よく釣合のとれてゐること。こゝは(二)の意。

【兩翼】リヤウヨク 兩方のつばさ。左右のつばさ。こゝ
は左右の廻廊を鳥の翼に譬へたのである。

【廻廊】クワイラウ めぐり廊下。神社佛閣などで、堂舎
の周圍に長く折りめぐらして作つた廊下。

明治神宮には内院・外院の外壁をなす内院廻廊・外院廻
廊と、拜殿の左右に連つて内外院の境界をなす複廊とが
ある。

【列柱】レツチュウ ならんだ柱。

【便殿】ベンデン 天子の休息の御殿。漢書・倭幸傳「休
息閑宴之殿曰便殿」

「便」は安くくつろぐ・くつろぎ休む等の意。

【たとしへもない】たとへやうがない。「譬へ無し」の義で
「し」は休詞かといふ。「も」は強めの助詞。

【西神門】ニシンモン 外院西廻廊の中央にある門。建

坪約五坪。

【視野】 シヤ (一) 視力のとゞく範圍。(二)一平面上の一點を凝視する時、同時に視覺のとゞき及ぶ範圍。こゝは(一)の意。

【嚴肅】 ゲンシユク おごそかなこと。きびしいこと。

【優雅】 イウガ やさしくみやびやかなこと。上品でみやびやかなこと。氣品のすぐれたこと。

【急轉】 キフテン 急に轉じかはること。俄に轉回すること。

【その向うの廣く開けた明るい視野の中に、目も覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉がそこに見える】

身も心も、莊嚴な「強い威力」に壓倒されて森林帯を出ると、そこに一面の芝生地が展開される。平和と明快さを象徴する目の覺めるやうな緑の色に、作者はほつとたくつろぎを感じる。それは神に詣でた後のあの明るい快活な感情であり、清淨潔白・優雅への轉回である。讀者も亦作者と共にこの意識の急轉を経験する如き巧妙な描寫である。

【林苑】 リンエン 木の茂つた庭園。

【組成】 ソセイ くみたてること。

【落葉樹】 ラクエフジュ 「常綠樹」に對する語。秋季に葉

が脱落して越冬し、翌春に至つて新葉の萌え出る樹木。梅・櫻・楓・樺等の類。この種の樹木には、落葉に先だつて紅葉・黄葉の現象を示して美觀を呈するものがある。

【寶物殿】 ホウモツデン 境内の北隅にある(五頁挿圖参照)祭神二柱の御在世中の御調度を初め、由緒深い御物を奉安する建物。大正三年造營豫算計上、造營局案の設計により同年竣工。東倉・中倉・西倉・東廊・西廊・東橋廊・西橋廊・東渡殿・西渡殿からなり、御寶物は東西兩倉に藏し、中倉に陳列して一般に拜觀せしめる。主なる御寶物は夏冬の御直衣東帶・陸海軍の御正裝・四書記紀等の御愛讀書、御常用の机・筆筒・筆硯・御馬車等で、何れも御威儀を拜し、又御質素の程の偲び奉られる御品ばかりである。(一五頁挿圖参照)

【中古時代】 チュウコジダイ 歴史上の時代區分。我が國では、平安奠都の時から源賴朝が鎌倉に幕府を開くまでの間、即ち平安時代をいふ。所謂平安朝の燦然たる文化を建設した時代である。大和時代を上古といひ、鎌倉・室町時代を近古といふのに對する。

【鐵筋コンクリート石張】 鐵筋で補強したコンクリートの上を更に石で張りつめた建築様式。

明治神宮寶物殿は鐵筋コンクリートを構造の主體とし、その壁體の鐵筋へ更に石を張りつめたもので、屋上は釉

懸耐寒瓦を以て葺かれてゐる。石は岡山縣萬成石、瓦は會津産のものである。

「コンクリート」英語 Concrete 「混凝土」の字を宛てる。セメントと砂・砂利のやうな骨材とを適當な割合で水を加へて混合したもの。これを放置すれば乾燥して硬化し、堅牢な建築用の構造材となる。

「鐵筋コンクリート」はこの中に張力の強い鐵材を挿入して、兩者の強度を相補はしめた構造材料で、耐震耐火に適するのみならず、工事費材料費の經濟的な爲に、現代建築上の主要材料となつてゐる。

【八幡製鐵所】 ヤハタセイテツジヨ 福岡縣八幡市枝光に在つた官設製鐵所。現日本製鐵株式會社八幡製鐵所の前身。明治三十年設立。我が國唯一の官設製鐵所であつたが、昭和八年半官的の日本製鐵株式會社の創立と共に廢せられた。現在東洋一の大型製鐵所で、原料鑛は主に支那大治鐵山から輸入する。

【橋梁】 ケウリヤウ はし。かけはし。

【池塘】 チタウ 池のつゝみ。朱子詩「未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」

この池は「北池」を指す。(挿圖参照)

【枅形】 マスガタ (一)四角い枅のやうな形。(二)柱などの上に設けた四角い枅のやうな木。とがた。(三)城の一

の門と二の門との間の廣く平な方形又は短形の地。

明治神宮の枅形は、南・北・西各參道の入口にある短形の廣場をいふ。こゝは勿論南參道入口の枅形。(挿圖参照)

【社務所】 シヤムシヨ 神社の事務を取扱ふ所。

明治神宮社務所は南參道右側の小高い所にある(挿圖参照)

【古雅】 コガ 古風でみやびやかなこと。古代の風があつて雅致に富んで居ること。

【由緒】 ユイシヨ (一)物事の由來した端緒。ゆゑよし。理由。(二)傳へて來た事由。來歴。こゝは(一)の意。

【舊御苑】 キウギョエン もと代々木御苑と稱し、明治神宮御造營後舊御苑と呼ぶ。昭憲皇太后の御健康の爲、明治天皇の思召で造營せられたものといふ。總坪數三萬二千三百坪、櫟・楡・栗などの鬱蒼たる樹下には熊笹が茂つて、今猶武藏野の悌を留めてゐる。

「御苑」は帝室の御庭。禁庭。

【舊御殿】 キウゴテン 社務所の北にある。もと井伊家の下屋敷であつたのを、御料地となつて後その一部に修理を加へた建物。御祭神二柱の御在世中御行幸啓の際の玉座が今猶存して居る。

本文は御苑内の建物に敷へられて居るが、挿圖の示す通り御苑外であり、社務所發行の諸書にも御苑外と記して

ある。作者の誤解によるのであらうか。

【舊御茶屋】 キウオチャヤ 「隔雲亭」ともいひ、御苑内南池に臨んだ小丘上に在る。(十七頁挿繪参照)

【田園】 デンエン (一)田とはたけ。(二)田舎。郊外。こは(一)の意。

【技巧を弄しない】 いたづらに技術上のたくみを用ひなす。「弄する」はもてあそぶ、自由にあつかふ等の意。

【趣致】 シュチ おもむき。ふぜい。

【愛賞】 アイシャウ めでること。好むこと。

【この御苑は、祭神二柱の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處】

昭憲皇太后は明治三十二年四月十三日の行啓を最初とし、其の後三十三年から三十六年まで、四十年から四十二年までは殆ど連年行啓あらせられ、舊御苑内に玉歩を運ばせ給ひ、或は舊御茶屋に御休息あらせられて四圍の風致を愛でさせられ、或は御花見・魚釣等に興がらせ給うた由である。尚行啓以外の御微行に至つては、少くとも毎年五・六回、多きは七・八回に及ばれたといふことである。明治天皇は政務繁劇の爲その御暇もあらせられず、ここに御行幸あらせられたのは明治十九年一月十九日只御一度に過ぎなかつた。併し御料地の御園の外が練兵場となつた折は、舊御茶屋の埃にまみれることと、外

より露はに見えずく事を慮り給ひ、陸軍省より接屬地三千坪を譲り受けさせられた。これ等は二柱の神の御在世中、特にこの御苑に御心を留めさせられて居られた證據である。

【しをらしく】 愛らしく。かはゆらしく。

【萩】 ハギ 荳科・萩屬の多年生亞灌木。莖高二米に達し叢生する。葉は廣楕圓形又は倒卵形の三小葉からなる複葉で、葉面に軟毛がある。秋日葉腋又は梢上に、多数房状の紅紫色または白色の蝶形花を開き、後莢果を結ぶ。變種が多く、秋の七草の一で、古枝草・野守草など、古歌に詠まれた異名がはなはだ多い。

【熊笹】 クマザサ 禾本科の多年生植物。莖は細い強靱な桿莖で、高さ一・二米に達する。葉は長楕圓形・鋭尖頭で每枝五葉内至七葉を掌状に出す。冬期綠葉の縁邊のみが白く枯れて一種の美觀を呈する。

花は長梗・卵形の圓錐花序をなし、桿莖の下部から發生するが、これを見ることは稀である。本州各地及び四國等の山地に自生し、又庭園に栽植される。葉は鮮の笹莖、料理の下敷等に用ひられる。

【樺】 クヌギ 殼斗科の落葉喬木。樹幹高さ三〇米に達するものがある。樹皮は暗褐色で深く縦裂する。葉は長楕圓形披針状で鋸齒を有し、栗の葉に酷似する。初夏葉間

に黄褐色穗状の花を開き、雌雄同株。果實は「どんぐり」と稱し、殼斗を有する球形の堅果でいがを具へる。材は薪炭に、樹皮は染料に供せられる。

【楡】 ナラ「柞」「枹」とも書く。學名を「こなら」といふ。殼斗科の落葉喬木。温暖地の山林に自生し、樹高一五米前後、樹皮は赫黒色で帶黄緑白色の斑點があり、始め平滑で後に深く縦裂する。葉は互生し、倒卵状長楕圓形、又は倒卵形で鋭尖頭、縁邊に鋸齒を有し、表面は綠色で、裏面は白色を帯び偃毛を有する。雌雄同株、雄花は疎に細長い穗状花序に配列し、雌花には花後楕圓形の堅果を生ずる。材は器具材・薪炭材に、樹皮は染料に供され、果實は食用となる。ならはのき・ははそ等の異名がある。

【雑木林】 ザフキバヤシ 雑木の林。「雑木」は建築用材などに用ひられない粗末な木。「雑」は粗末の意を表す接頭語。雑巾・雑兵・雑煮はこの類。

【近郊】 キンカウ 都市又は都邑の近傍にある村里又は野原。

【野趣】 ヤシュ (一)田園のおもむき。田舎びた趣。(二)素樸な趣味。こゝは(一)の意。

【一わたり】 (一)一度。一回。(二)一曲を奏し終ること。こゝは(一)の意。

【涙ぐましく】 (一)涙ぐみ易く。涙を催しがちである。涙

が出さうである。(二)かなしい。あはれである。こゝは(一)の意。

【霧】 モヤ 深い霧。

【かつきり】 區別のはつきりしたさま。くつきり。きつきり。

【振返つて見ると、御殿のあたりは、すつかりもう深い霧に包まれて、晝でも暗いほど黒々と生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白色が暮れ残つて續いて見えるのがいひがたい嚴肅な氣分を起させた】
「清らかな小砂利を敷きつめた參道の白い線」(六頁初行)と相對して、これはまた見る眼にすがすがしい明確な明治神宮の大觀であり、涙ぐましい感激を以て振返つた作者の目に映る神宮の印象であつた。森嚴な幽邃な優雅な神苑(一九頁二行)といふその明治神宮の特色を、作者は今回顧の中にはつきりと思ひ浮べてゐる。「永い私の一生を通じて果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか(末文)と自ら表白してゐる強い印象である。それがこの明確嚴肅な語調をなしたのであらう。

【神秘的な境】 シンビナサカヒ 靈妙にして知るべからざる場所。

「神秘」は(一)人智ではかり知られない靈妙な秘密。(二)普通の理論・認識を超越した事柄。こゝは(一)の意。

【曲線】 キョクセン (一)まがつた線。(二)數學上、何れの部分も直線でない線。こゝは(一)の意。

【威靈】 キレイ おごそかで神々しい力。威徳。

【印象】 インシヤウ (一)心理學上 Impression の譯語。

吾人が現在直接に物に觸れて得た感情が深く心に銘じて

活々としてゐる心の状態。(二)内・外的知覺が精神に表現せられたもの、即ち觀念の根柢となるもの。刺戟を受けて感覺を起す受動作用。(三)轉じて一般に忘れられない深い感銘。こゝは(三)の意。

2 文の構成

第一節 初―五頁八行 明治神宮建設工事の進捗を目のあたり見た作者の歡喜。

第二節 五頁九行―六頁七行 竣工した明治神宮の神域を、その地の舊態と比較しつゝ敘した大觀。

第三節 六頁八行―八頁一行 明治神宮の「建設」を完成せしめた超物質的な三つの原動力。

第四節 八頁二行―同頁末行 全國民の誠意の結晶であり、國民崇敬の標的たる二柱の神のいます宮居としての明治神宮の特色。

第五節 九頁一行―一九頁三行 參拜記。

1 表參道から神殿に至るまで(九頁初行―一二頁一行)

(イ) 神域に踏入つた時の感想(九頁初行―同頁七行)

(ロ) 參道兩側の流水樹石の優雅な景觀(九頁八行―一〇頁八行)

(ハ) 第一鳥居の説明(一〇頁九行―一一頁三行)

(ニ) 參道の盡きた所で遠望する神殿(一一頁四行―一二頁一行)

2 明るく莊嚴な神殿と默禱を終つた後の作者の感想(一二頁二行―一四頁末行)

(イ) 神殿の神聖莊嚴な有様(一二頁二行―一三頁一行)

(ロ) 默禱を終へた後の作者の感想(一三頁二行―一四頁末行)

(ハ) 拜殿の左右の廻廊便殿等の莊嚴美(一五頁初行―同頁六行)

3 西神門から寶物殿まで(一五頁七行―一六頁一〇行)

(イ) 神殿から寶物殿に至る間の林苑の景趣(一五頁七行―一六頁四行)

(ロ) 寶物殿の説明(一六頁五行―同頁一〇行)

4 舊御苑の景觀(一六頁末行―一八頁四行)

5 參道歸途に於ける感想(一八頁五行―一九頁三行)

第六節 十九頁四行―終 參拜によつて受けた忘れ難い印象を述べて文を結ぶ。

3 文意

懐かしい代々木の森の中に、着々と進捗する造營工事を見て歡喜に心を躍らせて居た作者が、其の峻成に當つてなした參拜記である。或は道々の神苑の景趣を敘し、或は御社殿の様子を記す間に、それらから受けた強い感懐、即ち森嚴と幽遠と優雅とを兼ね備へた明治神宮に對する、作者自らの敬虔に溢れた感動を表明してゐる。

4 鑑賞批評

極めて新鮮周到な觀察を以て林苑社殿の景觀を敘し、その間それらから受ける感懐を述べてゐるのであるが、一般に漫然として見過して行く舎殿・鳥居・神橋等の用材・産地或はその數字的記録等を明細にして、自らの感懐を實證し、更にその奥に意義を見出すといふ態度を以て筆をすすめ、その爲にその感懐の流露は極めて自然で、深く讀者の同感に訴へるものがある。而してその感懐の底に脈々として波うつものは言ふまでもなく二柱の御祭神に對する深甚な仰慕の念であり、隨つて明治神宮に對する敬虔そのものの心持である。いはばこの明治神宮に對する作者の敬虔な心が經となり、全國民の

熱誠を緯とし、これを織りなすに詩人としての作者の巧緻なる表現技巧を以てなされた一文であるとも言ひ得るであらう。明治神宮造營當初に於ける参拜記として、當時の國民的感情を代表するものともいふべき深い意義を持つてゐる。

三 備 考

1 指導研究

(一) 詩人的鍛鍊によつて磨かれた作者の表現技巧には、勿論此の文に相應しい新鮮巧緻なものがある。然し本課はその表現上の價値の爲といふより、寧ろ素材そのものの意義の爲に採擇した教材たる事はいふまでもない。随つて讀みの終局の到達點は作者の敬虔な感激への同感でなければならぬであらう。

(二) 建築の用材、参道の幅員、樹石の産地等作者はかうした造營に關する數字的知識を明細に記してをり、これは曾て参拜したものには今更の感があり、將來参拜せんとする者には貴重な参考であつて、生徒の中にはかうした知識に特別の注意を引かれ興味を感じる程度に讀みを終るものも尠くないであらう。併しこれは入口に過ぎない。さうした具體的事實の根柢に横たはり、これを裏附けてゐるもの、即ち祭神二柱に對する仰慕と國民の感謝赤誠などが理解せられねばならぬ。要するに觀察から感謝に發展し、感激を裏づける觀察として取扱ふやうな導き方、それによつてのみ全一的學習が指導せられるであらう。

(三) 併しかうした文に對しては斷片的な感想評語等は出来るだけさしひかへらるべきではなからうか。少くとも此の文の根柢に流れる作者の敬虔な感動は讀者を導いてある森嚴な沈黙に導くものがある。不純な心を排し、靜心熟讀して自らその感銘を深めるといふ態度の讀みが要求せらるべきである。

2 参 考

明治神宮建立の経緯を略記する。

- 1、大正二年三月二十六日、衆議員本會議に「政府ハ明治天皇ノ御靈ヲ奉祀センカ爲ニ神宮建設計畫ヲ立テ速ニ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ」との建議案が出た。
- 2、同年十一月二十七日、明治神宮御鎮祭を御治定。
- 3、同年十二月二十日勅令第三百八號を以て神社奉祀調査會官制を公布し即日施行、明治天皇奉祀に關する一切の事を調査せしむ。
- 4、第三十五帝國議會は滿場一致を以て神宮奉建の總豫算案可決。
- 5、同三年三月十五日、神宮の鎮座地を東京府下豊多摩郡代々幡村大字代々木の南豊島御料地に御治定。
- 6、同年五月一日、内務省告示第三十號で、明治天皇・昭憲皇太后を祭神とする明治神宮を代々木に創立し、社格を官幣大社に列すと定め、同日勅令第五十七號を以て明治神宮造營局官制を公布。神社奉祀調査會を廢止す。
- 7、大正四年十月七日、地鎮祭執行。
- 8、大正五年三月二十五日、新始祭・掘木始。
- 9、大正八年四月、石工事始。
- 10、大正八年五月二十七日立柱祭。
- 11、大正八年七月十二日本殿上棟祭。
- 12、大正九年八月金銅鑄金具を打始む。
- 13、大正九年十一月一日鎮座祭。

補 材

○明治神宮西参道の畫關けて清きひと照りの風ぞ過ぎたる

北原白秋の第六歌集「白南風」のうち「砧村雜唱」の初に載せられてゐる明治神宮を詠じた一聯の歌の中の一首である。

恰も本課の文一五頁七行から一六頁三行に至るあたりの景觀を詠じたもので、補材として好個のものである。

【関く】 たく (一)十分になる。盛りになる。(二)さかり過ぐ。末になる。こゝは(二)の意。故に「晝闌けて」は三時頃を指すものと思へる。

て若葉の輝いたさまを風それ自身が光つたかの様に表現した。自然現象の論理的解釋から解放され、直觀の世界を直ちにぶちまけた詩的表現のよさである。

【ひと照り】 颯と輝いて吹き渡つたさま。一吹の風によつ

明治神宮の西參道のあたりあかるく廣くひらけた芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。初夏の午後のその明るさの中を若葉をそよがせて光り過ぎて行く一吹の風の清爽明快さに對する詠歎である。

西神門から出て森林帯をすぎ「眼の覺めるやうな芝生地」を眼前にして「嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉」(本文一五頁末行)に心の明るく和やかに解放された時、晝闌けた明るさの中を一陣の風が若葉をそよがせて颯と吹き過ぎて行つたのである。芝生も木々の若葉も清々しく輝く風の清さである。神苑らしい清さが作者の心を打つたのであつた。「清きひと照りの風ぞ過ぎたる」はその詠歎であり、また此の一首を生かした實に巧みな表現である。

【作者】 北原白秋 一〇・良寛さま作者欄参照

三 岡に立つて

長 塚 節

一 解 題

1 作者

長塚 節 ナガツカタカシ 明治十二年四月、茨城縣結城郡岡田村おんたむら國生に生まれた。生來虚弱のため水戸中學校を中途退學し、爾後家に在つて病氣靜養の傍和歌に親しみ、殊に正岡子規の「歌よみに與ふる書」に刺戟され、三十三年二十二歳の時終に子規の門に入り、俳句・和歌・寫生文を學んだ。子規歿後、伊藤左千夫・岡麓等と雑誌「馬酔本」を創刊し、和歌・歌論・寫生文等を發表、更に雑誌「アララギ」の發行後はこれに據り、又寫生文の手法を以て小説を作つた。彼は家にあつて農事に勵み、竹林を栽培し、郷邑の青年の啓發に盡した。傑作「土」はかくして生まれたものである。彼は又旅行を好み、農事の餘暇には各地を巡遊し、その足跡は東北から遠く西海にまで及んだ。彼の和歌はその旅行から生まれたものが多い。四十四年十一月喉頭結核と診斷され、東京・京都・福岡と専門醫を訪ねて治療につとめたが、大正四年二月九州帝國大學附屬病院に歿した。享年三十七。

節の歌は蒼古な萬葉調の手堅い寫生に一貫され、歌調森嚴にしていやしくもせず、清澄繊細なものであつた。殊に晩年は東洋美術に感鳴する所があり、自ら作歌にも影響して、歌の上に「氣品」「牙」といふやうな境地を唱導した。晩年の歌集「鍼の如く」はこれを具體化したものである。又小説・寫生文に於ても繊細な描寫に終始し、正直に丹念に飽くまで現實に即して、對象の核心に徹する態度であつた。

著作には歌集に「長塚節歌集」、歌論に「萬葉集卷十四」「東歌餘談」「萬葉口舌」「寫生の歌に就いて」「枯桑漫筆」等、短篇小説に「開業醫」「おふさ」「教師」「隣室の客」等、長篇小説に「土」寫生文に「佐渡が島」「鉛筆日記」「彌彦山」「才丸行き」「須磨明石」等があり、今すべて長塚節全集全六卷に收められてゐる。

2 出典

短篇小説「芋掘り」から抄録した。「芋掘り」は明治四十一年三月雑誌ホトトギスに發表されたもので、平和な明るい農村を舞臺として、其處に醸し出される素樸な農民生活を描いたものである。今「長塚節全集」第二卷に收載されてゐる。本課の文は、その前半「後から後からと細やかに乾かして行く」(二六頁六行)までは篇首から、後半は篇末から、各の自然描寫を主とした部分を抄録したものである。

尙本文と殆ど同じものが長塚節全集第六卷に載せられて居る。これは明治四十二年發行の茨城縣下妻中學校雜誌「爲櫻」に「寫生斷片」として寄稿されたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

小春の日に照らされた田園の自然と、其處に土に塗れて刻苦する農民の生活との描かれた土の文字である。而も此の作者獨特の忠實丹念な表現態度は、素樸な一種の氣韻を滲みださせてゐる。かゝる藝術境への味到としての文藝的教材であると共に、自ら眞摯な農民としての體驗を土臺にした、深刻な生活觀察を通して人間的教養に資せらるべき文化的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【小春】 コハル 陰曆十月の異稱。氣候が溫暖和煦で春に似て居るので此の名がある。

【小春の日光は岡の畑一杯に射してゐる】

「岡の畑は明らかに照りわたつてゐるのである」(二二頁九行)「岡はたゞ長閑である」(二三頁末行)などと相照應し、此の季節と、季節特有な日光とを想起せしめ、全篇を蔽ふ温い明朗な情調を豫想せしめるよく利いた冒頭である。

【標】 クヌギ 殼斗科の落葉喬木。(一)明治神宮・一七頁末行既出)

【鬼怒川】 キヌガハ 利根川の最大支流。栃木縣の西北境奥日光に源を發し、大谷川を合せて同縣中央部を南流し、茨城縣相馬郡に入つて利根川に合流する。古く「毛野川」といひ、今「衣川」「絹川」とも書き、上流は溪谷の美を以て知られ、流に沿つて川俣・川治・鬼怒川の温泉、鬼怒川水力電氣の發電所があり、下流は灌漑と水運とに利する所大である。

【街道】 カイダウ 大通。國道。官道。

【田圃】 タンボ「デンボ」の音讀もある。田畑のある土地のこと。多く「田のある土地」の意に用ひる。こゝは此の意。

【草家】 クサヤ 草葺の家。

三 岡に立つて

【葦草】 ハウキグサ 「ハハキグサ」の音便。藜科の一年生草本。高さ一米内外。狭長な全縁葉を、赤色を帯びた分枝の多い細い莖に互生する。夏日枝上の葉腋に穗狀黄綠色の小花を綴る。雌花と雄花とがある。葉を乾燥して草蓐をつくる。ヨーロッパの原産で、「はゝきぎ」と言ひ、また「まきくさ」にはくさ」の異名がある。

【樺】 ケヤキ 樺科けやき屬の落葉喬木。幹の高さ三〇米、周圍三米餘に達するものもあり、上部に多くの枝を分つ。樹皮は帯緑暗紅褐色で粗糲。葉は短柄で互生し、卵狀長橢圓形又は披針形で尖り、縁邊に鋭鋸齒を有する。雌雄同株で四五月頃淡黄綠色の聚繖花序をなす雄花と、灰黒色の單立の雄花とを、それぞれ新條の下部又は上部に腋出し、十月頃扁球形の小核果を結ぶ。材は堅硬で木理が美しく、家具・建築・船艦の材料として重用される。

【篠】 シノ 細くして數多叢生する竹。即ち「めだけ」や「だけ」などの類。

【めだけ】 禾本科の多年生植物。高さ六七米に達し、結節上に枝條を簇生し、短柄披針狀の常縁葉をつける。花は通常生じないが時に淡綠色の穎花を圓錐花序に綴る。本州中南部・四國等に自生する。かはたけ・なよたけ・をなごだけ・あきたけ・にがたけ・みかはたけ等の異稱があり、釣竿、その他の竹材として用ひる。

〔やだけ〕 禾本科多年生植物。大體めだけに類するが結節が低く、節間が長い。高さ五六米、每節一枝條を出し小枝を分つて葉をつける。葉は披針形で互生し、上面は滑澤、裏面は無毛。弓の矢・籠等をつくるに用ひる。

【白々】 シロジロ・シラジラ 大層白いさま。眞白なる様。

【高瀬舟】 タカセブネ 川舟の一種。昔のものは船體が小さく、底が深かつたが、後世のものは大形で、どんな高瀬（あさせ）でも漕ぎ上られるやうに、底を平たく浅くしてある。

【盛まる】 チマまる 音「シユウ」

【鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つてゐるので、近くの水は其の蔭に隠れて見えない。のぼる白帆が半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越して水が白々と見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから、篠の梢を離れて高瀬舟の全形が見える頃には、白帆は遙かに小さく盛まつてゐる。如何にも精緻的確に、而も巧妙に距離の遠近を描いてゐる。上り行く白帆に焦點をおいた筆の運びに生動性があつて、その間、小春の日にふさはしい長閑けさを漂はしてゐる。寫生の妙趣と言ふべきであらう。

【筑波山】 ツクバサン 茨城縣の筑波・眞壁・新治三郡に跨る山。海拔八七六米。關東平野到る處からこれを望むことが出来る。頂上は男體（西）・女體（東）の二峯に分れ、

たのである。

【觀測所】 クワンソクジョ 筑波山男體の頂上にある。今の中央氣象臺附屬筑波山測候所。故山階宮菊麿王殿下が氣象學御研究の爲、明治三十四年に御設立になられたもので、當時山階宮筑波山觀測所と稱せられた。四十一年殿下御薨去の後文部省に御寄贈、翌年から中央氣象臺附屬測候所と改稱され、昭和四年に現在の廳舎に改築された。我が國最古の山嶽氣象觀測所として有名である。

【不透明】 フトウメイ 透明でない。すきとほらない。

【際立たせて】 キハダたせて 他よりめだつて。一際はつきりと。

【やや不透明な空氣は、針の尖でつづいたやうに、其の白い一點を際立たせて眼に映じさせる】

晴れてはゐるが小春のあの水氣の多い空氣の爲に、全景が少しおぼろに霞んでゐる。それで觀測所の建物の白さが、殊更に鮮明に鋭く眼に映するのであらう。巧妙な遠景描寫である。殊に空氣を文の主體に置いて「際立たせ」「映じさせる」と使役形を使った所、其處に小春獨特の薄くよどんだ大氣のさまを描いて、一種懶いまでに穩やかな情趣を漂はせてゐる。

【傾斜】 ケイシャ かたむいてゐること。

【中央に立つて見ると】

三 岡に立つて

全山森林に蔽はれて綠葉紅葉の美觀に富むのみならず、山上の四望闊大で山河襟帶の大觀を恣にし得る。男體山に伊弉諾尊を祀る男體祠及び中央氣象臺の附屬測候所があり、女體山には伊弉册尊を祀る女體祠があり、兩峯の中央鞍部（一名御幸原）からは水無川が源を發する。山腹に筑波町があり、その上方に縣社筑波神社（男體祠・女體祠は當社奥宮である）がある。山色は朝は藍、晝は綠、夕は紫に變ずるといひ傳へられ殊に紫の山は最も美しく、別に「紫山」の異稱があり、古來關東一の名山として、萬葉以來の歌枕である。

【一脚を張る】 イツキヤクをハル 「片一方の山裾をひろげてゐる」を擬人化したのである。

【常磐木】 トキハギ 「常綠樹」とも書く。四時綠葉を保つ樹木。松・杉等の類。「常磐」は（一）「とこいは」常磐の意。即ち常にかはらぬ、永久不變なこと。（二）「とこは」常葉の意、即ち草木の葉の四時綠色を保つてその色を變ぜぬこと。こゝは（二）の意に（一）の文字を宛用したのである。

【常磐木の部分】 筑波山の山麓より中腹の地帯にかけては檜・樅の常綠樹が多い。此の部分と言つたのである。

【赭く焦げたやうである】 アカクコげたやうである 樹木が落葉して山肌の赭土色があらはに見えるさまを形容し

「小春の日光は岡の畑一杯に射してゐる」と書出して、遠近の景趣を寫しながら、作者は一向に自分の立つ位置を語らなかつた。此處で初めて作者の位置が明瞭になつたわけである。生徒をしてもう一度前にかへつて、その傾斜した岡の畑の中央から描寫せられた遠近の景色を再構成的に眺望せしむべきであらう。

【櫟林は半ば隠れて】

櫟林に就いては原文本節の前に「櫟の林は、此の狭く連つてゐる田と鬼怒川との間を繋いで、横に續いてゐる。田も遙かのさきは櫟林に隠れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の林はびつしりと赭い葉がくつついてゐる。」の説明がある。讀解上何等支障をみない部分と思はれるので省略したのであるが、教授者は一應心得て置くべきであらう。

【兩毛】 リヤウマウ 上野國と下野國。

此の兩國は古くは合せて毛野國と稱したもので、仁徳天皇の御代東西に分つて、東を下毛野、西を上毛野とされた。降つて元明天皇和銅年間改めて下野・上野の文字を宛てた。今の「しもつけ」「かうつけ」はその轉訛である。

【綠青】 ロクシヤウ （一）銅が濕つた空氣にあつて生ずる綠色有毒の鏽。無水炭酸と銅との化合物である。（二）綠色顔料の一。葡萄汁液の搾滓が、醋酸發酵を起す時、そ

の中に銅片を放置して製する。主に緑色の繪具に用ひる。
【こんな周圍の中に、岡の畑は朗らかに照りわたつてゐるのである。土は乾き切つてゐる。既に二三寸伸びた麥は、岡一杯に薄く緑青を塗つたやうになつてゐる】

丹念に周圍を細敍して、然る後初めて足下の畑の描寫に歸つた。用意周到な手法である。而も既述した如く、「岡の畑は朗らかに照りわたつてゐる」は冒頭の「小春の日光は」に照應して、明るく靜かな小春の光を利かし、ふつくらと乾いた土に、麥の青々と伸びた畑の情景を活々と眼に描かせる。

【うなつてゐる】「うなふ」は、鋤・鍬で田畠の土をほり起してうねをつくること。「畝」を活用した語。

【芋】イモ 植物の根部又は地下莖が澱粉その他の養分を多量に蓄へて肥大したものの。「天南星科」のさといも・やつがしら・たうのいも、「旋花科」のさつまいも、「茄科」のじやがたらいも、「薯蕷科」のやまのいも・ながいも等がある。正しくは「芋」の字は「天南星科」のいもを表し、その他に對しては「薯」諸の字をあてる。ここは後の文から考へて「さといも」であらう。

【茶の木】チャのキ 山茶科の常緑灌木。支那及び我が國の原産。高さ二米内外。葉は長楕圓で兩端が稍と尖り、周邊に鋸齒を有し、厚質短柄で互生する。秋日葉腋に白

の田園情景である。

【百姓】ヒヤクシヤウ 農民。田舎人。「ヒヤクシヤウ」は國音。「ヒヤクセイ」と漢音に讀む時は、萬民・人民の意となる。

【長閑】ノドカ (一)靜かなさま。ゆつたりとしたさま。(二)空が晴れてうららかなさま。天氣のおだやかなさま。こゝは(一)の意。

【絶頂】ゼツチャウ (一)山の頂上。(二)物事ののぼりつめたところ。最上。極度。こゝは(一)の意。

【百姓の手元は忙しい。しかし岡はただ長閑である。日がやや傾くと、忽ち筑波山の絶頂から眩しい光がきらきらと射す】

寸分の緩みを見せぬ緊張した手法である。退屈さうな馬によつて象徴された長閑さの中に、忙しく動く百姓の手元の細部を描く作者は、忽ち「岡はただ」と大觀して、その長閑さを徹せしめる。そしてその「忙しさ」と「長閑さ」との對照の間に時間的經過をもたせ、それが直ぐ「日がやや傾くと」といふ時間的推移の直叙に移り、更に其處に筑波山の絶頂から眩しい光の射す全く新しい光景を展開せしめてゐる。洗煉醇化された此の簡潔な手法には驚くべきものがある。

【百姓の或者は、筑波山で火を燃やすのだらうなどといつて

色五瓣花を開き、花後扁圓鈍三角形の蒴果を結ぶ。春期その嫩葉を摘採して紅茶・綠茶を製する。

【畑の縁には馬が茶の木に繋いであつて、俵が轉がつてゐる】

何でもない此の點景描寫が、實は全景を如何にもよく具象化してゐる力に注意させたい。

【退屈まぎれに】 タイクツまぎれに 退屈をまぎらすために。

「退屈」は(一)倦みあくこと。倦み怠ること。(二)ひまでくるしむこと。無聊。こゝは(二)の意。

【轡】クツツ 「口輪」の義。馬の口に含ませておく金屬製の具。手綱をつけて馬を馭するに用ひる。

【極めつける】 キめつける 手強く叱りつけること。こゝでは「やつつける」位の意。

【叱り飛ばす】 シカリトばす 荒々しく叱ること。

【馬は退屈まぎれに、どうかすると茶の木を食ひむしることがある。其の時一人が驅けて出て、轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばすと、馬はまたおとなしくなつて、ばさりばさりと尾を動してゐる】

茶の木に繋がれた馬の姿が如何にも如實に描かれてゐる。靜中この動があつて、靜の更に深きものを覺える。まことに「春日遅々」とでも形容したい程靜閑な小春日

る】

無智にして純樸な百姓達の心の窺へる所である。

【芋掘の人々は勿論此の光を知らないのである】

仕事に傍目も振らぬ手元の忙しい百姓達には、その強い反射も今は目に入らないのである。それとあらはに言はずして、百姓の眞鍮な姿を偲ばしめる所、つまり眞鍮な一農人としての作者の生活の反映だとも言へよう。

【小麥】 ヨムギ 「まむぎ」とも言ふ。禾本科二年生草本。

稈は直立し、高さ一米内外、中空で節を有する。葉は線狀披針形で、毎節一葉を出し、葉柄は鞘狀をなして稈をつむ。五月頃、稈頂に花莖を抜き、小形の穎花を穗狀花序に配列する。果實は穎果で、芒を有するものと然らざるものとある。種子は粉としてパン・饅頭・菓子材料とし、稈は帽子・麥稈細工の材料とする。

【畝】 ウネ 「畦」「隴」「壟」などの字をも宛てる。田畠の中に堆く盛上げて長く續け、作物を植ゑつける所。

【芋の莖】 イモのクキ 「さといも」の葉柄をさすのである。「さといも」の葉は地下の球根から直ちに生じて、長く肥大した葉柄の上に筒形の廣葉をつける。その葉柄が莖に似てゐるので、これを普通「芋の莖」とよんでゐる。

【芋の莖はべたりと茹でたやうになつてゐる】

霜で凍て萎え倒れてゐる芋の葉の形容であるが、あの

水氣の多い紫色の芋の莖に「べたりと茹でたやうに」と言ふ形容は全く巧妙適切である。

一體この作者の文には擬態擬聲の副詞が極めて多い。例へば「ぼつぼつと」「二〇頁四行」「すくすくと」「二〇頁六行」「ぼつちりと」「二二頁二行」「がちんと」「二三頁七行」「ばさりばさと」「二三頁八行」「きらきらと」「二四頁一行」「びかびかと」「二五頁五行」「ざくつと」「二五頁六行」「ふはりと」「二五頁七行」「どざりと」「二五頁末行」等挙げればかなりの數に上つてゐる。併しこれらが何の煩しきも不自然さも感ぜしめないばかりか、却てみなそれぞれその所を得、且極めて實感的に效果的に活いてゐる。作者の精緻な觀察を通し苦心洗煉を経て到達した唯一の表現だからであらう。

【女・男】原著では「女」は「おすが」男は「兼次」となつてゐる。(参考欄「小説の梗概」参照)即ち原著では小説の主人公がこゝに初めて登場して来るのである。
【菜刀】ナガタナ 野菜類を切るに用ひる薄く廣い庖丁。菜切り庖丁。

【女は芋の莖を菜刀で根元から切つて先へ出る】
【小麦に障らないやうに極めて丁寧に掘つて先へ先へと行く】
【先へ出る】と言ひ、「先へ先へと行く」といふ。何れも

る】

精緻な觀察は、作業の方法とその光景とを、的確に活々と描いて、眼前にありありと浮ばせる。ここでもまた、「どざりと」「ぞろつと」「ぶりぶり」となどの副詞が情景を印象的ならしめてゐるかの如き効果を示してゐる。

【日光が其の土を後から後からと細やかに乾かして行く】これも亦冒頭の「小春の日光は——」に照應し、更にまた「岡の畑は朗らかに照りわたつてゐる」「二二頁九行」を承けて、小春の日の靜穩な明るさをより一層明らかにしてゐる。

【春が蘇つた】ハルがヨミガへつた 春がめぐつて來た。「蘇る」は蘇生する。生きかへるの意。冬の霜雪の下で死の靜寂をつゞけた萬象が、再び平和な明るい春の光と共に成長活動を始める、それが「蘇つた」と言ふ言葉の持つ内容である。

【世間には、また春が蘇つた】以下原著篇末の一節よりの抄録である。ここに一轉して二八頁七行「林から刈田を飛び廻る」に至る間、春から芋掘りの小春に移る岡の畑の季節の變化を挿入的に略敘して行くのである。

【膨らませ】フクラませ

【胡坐】アグラ 足を組んで坐ること。

三 岡に立つて

芋の植を連ねられた畑の廣さと、仕事の堆積とを、労働を通して間接的に表現したものである。

【庖丁】ハウチャウ 料理に用ひる刃物。

庖は「クリヤ」丁は「ヨボロ」庖丁はもと食膳調理の人、即ち料理人の意。その庖丁の用ひる刃物を庖丁刀といひこれを略して庖丁といふやうになつた。

【びかびかと光る鍬の先をざくつと芋の株へ斜に突きたてて、ぐつと鍬を持上げると、大きな土の塊がふはりと浮きあがる】

百姓の労働の姿が、細かく、力強く、躍々として活寫されてゐる。「ふはりと浮きあがる」の如き、全く體驗なしには到達し難い描寫である。前にも一言したのであるが「びかびかと」「ざくつと」「ぐつと」「ふはりと」と重ねた副詞がこゝでは特によく利いて、力と躍動の姿を髣髴せしめるものがある。

【ほぐれて】 解けてばらばらになつて。

【こごつた】 「凝つた」と書く。「凝る」はこほつて固くなる。凝結する。

【掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかり揚げて、どざりと打ちつける。細かに土がほぐれて、こごつた小芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩の掌でぶりぶり離して、やがて俵に取り入れ

【舳】ヘサキ・ミヨン 音に「チク」と「チウ」「イウ」の二つある。前者はとも(船尾)の意。後者に讀めばへさき(船首)の意。こゝは後者である。

【白帆を一杯に膨らませて高瀬舟が頻りにのぼるのが見える。船頭が胡坐をかいたまま時々舵に手を掛けるだけで、船の舳はちやぶちやぶと水に逆らつてのぼつて行く】

「白帆を一杯に膨らませて」といひ「頻りにのぼる」と言ふは蘇つた春の生動の姿を象徴し、「胡坐をかいたまゝ、時々舵に手を掛けるだけで」は長閑さそのものの情景を描いてゐる。誠に春風駘蕩たる一幅の繪である。

【南風】ナンブウ 南方から吹く風。春風。

【味を占める】アジをシめる 一度經驗して興味を覺える。

【鶇】ツグミ 燕雀目鶇科の鳥。形は百舌鳥より稍々大きく、上面は一般に灰褐色、下面は白色をなし、黒色の條斑がある。秋群をなして北方から飛來し、春になるとまた北に還る。鶇鳥として尊重され、肉は美味を以て賞されてゐる。「鶇」の文字は國字。

尚、鶇から椋鳥へ、椋鳥から鶇へと、その時々々の鳥の去來を描いて、季節の推移を敘してゆく着想手法など、注意すべき所であらう。

【椋鳥】ムクドリ 燕雀目椋鳥科の鳥。大きさは鶇大で、

尾は稍々短く、背面は灰褐色、頭上は黒く、腹部は白い。本邦各地に群棲し、その鳴聲は甚だ騒がしい。農・林業上の害虫を捕食するので益鳥に數へられてゐる。

【しらじら明け】 夜の漸く明けんとする頃。拂曉。

【疾風】 シツブウ (一) 疾く吹く風。はやて。(二) 氣象學上、毎秒六乃至一〇米の速度で陸上では木の枝を動かす程度の風。こゝは(一)の意。

【掠鳥はしらじら明けに西から疾風のやうな響をなして空を掩うて渡る】

「疾風のやうな」といふ羽音の形容が、「空を掩うて」といふ副詞とびつたり結びついて、まだ物音の静かな黎明の空を、羽音高く渡り行く掠鳥の群を髣髴せしめる。實に的確な用語である。

【麥搗】 ムギツキ (一) 麥を搗きしらげること。(二) 麥搗をする人。こゝは(二)の意。

【日和】 ヒヨリ (一) 空あひ。空模様。天氣。(二) 好晴。晴和。晴れた空。こゝは(二)の意。

【掠鳥が空を遙かに飛ぶ時に、麥搗は杵を持つ手の右と左をもち換へながら、「今日も日和だ。」と叫ぶ】

「今日も日和だ」といふ言葉から、掠鳥が空を飛ぶ其の時は、しらじら明けの拂曉である。百姓はそんな早曉からもう麥を搗いてゐるのである。而も常に心にかける空

模様を見上げるのも、杵を持ちかへるその合間である。孜々たる百姓の労働の姿が其處にある。また絶えず晴雨寒暑の自然の脅威と闘ふ百姓の心理がそれとなく語られてゐる。「杵を持つ手の右と左を持ち換へながら」は、作者の労働の經驗のじみ出て居る所で、外からの觀察のみで言ひ得る言葉ではない。

【刈田】 カリタ 稻など刈りとつた後の田。

【刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて、また冬が来る】 「刈田の跡の水のやうな」は流石に農人らしい譬である。荒涼とした底冷たい秋の感覚が、作者の實感を通して譬へられ、そこに秋から冬への辛苦が暗示されてゐるかに感じられる。

【鶺鴒】 ヒワ 「金翅雀」とも書く。燕雀類の小鳥。背部は黄色を帯びた暗褐色で、各羽毛に黒條を有し、顔及び翼の大部分は黄色。腹は黒條を交へた白色。雄には頭上に黒羽があり、雌にはこれがない。歐亞大陸の温帯、又はアフリカに棲み、我が國には早春に大群をなして渡來し、かあいい聲でなく。

【切なす】 セツなす (一) 壓迫されて苦しむ。(二) 苦しむ。こゝは(二)の意。

【たなびく】 「棚引く」「寝違く」などの字をあてる。雲・霞などが横に長く引くこと。

【眞倒様に落ちる】 マツサカサマにオちる

暮れやすい秋の日は「つるべ落し」などとも形容する。物が倒に高い所から落ちるやうに、加速度的に忽ちに沈んで行く秋の日に適切な表現である。

「眞倒様」は全くのさかさま。「眞」は名詞・副詞又は形容詞の語幹に冠する接頭語で、眞實・正確・純粹の意を示す。下に來る語の發音との接続に左右されて、或は「マツ」と捉音便になり、或は「マン」と撥音便になる。

【麥の葉をかすつて】 麥の葉に軽くふれて。夕日に麥の葉がほのかに明るく照つてゐるのを言つたのである。

【一しきり】 ひときり。ひとさかり。一時。

【短い日は、村の林の梢にたなびいた土手のやうな夕雲に眞倒様に落ちかゝる。横にさす光は麥の葉をかすつて、縞い櫟の林が一しきり輝く】

秋といふよりも冬がすぐそこに迫つてゐる小春日の黄昏、恰も燃え盡きんとする蠟燭の灯の一時の明るさにも似た、何か薄ら冷たく荒涼たるその夕べの感をよく把へてゐる。歌人節の鋭敏な感覚と精緻な觀察とがよく對象の核心にふれてゐるからであらう。

【晩稻】 オクテ 最も後れて熟する稻。早稻・中稻の對語。
【加減】 カゲン (一) 加へると減ずると。(二) 轉じて程度・分量・工合の意。(三) 身體の工合。健康状態。

こゝは(二)の意。

【形容】 ケイヨウ (一) なりかたち。姿。様子。(二) 物事の形状・状態をかたどつて言ひ表すこと。こゝは(二)の意。

【殘光】 ザンクワウ 暮れ残つた光。夕映。殘照。

【百姓に聞いて見れば、嘗てそんな筑波山は知らないといふ。知らないといふのは尤のことである。日が落ちて殘光がなほ明かな數十分間は、彼等の仕事も最も捗る時である】 迫り寄る夜の闇に追ひつかれまいとする懸命な労働、只管なる仕事への没頭、それが百姓達の生活の姿である。自然がどんなに美しからうと、それに傍目をする餘裕を持たぬ百姓の眞鍮な労働の姿が躍如として描かれてゐる所である。

【晩餐】 バンサン 夕食。晩食。「餐」は(一)のむ・くらふ。(動詞) (二)のみの・くひもの(名詞)

【頬白】 ホホジロ 「畫眉鳥」とも書く。燕雀目雀科に屬する本邦特産の小鳥。大きさは雀大、背面は褐色で濃色の斑紋を有し、淡腹部は褐色。頬部に白い羽毛を生ずるのでこの名がある。「一筆啓上」といふ風に聞えると稱され、籠鳥として愛養される。

【頓着】 トンヂヤク(又はトンチヤク) 佛語の「食着」より轉じた語だといふ。(一) 佛語。多く求めて厭足する所

のないのを「食」と言ひ、貪心の固着して離れないのを「着」といふ。(二)轉じてものにかまふこと。懸念。こゝは(二)の意。

【せつせと】 いそがしく。たえまなく。せつせつと。

【村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに、幾筋もたなびいて、田圃から岡まで届かうとしてゐる】

今しがた「どこの畑からも一人づつ立つて行つた」女達によつて營まれる夕餉の煙である。畑の百姓を迎へにでも出たやうに」といふ形容は、炊煙のたなびく靜かに平和な村の大觀であり、家々に妻が子が、畑の父を、夫を待ちわびる氣持を滲ませてゐるかの如くにも思はれる。そこには劇しい労働の後の休息が用意せられてゐるのである。

【黄昏】 タツガレ。タぐれ。夕方。誰ぞ彼は「人のさまの見分け難いさま」の轉訛。

【鳴】 シギ「鶴」とも書く。涉禽類鶴目科の鳥。中形で嘴

2 文の構成

第一節 初—二二頁八行 岡の畑に立つて眺めた周囲の情景。

1 岡の畑とその周囲の田圃の景物を敘す(初—二〇頁六行)

2 高瀬舟ののぼりゆく鬼怒川の土手とそれを越えて眺められる筑波山の景色(二〇頁七行—二二頁四行)

3 作者の立つ位置と兩毛の山々の遠望(二二頁五行—同頁八行)

第二節 二二頁九行—二四頁八行 晝の岡の畑とその閑靜な情景。

1 小春の日の照りわたる岡の畑の様子(二二頁九行—同頁末行)

2 畑に芋掘る人と、その畑の閑靜な情景(二三頁初行—同頁九行)

3 稍々日が傾くと、芋畑に起る唯一の變化として筑波山頂から反射の光が射して來ること(二三頁末行—二四頁八行)

第三節 二四頁九行—二六頁六行 芋掘りの仕事の精細な描寫。

第四節 二六頁七行—二九頁二行 岡の畑の春秋の略敘。

1 高瀬舟が帆を膨らませて鬼怒川を上る春の景趣(二六頁七行—二七頁三行)

2 麥秋の頃の情趣とその頃の百姓の生活(二七頁四行—二八頁二行)

3 稻刈より小春への推移と、その落日の光景(二八頁三行—二九頁二行)

第五節 二九頁三行—三〇頁二行 黄昏の畑の情景と其處に働く百姓達の姿。

第六節 三〇頁三行—終 夜の手に掩はれゆく岡の畑。

3 文意

小春の岡の畑に立つて眼に映する郷土の自然の景趣と、其處に働く農民の労働の姿を、精細丹念に、而も如實に描き、更に村の四季の推移を挿入して、その間に所謂汗と土とに塗れて働く農民の姿を滲みださせてゐる。短篇小説中の自然描寫の部分の抄録ではあるが、それは事件の背景としての自然ではなく、現實的な自然と人生との交渉の一断面を描いてゐるのである。

4 鑑賞批評

三 岡に立つて

が長く、その根部に軟皮を被る。脚も亦長く、四趾中前方に向ふ三趾は長く、池邊沼澤等の水濕地を巧みに歩行する。多く北地に蕃殖し、春秋の渡りの時、我が國を通過し、又は我が國で越冬する。田鳴・小鳴・山鳴・青鳴等種類が多い。

【夜の手】 ヨルのテ 夜の闇。夜を擬人化したのである。

【百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩ふのである】

百姓の生活の上に及ぼす夜の威力が、實に克明に描かれてゐる。自然の美しさにも、亦其處に生起去來する如何なる出來事にも、全く没交渉に、ただ必死の労働をつゞけて來たのは、彼等があまりにはつきりとこの夜の襲ひ來る事を知つてゐたからである。其の夜の不可抗な威力が、今や次第に天地の間を掩つて、百姓は黙々として家路につく。「百姓の後姿を村の中へ押込んで」は誠によく利いた表現である。

「そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精細な自然の観察者である。」とは夏目漱石が節を評した感歎の語である。誠に作者の観察の眼は微細に亘り、精緻を極めてゐるのであるが、併し決してそれは徒らなる繁雜ではなくて、歌人節の鋭敏なる感覚がよく事象の核心を把へてゐることは勿論である。而も節獨特の丹念克明な筆致によつて、岡の畑の情景とそこに働く農民の姿とを如實に描いてゐる。その調子は極めて地味で靜止的ではあるが、自ら眞摯なる農民としての體驗は、その觀察表現の深く廣い背景をなして、全篇に一種素樸な氣韻ともいふべきものを滲ませてゐる。本來短篇小説からの部分的な抄録であるが爲に、自然そのものに對する觀察の焦點が確立してをらず、従つて構成的な統一はないが、併し部分的には殆ど完成に近いものと言ひ得るであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一)自然觀察の精緻さと、同時に生活觀察の深刻さとの理解鑑賞が本課學習の主眼たることは前述の通りであり、これこそがこの文の特色であり生命であり價值である。併し自然・人生に對する觀察の精緻なるが故に、更にまた丹念克明な描寫に終始した平調さの故に、此の年齢の生徒達には、この文が興味薄くきこえないものに感ぜられるのではなからうか。此處に本課取扱ひの困難があり苦心が要求されるのである。

(二)更にまた自然觀察の精緻さと、その生命價値の判斷に到達し得る生徒はあつたとしても、進んでそこに織込まれてゐる生活觀察の深刻さと、その意義を理解する生徒は極めて少いのではないかと思ふ。作者は唯單に岡の畑を寫生してゐるのではなく、従つて芋掘りは自然の中の點景として描かれてゐるのではない。實にそれは自然と人生とが現實的に相交渉する一断面であつて、「芋掘り」の人々を通して、土にまみれて働く農民生活の眞實な姿を描かんとする、そこに中心的

作意は保つてゐる。そこまで讀みは深められねばならない。こゝにより以上の困難さがあり、より以上の苦心が要求されるのである。

(三)これを總括して勿論熟讀玩味が第一要件ではあるが、つまり部分的要所を發見又は指摘し、その徹底的な讀解から進んで全篇の上に及ぶのが最も適切な方法ではなからうか。かくして此の文の特色をなす精緻深刻な自然と生活との觀察も理解され、その意義と價值との決定的な判斷にも到達し得て、全一的な指導が果されるであらう。

(四)此の文は的確克明に對象を描いて居るが、その手段に擬態・擬聲語を頗る多く用ひ、而もそれ等が此の文の中に於てはまた極めて效果的に働いてをることは既に解釋欄でも觸れて置いた所であり、これは作文教授に關聯する場合には相當慎重に取扱はれねばならない。生徒はこの種類の語句を好んで用ひたがり、また實際に、盛に、而も不用意に用ひてゐることは教授者の熟知の事である。それは對象の核心に合致した時のみ意義があり、價值があるのであるし、その安易な濫用は唯文趣を墮し、淺薄幼稚な感銘を與へるに過ぎない。この點を明確に理解せしめておきたいのである。

2 參考

(一)挿繪 筑波山

東京朝日新聞社發行の「東日本新風景(昭和七年新年附録)」中に所收のもの。特に原版より焼付け頒布を受けしものである。

(二)長家節に就いての諸家の批評

1 夏目漱石評

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を讀み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、す

三 岡に立つて

ぐ感心したが、辭があるが、此「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

尤も誰にも書けないといふのは、文を遣る伎倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ丈の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を過ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になる計である。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生みつけられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべき困憊を極めた生活状態を、一から十まで誠實に此「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無知で、強欲で殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、ありありと眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を著けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直叙したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同様の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ濟まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿密に研究してゐる。鳥のもの、畔に立つ椋の木、蛙の聲、鳥の音、荷くも彼の郷土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る迄悉く其の地方の特色を具へて敘述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨特である。其の獨特な點を、普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なものに比べて、余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の觀察者である。（小説「土」の序文）

2 橋田東聲評

節は小説を書き、歌を詠むが、決して専門の文士ではない。百姓である、百姓も飯事まじこの美的百姓ではなくして、實際に飯を取り、肥

料をいじる百姓である。病院で入院してゐても、百姓のことばかり心配してゐる。國許の雨親に送る手紙も常に田畑のこと、竹藪のことである。麥蒔きを遅らしたり、刈入れの時期を失したりしたことを聞くと、腹が立つて、父母を叱りつけてをる。それ程、熱心な百姓であつた。この不斷の用意と熱心が「土」となり「芋掘り」となり、其の他の作品となつた。錢の如く「の連作歌や乗鞍岳の歌もこの心の所産である。長塚節の人と藝術の偉大な嚴肅な位の眞面目と努力で一貫してをる。些事と雖も苟くもしないのである。全人格に動くといふ言葉があるが、節の藝術は即ちそれである。一首の歌にも氏の面目がはつきり見える。それは心にうそがないからである。制作の態度が嚴肅で、一練一括と雖も上の空で、いゝ加減に引いたものでないからである。決して手先の器用ではない。直ちに身を以てぶつ突かるのである。渾身の力である。虚偽がないから、その熱が直に作品にあらはれる。藝術は言葉や繪の具の生むものではない。手元の技巧の生むものでもない。頭でも足りず、胸でも足りない。肉體そのもので描き、書くべきである。これが全人格的に描くの義である。而して節の藝術こそは眞に彼の全人格の表明そのものである。（「土の人長塚節」より）

四 渡り鳥

松本亦太郎

一 解題

1 作者

松本亦太郎 マツモトマタタラウ 心理學者。慶應元年九月上野國高崎に生まれた。明治二十六年帝國大學文科大學哲
學科卒業。更に大學院に進み、二十九年アメリカのエル大學に入り、ついでドイツのライプツヒ大學に學び、三十二
年歸朝して文學博士の學位を得た。東京高等師範學校教授兼東京女子高等師範學校教授に任じ、また東京帝國大學に講義
した。三十九年京都帝國大學文科の創設に當り、同大學教授となり、京都市立繪畫專門學校長、京都美術工藝學校長を兼
任した。大正二年東京帝國大學教授に轉じ、十五年停年により退職、現在帝國學士院會員であり、心理學界の權威として
重きをなしてゐる。

著書には「渡り鳥日記」「心理學講話」「諸民族の藝術」「繪畫鑑賞の心理」「素質の心理」等がある。
2 出典

「渡り鳥日記」から採つた。「渡り鳥日記」は作者の外遊中の感想紀行を主として、その他の感想類を集めたもので「遊
り鳥の生活」以下十六篇よりなり、大正六年一月の出版である。本課の文は第一章「渡り鳥の生活」より抄録した。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課「岡に立つて」に於て平野の秋に點出されてゐた「渡り鳥」を對象とし、その未來的習性を科學的に考察した説明

文である。如何にも科學者らしい廣い詳密な觀察を基礎とし、自由新鮮な行文を以て渡り鳥の習性を敘し、その間自然へ
の驚異と愛着とを吐露してゐる。科學的教材ではあるが、單なる概念の羅列ではなく、深く人間の教養に資すべき點があ
る。主として季節的關係を考慮して「芋掘る岡」と「相模灘の落日」との間に配した。

二 解釋

1 語釋

【渡り鳥】ワタリドリ 「候鳥」ともいふ。繁殖地と越冬地
とが隔在し、毎年季節を定めて兩地間を去來する鳥類を
いふ。この季節的移行を「渡り」と言ひ、その「渡り」
の理由については種々の説があるが、要するに食物の缺
乏に原因するものやうである。即ち冬期には繁殖地を
去つて氣候温暖で食餌豊富の地に移住し、春暖の候にな
ると繁殖地にかへつて生殖を営むのである。その越冬地
と繁殖地とは概して南北に位置し、遠距離のものが多く、
又その渡りの時期も種類によつて異なるのであるが、我
が國に於ては燕・雲雀の如く春來つて秋去るもの、雁・鴨
の如く秋來つて春去るものがあり、前者を「夏住鳥」
(或は夏鳥)後者を「冬住鳥」(或は冬鳥)といふ。また
鴨の如く去來の途中一時我が國に滯留するものを「一時
住鳥」(或は旅鳥)といひ、また「のどぐろつぐみ」の如

く常に渡來するのではなく、移動の途中途を失つて偶然
我が國に姿を現すものを「迷鳥」といふ。尙「渡り」は
安全を期する爲夜間大群をなして行はれるのが原則であ
り、而も極めて速い速度で常よりも遙かに上空を飛翔す
る。
候鳥は游禽類に多く、鴨・雁・白鳥・鶴・鴨等この種の
鳥は殆ど渡り鳥である。鳴禽類にも亦多く、燕・雲雀を
はじめ椋鳥・鶉・桑鴉・山鴉・四十雀・鶯・鶉等はそれ
である。

【梅が枝】ウメがエ 梅のえだ。「が」は接續を表す助詞
「ノ」に當る。「枝」を「エ」と讀むは古言。

【黃鳥】ウグヒス 「鶯」とも書く。燕雀類の小鳥。背部は
橄欖褐色で、腹部は灰白色、顔面には灰白色の稍と不鮮
明な肩斑がある。嘴は暗褐色で細く、脚は淡褐色を呈す
る。我が國特有の鳥で、樺太を除く全土に分布し、夏期

山地にあつて繁殖し、春初梅花のひらくを待つて平地に出現する。

【鴨】 カモ 游禽類の候鳥。雌雄著しく羽色を異にし、雄は雌に比して遙かに美彩である。嘴は軟皮を被り、末端のみ硬い。羽毛は甚しく密で長途の飛翔に耐へ、尾は短小で尖り、その上部から油をだして羽毛に塗る。頸は長く、脚は短く、後方に位す。前三趾間によく發達した蹼を有する。一般に北地に繁殖し、秋期大群をなして南方に渡る。種類が極めて多く、これを河鴨類と海鴨類とに大別し、一般に鴨といへば河鴨類をさし、又河鴨類中「まがも」一名あをくびのみを鴨といふこともある。

【閑雅】 カンガ (一)しとやかでみやびやかなこと。優にやさしいこと。(二)閑靜にして雅趣あること。こゝは(一)の意。「雅」と「稚」(チ)との誤寫に注意。

【泰平】 タイヘイ 「太平」とも書く。世の中の穩かに治まること。天下事なく、人民がやすらかに暮してゐること。昌平・昇平などとも言ふ。

【瑞相】 ズキサウ (一)めでたいしるし。瑞兆・吉兆・瑞祥・瑞徴などの語もある。(二)めでたい人相。福々しい人相。(三)きざし。前兆。こゝは(一)の意。

【愛でられて】 メでられて 愛せられて。
【サウス・ケンシントン】 South Kensington ロンドン市

ケンシントン區の一部。有名なハイドパークの南西に亘る一帯の地區で、博物館・帝國圖書館・帝國科學大學・ロンドン大學・王立美術學校等の所在地として學藝中心の觀を呈してゐる。

【博物館】 ハクブツクワン Museum の譯語。古今東西に互つて考古學資料・美術品・歴史的資料その他の學術的資料を博く蒐集して、これを組織的に分類陳列し、一般公衆の展覽に供し、學術研究の資とし、社會教育に寄與するための施設。

【サウス・ケンシントンの博物館】 現在サウス・ケンシントンには美術工藝の蒐集を以て名あるヴィクトリアアン・ドールバート博物館、發明品陳列で知られてゐる科學博物館並びに大英博物館分館である博物學博物館の三大博物館がある。ここは最後の博物學博物館を指すものと思はれる。

【蒐集】 シウシフ よせ集めること。まとめよせること。
【剝製】 ハクセイ 動物の皮を剥ぎ、骨格・筋肉・内臓等を去り、皮の内面に防腐劑を塗り、中に綿などをつめて縫ひ合せ、生時の外形をそのままにとどめて標本をつくること。又その製品。

【天然】 テンネン (一)人爲の加はらぬ状態。自然。(二)天性。うまれつき。(三)人力の如何ともし得ない状態。

(四)造物主。造化。こゝは(一)の意。

【直寫】 チョクシヤ (一)ありのままを書きうつす。(二)ありのままの状態をうつすこと。こゝは(二)の意。

【表情】 ヘウジヤウ (一)心中の感情情緒の外貌に表れること。(二)その感情情緒のあらはれた外貌の様子。こゝは(二)の意。

【風色】 フウシヨク (一)景色。ながめ。風光。(二)天氣。風の模様。こゝは(一)の意。

【眞に迫つてゐる】 シンにセマつてゐる 眞のものと同じのやうに見える。眞の有様に非常に近い。

【禽鳥】 キンテウ 鳥。鳥類。
「禽」はもと鳥獸の總稱に用ひ、後漢書華佗傳に「吾有^ニ一術。名^ニ五禽之戲。一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猿、五曰鳥」とあり、後に主として「とり」に用ひた。「鳥」は本來「とり」のみに用ひる。

【情合】 ジャウアヒ (一)人情のぐあひ。(二)情意の一致。こゝは(一)の意。

【濃やか】 コマヤカ (情愛の)厚くして懇なことをいふ。
【想像】 サウザウ (一)おしはかること。おもひやること。

(二)心理學上 Imagination の譯語。經驗・記憶を材料として新しい觀念を構成する精神作用。こゝは(一)の意。
【感歎】 カンタン 深く心に感心すること。感心してたい

へること。

【鳥の表情といひ、周囲の風色といひ、いかにも眞に迫つてゐて、これを見る人間は、禽鳥の一家親子の情合がいかにも濃やかであり、いかに平和であるかを想像し、感歎せざるを得ない】

「鳥の表情」といひ、「禽鳥の一家親子の情合」といふ。而もこれを見る者を人間と言つてゐる。作者の想像し感歎せざるを得なかつた深い感動が、これ等の語句の上に窺はれるであらう。出典に於て述べた如く、當時自ら「渡り鳥」として、家庭を離れて遠く異郷にあつた作者にとつては、事實その鳥の剝製に強く心を打たれるものがあつたのであらう。

「いかなる不慈の親も不孝の子もその本心にたち返るであらう」との作者の感想も、その深い感動の自然の發露として強い迫力を持つてゐるかに思はれる。

【不慈】 フジ いつくしみのないこと。慈愛の心に薄いと。

【本心】 ホンシン 人間本來の心。即ちこゝでは、親は子を慈み、子は親に孝を盡くす所の人間本來の心情をいふ。

【喜樂】 キラク 喜び樂しむこと。喜と樂。
【棲息】 セイソク 「栖息」とも書く。すむこと。やどること。

【奮闘】 フントウ (一)力を奮つて敵とたゝかふこと。
 (二)全力をあげて困難と戦ふこと。こゝは(一)の意。
 【併し】 鳥類が右のやうな喜樂平和の中に棲息するのは、其の生涯の或短時期に過ぎない。他の方面からみれば、鳥類の生涯は實に一大奮闘の生涯であるといはねばならぬ】
 第一節で一般に知られてゐる平和と喜樂に満ちた鳥類の生活を記し、以下あまり知られてゐない鳥類の大奮闘の生涯の敘述に入る準備としたのである。讀者をして期待を持たせ、瞠目して読み進ましめる構成の妙を思ふべきである。

【比類】 ヒルキ たぐひ。くらべるもの。

【種族繁殖】 シュゾクハンシヨク 自己の屬する種類の子孫をふやすこと。

「種族」は(一)同一の部類に屬するもの。たぐひ。ともがら。(二)一族を盡く誅戈すること。族誅。族滅。史記高祖紀「秦種^ス族^ス其^ス家。」こゝは(一)の意。

「繁殖」は「しげりふえること」「ふえますこと」。

【激烈】 ゲキレツ 極めてはげしいこと。「激」「烈」共に「ハゲシ」と訓する。

【不可抗】 フカカウ 抵抗することの出事な^スこと。「不可^{カス}抗」の漢文を棒讀みにした語。

【頡頏】 ケツカウ・キツカウ (一)鳥が飛び上ることを行既出。

行既出。

【ニューファンドランド】 Newfoundland カナダの東北、セントローレンス灣口の一大島、面積約二二〇七〇方軒、島は形状不整で海岸線は概して絶壁をなし、地味は硯角で林業牧畜が主として行はれ農業は振はない。島の東南は世界三大豊漁場の一で漁獲が甚だ多い。此の島は既に九世紀末頃ノルウェー人によつて發見せられたが、十五世紀末、英人ジョン・カボットの再發見以來歐洲大陸より移民が始り、その後英・佛兩國間に歸屬の争が行はれたが、西曆十七世紀初頃英領に定まり、一八五五年以來完全の自治領となつた。

【中央亞米利加】 チュウアウアメリカ 北アメリカ大陸の一部で南北アメリカ大陸の間をなす地狭部。メキシコ領の一部及び英領ホンジュラスの外、グワテマラ・サルヴァドル・ニカラガ・コスタリカ・パナマ等の共和國に分れてゐる。東北貿易風帯の中にあり、氣候は概ね熱帯性であるが、太平洋岸の縁邊に連なる高地は稍と清涼である。動物は虎・獅子等があり、鳥類は色採濃艶な熱帯的のものが多く、椰子・ゴム・マホガニ等の熱帯植物が繁茂してゐる。

【ハイチ島】 Haiti 西印度諸島中大アンチル列島に屬し、サントドミンゴ島ともいふ。面積七七三〇〇方軒、東部

「頡」といひ飛び下りることを「頡」といふ。詩郎風燕燕の詩「燕^{ユキ}于^ト飛、頡^ト之^ト頡^ト之^ト」(二)轉じて優劣を争ふ義。相對抗して互に下らぬこと。こゝは(二)の意。

【莊嚴】 サウゴン 尊くおごそかなこと。(二)明治神宮・六頁八行既出)

【鳥類の奮闘の最も激烈を極めるのは、殆ど不可抗の天然力に頡頏して、其の意志を貫ぬかうと努力する時である。かかる場合に於ける奮闘は實に莊嚴なものである】

頡頏の對象は「不可抗な天然力」である。かよわい禽鳥の身を以て、而もこの不可抗な天然力に對抗して、敢然としてその生活の意志を貫ぬかんとするのである。その努力たる誠に莊嚴と評すべきであり、読み進むにつれて、讀者はこの感歎の然るべきことを痛感するであらう。

【適例】 テキレイ 適切な例。適當な例。

【未來現象】 キョライゲンシヤウ 或地から異なる土地へ行き來する現象。こゝは候鳥の「渡り」の現象を指す。

「現象」は(一)あらはれて見えるかたち。(二)哲學上 Phenomenon の譯語。吾人に感知せられるものの形象。こゝは(一)の意。

【黃金鷓】 コガネシギ 游禽類鷓目科の鳥。背面に黄金色の斑點があるのでこの名があるのであらう。

「鷓」は「鳴」とも書く。(前課「岡に立つて」三〇頁六

はドミニカ共和國、西部はハイチ共和國に分れる。島の北側は雨量多く植物繁茂し、南側は乾燥してサボテンが群生し、中央部は乾燥殊に甚しく、エンキリヨの鹹湖がある。西曆一四九二年コロンブスが發見してエスパニョラと命名。その後イスパニア人・佛人・黑人奴隷の間に屢々領有の争があり、一八二二年ハイチ共和國、ついで一八四二年東部ドミニカ共和國が成立した。その後も兩共和國間の紛争が絶えず、一九一五年アメリカ合衆國軍が全島の秩序回復に當り、以來事實上同國の保護領となつてゐる。

【哩】 マイル Mile イギリスの距離の單位。約一・〇三九軒。英米では距離の單位は主としてヤード・ポンド法による。即ち吋・呎(十二吋)碼(三呎)鎖(二十二碼)哩(八十鎖)

【石返し】 イシガヘシ 英語 Turnstone の譯。鷓の一種。石の下の小甲殻類・蠕蟲等を啄むのでこの名がある。

【グリーンランド】 Greenland 北アメリカ大陸の東北に接して横たはる世界第一の大島。推定面積約二一七五六〇〇方軒で大部分は北極圏内にあり、年中氷河雪原に蔽はれて居住に適するは南東海岸の低地だけである。植物にははんのき・かんば等の小喬木及び灌木鮮苔類のみであり、動物には白熊・海豹・極狐及び二十數種の鳥類があ

る。住民は大部分エスキモー人で、主として漁業狩獵に従つてゐる。

島は西曆九八三年ノルウェー人エリツクによつて發見され、一七二一年以來デンマーク領となつてゐる。

【濠州】 ガウシウ 濠太刺利亞洲の略稱。世界六大陸の一。南半球に位置し、印度洋と太平洋との間に介在して、面積約七〇萬方呎。地形上南部高地・中央低地・西部高地に三分せられる。東部南部は氣候温和で雨量が多く、北部は暑熱烈しく、夏期降雨が多く、中部は乾燥高温で沙漠地帯をなしてゐる。生物は珍奇特異なものに富み、植物にユーカリ・アカシア等七十餘種の特種植物を有し、動物には有袋類の特産があり、鳥類にも火食鳥・エミュー・キングファイツシャ等有名である。

現在イギリス領自治植民地。六大陸中面積人口共最少で、土人オーストラリア族は次第に減少して、人口の約九割九分までイギリス人である。

【南米】 ナンペイ 南アメリカ洲の略稱。南半球の一大陸で、パナマ地峽を以て北アメリカ洲に接する。東は大西洋、西は太平洋に面し、面積約千八百萬方呎、南北延長四千五百哩に及ぶ。北部の幅の広い部分を赤道が横断して、大部分の地域は熱帯に屬する。西岸に沿つてアンデス山脈が走り、南部にギアナ・ブラジルの高地が隆起し、

この間にアマゾン河が世界第一の低平なる大流域を展開し、南部にはラプラタ河が南流する。本大陸の發見は十五世紀末で、長い間イスパニヤ・ポルトガルの領有であつたが、北米合衆國の獨立に倣ひ、現在英・蘭・佛領の一部を除く他全部獨立して、ヴェネズエラ・ブラジル・パラグワイ・ウルグワイ・アルゼンチン・コロビア・エクアドル・ペルー・ボリビア・チリーの十ヶ國の獨立國に分れてゐる。住民は各種混淆し、人口は稀薄で近時農牧の業が漸く盛となり、各國の移民がなほ續々と入りこみつゝある。

【旅程】 リヨテイ 旅行の道のり。

【南亞】 ナンア 南亞弗利加の略稱。所謂南部アフリカのこと、ローデシヤ・ベネチユアランドの英國保護地及び英國の自治植民地南アフリカ聯邦等を包含する。此の地方はアフリカ臺地の南部に當つて段丘に富み、雨量は一般に乏しく、内地は大陸性氣候で、所謂サヴァンナ(廣漠たる草原)をなし、西部にはカラハリ沙漠があるが、ひとり東部海岸平野は東南貿易風地帯にあつて、温暖多雨でアフリカの花園の稱がある。金・金剛石・羊毛等の産が多く、住民はバンツィ・ホットtentott等の土人を主とし、他は英人である。

【北水洋】 ホクヒヨウヤウ Arctic Ocean (英)の譯語。北

極洋ともいひ、ユーラシヤ・北アメリカの兩大陸によつて圍繞されてゐる一大内海。デヴィス海峽デンマーク海峽を以て大西洋に、ベーリング海峽によつて太平洋に連結されてゐる。北極地方の大部分を占め、その縁邊附近にニューシベリヤ群島・スピッツベルゲン群島等がある。平均深度は一五五〇米でスピッツベルゲン海淵の最深部は四八〇〇米に達する。海水としては氷山がなく、全部叢氷で、全海面の約三分の二は常に氷殻下にある。

【雙翼】 サウヨク 兩方の翼。

【地球の直徑】 チキユウのチヨクケイ 地球の赤道に於ける直徑。約一二七〇〇呎ある。

本文九千哩はこれを呎に換算して約一四五〇〇呎である。故に「地球の半徑よりも遠い」といふ。

【飛翔】 ヒシヤウ 空中をとびかけること。

【あの小さい雙翼の力を頼みに、地球の直徑よりも遠い距離を飛翔する勇氣と努力とは人間の想像以上である】

實際想像以上である。あの小さい小鳥に、この驚くべき生活意力をどうして想像し得よう。最早愛しいとか、平和とかいふ如き平常の感情は忘れられて、唯その不撓の勇氣と努力との前に、頭を下げざるを得なくなるのを覺える事實であり、また敘述である。

【迂回】 ウクワイ 遠路をまはる。まはり道をする事。

【バルチック海】 Baltic Sea 歐洲大陸とスカンディナヴィア半島とに擁かれた内海。南北に長く、延長一七〇〇呎に及ぶ。北部にボスニア灣、東部にフィンランド灣・リガ灣がある。海口は南スカンディナヴィアとユツトランド半島との間のカテガット海峽及びスカゲリアク灣を以て北海に連る。陸水の流入多く、且外海と殆ど絶縁されて内湖的性質を多分に持ち、爲に海水の含鹽量は甚だ稀薄。冬期殆ど全部氷結するが、北部歐洲交通の要衝たるを以て碎氷船を用ひて旺に交通が行はれてゐる。

【鶴】 ツル 鶴型目鶴科の涉禽。體大きく、頸と脚とは極めて長く、嘴は眞直で強大。翼はあまり長くないが、三烈風切のみは特に發達し、尾は短く十二枚からなる。四趾を有し、前方三趾は大きい。海濱・沼澤地・森林中の低濕地に群棲する。鶴の種類は世界に十九種のみであるが、我が國に飛來するものは、丹頂・眞那鶴・鍋鶴・姉羽鶴・袖黒鶴等の數種に及び、天然記念物として扱はれてゐる。狹義には一般に「丹頂」を鶴と呼んでゐる。

【亞弗利加】 アフリカ 亞弗利加洲のこと。北は地中海を隔ててヨーロッパ大陸に面し、東は印度洋・江海に面し、スエズ地峽を以てアジアにつゞき、西は大西洋に面する。面積約二七三〇萬方呎。海岸線は極めて單調で、全大陸が一大高原をなし、東部を南から北へ貫流するナイル河

が、その間に一大地溝をなしてをり、西北部一帯はサハラの大沙漠をなしてゐる。赤道が大陸の中部を横断し、氣候は熱帯性で、生物には珍奇なもの、巨大なものが多く、種々の熱帯植物をはじめ、獅子・狸々・河馬・毒蛇・駝鳥・キリン・斑馬・象・犀等ほとんどすべての熱帯動物が棲息する。本大陸には、遠くナイル河沿岸地域にエチプトが世界最古の王國を建設したのであるが、その後幾變遷を経て、現在エチプト・アビシニヤ・リベリヤの三獨立國の他すべて歐洲諸國の植民地であり、植民大陸の名さへある。

【アルプス山】 Alps 歐洲の西南部イタリア・フランス・ドイツ・オーストラリア等諸國の境に連る大褶曲山脈。イタリア半島の北を大きく弧をひらいて走り、東にカルパチヤ・チナルアルプス、西にジュラク南にアペニン等の諸山脈と相連つて一大山系をなしてゐる。これを普通西・中央・東の三群に分ち、更に北アルプス・南アルプスに分つ。山勢は險峻を極め、平均高度二三〇〇米に達し、モンブラン・モンテローザ・マツテルホルン・ユングフラウ等四千米を越える高峯が雲上高く聳え、永劫の雪をつみ、その間に幾多の氷河雪原があり、ライン・ボーン・ローヌ・ドナウ等をはじめ多くの河川は此處に發源し、歐洲大陸水源地の觀がある。山麓には森林が繁茂し、或

は緑の牧場がひらけ、また諸處に紺碧の湖を湛へて、世界屈指の豪壯雄大な風景を現出してゐる。

【ライン河】 Rhein 源をスイスに發し、ドイツの西部を流れ、オランダを経て北海にそゞろ。全長一三二〇餘軒。アルプス山脈のサンゴタルド峠に發源し、ボーデン湖に入り大瀑布をなして流下し、ドイツ・スイスの國境を過ぎてバーゼル市に至り、これより流路を北北東に轉じて、獨佛國境を流れて南プロシヤの地に入り、所謂ライン地溝と稱する沃野を過ぎてマインツ市に入り、ここに大支流マイン河を併せて北西に向ひ、頗る水勢を増してライン狭谷の美觀を現出し、コブレンツ市でモッデル河を合せ、更にジーク・ルール・リウベの諸支流を收容してオランダに入り、ユトレヒトの低地に到つてワール・レック・イーゼルの三大支脈に分れ、前二者は更に幾多の脈流を分つて北海にそゞろ、イーゼル河は北流してゾイデル海に注ぐ。本河は中古時代以來中歐水運の上に重要な位置を占めて來たもので、バーゼル・マンハイム・マインツ以下の諸都市の發達は此の河に負ふ所が大である。今日尚ドナウ・ローヌ等諸河との間に運河連絡の施設があり、中歐の大水路網を形成してゐる。

【ローン河】 Rhone スイスに源を發し、フランス南部を流れて地中海にそゞろ河。全長約七六〇軒。

アルプス山のフルカ峠の邊に發源し、西流してレマン湖に入り、湖の南西端ジュネーブ市から溢出しフランスに入り、ジュラ山脈の峽谷を西流し、リヨン市附近でソーン河を併せ、以下南に流路を轉じ、アルル市附近に於て數支脈に分流し大三角州を作つてリオン灣に注ぐ。南部フランスの主要河川で、同地方の交通灌漑運輸に貢獻する所が大であり、現在ローール・セーヌ・ラインの諸河と運河を通じてゐる。

【シチリア】 Sicily シチリア島のこと。伊太利の南端カラブリア半島とメツシナ海峽を隔てて横たはる地中海最大島。面積二五七三九方軒。イタリア半島から分離された陸塊として、アペニン山脈の一部を形成し、北海岸に沿うて走る高地を背にして南に向つて僅かに傾斜をなしてゐるが、一般に高原性をなし、氣候は代表的な地中海性氣候で、冬の雨期と夏の乾燥期に分たれ、概して快和である。地味豊饒、樹木鬱蒼としてイタリアの主要寶庫である。

古くギリシヤ領であつたが、後ローマ領となり、以後東ローマ帝國・フランス・ノルマン等の間の争奪を経てイスパニアに歸屬しついでオーストリア領となり、伊太利統一戦争に際しカリバルチがこれを征服してイタリアに併合した。

【食餌】 ショクジ 食物。ゑさ。

【やたら】 「やたら拍子」から出た語であるといふ。むやみ。みだり。むちやくちや。

【公道】 コウダウ (一)かたよらない正しい道。公正なる道。(二)公衆の通行する道。こゝは(二)から轉化して「定まつた道」といふ位の意。

【障碍】 シヤウガイ 「障礙」「障害」とも書く。さはり。さまたげ。じやま。

【死活の問題】 シクワツのモンダイ 死ぬか生きるかの決定する重大な問題。

【本能】 ホンノウ 心理學上 Instinct の譯語。生後の經驗教育等によらずして自然に要求し、自然に行動する先天的性能。食欲本能(個體保存の本能)防禦本能・交配・哺育本能(種族保存本能)等はその代表的なものである。

【本能によつてこれを知るのであるといつては説明が餘り簡単に過ぎる。これも人間がまだ十分に説明することの出來ない事實の一である】

科學者としての作者の深い驚異が語られてゐる。事實、死活の問題(同頁五行)に關する去來の公道は、幾代の經驗により、又幾多の幼鳥母鳥の悲惨な死の代償によつて見出されたものであつて、本より本能に根ざす神祕的な事實ではあるが、併し本能だけでは説明し得ない驚異と

いはねばならぬ。

【幼稚】 エウチ をさなうこと。幼少。

【迷子】 マヨヒゴ・マヒゴ。「マヒゴ」は「マヨヒゴ」の轉訛。道に迷つてさまよふ子。

【逢うて】 アうて アヒテ（動詞ハ行四段活用）の音便。假名遣に注意。

【四散】 シサン 四方に離散しちりぢりばらばらになること。

【旅行熱】 リヨカウネツ 旅行したいと願望する精神の興奮状態。

「熱」はこゝでは熱情・熱意などの意。

【浮かされる】 ウかされる もに氣をとられて落ちつかない。

【經驗】 ケイケン (一)實際にためし試みたこと。又それから得た知識技能。(二)觀察實驗等の方法によつて得た知識。(三)心理學上感官を通じて得た知覚、又は知覚によつて結合された知識。こゝは(一)の意。

【無鐵砲】 ムテツパウ 「無手法」を俗讀みにしたものに、更に「鐵砲」の字を當てたもの。理非前後を顧みないでむやみにことをすること。無法。

【鶉】 ウヅラ 鶉類の鳥。形は圓くふくらみ、鶉の鶉に似、全身赤栗色で、黒白色の縦紋がある。南部シベリヤ。

滿州・支那・朝鮮・日本内地等に棲息し、我が國では樺太以南・九州・臺灣に互つて分布する。飼鳥及び獵鳥として重んぜられ、肉は頗る美味である。

【東京から大阪まで】 東京大阪間は東海道本線の行程によれば五六八・一軒、約三三三哩であるから、時速三八哩の鶉ならば約九時間、四十三哩の鶉ならば約八時間で翔破する譯である。因みに特急燕の現在兩市間を走る所要時間は八時間である。

【鳩】 ハト 鳩類・鳩科の鳥類。これを地鳩類(きじばと・べにばと等)岩鳩類(かはらばと)樹鳩類(あをばと)に大別する。形は中形、色彩は種類により優美なもの地味なものなど多様である。嘴は先端硬く、基部に柔軟な膜を被る。翼は長く圓く、尾は丸形又は楔形。殆ど全世界に分布し、我が國には家鳩・野生鳩等二十餘種が棲息する。普通「鳩」とよばれ神社佛閣等に見る「いへばと」及び「傳書鳩」は「かはらばと」の變種である。

【競馬】 ケイバ 所定の區域間に於て、乗つた馬を駆けさせて着順の先後を争つて勝敗を決すること。

【記録】 キョク (一)書きつけること。物事を書きしるした文書又は帳簿。(二)英語 Record の譯語。競技成績の記録。競走・水泳等ではその所要時間、跳躍投擲等ではその距離の類。こゝは(二)で所要時間の記録のこと。

たその人。こゝは(一)の意。

【渺茫】 ベウボウ 廣々として果のないさま。

【往々】 ワウワウ ときどき。をりをり。

【危急】 キキフ さしせまつた危難。

【疾風】 シツプウ (一)疾く吹く風。(二)氣象學上毎秒六—一〇米の風速を有し、陸上で木の枝を動かす程度の風。こゝは(一)の意。

【鶉の如きは海上で疾風に遭ふと、これに抵抗して前進を続け愈々力が盡き、氣を失つて水中に墜ちるのである】

自然力に頷順して生活意力を貫かんとする鳥の努力に對して「實に莊嚴である。」(三三頁二行)と作者はその感慨を漏した。まことに死力を盡して前進し、力萎えて死ぬ鶉の、この敢爲な奮闘には、涙ぐましい程莊嚴なものがある。作者はこれをすら科學者らしく極めて冷靜に平敘してはをるが、然しその行文の底にこもる作者の驚異と感歎の情は、讀者の胸に訴へるものを持つてゐる。

【コーカサスの山上】 Caucasus コーカサス山脈のこと。中央アジア黒海・裏海の間を横たはる山脈。バミール高原の伸びたピンツクン山脈がカスピ海を越えてその西岸に擡頭したもので、高峻な連峯をなして黒海海岸に達してゐる。山相はピレネーに酷似し、高さはアルプスに勝つて、最高峯エルブルース山の如きは五千六百餘米に

【ヤード】 Yard「碼」の字を當てる。英國の長さの單位。

一碼は三呎即ち九一・四四種。尙語釋「哩」の條参照。

【燕】 ツバメ 燕雀目の小鳥。嘴は扁平でほぼ三角形。脚は極めて纖弱であるが、細長く尖つた翼はよく發達して飛力強く、長途の飛翔に堪へる。尾は長く又狀をなし、羽色は背面は光澤ある黒色、顔面・喉は栗色、胸部に黒帯を有し、腹部は白色。候鳥の一種で、東部シベリア・滿洲・支那北部・我が國等を繁殖地とし、南インド・マレー半島・濠洲北部等の熱帯地で越冬する。我が國では古來春來り秋去る夏鳥として雁と對比せられ、且人家の軒に巢を營んで、有害の混虫を捕食する益鳥として保護されてゐる。

【しかのみならず】 「加之」の字を當てる。それだけでなく。その上。かててくはへて。

【迅速】 ジンソク 極めてはやいこと。すみやかなこと。

【大西洋】 タイセイヤウ Atlantic Ocean ヨーロッパ・アフリカ及び南北アメリカの四大陸の間にある大洋。五大洋(太平・大西・インド洋・大洋・北極海)の一。世界海面の三分の一を占める。因みにロンドンから北米合衆國ニューヨークまで約四千四・五百海里(一海里は約一・八五軒)ある。

【羽翼】 ウヨク (一)羽とつばさ。(二)輔佐すること、ま

達する。その他四千米を越える多くの峻嶺が連なり、その中に幾多の火山を含み、谷々には數多の氷河を存してゐる。

【氷河】 ヒョウガ 地理學上の術語。高山又は極地の積雪が雪線に於て溶解し、再び凝固して大塊をなした所謂ネヴェが、上層の積雪の壓力の増加につれて、美しい藍色がかつた氷塊となり、低地に向つて流れ下るもの。流速は普通一日に二〇哩乃至五〇哩で、早いものも一〇米を越えない。氷河は「V字形の谷」を削りつくり、又兩岸から崩れ落ちた岩によつて、氷河の底及び側面の岩に擦

痕を生ずる。その他氷河湖・峻灣を形成することもある。
【悠々】 イウイウ (一)遙かに遠いさま。遠く遙かなさま。(二)時の久しいさま。悠久。(三)ゆつくり落ちついたさま。のんきなさま。こゝは(三)の意。

【疲労の餘り已むを得ず數日間は全く翼を收めることもあるが、それでもやはり歩行によつて、絶えず前進を続けるのである】

實に驚くべき努力である。人間の想像以上である(三五頁一行)と述べてゐる。激しい鳥の努力に對する作者の驚異と歎聲とが如何にもよく納得し得るであらう。

2 文の構成

第一節 初―三二頁四行

鳥類の家族生活に見られる平和と喜樂な生活の一面。

第二節 三二頁五行―三三頁三行

鳥類には天然力に頼煩する激烈な奮闘生活の方面が存することを敘して下文の序とする。

第三節 三三頁四行―終

鳥の奮闘生活の適例としての去來現象。

1 日本に於ける去來の時期及び方向(三三頁四行―同頁九行)

2 去來の距離についての實例(三三頁一〇行―三五頁二行)

3 去來の道筋についての實例と、その去來の上に於ける重要性(三五頁三行―三六頁五行)

4 去來の方法(三六頁六行―三七頁九行)

5 禽鳥の飛行速力(三七頁一〇行―三九頁三行)

6 飛翔の困難(三九頁四行―四〇頁終)

7 去來に於ける敢爲な努力の實例(四一頁初―終)

3 文意

平和と喜樂の象徴の如く見える鳥類の生涯に、實は我々の想像の及び難い激烈な奮闘の一面の存することを指摘し、その適例として去來現象を採りあげ、これに就いての幾多の實例を列舉して、科學者らしい詳細綿密な敘述を試み、其の間天然力に頼煩して生活意欲を貫徹せんとする鳥類の涙ぐましい莊嚴な奮闘生活に對する作者の驚異と感歎とを物語つてゐる。

4 鑑賞批評

廣汎詳密な觀察と明確な行文とを以てなされた説明文であるが、科學者らしい巧まざる自由さが此の文に清新な味をあたへてゐる。殊に作者は渡り鳥に對して格別の興味と同情とを感じてゐるもの如く、その觀察究明の底に、鳥に對する限りない愛情のこもつてゐる事を見逃し得ない。それが一見平板に感ぜられるこの説明文に厚みと巾を與へ、従つて讀者の感銘をして單なる鳥類の去來現象の認識として終らしめないものを持つてゐる。即ちそこに物語られてゐる人事を絶したとも言ふべき涙ぐましい奮闘生活に對する、驚異と感歎とを契機として導かれる深い自己内省である。蓋し味讀すべき好個の説明文であらう。

三 備考

1 指導研究

四 渡り鳥

(一) 科學的考察を以てなされた知識的教材として、生徒にとつてかなり新奇な興味をそよるやうな事實が少くないであらう。さうして知識を系統的に理解せしめるやうな取扱が學習の中心として進めらるべきことは言ふまでもない。

(二) 併しそれと共に見逃すべからざるものは、渡り鳥の習性を對象としての敘述の背景をなす作者の世界観とも言ふべきものである。即ち鳥の平和な姿を敘し、また更にその不撓の奮闘生活を究明してゐる作者の、内に籠つたかなり強い道徳觀であり、またその間に語られてゐる自然への驚異と深い愛着とである。忠實な精讀により、讀みはここまで徹底せしめられねばならない。これが理解を強ひる如き教授者側の態度は、結局單なる教訓として終らしめるもので、最も避くべきであることは言を俟たない。

(三) 如何にも科學者らしい自由さを以て、平明確實に、而も丁寧親切に説明してゐる。説明文の模範として作文教授との聯絡も考へられねばならない。

2 參考

(一) 挿繪 しぎの群飛

日本鳥學會代表農學博士内田清之助・下村謙二共著の「鳥類生態寫真集(第一輯)」(昭和五年三月三省堂發行)より轉載した。下村兼二氏撮影のもので、説明によれば「はやぶさ」に追はれて逃げる一群の鳥で、圖中稍々大形のもの「はましぎ」、小形のものは「とうねん」であるといふ。

(二) 挿繪 渡り鳥の群(ナイル河畔)

「國際寫真情報」所載の寫真である。スエーデンのベント・バーグ氏撮影にかゝる。冬季に向ふアフリカから歐洲に移住するあらゆる種類の渡り鳥が、ナイル河畔を一齊に飛立つ瞬間である。

(三) 本文の理解を補ふに足る部分を原著の中から左に引用する。

鳥類が自然界の種々の障礙に抵抗し、其の目的地に達せんと努力奮闘する状態は上來見たる所にて略之を察知するを得るのであるが、此の去來の念願は實に強大なるもので、去來慾の勃發する時鳥を拘束する時は、鳥は堪へ難き苦痛を感じ如何かして籠外に脱せんと試み、遂に頭や嘴が傷きて血だらけになるも顧みず愈々切に破籠を企つものである。翼を切られた或る水鳥が移住慾を抑へる事が出来ずして、歩行して千餘哩の旅程に上つたといふ例もある。時としては移住慾が非常に強くなりて、其の爲に親子の情は一時壓倒せられ、其の幼鳥が巢外に遊びに出た留守に、前後を顧みるの暇なく出發して長き旅路に就く鳥もある。斯う云ふ親鳥が安全に目的地に達して、移住慾が静まつた時には遠隔の地に遺し置きたる幼鳥の事を思ひ出して嗚悔するであらうとダーウキンは言つてゐる。

極めて平和喜樂の生活をなして居つた鳥が一夕奮然と感ずる所ありて、あらゆる愛着を断ちあらゆる危険を冒し、其の生命を賭して或る地點に向つて猛進するといふは至極不思議なる現象にて、是れは抑も如何なる理由から起るのであるか。之に對しては自然淘汰の方よりの解釋と生理上よりの解釋との二つがある。太古に於ては、地球の北方の陸地は水河が張り詰めて居つたのであるから、鳥類は多く南方の溫暖なる陸地にのみ棲物して居つたのであるが、鳥類の蕃殖が盛になるに従ひ食物が漸次に不足し、其の結果として生存競争が烈しくなり、又一方に於ては氷河時代の去ると云ふ事があつて、鳥類棲息の範圍が漸次北方に擴がる事になつたのである。併し生存力の弱い鳥は北方の氣候に耐へられずして死滅に歸し、北方の嚴なる氣候に抵抗するを得る鳥だけが殘存する事になつたのである。そこで尙ほ鳥類は春夏の候には成る可く北方に居る方が競争が少く生活し易いから、自然北方移住の習慣が出来、此の習慣が代々積み重り、遂に今日に於て春夏には北方に移住する事が天性となつたのである。併し秋冬になれば北方に生活する事は困難になつてくるから此の季節には南方に移住する習慣が出来、是も亦代々積み重りて遂に鳥類の天性となつたのである。ダーウキン・スペンサー・アルレン及びバルメンなど云ふ人々は斯の如く食物及び氣候が生活に及ぼす關係上から鳥の去來現象の説明を試みるのであるが、併し或る鳥類は冬季に於て食物の多き熱帯の地を去り却て北方の寒地向ふ事もあるから、此の自然淘汰的傳説だけではまだ十分の説明とは云はれない。

夫れで近來少壯の心理學者及び動物學者はもう一つの解釋を試みてゐるのである。其の説によると一年内に於ける鳥の身體の生理的

變化には二つの著るしき時期がある、即ち生殖前期に於て、或る生殖期中に於ては身體に最大なる變化を生じ、脱羽期に於て之に次ぐの小變化を生ずるのである。而て生殖前期に當つて鳥類の音聲、羽毛、上冠、下冠其の他争鬪の具の如きは最も完全なる程度に發達するのである。加之或る鳥は移住出發前に際し其の生殖機關が著るしく膨大するのである。此の生殖力の週期的増加に應じ全身に一種の生理化學的の變化を生じ、從來棲息し居たる外圍の境遇と順應することが出來ざる様になつて來るのである。其の結果鳥の性質一變し、是れ迄楽しんで居つた土地氣候に對して何となく不満足厭倦の情を生じ、生殖慾を満足せしむべき風土に對し、一種の羨望の情を發するので、其の結果として南方移住が起つて來るのである。之と相反して居るのが脱羽期に於ける身體變化である。生殖期に於ける變化は種族繼續を目的としてゐるのであるが、脱羽期の變化は寧ろ自己の保存を目的として居る。此の時期に於ては鳥は歌ふを止め、裝飾的羽毛は脱落し、雌に媚ぶるが如き求婚的舉動は止んで、却て孤獨非社交的の傾向を現し、或る鳥は仲間を避け或は穴に隠るゝのである。斯の如き脱羽期の變化は南方移住の完了せられたる後起り始むるものにして、此の身心の變動に對して南方棲息地の境遇は又堪へ難くなり、厭倦の情を催し來るので、北方移住を欲せざるを得ざる事となる。

如上生理的の解釋は鳥類の未來現象の基礎を一種の生理作用に求め、此の生理作用が神經を刺戟して南方移住或は北方移住を生ぜしむると説くのである。此の生理説と最初の自然淘汰説とを相合して考ふれば鳥類の奮闘生活の起る原因は大略之を察知する事が出來るのである。

五 相模灘の落日

徳富 蘆花

一 解 題

1 作者

徳富蘆花 トクトミロクワ 文章家・小説家。名は健次郎。蘆花はその號であるが、これを用ひたのは前半生の著書に於てであつて、後半生の著作にはすべて本名を用ひてゐる。明治元年十月熊本縣葦北郡水俣村みづえに生まれた。父は横井小楠の門人熊本藩士一敬、貴族院議員徳富猪一郎（蘇峯）は彼の兄である。十一年兄猪一郎に伴はれて京都同志社に入學したが、十三年退學。十八年熊本市で基督教の洗禮を受け、一時横井小楠に隨つて愛媛縣今治に於て傳道に従つた。十九年同志社に復籍。翌年同志社文學創刊號に短篇小説「暮畔の夕」を載せた。これが氏の小説界への第一聲であつた。間もなく歸郷して熊本英學校に教鞭をとること一年有半。二十二年上京して兄猪一郎の經營にかゝる民友社に入り翻譯著述に従事し、同時に同じく兄の經營する國民新聞記者として、小説ならびに歴史・政治の論說に筆を執つた。三十一年十一月から翌年五月に互つて同紙に連載された「不如歸」は、三十三年單行本として出版せらるゝに及び、洛陽の紙價を高からしめた。ついで「自然と人生」思出の記」等を上梓して、一躍讀書界の寵兒となり、文壇に獨自の地位を占めた。三十五年政治小説「黒潮」の國民新聞へ掲載中止の事から兄蘇峯と不和を生じ、「兄弟牀を對するも夢は東西に飛ぶ。鳥鵲今宵一枝に棲むも、明朝は南天北地の身なり。骨肉は情なり、傾向は天なり、各々賦命に従うて自己を發揮せんのみ」と、蘇峯に絶縁状を送つて民友社を去り、翌年「黒潮」を自費出版して、兄と性行の全く一致せずして止むなく社を辭した旨を告白

してゐる。三十九年聖地イエルサレム巡禮の途に上り、更にロシアのヤスナポリヤーナにトルストイを訪ひ、半歳の後歸朝、四十年北多摩郡千歳村粕谷に閑居し、トルストイの田園生活に倣つて、晴耕雨讀ひたすら思索に耽つた。大正三年父の死に會ひ、三年間隠棲服喪したが、八年夫人を同伴して世界周遊の途に上り、翌年歸朝。後自敘傳小説「富士」の執筆に傾倒中、十五年腎臓を病み、翌昭和二年七月伊香保の地を慕つて重態の身を運び、九月歿した。享年六十。臨終に際して兄蘇峯を招いて二十五年振の和解をした。

著作には前記「不如歸」、自然と人生「思出の記」「黒潮」等の他「青山白雲」「青蘆集」みみずのたはごと「死の蔭に」「新春」等の隨筆、「巡禮紀行」「日本から日本へ」等の紀行、及び傳記「竹崎順子」がある。今總べて蘆花全集に收められてゐる。

2 出典

「自然と人生」から採つた。「自然と人生」は短篇小説「灰燼」を始め、「自然に對する五分時」「寫生帖」「湘南雜筆」「風景畫家コロオ」等五篇五百餘章よりなり、四季の自然美を描寫した小品・隨筆がその大半を占め、自然描寫の文學として、當時驚異を以て迎へられ、今日尙廣く愛誦せられてゐる。

本課は「自然に對する五分時」中の一編である。

3 主眼及び採擇の趣旨

文章に表現することは至つて困難であると思はれる太陽の、而も落日の數分間に取材して、或はこれを大聖の臨終に比し、或はその餘光を偉人の歿後に譬ふるなど、平和莊嚴神祕な落日の光景を遺憾なく表してゐる。深い觀察の上に立ちながらも、寫生に泥まず、また主觀に走らず、全く主客合一の境地に浸り入つて、而も敘するに漢文調の平明澄徹な文を以てし、餘韻の深い一種特異な藝術的香氣を匂はせてゐる。これが鑑賞を通して高雅なる心情の陶冶に資すべく文藝教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【相模灘】 サガミナダ 伊豆半島と房總半島との間、即ち相模灣の沖合の海面を言ふ。東は三浦半島の劍崎と房總半島の洲の崎とを連ねる線、浦和水道と境し、北は伊豆半島の基部に突出する眞鶴岬と三浦半島の城ヶ島とを連ねる一線で相模灣に接し、南は伊豆大島の線で劃られてゐる海域。

「灘」ナダは、字は「難水」の合字にして、意は「波高」の略といふ。陸から遠くて波の荒い海路。風波が荒く航海の困難な海。鹿島灘・熊野灘・玄海灘等の「灘」は皆この意である。

【落日】 ラクジツ 入日・夕日・沈みかかつた太陽。落照・落暉・落陽などの語もある。

【秋冬】 シウトウ 秋から冬に移る頃。訓讀すると「秋と冬」の意となる。

【風ぎ】 ナギ 静まつて。「風」は國字。風の止むこと。風が止んで波が靜まること。

【秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に

落つる日を望むに、世に斯かる平和のまた多かる可しとも思はれず」

所謂小春日和の靜穩和煦の夕である。作者はまた「平和の至」(四四頁一行)と稱へてゐる。併し平和を見、平和を感ずるのは、その人の心の平和である。「世に斯かる平和のまたあるべしとも思はれず」とは、實に此の平穩の光景が平和な心境に投射された時の、自らなる詠歎であつたのである。

【三分時】 サンブンジ 三分の時間、三分間。

【日の西に傾くや】 この「や」は助詞であるが、「日が西に傾くとその時には——」といふやうな氣持。

【相豆の連山】 サウヅのレンザン 相模・伊豆の連なつた山々。こゝは伊豆半島の東側に連なる箱根(相模)天城(伊豆)兩火山脈の諸峯を指す。

【白日】 ハクジツ (一)照り輝く太陽。くもりなき日光。太陽。(二)ひるひなか。日中。こゝは(一)の意。

【爛々】 ランラン (一)光りかゞやくさま。鋭く光るさま。きらきら。つやつや。(二)あきららかな様。こゝは(一)の

意。

【山も眼を細うせるにや】

白光の眩しさの爲に「山も眼を細くしてゐるのであらうか」といふ山の疑人化である。警抜巧妙な疑人法といふ他はない。この語は前の「連山は煙の如く薄し」を受けてその理由を示してゐる。「細うし」は「細く」の音便。「せるにや」は「せるにやあらん」の省略。「や」は軽い疑問の助詞。

【日更に傾くや——相豆の連山次第に紫になるなり】

【日更に傾くや——相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ】

「日更に傾くや」の反復は、落日に向つて凝視の瞳を据ゑてゐる作者の緊張した心の姿を示してゐる。その緊密な觀察は、次第に紫となり、やがて紫の肌に金煙を帯びて行く富士を初め相豆の連山の、時々刻々に移りゆく變化を克明に寫してゐる。

【落日海に流れて】

落日の光が海面に細長く映つた様の形容。挿繪は正にその情景である。「流れて」は如何にも生動的な表現である。

【逗子】 ズッ 現神奈川縣三浦郡逗子町。相模灣の東北隅に面し、帝都に近い別荘地・遊樂地として古くから有名である。その海岸を新宿ヶ濱と言ひ、近く江ノ島を望み遠く相豆の連山を越えて富士の靈姿を仰ぎ、眺望の絶佳

光景を描いて、繪畫的な美しさを表してゐる。作者の苦心の存する所、また作者の優れた自然描寫の力量の窺はれる所である。

【大聖】 タイセイ 最も優れた聖人。最も徳の高い聖人。「聖人」は知徳の圓滿具足して、萬人の師表と仰がれる理想的人格。

【臨終】 リンジュウ 「生命の終に臨む」の意。死に際。いまは。最期。終焉。往生。

【侍す】 ジス 貴人の側に奉仕する。はべる。さぶらふ。

【莊嚴の極】 サウゴンのキョク 此の上もなく莊嚴なこと。莊嚴の極地。「莊嚴」は尊くおごそかなこと。(二)明治神宮六頁八行既出)

【平和の至】 ヘイワのシ 此の上もなく平和なこと。平和の至極。

【凡夫】 ボンブ (一)凡人。尋常の人。普通の人。(二)佛語、煩惱に束縛せられて生死を脱却出離し得ない衆生。聖者(シャウジャ)又は聖人(シャウニン)に對する語。こ

こは(一)の意。

【靈光】 レイクワウ 靈妙不可思議な光。

【肉融け】 ニクトケ 肉體が融け去つて。即ち肉體的存在としての自己を超脱忘却して去つて。「肉」は下「靈獨り」の「靈魂」に對する「肉體」の意。

を稱へられてゐる。町の南端を流れる田越川を中心に、六代御前の墓をはじめ鎌倉時代の遺跡が多い。

【生簀の籠】 イケスのカゴ 籠生簀のこと。竹製球状で大小種々ある。海岸地方で海面に浮かべて、内に鰹釣の餌の鰻を畜へるものなどは、徑一五〇糎乃至一八〇糎、高さ二四〇糎乃至二七〇糎もあり、口部の周圍に木枠を附して使用する。養魚池等で鯉・鰻など畜へるものは、徑約八〇糎、高さ約四・五〇糎で、口部に重ね蓋を有する所謂「遠州籠」と稱するものを用ひる。

【生簀】 「生洲」又は「活洲」とも書く。漁獲した魚を生かして置く場所、又は器具。箱生簀・籠生簀・船生簀・網生簀・船内生簀等種類が多い。

【赫焉】 カクエン (一)赤いさま。(二)光明を發するさま。

(三)あきらかに著しいさま。(四)いきほひの盛なさま。

(五)怒を發する様。こゝは(一)の意。「焉」は形容の語辭で「然」如と同じ。

【此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾が足下に至り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし】

色と光との鮮明な描寫により、克明に、印象的に落日の

【端然】 タンゼン 正しく整つた様。行儀作法の正しいこと。きちんと。

【永遠の濱】 エイエンのハマ 現實を超越した永劫不變の世界。「濱」はこゝでは「世界」の意、海邊に因んで「濱」と言つたのである。

【莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り端然として、永遠の濱に佇むを覺ゆ】

稍々誇張とも言はれる程の主觀的感想の表白であるが、天地の大觀を敘し來つて、そこに凝然として佇む作者の境地に思ひ至る時、深い眞實性を以つて讀者の心に迫り來るものがある。

【物あり】 モノあり これと説明し得ないある「物」である。それは主觀的な存在であり、感情の對象ではあるが、未だ客觀的に認識されない漠然たる物である。

【融然】 ユウゼン やはらぎとけるさま。

【物あり、融然として心に浸む。喜と云はむは過ぎ、哀と云はむは未だ及ばず】
何だか得體の知れない物があつて、それが融けるやうにやはらく心の中に浸みこんで來る。心の中に浸みこんで來た「物」の正體に就いて反省を加へて見ると、それは喜と言つては言ひ過ぎであるが、さりとて哀と言つては言ひ足りない。即ち喜の中に哀があり、哀の中に喜があ

り、喜とも哀とも言へない渾然たる一種の感情である。物と心とが渾然として融合した主客未分の意識状態、喜とも哀とも言へない一種の感情状態はその意識の上に存在する。それは物であり同時に心である。即ち物心一如の境に於ける一種の感銘に他ならない。更に言へば、それは刹那であり、而して永遠である。永遠の濱に佇むを「覺ゆ」と言つた心境の表現である。

【かゝるや】 かゝると。「や」は強意の助辭。

【印度藍色】 インチゴ 英語 Indigo の宛字。帶銅赤色の青色。染料としてのインチゴは、帶銅赤色の青色粉末で、藍・青藍・藍靛・洋藍・インド藍などとも言ひ、天然には木藍(印度産) 蓼藍(本邦内地産) 山藍(琉球産) 菘藍(支那産)等の葉部に含有される。木綿等の植物性纖維、及び絹・羊毛等の動物性纖維によく染着する青色染料として用ひられる。

【舊に仍つて】 キウにヨつて もとのままに。依然として。

【銜み初めぬ】 フクみソめぬ 落日が山に沈みかゝつたのを擬人化して、山が落日をくはへ初めたといつたのである。

「銜む」はものを口にくはへる意。

【落日の影】 ラクジツのカゲ 落日の光。

「影」は(一)暗體によつて光線の遮られた暗い部分。(二)

水面鏡面等に映つた所謂影像。(三)光線を遮つてあらはれる暗體の形。(四)姿。おもかけ。(五)薄くぼんやり見えるもの。(六)肖像。にすがた。(八)うつし。模造。(九)日・月・燈火などの光。こゝは(九)の意。

尙陰(一)光線のあたらない所。(二)人目に見えぬ處及び蔭(木の下など)との區別をも明にしたい。

【迫らず】 セマらず 落ちついて。急がず。

【悠々】 イウイウ (一)遙かに限りない様。遠くはるかな様。(二)時の久しい様。(三)ゆつくり落ちついた様。こゝは(三)の意。

【伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば、海に浮かべる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く】

日は愈々山に沈み初めて、作者の眼と筆とは、正に觀照の焦點に集注せられた。山が落日を銜み初めたと言ひ、別れ行く世をば顧みがちにと言ふ。すべて巧妙なる擬人法である。

【瘖せて】 ヤせて 細くなつて。

【蒼然】 サウゼン (一)色をあをとしたさま。(二)夕暮の薄ぐらいさま。(三)色のふるびたさま。こゝは(二)の意。「蒼然として憂ふ」は山も海も暮色につつまれて蒼然たる様を擬人化していつたのである。

【眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ】

忽ちにして没した落日を見送り、思はずも卒然として願望せざるを得なかつたのである。そして今や無韻の哀歌を奏する光なき天地の姿に驚の眼を見張るのであつた。

【餘光】 ヨクワウ (一)あまりの光。殘光。(二)おかけ。餘德。餘慶。こゝは(一)の意。

【箭】 ヤ(音セン・ゼン) 關よりして東は「矢」と言ひ、西は「箭」といふ。こゝは勿論この區別はない。

【偉人】 キジン 大人物。偉大な性格を具へた人物。

【日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿後、實に斯の如し】

光の消えた天地の姿に驚の眼を見張つたのも東の間、作者の眼は忽ちにして金よりも黄なる餘光の箭に注がれる。その莊嚴な光景には、偉人の歿後を想望せしめるものがある。偉人が太陽か、太陽が偉人か、ある嚴肅な宇宙の理法の前に、作者は今や敬虔なる感激に打たれてゐるのである。

【程なく】 ホドなく 間もなく。

【上りては】 ノボりては 上になるにつれて。

【字藍色】 プルツシャンブルー Prussian-blue 暗藍色。黒ずんだ藍色。

【遺孽】 ワスレガタミ(音キゲツ) (一)父の死後生まれた妾腹の子。(二)後に残つた賤しい血統のもの。(三)轉じて滅亡したものの子孫。こゝは(三)の意。

「孽」は「孽」の略字。(一)庶子。(二)賤しい生れの者。(三)わざはひ。つみ。憂。

赫突として晝を輝かず太陽に對して、夜靜かに光る明星を譬ふるに「孽」の字を以てした所にも、作者の周到な用意がある。

教科者に「孽(ひこばえ)」とあるのは印刷の誤であるからよろしく訂正せられたい。

【明星】 ミヤウジャウ 金星。諸惑星中最も地球に近く、その大きさも略々地球に等しく、地球によく似た天體である。太陽の周囲を公轉するに當り、月と同じく盈虧がある爲、その光輝は時によつて甚しく變化する。黄昏は諸星に先立つて、先づ西空に輝き、曉は諸星に後れて東天に残る。故に「宵の明星」曉の明星」と呼ばれる。又支那に「太白星」我が國に「ゆふづつ」の異稱がある。

【日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、煙りたる樺となり、上りては濃き字藍色となり、日の遺孽とも思ふ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の日の出を約するが如きを見るなり】

金・朱・樺・字藍色と、色彩の鮮明な描寫によつて印象

的に、繪畫的に浮かび上らせてゐる力量もさることながら、落日の後、筆をつまづけて星を點出して文を結んだ手法

は、全體を極めて回想的な餘情深いものにしてゐる。

2 文の構成

第一節 初―四二頁三行 伊豆の山に落ちる日を望む平和感を敘して全文の序とす。

第二節 四二頁四行―四四頁七行 傾き行く日に照らされて赫焉として輝く萬象と、其處に莊嚴と平和の至極を覺える作者の感想。

1、日の除々に傾くにつれて變化して行く伊豆の連山と富士の山。(四二頁四行―四三頁三行)

2、落日に照らされて赫焉として燃える萬象。(四三頁四行―同頁一〇行)

3、落日を望んで莊嚴と平和の至極を感ずる。(四三頁末行―四四頁四行)

4、落日伊豆の山に没しかゝらんとする直前の光景。(四四頁五行―同頁七行)

第三節 四四頁八行―四五頁五行 伊豆の山に落ちる日と餘光の美しさに打たれた作者の感慨。

第四節 四四頁六行―終 落日後の富士を描き、明星の光を點出して餘情的に文を結ぶ。

3 文意

落日の平和感を敘して、先づ全文の絃となし、次に傾き行く日につれて變化する萬象を、印象的に、色彩的に、鮮明に描いてゐる。其處に作者は大聖の臨終を想像して至極の平和と莊嚴とを感ずる。而して忽焉として没し去つた落日の後、上射する餘光に對して「偉人の歿後、實に斯の如し」と斷ずる敬虔な感激に打たれ、更にその後明星の光を點出して、一種深遠な情感を以て文を結んで居るのである。

4 鑑賞批評

出典の示すが如く、五分時の間に於ける自然の寫生である。それだけで既に相當困難な課題である。而も太陽の出没を描寫する如き、或は餘りにも莊美であり、或は餘りにも嚴肅であり、又或は餘りにも平和である。それは、考へて見ただけでも至難な業である。然るに本篇の如き、寫し得て完璧に近きものと言ひ得るであらう。觀念に傾かず、寫生に拘はれず、作者は正に主客融合の美しい永遠の世界に立つてゐる。此の作者の特色として、譬喩法がかなり多く用ひられてゐるのであるが、それは常に如何にも自然的實感的であり、鮮美優雅な用語と、巧妙適切な措辭と、更にその繪畫的表現と相俟つて、自然の狀景を眼前に髣髴たらしめるものがある。而もそれは皮相な感覺に止らず、幽邃深玄であり、平明簡潔の中に盡きせぬ詩情を溢へてゐる。實に熟讀朗誦に價する名篇と言ふべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 落日に大聖の臨終を想像し、莊嚴と平和の至極を感じて、主客合一、靈肉渾融の永遠の世界に至り得たものは、作者の胸底に潜む深い自然愛の精神である。その作者の胸底に參入せしめることが主眼たるべきは言ふまでもない。

(二) 従つて此の作者の持つ特有な技法、自然的で實感的な譬喩、巧妙なる措辭、優雅な用語等、些々たる形式の末も忽にせず、忠實に讀み味はつて行く態度で指導は進めらるべきである。

(三) 漢文調の雄健な筆致と、短句を自在に重ねた簡潔平明な調子とは、それが巧妙な色彩描寫と相俟つて印象的で繪畫的で迫真的であり、而も、其の中に常に餘情を溢へて詩趣盡きせぬものを持つてゐる。これも亦此の作者の優れた特色として十分味讀せられねばならない。

(四) 文體は文語文ではあるが、併し作者の觀察の態度・手法・用語等、生徒作文の模範として利用せらるべきものである。

2 参考

(一)挿繪 落日

「繪葉書」に據つた。正に落日海に流れて、萬象の赫焉と燃える風景である。本文の敘する、「平和の至、莊嚴の極」なる氣分を味はふすがとならう。

(二)徳富蘆花の文學的功績に就いての相反する批評として高須梅溪・正宗白鳥兩氏の言葉を左に引用する。

〔高須梅溪評〕

私は既に「青山白雲」などで、氏の優れた文學的手腕を知つてゐた。それで「不如歸」を見たときも、氏が當然、發展の過程を追つたものだと思つた。それについて氏は「自然と人生」を公にし、「思出の記」を書き、「黒潮」を發表するといふ風で、正に氏の生涯中最も油の乗つた時代であることを適確に示した。

氏は「自然と人生」に於て、民友社同人、湖處子が「歸省」のうちで清新な自然描寫を見せた脈を追ひ、尙氏一流の情趣を加へて、可憐愛すべき繪のやうな小品をいくつも書いた。それはドオデー、ラスキンなどの小品を連想せしめる妙味を持つと共にいかに新しく自然を見るか、いかに正しく自然を寫すかを若い人々に教へた後、その延長が「新春」となり「みみずのたはごと」と進化したのである。

氏の自傳の一部「思出の記」は健全すぎた立志談で勢ひ通俗化しやすいのを、氏は或程度まで藝術の芳香を以て包んだ。この點に於て、氏は矢張り一個の詩人であつた。明るくクリスト教的樂天觀を持つ詩人であつた。それが急に廣い世界へ出て「黒潮」の如き社會小説・政治小説とも云ふべきものを書くに至つたのは、氏の上き一轉向であつたと云へよう。それに於て氏は伊藤博文公を中心とした政界のアトモスフィアを描き或程度の成功を収めたが、無論、ぐつと急所を穿つたとは云へない。けれども當時の小説家にくらべると、

氏の視野は遙に廣く、且文明批評家と云つたやうな風が見えて一步先に進んでゐた。天分もある事だが此處まで出てくるには努力も地並でなかつたらう。

以上氏の全盛期で、文學的に最高頂に達したのである。が「順禮紀行」などから、氏は次第に回顧的となり、在來歩いて來た道をほぼ守るにすぎない氣味が見えて來た。唯「みみずのたはごと」は流石に圓熟老成の味を示し、「寄生木」また少し變つた毛色を帯びてゐたが、「富士」黒い眼と茶色の眼」などになると、唯在來の人生觀を固有し、自分が作つた型の中を往返して、それ以外、一新路を打開し得ない齒痒さがあつた。筆も材料も稍々固定して、老熟したところはあつても、フレッシュユさを幾分失つたのは遺憾である。が、その眞面目と熱心とは失つてゐない。エナジイも六十翁と思へないほどに強かつた。かうして獨往孤高の道を、長く一貫して歩いた氏の超邁の風趣は、文壇の一大異彩として尊いものに思ふ。今、氏の訃音に接し、眞に哀情に堪へぬ次第である。

〔正宗白鳥評〕

彼の最得意の壇場は「みみずのたはごと」位で、もとゞ小説家といふ柄ではない。「不如歸」が意外な當りを取つた爲に、遂に小説家となつて了つたが、之は彼の爲に幸福な轉歸とは言はれなかつた。「富士」に至つては似而非なる自然主義小説の弊に墮して、むしろ醜態を呼び起さしめる。要するに彼は「自然と人生」派の散文家として其の分に安んずべきであつた云々。(昭和三年七月雜誌改造)

(三)綱島梁川氏の徳富蘆花人物評を左に引用する。

けふ、徳富蘆花氏の來訪に接した。君とは初對面である。予は、一見して未言相見醉の感があつた。實に稀に見る品藻の美しい人だ、一言すれば、何となく予の好きな人だ。折から西田天香君も、京都より來合はせ、談はトルストイ翁に關する詳論を中心として、それからそれへと枝が繁り、花が咲きて、約三時間の清興に、病の身にあるを忘れた。蘆花氏は、實に詩魂と敬虔魂との炎のゆらめき美しい人とても評すべき、懐かしく、慕はしい人である。けふは、實に感謝すべき一日であつた。(寸光録)

六宿かり

志賀直哉

一 解題

1 作者

志賀直哉 シガナホヤ 明治十六年二月宮城縣石巻町に生れた。十八年兩親と共に上京、祖父母の家に住み、學習院初等科より中等科・高等科を経て三十九年東京帝國大學英文學科に入學したが、四十一年中途退學して専ら創作に従つた。四十三年武者小路實篤・有島武郎・里見弴・柳宗悅等の諸氏と共に雜誌「白樺」を創刊し、俊秀作家として漸次文壇に頭角を現した。大正元年以來尾の道・松江・京都・我孫子・京都等轉々として居を移し、十四年以來奈良に住み、悠々自適の生活の中に今尙創作に従つてゐる。理想主義的熱情を以て人間性の深奥を透視し得る強い性格と、虚偽不正に對し烈しい憎惡を以て生き抜く正義心とをもつた作家として、文壇に特異の地歩を占めてゐる。作風は寫實主義に近いが單なる精細密な外形描寫に終始せず、對象の核心を把握してこれを浮彫して行く如き風がある。

作品には短篇集に「留女」「大津順吉」「夜の光」「荒絹」「雨蛙」「山科の記憶」「或る男」「其姉の死」等があり、長篇小説に「暗夜行路」がある。

2 出典

短篇集「荒絹」から採つた。「荒絹」は大正十年二月に出版された小説集である。本課の文は「荒絹」の中「宿かりの死」を殆どそのまま採録したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

虚榮の假面をかぶり、欲望の重荷を負うて苦悶し續けた宿かりの不幸な生涯の物語であるが、これはとりも直さず足ることを知らぬ人間の運命であり、宿かりの人知れぬ苦惱は分に安んじ得ない人間の苦惱の姿である。つまり虚榮にあこがれ、欲望に追立てられて、喘ぎ苦しむ人間の運命を寓するに、この不幸な宿かりの生涯を以てした寓意の物語である。作者の暢達な筆は平明簡潔に、而も暗示深くその心理を描きいだして、讀者の深い内省に訴へてゐる。文藝的教材として、同時に人間的教養に資すべき文化的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【宿かり】 ヤドかり 甲殻類に屬する節足動物。蝦と蟹との中間の形をなし、腹部は柔軟で節を有せず、頭胸部はよく發達して堅い皮殻を被り、一對の大きい螯を持つてゐる。巻貝の殻を求めて、これに柔軟な腹部をさし入れて生活し、成長するに隨つて大きい貝殻に住みかへ、時には適當な巻貝を殺してその殻を奪ふこともあるといふ。別名「がうな」。

【菜螺】 サザエ 「拳螺」とも書く。腹足類の貝。介殼は厚く拳状をなし、表面に管状の突起がある。外面は暗蒼色、内面は平滑で眞珠色をなす。殻孔は圓く大きく螺旋状をなし、「へた」は石灰質で硬い。我が國には東海より西南

六宿かり

海に亘つて多く産し、近海の岩礁の間に棲息し、海藻を食とする。肉は多く壺焼として食ふ。

【きしやこ】 「きさこ」の轉訛、「細螺」「扁螺」など書く。腹足類の海産の貝。殻は蝸牛に似て小形、厚く固く、淡青色で光澤があり、美しい紋様がある。別名「しただみ」。

【うちうち】 ぐづくぐ。もちもち。

【冷笑】 レイセウ あざわらふこと。さげすみわらふこと。

【小さいな】と思つた。「相變らさうちうちしてゐる。」と腹の中で冷笑した。

「うちうちしてゐる」といふ冷笑は「小さいな」と相手を見下す傲慢不遜な己惚心の自らの表れである。嘗て自分が其の中に育くまれた仲間を冷笑の眼で見下すこの宿

かりの己惚心には、既に自己を喪失した空虚さがある。「宿かり」の一生の不幸は實にこの「小さいな」といふ冷笑から始まるかに思はれる。

【己惚れる】 ウヌボれる。「自惚れる」とも書く。自ら慢心して自らをたのむ。己れ自ら、己れに心酔して實際の價値以上に自分をえらいと思ひ誇る事。

「惚れる」は(一)うつとりする。ぼんやりする。(二)一すぢに思ひをかける。思ひ慕ふ。こゝは(二)の意。

【宙返り】 チウガヘリ (一)空中で身體を回轉すること。とんぼがへり。(二)飛行機の空中に於ける逆轉。こゝは(一)の意。

【わあ】といふきしやごどもの笑ひはやす聲が聞えた。眞實大きくないものが大きく見せようとする時、必ずや其處に無理がありごちなさがあつて、その行動に自ら人の笑をそゝる滑稽感の伴なふものがある。宙返りして海の中に飛びこんだ宿かりの姿態がそれである。きしやごどもはそれで思はずふきだしたのではなからうか。何がをかくして笑つたのか生徒自らをして考へさせたい所である。

【笑ひはやす】 聲をあげて笑ひたてる。

「はやす」は(一)聲をあげて歌曲の調子をとる。(二)囃子を奏す。(三)人の立ち舞をみて褒める。(四)俗に聲を立て

て嘲る。悪意を以て言ひそやす。こゝは(四)の意を含んだ笑で、嘲笑的な笑と見るのがよい。

【寛大】 クワンダイ (一)心の廣くゆるやかなこと。(二)手やはらかにすること。こゝは(一)の意。

【彼は大きな者のみが感じられる寛大な心持を味はひながら、海の底をのそのそと歩いてみた】

眞の偉大なるものは自らの寛大さに自己満足を感じて得意になることなどない。小人と自らとを對比して自らの優位を感じるなどの事もない。彼の寛大さはその宏大な氣宇の自然の流露だからである。然るにこの宿かりはまづ「馬鹿どもが」と、小さなきしやごどもの笑にすら腹立つ自らの小ささに氣附かないのみならず、却て自己の大きさに獨り己惚れてゐる。「味はひながら」と言ふ語は附焼刃に過ぎない、その自己満足を示したものであり、これに照應する「のそのそ」といふ副詞は如何にもよく効いてゐる。

【拔足差足】 ヌキアシサシアシ 音を立てないやうにこつそりと歩く形容。

「拔足」は音を立てない爲足を抜き上げるやうにして歩くこと。

「差足」は、音を立てないやうつまだつて足を地にさしこむやうにして歩くこと。

【彼は急に堪らなく恥づかしさを感じた。彼は榮螺に見つからないやうに、拔足差足そこを退いた】

拔足差足逃げるやうに退いて行く宿かりの姿は、何といふ小ささであらう。小さいきしやごどもには、まだ宿かりを笑ひはやすだけの大きさがあつたといへる。然るに、今この宿かりは榮螺の眼に入り得ない程小さくなつてゐる。これこそ己惚に溺れたものが、その満心を打碎かれた惨めな姿であり、更に言へば我を失へるもののははれな心の姿であつた。

【むかむかと】 (一)吐氣を催すさま。(二)怒氣の起り立つさま。こゝは(二)の意。

【無理やりに】 ムリやりに 無理に。強ひて。

【一人になると、彼は急にむかむかと腹が立つて來た。そして直ぐ無理やりに自分の殻を説いてしまつた】

何の爲の腹立ちか生徒達に考へさせたい。勿論それは虚榮の附焼刃が引割られて、その誇が滅茶苦茶に打碎かれた憤懣である。宿かりに取つてこれは自分の眞の姿を發見すべき内省の機會であつた。にもかゝはらず、己惚と虚榮とに溺れた彼は、内省するかはりに獨りむかむかと腹を立て、而も無理やりに自分の殻を説いてしまつてゐる。彼が不幸な生涯を終らねばならなかつた原因は此處に潜んでゐたのである。

【臆病】 オクビヤウ 膽力がなく少しの物事にもおちおちれること。

「柔かい尻が砂で擦れて、痛くてやりきれなかつた。」とあるから、その爲の臆病もあるであらう。併しこの臆病はそれだけではあるまい。虚榮に溺れ己惚に酔つてゐる者にとつて、自己の短所やみすばらしさを暴露することはどんなに惨めな事か。この臆病はむしろその方の臆病と解すべきであらう。

彼は苦しんだ(同頁五行)の「苦しんだ」も同様の苦しみとみるがよいと思ふ。

【やりきれない】 (一)辛捧しきれない。我慢出來ない。(二)物事をより以上繼續又は繼承し得ない。こゝは(一)の意。

【法螺貝】 ホラガヒ 「吹螺」とも書く。腹足類・楯目藤津貝科に屬する海産の大形螺貝。螺層は八階で高さ四〇厘内外、直徑一四・五厘位。殻表には美しい紋形があり、殻口は大きい。我が國南部の沿海に産し、大きいものは殻頭に孔をあけ、古、軍陣や山伏の入山などに吹き鳴らして、合圖威嚇等に用ひられた。

【おびやかす】 「脅す」と書く。(一)おそれさせる。おどす。おどろかす。威力を示す。(二)おどして財物を奪ふ。おどして心に従はせる。こゝは(一)の意。

【その貝は重く、且つ身體にはゆるゆるだつた。が、かまけ

す苦しい思をして、それを曳きすつて歩いた】

借物の大きさや巧みさや美しさを装うて自らを偽り、その自己欺瞞のために憂鬱な重苦しい不安な氣持で自らを苦しめる―それが我々凡愚のあはれな姿である。宿かりの身體にゆるゆるな大きさは、その借物の爲であり、その重さはとりもなほさず憂鬱な壓迫ではなからうか。而も彼はその苦しみをも構はず曳きすつて歩いてゐる。かまはず苦しい思をして―は虚榮と虚偽の假面をかぶつて恬として恥ぢない彼の救はれない心である。

【欲望】 ヨクバウ (一)ほしがること。又その心。のぞみ願ふ心。欲求。(二)心理學上 Want の譯語。意志の根本作用、即ち常に或る對象に向つてゆく傾向が充足され實現されることを欲する肉體的的心理的發見。こゝは(一)の意。「欲望に燃え立つ」は火の燃え立つやうに欲望が盛に起る。即ち熱烈に欲求する。

【彼はまた大きくならう大きくならうといふ欲望に燃え立つた】

「彼は餘りいららしなくなつた(同頁七行)とある。「大きくならう大きくならう」と重ね、「燃え立つた」と言ふ所、これは宿かりの焦燥である。唯法螺貝の殻に一杯にならうといふ外面的な大きさのみ只管に欲求して心の安まる時はない。それは名聞利欲に追ひつかはれて心

の安んずる暇のない迷ひである。宿かりは今その迷に自らを失つてゐるのである。

【いららしする】「苛々する」と書く。いらだつこと。心がいらだつてもどかしく思ふ。じれつたがる。

【彼は餘りいららしなくなつた。前程には大きくならうといふ欲望も燃え立たなくなつた】

眞の大きさを希ふ心ではない。虚榮が満たされ、所謂外聞を蔽ひ得さへすればすぐ小さな満足に墮ちて得意になり、いゝ氣になつてしまふ。「いららしなくなつた」は嘗つてきしやごを冷笑したあの傲慢不遜な心にまた立戻つてゐるのである。併しそれまでの焦燥と煩悶との間に、彼の精力は殆ど燃え盡くしてゐるのである。「欲望が燃え立たなくなつた」のは、彼の心からの安心満足ではなくて、精神力の消盡が意味されてゐる。

【偶然】 グウゼン 思ひもよらず。はからず。

【素敵に】 ステキに 非常に。澤山に。甚だしく。

【氣絶】 キゼツ 一時息の絶えること。卒倒。

【失望】 シツバウ のぞみのかはないこと。希望を失ふこと。がっかりすること。

【自分に失望する】は自分の無力無智に失望したのである。

【彼は榮螺の殻に入つてゐた時、大きな榮螺に會つた時より

も倍の倍も自分を恥づかしく感じた。腹を立てるにしては、もう力が足らなくなつた。彼は全く自分に失望した】

小さなきしやごを見下してゐた時に比べて、自分を壓倒し去つた榮螺より、より大きくなつた宿かりの得意な心境は想像に難くない。自分より大きなものの存在をすら彼は考へてゐなかつたのではなからうか。すつかり慢心し切つた時にこの驚であつた。「倍も倍も恥づかしく感じた」のはその爲である。欲望に迫立てられてあへぎ苛立ち休みなき生活の中に力も既に萎えかけてゐた時、この衝擊は「腹を立てるにしては」餘りに大きかつたのである。而も唯恥づかしさのみを感じる彼は、そこに自己の本然の姿を見出し得ず失望の苦惱に自分自らを陥れてゐるのである。

【自分がどれ程大きくなるにしても、そこにはいつも自分だけの大きさの貝殻がなければならぬと思つた。彼は全く絶望してしまつた。彼は直ぐ様自分のはひつてゐた法螺貝を捨ててしまつた】

自分自身の力で築き上げた大きさをなかつた事に氣附いたのである。それは常に借物の殻の中に自分を當はめて行つた外面的な大きさに過ぎなかつた。中味のない空虚なゴム風船の大きさを過ぎ、更に言へば全く自己欺瞞の満足に過ぎなかつたのである。今そこに氣付きながら、そ

の境地に諦めて、内を満たさうと思念する代りに、この宿かりは絶望して直ぐ様その殻を脱ぎ捨ててしまふのである。足るを知らぬ心の貧しさはあはれといふ他はない。

【輕蔑】 ケイベツ 輕んじあなどること。みさげること。

【横目使ひ】 ヨコメヅカひ ながしめにみることに。横目に見ること。

【伊勢海老】 イセエビ 「えび」の一種で、形大きく、長さ

三〇厘米に達するものもある。金色栗色、又は帯紫褐色の堅牢な甲殻を有し、大なる尾を具へ、眼は有柄複眼で露出し、二對の觸角、五對の脚がある。肉味佳良。かまぐらえび・しまえびなどはこの種の異稱である。

「えび」は「海老」又は「蝦」と書く。甲殻類十脚目長尾亞目に屬するものの通稱。體は頭・胸・腹の三部に分れる。頭胸部は一枚の背甲で覆はれ、前部に觸角・複眼・齒・鞭絲等があり、下部に五對の歩脚及び鉗がある。腹部は七箇の可動關節から成り、五對の遊泳腹と尾扇がある。海水・淡水何れにも産し、種類が多い。

【龍の落子】 タツのオトシゴ 總鰐類の小魚。體長は一・五厘米内外。體は骨質の環節で被はれ、頭は馬首の如く、直立して遊泳し、やはらかい尾で海藻に纏絡する。雄は腹部に皮囊を有し、雌の生んだ卵を入れて孵化させる。全體の形狀が「龍」に類似するのでこの稱がある。我が國

各地の近海に産し、「海馬」「龍の駒」「龍の捨子」「みづちのこ」「龍宮の駒」など異名が多い。

「龍」は普通「リュウ」と音讀する。想像上の動物で、印度支那等に太古棲息してゐたといはれ、姿は巨大な爬虫類、胴は蛇に似て剛鱗を有し、四足。角は鹿に、眼は鬼に、耳は牛に似る。地上では深淵海中に潜み、時に空中を飛翔して雲をよび雨を降らすとされてゐる。支那では鱗蟲の長として麟・鳳・龜と合せて「四端」といはれ、天子になぞらへられてゐる。

【げんげん】 不思議で合點のゆかぬこと。

【時々、その傍を輕蔑するやうな横目使ひをしながら、伊勢海老がびんびんと勢よくはねて通つた。龍の落子がげんげんな顔をして、立ち止つて彼を見送つた】

「自分に失望した」者に取つては、自分に注がれる總べての眼は輕蔑の色に映り、冷罵の眼眸に感ぜられる。「輕蔑するやうに」といひ、「げんげんな顔をして」は何れも、宿かり自身のひがみである。勢よくはねる伊勢海老と空とぼけた顔つきの龍の落子を取り來つて、前者に輕侮を後者に疑惑の眼を托した所、如何にも巧妙適切な筆である。

【それでもまだ何か求めるやうに】
足るを知らざるものの飽くなき欲望に惹かれ行く姿であ

る。氣力は失せ全く絶望しながら、それでもまだ自分の内なる安心の世界を求めることを知らないのである。

【腹縮】 ハラワタ 正しくは「腸」の字を書く。腹縮は當字。(一)生理學上、(イ)古く大腸のみをいふ。(ロ)大腸と小腸。(ハ)臟腑全體。(二)こころ。性根。こゝは(一)の(ハ)の意。

「腹縮の尻」は「腹縮の入つてゐる尻」の意。

【極端】 キョクタン (一)いちばんはし。はしのはし。

(二)甚だしくかたよること。甚だしく中正を失ふこと。

「極端に」は(一)の意をとつて副詞とした語。ひどく・非常に等の意。

【憂鬱】 イウウツ 氣がふさぐこと。氣が晴々しないこと。

【なえる】 「萎える」と書く。(一)植物等のしをれる。しな

びる。(二)氣力がなくなるとなになる。(三)おとろへる。

こゝは(二)の意。

【生涯】 シヤウガイ (一)此の世にゐる間。一生の間。終

生。(二)一生中の或事に關係した間。一生中の或部分。

「全生涯」の類。こゝは(一)の意。

【結末】 ケツマツ 終り。くくり。

【何故自分の生涯の結末がこんなにならなければならなかつたらうと考へた。それよりも、何がただの宿かりでゐられないやうな欲望を自分に與へたのだらう。そしてそれは

何のためだらうと考へた】

絶望し苦悶し次第に力のなえて行く經路を敘し來つて、此處に今死に類した宿かりの反省を述べる。如何にも自然なこの筆の運びは讀者をも誘つて宿かりの不幸な生涯の依つて來たる原因を反省回顧せしめずにはおかない。作者は「彼は常に満たされず來たのだ」(五二頁五行)と彼の不幸の原因を明言してゐる。これがこの物語の主題である。生徒自らをして全篇をもう一度回顧省察せしめて、その原因を究めさせたい。傲慢な心からだといひ、己惚からだといひ、生徒の立場は恐らくまちまちであらう。これが適當な補導を加へて、要するに足るを知らざる心に歸着する根本の原因をつかませて行きたい。

【夢想】 ムサウ (一)夢におもひみること。(二)夢の中に神佛の示現のあること。(三)あてもないことを心に描くこと。空想。こゝは(三)の意。

【疾うの昔】 トウのムカン すつと以前。

「疾う」は「トク」の音便。はやく・速に・急に等の副

2 文の構成

第一節 初―四八頁二行

榮螺の殻にはひつた宿かりが小さいきしやごを見下して己惚れてゐる時、突然自分より大きい榮螺に出遇つて恥づかしくなり腹を立てて自分の殻を脱いでしまつたこと。

第二節 四八頁三行―四九頁八行

一日一晚苦しんだ末やつと大きな法螺貝を見つけてその中にもぐりこんだ宿かり

詞。こゝはその副詞より轉化して名詞となつてゐる。

【實現】 ジツゲン 實際に現れ出ること。又實際に現しだすこと。

【彼は常に満たされず來たのだ】

「名利につかはれて靜かなる暇なく一生を苦しむこそ愚なれ」と徒然草の作者は言つて居る。樂觀し悲觀し煩悶と焦燥との間に重荷を背負つて生涯を苦しみ通す不幸はすべて此處に原因する。此の物語を通して、生徒の自省を促すべき所であらう。

【まゐる】 もと「行く」の敬語。轉じて負ける・降参する等の意味となり、こゝでは、すつかり駄目になる、弱りきつてしまふ等と解したらよい。

【彼の精神も肉體も段々にまゐつて來た。とうとう動けなくなつた。そして死んだ】

惨めな宿かりの生涯の結果である。簡潔に直截に敘して、而も餘韻と暗示に富んだ至妙な結尾である。

が、一年程の間に驚くべき成長を遂げてまた得意になつたこと。
第三節 四九頁九行―終 其の時偶然素敵に大きい法螺貝に出遇つて自分に失望し自分の殻を捨てて煩悶懊惱し、不幸な生涯の原因を反省しつつ死んで行くこと。

右に便宜上三節に分けては見たが、本來此の物語は不幸な宿かりの心理過程を描いたもので、心理の變化に沿つて細かく検討を進められるならば、より多くの段落にも分たれるであらう。或は全く分節せず取扱つてもいい課である。生徒の讀みの程度を斟酌して教授者の適宜な取扱が考慮せらるべきであらう。

3 文意

小さなきしやごを冷笑して得意になつてゐる宿かりが、大きな榮螺に遇つて堪らない恥づかしさを感じ、獨り腹立ち、その殻を脱ぎ捨てて別の大きな法螺貝にもぐりこみ安心する暇もなく、また素敵に大きい法螺貝に出くわして絶望し煩悶し、不幸な生涯を反省しつつ死んで行くといふ筋である。筋はたゞそれだけであるが、要するに作者の意圖は足るを知らざる人生の不幸を此の宿かりの運命に托するにあつたことは勿論である。

4 鑑賞批評

「悪達者な作家が筆にかけて無闇に曲線をつかふ處を君は直線に描く」といひ、また「それは美しい、又槍のやうに鋭い、だが燻しがかゝつてゐる。澁く、しかし美しい、美しいが枯れてゐる」といふ、これは長與善郎が氏の作品を評した文中の句である(参考欄参照)。まことに澁く枯れた美しさと槍の如き鋭さを以て宿かりの心理を如何にも暗示深く描いてゐる。此の作の中心的興味は蓋しこの宿かりの心理描寫にある。宿かりの心理を通して人間の心理を暗示した所にある。内なる心の養を忘れ、外なる大きさにのみ憧れて己惚れ失望し樂觀し悲觀して、終に惨めな死を遂げる宿かりの一生は、つまり人間の人間たる所以を忘れ、名利に追ひつかはれて、満たされる時なくあへぎ苦しむ我等凡愚の姿である。何等修飾誇張のない直截簡明な所謂直線的な筆致を以て、その心理を描きながら、そこに無限の暗示が潜んでゐる。そして其の暗示の中に槍の如く人の心奥を刺す鋭さを持つてゐる。而も受ける人の受け取るに任せて素知らぬ顔で不言の教を語つてゐる所が面白い。

三 備 考

1 指導研究

(一) 既述の如く寓意的作品である。成程其の筆は暢達で、よく宿かりの心理を描いてはゐる。然し其の中に寓されてゐる作意を考へなかつたなら、此の作品は餘りに單純である。反對にこの中に暗示された吾々自身の姿を感じる時、此の作品には無限の味がある。恐らく一語一語から何等かの意味を受けとり、内省を促され、盡きざる興味が感ぜられる筈である。形式的に特別の注意を必要としない平明さの故に、生徒達は安易な氣持で、單に宿かりの生涯の記録として讀過してしまふ恐が多分にある。反省しつつ考へながら、文中の寓された意味を讀みとらせるやう靜かに熟讀玩味させたい文である。

(二) 同時に最も教授者側の説明が避けらるべき課である。若し説明を施すことになれば、それは結局教訓的になり勝たからである。文藝的教材であつて修身教材ではない。語られ授けられる教訓は概して皮相淺薄な肯定に終り、深い感動は伴はないものである。生徒各自をして思索し内省しつゝ、讀みを深める事によつて、本文の象徴的意味を體感せしめるやうな態度が要求される。一語一句をも忽にしない深い讀みによつてのみこれは可能である。繰返し熟讀玩味させたいものである。

2 参考

(一) 挿繪 宿かり

舊小學讀本挿繪筆者山本方堂氏が特に本教科書の爲に執筆されたものである。きしやこの殻に入つた小さい宿かりと、大きい榮螺とを並べた所、本課の文と合せみる時、何か諷刺的な味が感ぜられるではないか。

(二) 志賀直哉に就いての批評

〔長與善郎評〕

それは美しい、又槍のやうに鋭い、だが煙しがかつてゐる。濃く、しかし美しい、美しいが枯れてゐる。たとへて見れば、煙し銀のやうとも云はうか。兎も角そんな感じが志賀君の作品には聯想される。

志賀君は夙くからその藝術に對して或る見識を持つてゐた。殊に小説道にかけては、既に二十六七の頃にははつきりした一流の見識を持つてゐた。それだけに、その手法と云ふやうなものに對しても、なか／＼意見がやかましく、その一種の定石を重んずる傾向が、同じ白樺の中で、個性自由主義の武者小路の傾向とちよつと對立してゐる觀があつた。兎も角、その獨特の小説觀に依つて夙くから完成品を作つてゐた點に於て君は確かに早熟なタレントであつた。

誰でも云ふことであるが、志賀君の特色は物の感じ方、神經の働きにあると云へる。さうしてそれは同君の性格から來てゐることは勿論である。同君は實に嘘を嫌ふ。従つて、他人の嘘にも氣むづかしいが、それだけ誰でも君に對して信頼の心を起こす。陰日向とか、人や世間の鼻息を覗ふといふやうな卑屈な眞似は、君の決して出來ないところである。よく氣の付く複雑の中に、何處か竹を割つたやうなといふと簡單に聞こえるが、男らしい氣位と我儘さを持つてゐる。それが神經となつて覗はれ、又一種古武士的ともいふべき卒直誠實な感を與へる。君の官能と趣味とは洗練されたもので、僕は曾て「山の手の粹」と君を評したことがある。

「生と熱」といふ事を富岡鐵齋はよく云ひ、晩年の鐵齋は、その生を目標としたと云はれるが、志賀君の作風にも、その「生」が非常に生きてゐると思ふ。技巧の悪達者な作家が、筆にかけて無間に曲線をつかふ處を君は直線に描く。普通の讀者は、巧みな曲線を見て、あゝうまいなと感心するが、趣味の高い人から見れば、それは一つの下品である、低級である。曲線に書けばいくらもうまく書けるところを殊更にぐつと直線を引いたなりですまして置く。それは餘程趣味の進んだ人でなければしないことで、文章の品位は其處に

現はれる。君の文章が芥子のやうにびりつとして、簡潔に生きてゐる事は、誰でも知るところであるが、其の品位の現はれて來る所以は、かういふ處にあると思ふ。

ものの描寫などの點で、君が名文家の漱石よりも更に進んだ名文家であるのは、時代のせみもあるが、矢張り藝術に對する觀照、人事自然に對する觀照が進んでゐたのだと思ふ。所謂名文を弄して得々たるほど君の趣味は幼稚ではない。その文章の引き締つてゐる點、趣味の高雅な點に於て、君は一寸フランスのジツドを想はせる。君がジツドを好くのは至極尤もと思はれる。

志賀君は又フロイベルを非常に畏敬してゐる様であるが、君の藝術はフロイベルのやうに大きくもなし、豊かでもないかほりに、又あんなにアカデミックでなく、新鮮で進んでゐるところがある。(志賀直哉の人と藝術)

〔谷崎潤一郎評〕

氏の文章に於ける最も異常な點を申しますと、それを刷つてある活字面が實に鮮かに見えることとあります。と云つても、勿論志賀氏のものに限り特別な活字がある譯はない。單行本でも雑誌に載るのでも普通の活字で刷つてゐるのに違ひありませんが、それでゐて何か非常にきれいに見えます。その部分だけ、活字が大きく、地紙が白く冴え／＼と眼に這入ります。これは不思議であります。なせさう云ふ感じを起させるかと云ふと、作者の言葉の選び方、文字の嵌め込み方に慎重な注意が拂はれてゐて、一字も疎かに描かれてゐない結果であります。そのために心なき活字までが自然とその氣魄を傳へて、恰も書家が楷書の文字を、濃い墨で、太い筆で、一點一劃苟くもせずに、力を籠めて書いたかのやうに、グツと讀者に迫るのであります。

文章も、かう云ふ域に達するのは容易ではありません。大概な人の書いたものは印刷物にしてみても、活字が宙にふはついてゐて、直きに動きさうに見えますが、志賀氏の使ふ文字は、活字になつても根を据ゑたやうにシツカリと深く見えます。さればと云つて、特に人目を驚かさうな變つた文字や熟語が使つてゐるものではありません。志賀氏は多くの作者の中でも派手な言葉やむづかしい漢字を使ふことを好まず、用語は地味で質實であります。たゞその文章の要領は、敘述を出来るだけ引き締め、字數を出来るだけ減らし、普通の人が十行二十行を費す内容を五六行に壓縮する、さうして形容詞なども、最も平凡で、最もその場に當て嵌まるもの一つだけを選ぶ、こ

とであります。かうすると、一字々々へ非常な重み加はつて來、同じ一箇の活字でありながら、その中に二箇三箇の値を含み、全く違つた活字のやうに浮かび上つて來るのであります。(文章讀本)

〔武者小路實篤評〕

志賀直哉は多くの優れた短篇と、二三の長篇をかいてゐる、彼の作品は量が多いとは云へないが質はすぐれてゐる。彼について、自分がかいたものがあるので、それをこゝにかいておく。

「志賀は思想家のタイプでも、學者のタイプでもない。彼は小説家だ。志賀の話はいつもそのまま、優れた小説的描寫に満ちてゐる。支那に旅行して歸つて來た時、支那のある料理屋の話聞いたが、すぐれた描寫になつてゐた。觀察が緻密で、多角的で、描寫が的確だ。自分では小説風に話してゐるつもりではないが、もの見方がさう出來てゐる、生活や見方が小説家としてイタについてゐる。志賀の小説は目の小説ではない。實に見てゐるが、心が伴はずには見てゐない。だから單なる見聞記は彼にはかけない。自分の経験したことでないとかけない。志賀が見るのは外見ではない。其處にあらはれてゐる人間の心の動き、境遇、生活、運命、その上それにしたる價值判斷が加はつてゐる。だから見物でなく觀察になるのだ。其處で小説が生れるわけだ。……觀察と生活がとけあひ、結びあつて、お互に助けあふ點で志賀のやうに渾然としてゐる作家は少ないと思ふ。」

志賀の趣味、神經、價值判斷、それは志賀の生命にとつて切りはなせないものだ。後は客觀的なものをかき、自己にはなれたものをかくの一方好きらしいが、しかし自分が経験しないものは一つもかゝらないと思ふ。其處が彼の強味であり、その眞實さが、白樺派の特色をなしてゐる。

補材

恥

弱いのが決して恥ではない。その弱さに徹し得ないのが恥だ。

藤村讀本より採つた。藤村讀本は藤村の隨想小品を「春夏」「秋冬」の上下二部に分ち輯めて發行されたものである。

【弱さ】力の「弱さ」だけを意味してゐるのではない。美に對する醜・大に對する小・富に對する貧・有能に對する無能など、我々をして恥ぢ歎き、或は落膽失望せしめるやうなすべての内容を持つ語と解すべきである。

【徹する】テツする 徹底する。更に言へば自己の現實を深く諦觀し、そこに生きて行く眞實の道を求めて行く態度である。

本課「宿かり」が煩悶懊惱にあがき苦しんだ生涯の不幸は實に此の弱さに徹し得なかつた所に起因してゐる。本課の作者は「常に満たされず來た」爲だといふ。これはそれをより積極的に解釋した言葉である。本課の文に併せ讀まれる時、この言葉の持つ深い味が理解されるのではなからうか。補材とした理由である。

【作者 島崎藤村】 一三・落葉の課作者欄參照

七 猫の垣巡り

夏目漱石

一 解 題

1 作者

夏目漱石 ナツメソウセキ (卷一・三・峠の茶屋既出)

2 出典

「吾輩は猫である」から採つた。「吾輩は猫である」は、明治三十八年一月から翌三十九年八月に亘つて、雑誌「ホトトギス」に連載せられ、漱石の文名をして頓に高からしめたものである。後單行本として出版され、今漱石全集卷一に收められてゐる。

本課の文はその第七章から抄録した。

3 主眼及び採擇の趣旨

滑稽諷刺の文學として明治文壇に特異な地位を占める「吾輩は猫である」の一節を採つた。漱石獨特の機智の閃きが隨所に表れ、滑稽洒脫な趣に溢れて、而もその中に深く鋭い諷刺が語られてゐる。この機智縱横、輕妙洒脫なる文趣を味到せしめることは勿論、更にその蔭に語られた諷刺的内容の理解にまで讀みを深めて行きたい。文藝的教材たると同時に、人間的教養に資すべき教材として採擇した。その取扱の態度に於ては全く趣を異にしてはゐるが、同じく自惚に我を失つた人間を寓した内容に至つては前課「宿かり」と一脈相通するものがある。前課に次いでここに配した所以である。

二 解 釋

1 語釋

【吾が輩】ワがハイ 本來われら・わがともから・われわれども之意。余輩・吾人などの語と同じく演說調の語であるが、轉じて自ら尊大にかまへて言ふ時の自稱代名詞。こゝは「猫」の自稱。

此の「猫」は英語教師珍野苦沙彌先生の家の飼猫で、即ち「吾輩は猫である」の主人公なのである。猫をして「吾が輩」といはしめる所、既に滑稽感をそゝるものがある。「吾が輩は猫である」の一篇はこの猫の飼はれてる苦沙彌先生の家庭、及びその家に入出入する友人の迷亭・寒月・東風・多々羅三平、拜金主義者の金田・鈴木等の行動を猫の觀察として描寫し、諷刺的滑稽の中に著者の該博な知識を思はせ、皮肉な文明批評をしてゐるのである。

【不審】フシン (一)審でないこと。たしかにわからないこと。未詳。(二)うたがはしいこと。あやしむべきこと。こゝは(二)で「うたがひ」位の意。

【器械】キカイ 道具。器具。器物。

「器械」は抵抗力を有する物件の組合せにより、動力か

七 猫の垣巡り

らエネルギーを受入れ、各部分の制限關係運動の下に機械的仕事をなすもの。これを平易に言へば所謂種々のからくりじかけになつてゐるものを言ふ。

【ボールもバットも】野球に使ふ球と打棒。今は殆ど原語のまゝで廣く通用する。

「ボール」Ballは革・ゴムで作つた毬で、蹴球・野球・籠球等に使用するものすべてについて言ふのであるが、「ボール・バット」と言ふ場合には野球用の球である。

【一文】イチモン (一)一文錢のこと。徳川時代に鑄造された穴明錢。一千枚を以て一貫とした。通貨の最も下位のもので、明治維新後殆ど廢れたが、尙暫らくは一厘として通用してゐた。(二)轉じて僅少な金。こゝは(二)の意。

【一文いらす器械なし】

「器械を持つことが出来ない」と言ひ、「金がないから買ふわけにいかない」といつた前文の結論であるが、それを七・五の調子のよい口調にまとめ上げて滑稽感をだしてゐる。機智の閃の示された句である。

【主人】シユジン 猫の飼主。前記珍野苦沙彌先生。猫の

觀た主人を原文から次に採録する。

職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に入つたきり殆ど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つてゐる。當人も勉強家であるかの如く見せてゐる。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寢をしてゐる事がある。時に讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらはしてゐる。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカチヤヌターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らしてゐる。

【平行】ヘイカウ「並行」とも書く。數學上の用語。同一平面上にある二つの直線、又は二つの平面、或は一平面とその平面外にある直線とが、如何ほど延長しても相交らぬ場合に、その二直線、二平面及び平面と直線とは互

に平行するといふ。

【まま】「間間」と書く。をりをり。時々。往々。をりふし。【首尾よくいく】シュビよくいく。よいぐあひにいく。うまく出来る。

【首尾】(一)首と尾。(二)始と終。始終。(三)物事のなりゆき。顛末。結果。(四)都合。工夫。こゝは(四)の意。【御慰みになる】オナグサみになる。たのしみになる。面白い。

【首尾よくいくと御慰み】

曲藝師・手品師などが、その前口上によく使ふ言葉をそのまゝ借り來つて、そこをかしみを持たせ、併せて曲藝氣取で竹垣の上を渡つて行く猫の危げな仕草を想像させてゐる。

【丸太】マルタ 丸く長い材木。皮を剥いだまゝの材木。

【便宜】ベンギ (一)好都合、便利。(二)適宜の處置。こゝは(一)の意。

【やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる】

「やるたびにうまくなるから面白い」のである。かう表せば成程語數の經濟にはなる。然し唯それだけで面白みはない。「うまくなる。」と切り「うまくなるから」と續ける連鎖に輕妙な機智があつて面白いのである。漱石獨特の語法で、この邊の語趣をよく味はせたい。

【鳥】カラス 卷一・金華山既出。

【推參】スピサン (一)推して參上すること。自分より訪れる。招かれずしておしかけていくこと。(二)轉じて無禮な振舞。無禮なこと。こゝは(二)で「推參な奴だ」は無禮な振舞をする奴だの意。

【人の運動】ヒトのウンドウ この「人」は「他人」の意。こゝでは「自分」を指してゐる。次に出て來る「人の堀」の「人」も同じ。

【籍もない分際】セキもないブンザイ 戸籍もない身分。何處の馬の骨だかわからぬ分際といつたやうな輕侮の言葉。

「籍」セキ (一)書籍。(二)戸籍。こゝは(二)の意。「分際」は「分限」ともいひ、身のほど・身分。

【これは推參な奴だ、人の運動の妨をする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるものか】

「推參な奴だ」と憤り、「人の運動」と力んで更に「籍もない分際で」と嘲罵する。「吾が輩」と尊大ぶる猫の傲慢不尊の心理を描いて、その中に獨り善しとして自ら高慢に構へてゐる人間への諷刺がある。

【眞先の鳥は此方を見てにやにや笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何

か食つて來たに違ひない】

自らは傲慢に構へてゐても實は空虚な空威張に過ぎない。獨善的な已惚れ猫には「にやにや笑つてゐる」やうに見え、庭を眺め、垣根の竹で嘴をふいて一向自分を無視してゐるやうにも見えるのである。「何か食つて來たに違ひない」には冷笑され無視された猫の憤懣の躍如たるものがある。鳥の姿態がいかに眞に通つてゐると共に、猫の心理を通して輕い諷刺が語られてゐる。

【猶豫】イウヨ

「猶豫」とも書く。「猶」も「豫」も共に疑ひためらつて決しないこと。孟子、公孫丑、上篇、疏「先レ事而慮謂之豫。後レ事而慮謂之猶。」轉じて、時日を延ばすこと、即ち延引・遷延の意味にもなる。

【吾が輩は返事を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つてゐた】

人間界の國際紛争に用ひられる最後通牒は「二十四時間以内」が通り相場である。それを借り來つて、而も「三分間」と切つた所に味がある。存外意氣地なしの猫が「垣の上に立つて」空威張りにかまへてゐる姿も思はれて、微笑を誘はれる上品なユーモアである。

【通稱】ツウシヨウ (一)普通にとなへる名。「實名」に對していふ。とほりな。俗稱。(二)一般に通用する名稱。こゝは(一)の意。尙「名」について簡單に説明を加へて

おく。

童名(ワラハナ) 生れるとすぐつける名で、幼時から元服の時まで続き、愛らしくめでたいものが多かった。乙若。竹千代等の類。

若名(ワカナ) 元服前の青年時代の名で、元服の後までしばらく通用した。童名と共にこれをつけておく家が多かつた。善吉、清之助等の類。

本名(又は實名) 名乗(ナノリ)ともいひ、元服の時つける名。義經・清正等の類。

通稱 東洋では實名を忌名(イミナ)と稱して、人に本名を呼ばれることを忌み、自らもこれを名乗らなかつた。その故に「通稱が」必要であつた。支那では「字」(アザナ)といつて自ら選定した。日本では初め他人が付けたもので、多くの人に共通なものでなければならなかつた。今この諱名に近かつたが、後には自身撰定するやうになつた。

尙何兵衛・何右衛門などの「官名」受領名「また父祖相繼ぐ「通り名」などもあつて、一生の間何回も名の變更が行はれたが、現今の法制では名は一つに限られてゐる。

【勘左衛門】 カンザエモン 鳥のカアカアといふ鳴聲から擬人化した呼稱。勘三郎ともよぶ。鼠を忠助、雀を忠兵衛

【逗留】 トウリウ 「逗」は説文に「止也」とある。(一)とまつて進まないこと。とまこぼること。(二)旅先で一時期に暫く宿ること。滞在。こゝは(一)の意。

【況や】 イハンヤ まして。なほさら。その上。「況」は俗字。

【藝當】 ゲイタクウ (一)藝ごと。演藝。けい。(二)たくらんでする行爲。ことさらなす所業。(三)危い仕業。こゝは(一)の意。「綱渡り」は空中に綱を張つてこれをわたる曲藝であるから「藝當」といつた。

【況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ】 「首尾よくいくと御慰み(五四頁六行)と對照される所で、軽いウイットを働かせた軽妙な表現である。

【障物】 シヤウガイブツ 邪魔もの。

【保證】 ホシヨウ (一)うけあふこと。(二)法律上債務者がその責務を履行しない場合責任を以てこれを負擔すべきことをうけあふこと。(三)擔保の根據となる金銭物品又は人。こゝは(一)の意。

【黒装束】 クロシヤウゾク 黒い衣裳をつけた扮装。又その人。黒い鳥の羽毛から擬人化したのであるが「覆面黒装束」などいつて、多く強盗その他曲者の扮装をいふ語であり、こゝにもその意味を同時に含んで居ること勿論

衛などいふと同じ擬人的呼稱である。

【成程勘左衛門だ】 成程癩癩に障り腹の立つ勘左衛門だの意。「勘」を「癩」の音にかけたものである。

【威光】 キクワウ 人に畏敬せられる勢。威勢。

【やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢を更へただけである】

ぶりぶりといふと憤慨してゐる猫と、これに對して人を食つたやうに悠々落ちついて猫をじらす鳥との對照にまづ滑稽を誘はれる。併しそれだけではない。餘り自惚れの強い人間の自ら招く自嘲と腹立たしさ、さうした諷刺皮肉をその言葉の裏に見逃してはならない。吾々のいたい所をちくりと刺して、思はず微笑させる所である。

【その分に】 そのブンに そのまゝに。「分」はこゝでは度合・程度等の意。

【如何にせん】 イカにせん どうしよう、どうにもしようがない。(反語)「餘裕がないのを如何にせん」となるべき所を上に出して意味を強めたのである。

【たださへ】 何もしないでも。ただでも。

【道中】 ダウチュウ (一)旅の途中。旅中。旅上。(二)旅行。たび。こゝは(一)の軽い意。

【餘裕】 ヨユウ あり餘つてゆたかなこと。ゆとりのあること。こゝは「十分な時間」程の意。

【黒装束が三個】

三羽といはず「三個」といつてまるで鳥を品物扱にしてゐる所に猫の空威張りを表してゐる。

【遮る】 サヘギル (一)へだてふさぐ。邪魔する。中途をたちきる。(二)まぢぶせする。要撃する。(古語)(三)おほふ。しきる。こゝは(一)の意。

【容易ならざる】 「ならざる」と文語調にして、重大性を誇張してゐる所、軽いユーモアがある。

【都合】 フツガフ (一)不便なこと。都合の悪いこと。(二)不埒。不届。こゝは(一)の意。

【面倒】 メンダウ 物事をするのが厭しいこと。手数のかかること。

【人體】 ニンタイ・ジintai 人の様子。人柄。人品。【おつに尖る】 おつにトがる 變に尖る。異様に尖つてゐる。

【おつ】 は「お通の約か」といふ。(一)通なること。奇妙。奇。(二)不思議。變なこと。異様。こゝは(二)の意。

【天狗】 テンダウ (一)深山・靈地等に棲息する想像上の怪物。人間の形姿をなし、顔が赤く鼻が高く、翼があつて神通力を有し、飛行自在で羽團扇を持つてゐる。これを

大天狗と稱し、尖つた嘴を持つてゐるものを小天狗といひ、またその小形なものを烏天狗・木の葉天狗などと呼んでゐる。

【申し子】 マウシゴ 神佛に祈つて授かつた子。

【嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子の様だ】

警拔な譬喩を以つて滑稽感をだしてゐる。

【質】 タチ (一)うまれつき。もちまへ。性質。(二)しな。から。しつ。こゝは(二)の意。

【深入り】 フカイリ 度を越えて入りこむ。

【恥辱】 チジヨク はぢ。はづかしめ。

【退却が安全だらう。餘り深入りをして萬一落ちでもしたら尙更恥辱だ】

空威張りに威張つて、横柄な口をきくが、實は口程にもない意氣地なしである。すぐ退却をきめこむ。然しそれにはそれで或は「地面の上なら」(一五六頁七行)といひ或は「敵は大勢」(七頁末行)だといひ、又「質のいいやつでないに極つてゐる」などと、一通りの自己辯護をするのだ。こんな人間を我々は我々の周囲に見出さないであらうか、否我々自らにかうした一面がないと斷言し得るであらうか。痛い皮肉である。「誠に愉快であつて、それでめて笑つてすませない嚴肅なものがある。」といふ松岡讓の批評はこの邊の所を指したともいへるであらう。

【阿呆】 アホウ 「阿房」とも書く。おろかなこと。たはけ。馬鹿。俗に「秦の始皇帝が阿房宮を營んで民を苦しめ天下を失つた。これは愚の骨頂であるから、本朝に於て俗に愚を「阿呆」とよぶといふ。

烏を嘲つて別に「阿呆鳥」とよぶ。近松門左衛門の用明天皇職人鑑に「まぢつと寝ようと思ふ間にあほう鳥のあが云々」とある。

【最後の奴は御丁寧にも「阿呆、阿呆」と二聲叫んだ】

「御丁寧にも」といひ、「二聲」と限定してゐる。これも亦漱石獨特の機智にとんだ諧謔的語法である。

【温厚】 ヲンコウ 優しく篤實なこと。

【看過】 カンクワ (一)見のがす。黙許する。(二)目を通す。見すです。こゝは(一)の意。

【烏輩】 カラスハイ 烏ども。烏だち。

「輩」は(一)ともがら。やから。(二)あひて。たぐひ。(三)なみ。つら。こゝは(一)の意で、輕侮の意を含んだ語法である。

【侮辱】 ブジヨク あなどりはづかしめること。

【名前にかゝはる】 ナマへにかゝはる 面目に關する。

「名前」はこゝでは 名譽・面目・體面・評判・名譽などの意。

【如何に温厚なる吾が輩でも、これは看過出来ない。第一自

きて。さきぞなへ。

【いきなり】 突然。やにはに。

【しくじる】 やりそこねる。失敗する。

【圖太い】 ツプトい 横着である。腹が悪く肝の太い。づらづらしい。「圖」は圖體(づうたい)・圖太いなどの如く、一種の接頭語。

【俗人】 ゴクジン (一)世間一般の人。(二)僧侶に對して世俗の人をいふ。(三)風流を解しない人。學問のない人。こゝは(三)の意。

【靈妙】 レイメウ 不可思議で人知を以ては測り知り難いこと。「靈妙な詩」は「秀れて深い趣がある詩」位に解すればよい。尙原文には「靈妙な象徴詩」とある。

【反應】 ハンオウ 「ハンノウ」と發音する。(一)化學上の用語。二種又は二種以上の物體間における化學變化。(二)轉じて一般にはその結果がものに應じて表れること。こゝは(二)の意。

「反應を呈しない」は「怒の記號に應ずる何の結果をも示さない」の意。

【呈す】 テイス (一)さしだす。さし上げる。(二)おくる。進呈する。(三)あらはす。示す。こゝは(三)の意。

【圖太い奴だ。睨みつけてやつたが一向利かない。背を聞くして少々唸つたが益々駄目だ。俗人に靈妙な詩の意味が

己の庭内で烏輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる】

意氣地なしが依然勿體ぶつて力味かへつてゐる。言ふことだけは堂々たるものだが、それに反比例した内容の貧弱さが笑をそゝるのである。

【諺】 コトワザ (一)昔からいひならはした言葉。(二)訓誡諷刺を含んだ短句で一般にいひ傳へられる言葉。こゝは(一)の意。

【烏合の衆】 ウガフのシュウ 規律統一のない群衆。

下り立つた烏の群があがと鳴き騒いで規律統一のない様から出た語。後漢書、邳彤傳「卜者王郎集、烏合、震、燕趙之北。」

【存外】 ゾングワイ 思ひの外。意外。案外。

【癩癩】 カンシヤク 激怒しやすい性質。前後の見さかひもなく粗暴な言動をなすこと。

「癩癩に障る」は俗にいふ「癩に障る」で憤懣の心を起させるの意。

【いくら怒つてもそのそとしかあるかれない】

癩に障つてぶん／＼怒つてゐるが、反對にのそのそとしか歩けない。こゝに對照の妙があり、一層諧謔が目立つてゐる。

【先鋒】 センボウ 先頭に立つもの。先陣に進むもの。さ

七猫の垣巡り

101

分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等反應を呈しない」

敵の前ですとんと轉落する。それだけで猫の顔はまる潰れだ。更に背を圓めて唸つてみても一向利き目がない。益々正體暴露の滑稽感がそゝられる。而も自分の失敗は棚へ上げて、勝手な熱を上げ負け惜しみを振りまはす所、笑止の至ではないか。而も「俗人に靈妙な詩が分らぬ如く」とは大袈裟な譬喩である、これをうけて「吾が輩」「彼等」「怒の記號」「反應」など誇張的言辭を以てして、一段とユーモラスな味をだしてゐる。

【こたへる】「應へる」と書く。反應がある。ききめがある。
【あいにく】「あやにく」とも言ひ「生憎」と書く。(一)折わる。都合わるく。(二)意味わるく。こゝは(一)の意。
【機を見るに敏】キをみるにピン 機敏なこと。しほどき

2 文の構成

原文はもと一續の文で特に段落がきつてはないのであるが、途中省略の箇處もあり、且取扱ひの便宜上段落を設けたものである。矢張本課は形式上段落に分つてあるので、それによつて取扱つて行きたい。

第一節 初―五三頁八行 猫が垣巡りの運動を始めた理由。

第二節 五三頁末行―五四頁九行 垣巡り運動の方法。

第三節 五四頁一〇行―五六頁六行 垣巡りの四週目に烏が三羽飛んで来て前方を遮つたので、これに抗議するが埒が

あかないこと。

第四節 五六頁七行―五九頁四行 面倒だから退却しようと思つた自己辯護を試みてゐる時、阿呆と言はれ奮慨してのその近づいてゆくこと。

第五節 五九頁五行―同頁九行 五六寸の距離まで近づいた時、烏の飛び上つた羽風にあほられて顛落したること。

第六節 五九頁一〇行―終 轉落して怒つて見るが、結局烏の相手にすべからざる理由を悟つて引上げたこと。

3 文意

垣巡りの運動の途中烏に前方を遮られた猫が、虚勢を張つたり自己辯護をしたり、空威張りに威張つて見たりするが、とどのつまりしくじつて垣から轉落し、綺麗さっぱり諦めて縁側へ引上げるといふ事件である。漱石一流の機智と諧謔とに溢れた辭句を自由に驅使して、滑稽の中に笑つてすまされぬ諷刺皮肉を含んだ文である。

4 鑑賞批評

本課「吾が輩は猫である」の一篇は漱石初期の代表的作品であり、作者の該博な學識と辛辣な人生觀察と徹底した社會觀とが渾然として織りなした諷刺文學である。蓋し日本の持つ此の種の文學の白眉であらう。日頃猫族の有識者を以て自任し、「吾が輩は」と大見得をきる猫の言動が全篇を貫く筋書を構成してゐるのであるが、併しそこには皮肉な文明批評があり、社會に對する涙の觀察があり、また人生について辛辣な諷刺があり、而もこれを漱石獨特の機智と諧謔に富んだ言辭を以て覆ひ、明るく上品なユーモアに溢れた作品を構成してゐるのである。本課はほんの一部分の抄録ではあるが、併し既に解釋の條に於て詳しくこれを取扱つた如く、全文殆ど輕妙な機智を示した言辭を以て満たされ、微笑・苦笑、或は噴飯せざるを得ない滑稽感を誘ふのみならず、且また單に笑を以てすまされない皮肉があり諷刺がある。此の短い抜粹によつても漱石の文趣を味はふには事缺かないであらう。

をみてこれに處するにすばしこいこと。

「機」はこゝでは機會・しほ・折などの意。

【綺麗さっぱり】キレイさっぱり 何の未練もなくさつさつと。何の躊躇もなしにさつさと。

「綺麗」は(一)綺麗を裝うて美しいこと。(二)轉じてすべて美しいこと。(三)潔いこと。清いこと。未練を持たないこと。こゝは(三)の意。

【機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから、綺麗さっぱりと縁側へ引上げた】

散々しくじつた上の退却である。而も「機を見るに敏なる吾が輩」といふ。何たる負け惜しみであらう。自負に溺れた己惚れの強い猫は、何とか自己辯護を言はぬば腹が癒えないらしい。

三 備 考

1 指導研究

(一) 全篇を通じて特に教授すべき難語句はなく、全くの趣味教材として文の獨特の妙趣を十分に鑑賞味せしむべきものである。而してこれは滑稽をかしみの方面と皮肉諷刺の方面と、更に形式的な輕妙洒落な機智に富む點と、此の三方面から考へらるべきであらう。

(イ) 本課の程度の滑稽をかしみは、別に理窟なしに大方の生徒はこれを感じるであらう。併し時にこれを感じ得ない不幸な生徒もないことでもあらうから、場合によつて、そのをかしみのよつて來る所など質疑應答的に取扱ふ事も必要であらう。或は不相應感から來る「吾が輩」或は正體暴露を表す言辭など、堅苦しい理窟に墮ちない程度の適當な説明が時々施さるべきである。

(ロ) 皮肉諷刺等陰に隠れた内容は、結局生徒の鑑賞力相應に讀み取らせる他はないであらう。併し滑稽をかしみに引ずられて皮相な讀過に終り勝ちな此の時代の生徒に對しては、此の方面に就いては相當な、それも暗示的な説明が加へらるべきであつて、それが表面的の讀過から救ふ要件である。

(ハ) 機智に富んだ輕妙な文趣に就いても、解釋欄で扱つて來たのであるが、これは漱石の作品の極めて重要な特質であるから、それぞれの場合に於てこれを指摘して吟味せしむべきである。

(ニ) 作文との聯絡に就いて本課は特に注意せらるべき課である。何となれば、漱石の文は生徒に餘りにも影響が強いからである。「吾が輩は机である。」「吾が輩は鉛筆である。」等本課の文に模した作品が、生徒の間に如何に多いかは教授者自らの知る所であり、而もそれが一律に淺薄皮相な駄洒落に墮した底のものである。これは卷一・峠の茶屋に於ても言及

した如く、漱石の文は深い洞察力を持つた漱石の人格から滲みでたものであつて、その表面的な模倣には反つて多くの危険の存する事が指摘され、適當な指導が行はねばならない。

3 參考

(一) 挿繪 夏目漱石肖像

撮影年月日は未詳。漱石はその文章の諧謔滑稽なものと反對に、接した感じは極めて謹嚴濃厚な紳士であつたといふ。さうした風貌を親ふに足る立派な寫眞である。

(二) 挿繪 漱石筆蹟

昭和五年岩波書店發行の「吾輩は猫である」の巻頭の筆蹟を轉載した。野上豊一郎氏所藏のものである。明治四十一年九月十四日、知友に宛てた猫の死亡通知狀で、いかにも漱石らしい手紙として興味深いものである。

(三) 本課に省略された部分を原文より採録すべきであるが、あまり長く却つて煩雜にわたるので次に「漱石全集」の頁數だけを示して置く。就いて見られたい。

(イ) 冒頭「吾が輩は近頃運動を始めた」の次

二八二頁二行より二八五頁一三行まで省略。

(ロ) 第一節終「種類に族するものだと思ふ」の次

二八六頁三行より二九四頁七行まで省略。

(ハ) 最後の節「鳥の勘公とあつて見れば致し方がない」——實業家が苦沙彌先生を壓倒しようとおせる如く、西行に銀製の吾が輩を進呈するが如く、西郷隆盛の銅像に勘公が糞をひるやうなものである。

(四) 「吾輩は猫である」製作當時の事情を語る高濱虚子の文を次に採録する。

その頃私は四方太・鼠骨・左千夫・筋等と一緒に文章會を開いてゐた。それは毎月自作の文章を持ち寄つて、朗讀して、互に批評し合ふのであつた。その文章會に持つて行つて讀んでみるから、一つ漱石にも何か文章を作つて見てはどうかと云ふことを話した。それからその文章會の目になつて、私は漱石の家へ寄つて、文章が出来てゐるかどうか慥めた。大方來てゐないであらうと想像したが、案外にも出来てゐた。出来てゐた許りでなく、私の來るのを待つてゐるのであつた。それから

「一つ讀んでみて呉れませんか」とのことであつた。私は作者の前で聲をあげてその一篇を朗讀した。漱石は他人の作をきいて鑑賞するやうに熱心に聞いてゐた。そして、をかしい所に到ると、聲をあげて笑つた。朗讀してゐる私も覺えずフキ出さざるを得ない場合があつた。

これが「猫」の第一回である。續いて「倫敦塔」といふ文章が書かれて、帝國文學の編輯者の手許まで送られた。

その日は朗讀に相當時間を費して、文章會に出席するのが遅れた。私は早く出席しなければならぬと、心急ぎがしたが、漱石は愉快さうに聽いて居つて、時間のたつのも知らぬらしかつた。それからこの一篇の標題がまだきめてなかつた。「猫傳」としようか。或は冒頭の一句の「吾が輩は猫である」といふのをとつてそのまま標題としようか。どうしたものであらうと私に相談をした。

私は無論「吾が輩は猫である」の方を取るといつた。それから漱石に所々に冗文句と思はれるものがあるを削りとつても好いかと念を押した。漱石はどうでもしてくれとの事であつた。その席上でも一二の文句は削り去ることを勧めた。漱石は筆を執つてそこを削り去つたと記憶してゐる。

後の漱石は、私がさういふことを云つても輕々しく肯じなかつたであらう。殊に「虞美人草」を書くやうになつてから後の漱石は、自分の原稿を消して書き直すといふやうなこともしなかつた。一旦筆を下した以上は、丁度相撲が取組んだものの様で、もう後には引けぬといつてゐた。自分でも直すことを肯ぜぬ位であるから、まして他人の言を聞いて抹殺するとか改削するとか云ふやうな事は、容易に承知しなかつたであらう。が始めて「猫」を書いた時分の漱石は、まだそれほどに自信がなかつたので容易に私の言ふ事を聞いた。そこで自宅に歸つて後に、私は作文書生の文章を點検するやうな積りで、仔細にこの「猫」の文章を検して無用の文句と思はれるものは

削除してしまつた。私は今でも無益な削除をしたものとは思はない。これが爲に全體が引締つてゐると思ふ。適當な削除を爲し得たものと思ふ。

(五)「吾が輩は猫である」の批評二三を左に掲げる。

(イ)二葉亭四迷評 これは發表當時グレイマルキンの匿名を以てなされたものである。

猫は決してユーモリストの作ではない、寧ろサナリストの作である。更に進めて言へばスケプチックの作である。言ひ得くくんば深刻悲痛なユーモアである。

即ちそのユーモアは、人の精神に自由を興ふる種類でない、訴ふる所が感情でなく智力である、犀利なる洞察から來る諷刺である。従つて讀者は吹き出しかけても直ぐ眞面目になる、自然と考へさせられる。その飄輕な洒脫な言句の裏面には、到る處に薄氣味の悪いサゼクションが滲んで居る。讀んで後に不安を興ふるとイブセン一流の作と異なるなしたが、イブセンの作には紙笑がある、向上の煩悶がある、而して「猫」には苦笑がある。

「猫」は世に碎け碎かれて兎に角浮世は怎麼ものと、淡泊に悟つた翁のざれ言とも違ふ、またどうせ眞面目な野暮な世の中、泣くより笑つて暮しやせうと、悪度胸を据ゑた洒落とも違ふ、「猫」に表はれた漱石氏は頗る面倒な厭世家である。そのニヤリと笑ふのは、旦那が男部屋で抱車夫の氣焔を聴く格で、大袈裟に言へば、天下はその弱點に於てのみ時代と聯關す、と言つたやうな風で、天才も凡俗に伍する時は氣が樂だといふに止まる。

「猫」を一貫する所のものは、飽く迄沈鬱な、インクキジチブな、不満足な、懷疑的な厭世の調子である。

一體人生の何處が面白いのだ、知識？知識も到底命の木ではない。事業？減びざる事業は無いではないか。金錢？金錢で幾何の満足が買へるものか。然らば已を得ない、無爲にして壺中に安臥せよ？成る程無爲は好いが胃を悪くする。それでは筆がない、死んで了へ？ どうせ一度は死ぬのだ。急ぐには當らない、然し愉快に死ぬるなら今でも敢て辭せぬ、と言つたやうな思想が横溢してゐる。

要するに「猫」は大膽な作である。現代一部の暗潮を臆面なく描き出した氣味の悪い作である。「猫」に描かれた人生は苦痛の人生である。退屈な人生である。寂滅爲樂の人生觀である。猫の往生によつて察すると、酒を煽つて土左衛門を學ぶのである。即ち愉快を感じた瞬間にこの世を辭するのである。

同氏の作で同じく「ほととぎす」に出た「幻影の盾」の結果を見ると、次のやうな句がある。「百年の齡は目、度も有難い。然しちと退屈ぢや、樂も多からうが憂も長からう——水臭い麥酒を日毎に浴びるより、舌を焼く酒精を牛滴味ふ方が手間がかゝらぬ……」正に是だ、このキイノートに配するに幾多の變物・俗物・閑人を點出して、諧謔諷刺の間に現代を罵倒し、擲論したのが猫である。是を唯面白く可笑しいと讀む者は、後指さされて知らぬお目出度屋の隊長で、一讀自殺論に雙手を擧げるのは、この節流行の神經衰弱連だらう。味をもち、文人畫風の畫をも能くしたから、その作品にはこれ等の知識と趣味とが渾然として融合し、その該博な識見に光彩を放ち、加ふるに獨特のユーモアが作風を明るく軟げてゐる。

(ロ)高須芳次郎評

彼(漱石)が文壇において、始めて重きを爲した作は、「吾が輩は猫である」の一編だ。それは彼の長所美所を最もよく代表し得たものである。彼は、その後もいろ／＼の佳作を出したけれども、「吾が輩は猫である」に及ぶものは一つも書いてゐない。それほど此の作は彼にあつて一番ユウニクのものである。彼には豊富なイギリス文學の素養があり、また支那文學の造詣が相當にあつた。その上、江戸つ兒通有の頓智・機才と云ふやうなものを多く持つてゐた。江戸つ兒趣味・イギリス趣味・支那趣味・乃至禪の趣味、そして俳趣味、それらが一つになつて、彼に備つてゐた。殊にユウモアの趣味は、どの篇にも共通であつた。そして彼はジョルジュ・ユメレデイスに私淑してゐた。かうした彼が「吾が輩は猫」で異常の成功を得たのは當然である。それは猫の觀察を假りて、中學教師苦沙彌先生の家庭交遊などを描いたもので、任意に雜多の事件を配列して、故らに統一を加へず警句・機智の閃きが隨所にあつて、上品で趣味ある滑稽小説の趣で溢れてゐる。

八山陽と法海

南條文雄

一 解 題

1 作者

南條文雄 ナンデウブンユウ 嘉永二年五月十二日、岐阜縣大垣市眞宗大谷派誓運寺に生まれた。父を英順といひ、三男として出生。幼名を恪丸といひ、明治四年に文雄と改めた。幼より俊英を以て鳴らし、十歳にして漢詩を賦した程の神童であつた。明治元年廿歳の時、京都に赴き高倉學寮(大谷派學問所)に學んだ。明治四年廿三歳の春、越前國南條郡憶念寺神興に懇望せられて、養子となり、後僧侶も苗字を稱すべき事となつて、地名南條を以て其の姓としたのである。其の後、明治九年、廿八歳の時、本願寺の命を受け、同僚笠原氏と共に英國に留學する事となり、八月倫敦に到着した。それより約三年、英語の學習をつとめ、卅一歳の時、オックスフォード大學に赴き、マクス・ミュラーに就いて、佛敎梵語文學を學ぶに到つた。笠原氏も同じく梵語研究を行つたのである。南條氏が梵語學者として世界的名聲を得るに到つたものは、卅五歳(明治十六年)に大明三藏聖教目錄の英譯をオックスフォード大學印書局より出版した事による。其の後マクス・ミュラーとの合著の梵語佛典なども多く出版し、卅六歳の時、マスター・オブ・アーツの學位を授與せられ、米國を經由して歸朝した。實に外遊八ヶ年に及び、世界的な梵語學者として歸朝したのである。而して東京大谷敎校の敎授となり、卅八歳東京帝國大學講師を兼ねた。明治廿年印度に遊び、四十歳文學博士となり、大谷派の學校のみならず諸種の要職に歴任し、明治三十九年には帝國學士院會員となり、大正三年眞宗大谷大學學長となり、大正十二年同大學長を

辭し、昭和二年七十九歳を以て歿した。我が國佛敎研究及び梵語學梵文學の基礎を築いた成績は偉大なるものがある。

2 出典

修養錄から抄録した。「修養錄」はその自序によれば、博上が實際的修養に關し講演し、或は諸雜誌に掲載したものを舟橋水哉が輯録編纂したもので、五章二十節に分れ、明治三十九年發行された。

本課の文は、第三章「譯句と註釋」の部にある、「虚往實歸」といふ語に就いて説いた文の一部を抄録したもので、原文の口語敬體をすべて口語常體に改めた他、更に多くの修正を加へたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

學徳兼具の高僧雲華・法海の兩上人と豪快無比の文人頼山陽との間の交渉によつて生まれた逸話である。嚴勵夏日の如き法海も偉とすべく、恩愛冬日の如き雲華にも傾倒すべきものはある。併し學ぶべきものはよく改過遷善した山陽の虚往實歸の態度である。六「宿かり」では足るを知らずして惨めな死をとげた宿かりの一生について考へさせられた。つづいて前課は常に自己辯護によつてその非を赦はんとする猫の態度を笑つて來た。これはそれと正反對に、眞正面からその非難叱責と訓誡とを受容れて過を改むるに憚らなかつた貴い偉人の姿である。本課は正に前二課の結論であつて、生徒の人間の陶冶に資すべき教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【山陽】サンヤウ 頼山陽。安藝の人。名は襄、字は子成、通稱久太郎、山陽又は三十六峯外史と號した。父は頼春

水である。幼より峻秀にして詩文に長じ十二歳にして立志論一篇を草し、十三歳「十有三春秋 逝者已如流水 人生有生死」安得類古人 千載列青史上の五言の詩

を作つたといはれてゐる。寛政九年(十八歳)叔父に伴なはれて江戸に出で尾藤二洲の宅に寓し昌平齋に學んだ。翌年病を以て歸國、文化六年(三十歳)備後の菅茶山に招かれてその塾生を監し、二年にして去つて京都に出で、自ら塾を開いて子弟を教へた。十三年父春水の危篤の報に接し、急ぎ歸國したがその臨終に間に合はず、深く悲しんで、京都において三年の喪に服した。文政元年(三十九歳)歸國して父の法會を營み、後西遊の途に上つた。耶馬溪に遊んだのは此の年の十二月である。翌年廣島にかへり母を奉じて入洛し、爾來屢々諸侯の聘を受けたが、すべてこれを辭して専ら母に孝養を盡くし、天保三年日本政記執筆中病に歿した。享年五十三。著書に「日本外史」「日本政記」「日本樂府」「山陽詩鈔」等があり、特に「日本外史」は全國津々浦々の人に愛讀せられ尊皇精神の鼓吹に力があつた。

【法海】ホウカイ 易行院法海。眞宗大谷派の講師。字は月藏、日南又は橋州と號した。明和五年、豊後國日田の長徳寺に生まれた。父は長徳寺の僧寶月である。早年得度し高倉學寮に入り、宗餘乘を攻究し、文化元年以來連年諸經を講じ、十一年八世の講師となつた。後肥國後八代の光徳寺の往職となり、天保五年八月歿した。享年六十七。著書に「往生要集講義」以下無量壽經・觀無量壽

經・文類聚鈔等の講義を編輯したものが多く、識見高邁學徳圓滿な高僧としてたゞへられ、本課山陽との對面談は特に有名な逸事である。

【豊前】ブゼン 今の福岡縣東部及び大分縣西北部に跨がる國名。

【山國谷】ヤマクニダニ 大分縣下毛郡にある山國川上流より中流にかけての溪谷。南北十數里に亘り、所謂耶馬溪の奇勝をなす。

【正行寺】シヤウギヤウジ 原著には「豊前の古城の正行寺」とある。

【眞宗】シンシュウ 詳しくは淨土眞宗。門徒宗又は一向宗ともいひ、我が國佛敎淨土門の一派。無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經を所依とし、阿彌陀佛の本願力によつて、成佛を期するを宗旨とする。親鸞を開祖とし、その歿後法派相承によつて、本願寺派・大谷派・高田派・佛光寺派・興正寺派・木部派・出雲寺派・山元派・誠照寺派・三門徒派の十派に分れ、寺院の傳統は血脈相承によつてゐる。

【住職】ジュウシヨク 住持の役目。一寺の主僧たる役目

【大舎】タイガン 徳川末期の畫僧。「雲華」ウシクワと號し、また鴻雲・染香人の號もある。豊前の滿徳寺に生まれ、古城の正行寺の鳳嶺和尚に養はれ、當寺の住持とな

り、ついで京に上つて宗門の教義を究め、文政二年高倉學寮の擬講となり、八年講師に進み、枳東園に住して諸種の經論を講じた。また畫に長じ、殊に蘭竹を畫くに巧みであつた。嘉永三年歿、享年七十八。著書に「安樂集」「文類考抄」「淨土論」「正信偈」等がある。

【文學】ブンガク (一)文の道。學問・藝術を總稱する。

(二)文學上 Literature の譯。情緒・思想を想像の力を借りて、言論又は文字によつて表現した藝術作品をいふ。詩歌・小説・戯曲・評論・隨筆等。文藝。(三)自然科學及び政治法律・經濟等に關する學問以外の諸種の學問即ち純文學の他、哲學・史學・社會學・言語學等をいふ。(四)我が中古時代朝廷から侍講として親王家に賜はつた官名。大寶元年に創置して後世これを廢した。(五)江戸時代諸藩の儒者の稱。こゝは(一)の意で、學藝を意味する。

【能くす】ヨクす (一)巧みにする。(二)たびたび行ふ。(三)することが出来る。こゝは(一)の意。

【文人】ブンジン (一)學藝にたづさはる人。(二)詩文に心をよせる人。こゝは(一)の意。

【墨客】ボツカク 書畫に巧みなる人。

【別して】ベツして 特別に。とりわけて。特に。

【無二】ムニ 最もすぐれてゐること。二つとないこと。

【遊歴】イウレキ 各地をへめぐり遊ぶこと。
【景勝】ケイシヨウ 景色のすぐれてゐること。又その土地。

【三十九の年に九州を遊歴した】

文政元年、年三十九の時京都の塾を閉ぢて歸國。廣島で父の大祥忌を営み、後九州遊歴の旅に出で、この年十二月に耶馬溪に遊んだ。(山陽略傳の項参照)

【上人】シャウニン (一)知徳兼備の佛徒の稱。(二)僧位。法橋につぐ。(三)高僧の尊稱。こゝは(三)の意。

【手引】テビキ (一)手で引きだすこと。(二)人の手を引いて連れて行くこと。又その人。案内。(三)或物事を知る爲のしをり。圍碁手引の類。(四)つてづる。つて。縁故。こゝは(二)の意。

【耶馬の溪山は天下に無し】 耶馬溪程景色の勝れた溪山は天下に又とない。西遊稿に「入三豐前二過耶馬溪二遂訪雲華師二共再遊焉。遇雨有記、又得八絶句。」と題する中の一首中の一句。この詩は山陽詩鈔にも收められてゐる。一首を挙げれば次の如くである。

峰容面々趁看殊 耶馬溪山天下無
安得彩毫如董巨 生縑一丈作橫圖

【激賞】ゲキシヤウ 非常にほめたたへること。
【耶馬溪】ヤバケイ 前記山國谷の景勝。日豐線中津驛か

ら柿坂驛まで耶馬溪鐵道があり、柿坂から守實を経て豊前の白田へ六里、白田から筑後鐵道で久留米へ出る。車上の觀賞も自由である。樋田村に近い鮎返りから追々景



色がよく、佛坂から青洞門へ出ると、路は山腹を穿ち川に沿うて通ずる。近く一峯高く秀でて、頂に羅漢寺があり、形勝の地を指呼の間に集めてゐる。更に進めば曾木岩・巖洞山・停立岩・醉仙巖等の勝があり、耶馬溪橋から口の林柿坂の勝を経て彦山路に入り、山麓の猿飛に至る間は造物の奇怪筆舌の及ばざる天然の傑作であると稱されてゐる。柿坂驛の近くに山陽筆投の勝がある。

【著聞】チヨモン・チヨブン 有名になる。世に喧傳される。

【肥後】ヒゴ 今の熊本縣。

八 山陽と法海

【八代】ヤツシロ 熊本縣八代郡八代町。八代海に臨む河港。松井三氏萬石の舊城下町。

【學徳】ガクトク 學問と德行。

【途次】トチ 途すがら。みちのついで。途中。

【豫て】カネて 前もつて。前方から。あらかじめ。

【紹介】セウカイ なかたち。ひきはせ。とりもち。こゝは「紹介狀」の意に用ひてゐる。

【法海師】ホウカイシ 「師」は學者・僧侶等の名に添へて尊敬の意を表す語。こゝは「法海上人」といふに同じであるが、上に「雲華上人」とあるので重複を嫌ひ、變化を持たせて「師」の語を添へたのであらう。

【老師】ラウシ (一)年老いた師匠。老先生。(二)年老いた僧侶。老上人。こゝは(二)の意。

【高名】カウメイ 或はカウミヤウ 鳴り響いてゐる名前。盛名。

【お取次】オトリツギ 訪問した人の旨を主人に傳へ告げること。

【折柄】ヲリカラ 丁度その時。折しも。

【端坐】タンザ (一)行儀正しく坐ること。正坐。(二)何事もせず坐してゐること。(三)轉じて茫然と目を暮すこと。こゝは(一)の意。「座」(坐る場所・席等の意)は印刷の誤であるから訂正せられたい。

【讀經】 ドキヤウ 聲を上げて經文を讀むこと。漢音は「ドクタイ」で、經書を讀むことをいふ。

【やをら】 おもむろに。靜かに。

【初見】 ショケン (一)初めて見ること。(二)初めての會見。初對面。こゝは(二)の意。

【楠公傳】 ナンコウデン 楠木正成公の傳記。

楠木正成は二三「櫻井驛」解釋欄楠木正成參照。

「傳」は傳記の意で、個人一生の事績の記錄。

山陽は三十歳既に日本外史の稿を起し、その大著の第五冊目「楠公誠忠の卷」は特に得意で客があれば讀み聞かせてみたといふ。

【稿本】 カウホン したがき。原稿。草稿。

【慇懃】 インギン (一)ていねいなこと。ねんごろなこと。(二)親しい交。人と親しみ懇にすること。司馬遷の文に「未嘗銜杯酒」接。慇懃之歡」と。(三)男女の情交。こゝは(一)の意。

【一瞥】 イチベツ ちらと見ること。一目見ること。莊子「天下豈之猶一瞥也。」

「一瞥を興へる」はちらりと一目みるの意。

【老師はその表紙にちらりと一瞥を興へたまふで、手に取らうともしなかつた】

一筆よく無名の溪山を天下に著聞せしめた大文章家山陽

たといふことだが、では御邊の事でござつたか】

痛烈肺腑を刺る叱責の言である。「怪からん」とか「身の程知らずな奴だ」とか、説明的な言辭がないだけに、却つて烈日の鋭さを以て骨身に堪へるものがある。山陽自ら「夏日の日」(六五頁三行)と言つてゐるが、鋭い眼光に威壓されて、山陽程の人が「思はず面を伏せた」(同頁六行)のも宜なる哉である。

【電】 イナヅマ 「稻妻」とも書く。いなびかり。空中電氣の放電して發する光。電光。

【面を伏せた】 顔を伏せて下を向くこと。面目ない時の所作。

【忠臣は必ず孝子の門に出づ】

「忠臣出於孝子之門」の譯讀。君に忠なる者は必ず親に孝なるのであるの意。「門」に「に」は「於」に當り、「より」の意。

漢書、韋彪傳に「求忠臣必于孝子之門」(頭註參照)とあるに基づいた句。

【金言】 キンゲン (一)龜鑑とすべき言語。戒とすべき貴い言葉。名言。格言。(二)堅く誓つた言語。白居易詩「金言自鎖鑠」(三)佛語。佛の金身の口から出た不滅の法語。こゝは(一)の意。

【天をれたこと】 ダイをれたこと 極めて怪しからぬこと

が「御批評を」と慇懃に差出した原稿である。併しちらりと表紙を一瞥しただけで手にも取らない。多分に自信を持つてゐたに違ひない山陽に對して、これは何と手厳しい批判であらう。名聞に執はれず、聲譽を度外において、流石學德兼備の老師の痛快な鐵錘の一下であつた。

【藝州】 ゲイシウ 安藝國。今の廣島縣西半部の地。

【儒者】 ジュンヤ 儒學を修める人。儒學を講ずる人。儒學者。(二)江戸幕府の世職。經典を進講して文學を掌る職。林氏の世職であつた。こゝは(一)の意。

【頼久太郎とやらいふもの】 「やら」は疑問の助詞「や」と推量の助動詞「らむ」を續けた「やらむ」といふ語の下略。「とやら」は大體「とか」と同じ。

【歸省】 キセイ (一)故郷に歸つて親の安否をたづね省ること。(二)轉じて郷里に歸ること。こゝは(二)の意。八行目「三年も歸省せぬ」の「歸省」は本義(一)である。

【安否】 アンビ 安らかなるか否らざるか。無事と否と。起居の様子。禮記・文王世子「今日安否如何。」

【御邊】 ゴヘン 人代名詞對稱。そなた。貴公。貴殿。同輩又はそれ以下に對して用ひる。

【この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間ただの一度も歸省して親の安否を尋ねようとはせず、忠臣楠公傳を作つ

と。あるまじきこと。

【愚僧】 グソウ 僧侶の自稱代名詞。謙稱。

【元の座】 モトのザ 元の座席。即ち前に讀經してゐた机の前。

【取着く島】 トリツクシマ すがり頼む所。とりつくところ。

【默禮】 モクレイ 無言のまま敬禮すること。

【程經てやつと頭を擧げた山陽は冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣がついた。が、今は取着く島もない。老師に默禮して寺門を出た】

山陽の深い感動の姿が思はれる。彼の後半生を支配した貴い體驗の一時であつた。老師の叱責も徹底してはゐた。併し徒らな自己辯護や反抗なしに、自己の過に懺悔の冷汗を流す所、山陽の偉さが思はるべきである。

【學頭】 ガクトウ (一)勸學院(藤原冬嗣の創立にかゝり藤原氏子弟の教育をした學校)の職名。別當の次に位する。(二)社僧の職名。延曆寺・鶴岡八幡宮等の神宮寺におかれて佛事を修する僧。(三)多數教師の上席の位置にあるもの。こゝは(三)の意で、法海が高倉學寮の講師であつたのを指す。

【和尚】 ラシヤウ 修行を積んだ僧の敬稱。師僧。天台宗では「クワシヤウ」眞言宗では「ワジヤウ」禪宗、

浄土宗では「ヲシヤウ」といひ、又津宗・眞宗では「和上」と書く。併し一般にはこの區別なしに用ひられてゐる。こゝも一般的用法。

【文名】 プンメイ 詩文に巧みな評判。能文家たるの評判。【一世に鳴る】 イツセイ(イツセ)にナる 世間全體に聞える。世間一般に名高い。

【一世】は(一)一生。一時代。(二)當時。當代。(三)三十年。説文「三十年爲一世」(四)世間全體。世間全般。一世の「一」は或語に冠してすべて・全體等の意を表す接頭語。

【豪快】 ガウクワイ 元氣が旺んで小事にかゝはらないこと。

【腹の底から搾り出された感歎】

唯單なる表面的な一通りの感歎ではない。腹の底の底から眞實押し上げて來た深い感動から漏らされた歎辭である。「搾り出され」はその感銘の深さを示して居る。

【一部始終】 イチブシジユウ (一)一部の書物の始から終まで。(二)轉じて事の始から終まで。こゝは(二)の意。

【我が意を得た】 ワがイをエタ 自分の心になつた。満足した。氣にいつた。

【貴公】 キコウ 人代名詞對稱。古くは目上に對して用ひ、現今は同輩又はそれ以下に對して用ひる。

友山陽に對する痛烈な叱責罵倒に對して、「よく言つてくれた」といふ。そして優しく、正しく、山陽の今後進むべき道を示してゐる。「上人は冬日の日だ」と山陽は評してゐるが、誠にこの人を導く精神といひ、その態度といひ、いづれも床しい高僧のそれである。

【夏日の日。冬日の日】 カジツのヒ。トウジツのヒ。春秋左傳文王七年「趙衰冬日之日也。趙盾夏日之日也」とあり、杜氏註に「冬日可_レ愛、夏日可_レ畏也。」(頭註參照)とある。即ち法海には人を叱咤覺醒せしむべき折伏の力があり、雲華上人には慈悲を以て攝取る力のあることを評した語である。尙「修養錄」原文には作者の次のやうな説明が添へられてゐる。「これは春秋左氏傳の中にある事を持ちだして評を致したので、法海講師の嚴格なる事は夏の太陽の如く畏るべきである。又雲華院師の親切なる注意は冬の太陽の如く愛すべきである云々。」

【行李】 カウリ (一)使者。(二)旅行の荷物。旅の仕度。(三)旅行用の荷物を入れる具。竹・柳等で編んだこり。(四)軍隊の戦闘又は宿營に必要な物品を積載した輜重。こゝは(二)の意。

【發足】 ホツツク・ハツツク 旅立つこと。出發すること。

【老母】 ラウボ 年老いた母。山陽の母は名を「靜子」といひ、大阪の儒者飯岡義齋の女、二十一歳にして頼春水

【陽明學】 ヤウメイガク 明代の儒者王陽明の創唱した知行合一の學説。心外に事なく心内に理なしとし、心が靈明で感應の謬なきものを「良知」と稱し、良知は聖人・凡愚を問はず等しくこれを具有するが、凡愚にあつては私慾に障蔽せられる爲に行爲と良知と一致しない。故に力めてその私心を除去して知行合一をはかるべしと説くのである。當時の支那學界を風靡し、我が國に傳へられて中江藤樹・熊澤蕃山等に信奉せられた。頼山陽もこの學統をひいてゐたのである。

【知行合一】 チカウガフイツ 前項王陽明の學説。朱子が格物致知を唱へて、先知後行説を説へたのに對して、王陽明は「知はこれ行の始、行は是れ知の成るなり」といひ、また「知の眞切篤實なる所即ちこれ行、行の明覺精察なる所即ちこれ知」と唱へて、知行は決して區別し得べきものでいことを主張した。即ち知行合一説で、徒らに高尚な哲理に走り、實行のこれに伴なはなかつた當時の學界に有益な警鐘であつた事は前項に述べた通である。

【さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行すべき時である】

雲華上人も亦これ道を知る高德の僧であつた。無二の親

に嫁した。春水が藩侯に従つて江戸詰となり長く彼地に止る間、山陽幼時の薫陶に盡した。山陽にとつては父以上この母が懐しくもあつたのである。春水歿後梅麴と號し、廣島の舊邸にあつて山陽歿後尙十餘年の長壽を保つた。

【膝下】 シツカ(訓はヒザモト) (一)ひざもと。(二)父母のもと。こゝは(二)の意。

【山陽は覺えず立ち上つて「法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ。」といふや否や、早々に行李をととのへ、翌日早朝に發足して、老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ】法海の折伏の威力に壓倒され、冷汗を流した程の激しい感動に打たれたはしたが、未だ實行に移る心の餘裕はなかつた。然るに、重ねて雲華上人の慈悲に溢るゝ忠言に接して、今はつきりと自らの行くべき路を悟るに及んでは何等の躊躇逡巡もない。「法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ。」と評し終つた時、既に山陽は改過の行動へと立上つてゐたのである。「過則勿_レ憚_レ改」とは聖人孔子の繰返し論す所である。さすがに山陽は虚心坦懐よく誤を改めて憚る所がなかつた。「虚にして往き實にして歸る」とは山陽のこの行動であり、これが本課の主眼をなすのであるから十分の検討吟味が望ましい。

【吉野】 ヨシノ 吉野山のこと。奈良縣吉野郡にある。大

峯山の北側にあたり、蜿蜒八軒に及ぶ一尾根の稱で遠く萬葉時代よりの歌枕であり、後櫻の名所として名高く、更に吉野朝廷の所在地として幾多の史蹟に富んで居る。現在吉野熊野國立公園の地域内に屬する。

【伊勢】 イセ (一)伊勢の國。今の三重縣の大部分。(二)伊勢大神宮の略。こゝは(二)の意。

【孝養】 カウヤウ 孝行の心をつくして父母を養ふこと。

【吉野や伊勢にお伴して孝養を盡くした】 山陽が母を京都に迎へてこれを慰めた事實を次にあげる。

(イ)四十歳 九州よりの歸途、二月母を伴なつて京都に歸り、或は嵐山に、圓山に、花を賞し、遠く吉野・奈良等にまで待遊し、また大阪に芝居見物に案内するなど、痒い所に手の届く孝養をつくし、秋母を送つて廣島に歸省した。

(ロ)四十五歳 再びこれを迎へて、或は大阪の芝居見物に、或は京都の名所古蹟の遊覽に、その心を慰め、琵琶湖にまで待遊してゐる。

(ハ)四十八歳 母の吉野再遊の希望により、三月これを迎へて吉野の花を賞し、京都にかへつて、爾來京都大阪と所々を見物し、十月送つて廣島に歸省した。

(ニ)五十歳 また母を迎へて京阪の間を遊覽し、三月の

下旬より四月の初旬にかけて伊勢參宮に伴なつて、また秋送つて廣島に歸省した。

【至孝】 シカウ 此の上もなく孝行なこと。「至」は至上・至極の意。

【虚心】 キョシン 心に何の考をも抱かないこと。心にわだかまりのないこと。即ち先入觀念や私心にとらはれないこと。

【虚にして往き實にして歸る】 (一)知徳のない者が聖賢を訪うて教をうけ知徳を充實して歸ること。莊子徳充符に

「虚而往、實而歸」とあるのが最古の典據である。(二)轉じて虚心平氣を以て他人の言に聞き何ものかを得てかへること。修養録の原文には作者の次のやうな説明がある。

「もと此の四字(虚往實歸の四字をさす)は、支那の曇鸞といふ高僧の往生論註と云ふ書物の中に出てありまして、私は明治元年に初めて京都の學寮で此の書物の講釋を聞きました。此の四字の意を早く分る様に申せば、親類や友達の家を招かれて晚餐の饗應に預る様な時は、空腹にして往つてこそ、先方の馳走を満腹に戴き、心底から禮を申して歸れる譯で、人の話を聞く時も同様である。虚心平氣で往けば先方の話を十分に聞き取りて歸ることが出来ます。若し自負自慢で、人の教を受けると云ふ様な餘裕がなければ、更に徳の無い

ばかりでなく、大きな損をして笑の種となるばかりで

ある。」

2 文の構成

第一節 初―六一頁七行 山陽と雲華上人との關係。

第二節 六一頁八行―六四頁八行 雲華上人の紹介を持つて法海師を訪れ楠公傳の批評を請うた所、法海に身の不孝を叱責され、強い感動を受けて辭去した事。

第三節 六四頁九行―六五頁五行 雲華上人に一部始終を語り、こゝでまた上人から優しく懇切な忠言を受け、翻然として悟つた山陽が急ぎ老母のもとに歸省した事。

第四節 六五頁六行―終 山陽の其の後の孝養を叙して、右の逸話を批評する。

3 文意

若くして文名一世に鳴る山陽が法海老師に楠公傳の批評を請うて、却つて痛烈な叱責罵倒を浴せられて深い感動に打たれた上に、更に雲華上人の懇切なる訓諭を受けて、虚心坦懐これを受け入れ、翻然として悟り、爾來至孝の子となつたといふ逸話である。もともと「虚往實歸」の章の一例話であり、要は山陽がよく虚にして往き實にして歸つたその勝れた人格への感歎を述べたものである。

4 鑑賞批評

原文とその形式を變へたのみならず、その他にも採録に當つてかなりの修正削除を施したことは既述の通りである。従つて此處では形式方面の批評はこれを差ひかへることにするが、とにかくよく纏つた意義深い好個の逸話ではある。法海の烈々夏日の如き人となりも、亦濃厚冬日の如き雲華の人格も躍如たるものがあり、殊に、その叱責と懇諭とを契機にし

て改過遷善する山陽の虚心の態度は人を動かすものがある。その心理の描寫が解剖的説明的でないことは、矢張専門的な文學者の文などと異なる特質であらうが、その素樸な所が、反つて暗示的で、この場合には却つて効果をあげてゐるのではなからうか。實に虚心坦懐よく人の言に傾倒した山陽の此の態度には、頭を下げざるを得ないものがある。

三 備 考

1 指導研究

(一)法海上人の折伏の態度も偉い。雲華上人の懇篤な教示にも秀れたものはある。併し勿論生徒は虚にして實を得た山陽の態度に學ばねばならない。かゝる苦言はこれを受ける人にとつては眞實辛いものであり、随つてその耳に入ることは難く心に悟る事は凡愚のよくする所ではない。而るに山陽は虚心よくこれに耳を傾け飄然として心に悟り、悟れば直にこれを實行に移して何の躊躇逡巡する所もなかつた。史家としてその名の天下にかくれない山陽が、同時にまた孝子としてあまねくその名を世に稱された所以は實に此處に存するのであつて、山陽の此の人格こそ欽慕尊敬すべき事をしつかり體得せしめたい。

(二)生徒がその師長から、又同輩から受ける教訓忠告非難の言葉は決して少しとしない。然るにこれによつて磨かれる事の少いのは、實にこれを受け入れる態度・心構へに缺ける所がある爲であつて、辯解し、反抗し、或はまたさあらぬ態で聞き流したりする、それが人情である。併し虚心人の教訓に聞き、坦懐人の忠言非難に耳を傾け、私意を空しうして反省改過につとめる、そこにこそ向上進歩の根柢は求められるのであつて、實は叱られ非難され、また忠告される事は人にとつて誠に有難い事でなければならぬ。山陽はこの有難さを悟つた人であつた。山陽のこの人格に傾倒せしめると同時に、各自の實生活に結びつけて潛心味讀せしめたいものである。

3 参 考

(一)挿繪 頼山陽肖像 山陽先生遺墨集所載のものを轉載した。天保三年八月(歿前一月)門人大雅堂義亮が山陽先生の病床に就きその風貌を寫し、門人宮原節庵が代つて先生の自贊二首を録したものである。その自贊は次の如くである。

一、躬偃^レ仰一室^二而心關^三百代之失得^一 弗^レ恤^三己監^二察^一而憂^二人家國^一 文章滿腹不^レ濟^二乎餓^一 曲^レ尺直^レ尋則所^レ不^レ爲、噫是何物迂拙男兒乎、雖然知^レ無^レ念^三此迂拙者^一之時^上哉。

二、此膝不^レ屈^二於諸侯^一、聯袂故君之德 此眼竭^二之群籍^一不^レ虛^二先人之囑^一。此脚侍^二母與躋^三芳山^一、五蹕^二太湖^一十上^三下漢^一灣^二而未^レ曾踵^三朱頓之門^一。此口不^レ能^レ餞^二殘杯冷炙^一 而此手欲^レ援^二黔黎之寒餓^一也。

(二)作者の著「安心録」から同じく「虚往實歸」と題する一文を次に採録する。「修養録」の文と内容は殆ど同じものであり、本課の原文を知る上からも、またその理解を補ふ上からも参考とするに足るものである。

虚往實歸といふ言葉は、二千何百年前莊子の書中に見えた。莊子には虚而往實而歸とあるが、後の人は唯此の四字を書く様になつた。此の簡單なる言葉は實に有意味である。私は山陽先生の逸話を紹介してこれを詳解しようと思ふ。先づ最初判り易いやうに手近き處に一例を取るであらう。

諸君が何事かで他家に招かれたと假定し、腹一杯食つて行つたなれば、先方が折角の心づくしになつた山海の珍味も腹に収まらな。これでは厚意を空しくする譯である。虚の字は空といふ意であるから、虚往即ち此の場合空腹で行つたならば御馳走を甘く味ふことを得、満腹になつて心から御禮を言つて歸る事が出来る。其處が即ち實歸である。他人の講話を聞く場合にも腹を空しくして承らうと言ふ心掛けがあつたならば歸りに大いに得るところがあると謂ふのも亦同じ意味である。

頼山陽の父は春水と言つて儒學を以て名を得た人。後には蕪州廣島の藩主、淺野氏に仕へたが始めには大阪へ来て塾を開き飯岡某の息女を室として山陽を生んだ。山陽は生來蒲柳の質、長じて江戸へいで尾藤門下に學び、三十歳の時には既に日本外史二十二巻を書い

て居つた。後病軀を提げて山水明媚の京都の客となつたのは、所謂轉地療養の意である。而して山陽は大著の五冊目即ち楠公誠忠の巻を最も意を得たるものとし、常に手盛りの馳走といふ風情にて、客あればよく讀み聞かせたものである。何人も亦當代の名著として讀めないものはなかつた。山陽の息は益々高い。其の頃京都に於て眞宗大谷派即ち東本願寺の學頭で文政から天保の初めにかけて名聲を博した易行院法海といつた肥後の國八代に寺を持つてをつた人がある。山陽は法海に例の五冊目を見せて批評を乞はんが爲、友人である豊後の國竹田に生まれて豊前の古城の正行寺の住職であつた雲華院大舎に紹介を請ひ、日を約して法海を訪問した。蓋しこの時山陽は手盛りの馳走で満腹であつた。實は法海にも振舞つてやらうといふ考で行つたのである。處が法海の初對面の挨拶といふのが、「この頃聞く、頼久太郎なるもの、京に在つて酒を飲み、三年其の親を省せず、而して忠臣楠子の傳を作ると、足下豈に是れか、凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づ、今不孝人の筆を以て忠臣を傳す、楠子にして知ることあらば必ずこれを辱しとせざらん。老納も亦不孝人を見るを辱しとせざるなり。」と勵聲一番更に讀みかけの經典に眼を移して復た願みない。試みに諸君は山陽の地位に立つて而して刹那の感想を語れ、恐らくは失敬な申分だと腹を立てるであらう。處が流石は山陽である、決して憤らない、よく噛みしめて是れは味のある忠言だと思つた。此の時には山陽は空腹で聞いたからである。案ずるに法海の言裡には「忠臣を求むる事は孝子の門に於てす」といふ儒學の句を借りて山陽を責めてゐる。要するに山陽は持つた棒で打たれた。凡そ人にして誠意あればそれが體に表はれ、働きに現はれ、君に對しては忠となり、親に對しては孝となる。哲學の所謂主觀である。山陽はこの道理に服した。今三年間も酒を飲む暇があつても歸省を怠り孝養を缺く者が忠臣の傳を書くとは其の意を得ない。老僧はあなたより十二年上であるが不孝の子の顔を見ることを愉快とせずといはれ、山陽は額に汗して法海の前を滑り出た。而して「眞に一宗の學頭である。」と言つた。そこで紹介の勞を執つた大舎は山陽の袖を控へて曰く、「君は周より陽明學を講ず、さればその信條たる知行合一を實踐せよ」と。山陽は重ね々御馳走に預つた。大舎の言葉は君の學問の主義として惡かつたと知つたら止しなさいといふ意であるから山陽は再び腹を空しくして聞いた。別れに臨んで「海公は夏日の日の如し。舎師は即ち冬日の日なり」と言つた。是は周の世八百年と言ふ末の方二百四十年間の春秋の時代を書いた左氏傳中に在る句を思ひ出して、法海と大舎とを評したのである。即ち左傳中の趙衰と趙盾との父子に兩人を擬し、一は眞直に、一は婉曲に

忠告をしてくれたのは、恰も夏の太陽と冬の太陽の如きものにして共に季節こそ異なれなくてはならぬものだと思ふ意を表したのである。乃ち山陽は兩人の忠言に悟る所あつて、歸ると直ぐ其の日の内に旅の用意をなし、翌日早朝立して廣島に歸り、母親に無音を謝して共に携へ嵐山や吉野を見物し、自分は母の籠傍に草靴を履いて付き添ひ、名所古跡の説明をして慰藉に努めた。以來山陽は身を獻げて母に孝養を盡した。後に山陽門下の書いたものの中に父の春水先生が大病なりとの手紙が來た時に恰度莊子の講義をして居られたが本を開いてまゝ急ぎ支度をして晝夜兼行歸省せられたが死後に着したため修身莊子を手になかつたと言つてある。それからと言ふものは母に送る手紙は病床にあつても必ず自分で筆を執り心を盡して音信を怠らず、日常節儉を守り餘財を以て母の厚遇に充てた。要するに山陽は一度法海及び大舎の忠言をきいて以來三年間も歸省を怠つて居たものが斯く孝養を盡すやうになつたのは虚往實歸の適例である。何事でも虚心平氣と腹を空にして聞いたならば、心の底に感ずる所がある。(安心録)

九 秋 草 の 原

若 山 牧 水

一 解 題

1 作 者

若山牧水 ワカヤマボクスキ 名は繁。明治十八年八月宮崎縣東臼杵郡東郷村に生まれた。宮崎縣立延岡中學校在學中から作歌を試み、十八歳の頃五・六の雜誌に投稿して、早くも佐佐木信綱博士に認められた。二十歳の春上京、早稻田大學英文科に入り、尾上柴舟の門に入った。三十八年同門の前田夕暮・正富汪洋等と車前草社を起し、歌壇に進出し、その浪漫的聲調は當時の青年層に迎へられた。卒業後中央新聞社に入つたが、二・三ヶ月で退社し、四十四年創作社を起し、雜誌「創作」を主宰し、經營の困難と戦ひつゝ後進の誘導に努めた。四十五年閩秀歌人太田喜志子と結婚。大正四年三浦半島に移り住み、大正九年には沼津市に轉住した。その間飄然旅程に上ることが多く、遍く各地に巡遊して自然に親しみ、旅中吟詠の作が多い。昭和三年九月歿。享年四十五。

著書には、歌集に「海の聲」「獨り歌へる」「路上」「秋風の歌」「白梅集」「溪谷集」「山櫻の歌」等、歌話に「牧水歌話」「和歌講話」「短歌作法」等、散文集に「旅とふるさと」「海より山より」「靜かなる旅をゆきつゝ」「比叡と熊野」「樹木とその葉」等があり、すべて牧水全集十二卷（改造社發行）に收められてゐる。

2 出 典

「比叡と熊野」から採つた。紀行文を主とし、これに隨筆小品を加へて大正八年九月春陽堂から發行されたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

本課にはその中「秋草の原」と題する文をそのまま採録した。少年時代の記憶の中に生きる美しい故郷の山河に寄せる歌人牧水の止み難い思郷の情である。柔かい秋陽の中、蒼く澄んだ秋空の下にくりひろげられる記憶の原は、孤獨を愛した牧水の少年時代を物語る一卷の繪卷であり、萩が咲き、溪が流れ、有明月の懸る自然の背景は、これまたそのまゝに詩であり歌である。純樸な自然詩人の醇乎たる詩情が愛着止み難い故郷の山河に傾けられて、こゝに詩趣溢れる作品を構成したのであつた。この豊かな藝術的香氣の味到を目指すべき文藝的趣味的教材として採擇した。併せて郷土愛の觀念を培ふすがともなるであらう。

二 解 釋

1 語 釋

【私の生まれた家】 宮崎縣東臼杵郡東郷村太字坪谷。次行に「坪谷村字石原」とあるは、「坪谷村」は大宇「石原」は小字の名である。「坪谷村」に就いては作者の文「おもひでの記」の中に「坪谷村」の一章があり、詳細な説明がある。参考欄について参照せられたい。

【東と北とに山を負ひ】 坪谷村の東から北へかけて「加子山」「珍神山」の山並が一帶に續いてゐる。これを指したのであらう。

【溪】 タニ 水なきを谷といひ、水あるを溪・谿といふ。この溪は「耳川」の支流「坪谷川」を指す。牧水は此の

家の前の溪流が殊に好きであつたらしく、その號牧水の「水」はこの溪をとつたものだといふ。これについて氏はその文「おもひでの記」の中に次のやうに書いてゐる。「現に使つてゐる牧水といふのも當時最も愛してゐたものの名二つをつなぎ合せたものである。「牧」はまき、即ち母の名である。水はこの溪や雨から來たものである」（参考欄参照）

【番戸】 バンコ 戸籍に於て、家を基準として附けたもの。今日は、所在地を中心として番地といふ。番地と同じ。牧水の「おもひでの記」の中には「私の家はその一番戸であつた。（今は三番地とよぶ事になつてゐるさうだ。）」

とある。

【巍峨】ギガ 山の高大なさま。山の高く聳えるさま。

【險山】ケンザン けはしい山。峻山とも書く。

【巍峨たる險山】坪谷村の南に聳える尾鈴山を指す。

「尾鈴山」に就いても「おもひでの記」の中に次のやうに書いてゐる。

「村の眺望の基調をなしてゐる尾鈴山をば殆んど正面に、而してまた斜にその全體を眺め得る様な地位に當つてゐる(中略)元來この尾鈴山はその南面の太平洋に臨んだ方は極めてなだらかな傾斜で高まつて来て、四千尺近い頂上となり、急に削り落した様に岩骨を露はしながら峻しく切れてゐる。云々(参考欄参照)」

尚尾鈴の山に就いては次のやうな歌もある。ふるさとの尾鈴の山のかなしよ秋もかすみのたなびきてをり。」

【部落】ブラク (一)民族のむれ。(二)民家の集り。むらり。こゝは(二)の意。

【取著き】トツツキ 「トリツキ」の音便。一ばんはし。入口。

【その部落と東隣の部落との間には、少しの間人家が断えてゐて、和田越といふ小さな峠を越して来ると、先づ私の家が取著きとなり、そのまゝ疎らに溪に沿うて、西へ細長く總戸數二十二戸の石原村となるのであつた】

【溪谷】ケイコク 谿谷とも書く。谷。谷間。溪流の流れてゐる谷のこと。

【流域】リウキキ 地理學上 Basinの譯語。河川の受水區域。即ち一つの河川とそれに隣接する河川との分水界によつて圍まれた地域。

【區劃】ククワク くぎり。しきり。境界。

【元來】グワンライ 元から。はじめから。

【克明】コクメイ まめやかなこと。きちようめんなこと。實直なこと。りちぎ。じつてい。

【手を著ける】テをツける 手を加へる。手入れをする。

【開墾】カイコン 山野を耕して新たに田畑を開くこと。

【灌木林風】ダワンボクリンフウ 灌木林のやうな様子。

「灌木」は、木本植物の一。「喬木」に對し、丈低く、幹は根際から叢生し、高さも約三米以内のもの。落葉するものと常緑のものがある。薔薇・山吹・南天・牡丹・茶などこの類。「風」はここでは様子・趣・ぐあひ等の意。

【元來が極めて平地に乏しい山地のことで、その溪の兩側など、かなり克明に手を著けて、小さいなりの田なり畑なりに開墾せられてあつたが、それでもまだ山ともつかず、森ともつかぬ灌木林風の荒れた平地が澤山残つてゐた】

狭い山峡によく見受ける風景である。小さい田畑が兩側の斜面に重つて、克明な開墾の手は、時に見上げるやう

「東と北とに山を負ひ、前に溪を控へた坪谷村字石原一番戸」の位置が更に明瞭にされた。峠の下り口で、而も二十二戸の小部落の取著きに邊在した家の位置そのものが、既に野趣の豊かさを思はしめるものがある。

【瀨】セ 「湍」とも書く。「淵」の對語。(一)河川の淺くて徒涉し易い所。淺瀨。(二)水流の急なところ。はやせ。

(三)折。場合。こゝは(二)の意。

【彎曲】ワンキョク 弓なりにまがること。

【淵】フチ 「潭」とも書く。「瀨」の對語。(一)水の深く淀んでゐる所。(二)苦しい境遇などの譬。こゝは(一)の意。【二階からはその大きな淵が一面に見おろされて、月の夜などは特に好かつた】

「月」の夜によつて、あたりの景觀に具象性と現實性とが付與された。瀨には月光が躍り、淀には澄んだ月が浮かぶ。作者の幼い日の記憶に残つた程の美觀が推し測られる。

【背戸口】セドグチ うらぐち。うらもん。

【他の小徑】タのコミチ 一は峠を越して来る道で、これはそれより別の小路である。

「小徑」の「徑」は音「ケイ」「コミチ」と訓じ、小路・細路などの意。

【背後】ハイゴ うしろ。せの方。

な高い山腹に及んでゐたりすることがある。而も雜木の森や林が小山をなして起伏してその間に荒蕪の地を止めてゐる。作者の筆はよくかうした山村特有なこの景趣を描いてゐるのであるが、更にその間に、次節以下、栗が落ち、茸が生える灌木林を、それとなく其處に提示してゐる手法は流石に輕妙である。

【不思議なことには、この溪ぞひには人家といふものが一軒もなかつた】

孤獨を愛した少年時代の作者が心ゆくまで楽しみ得た灌木材の、その草原の人里遠い情趣を示す伏線ともなる句として、一應注意さるべき所である。

【物心の著く頃】モノゴコロのツクコロ 人情世態などの解る心の出来る頃。即ち幼年期から少年期に入る時分。

【四國者】シヨクモノ 四國生まれの人。

【瓦焼】カハラヤキ 瓦を焼いて作ること。又その職人。瓦は粘土を一定の形にかため、これを瓦窯(土を饅頭形に積み築いて、中を空虚にし、前方に焚火口を、上方に煙出口を開けた窯)で蒸焼にしてつくる。瓦をつくるのを「瓦焼」といふのはこの爲である。

【栗】クリ 殼斗科の落葉喬木。樹高約十五米に達する。樹皮は暗褐色、葉は長楕圓狀披針形で、鋸齒があり互生する。六月頃花穂を抽き、淡黄色の細花を綴る。單性花

で雌雄同株。果實は堅果で長い刺のある殻斗で包まれ、熟すれば裂開して内から果實を散出する。その味は甘くして食用に供せられる。木材は種々の用に供せられ、樹皮と殻斗とは染料に用ひられる。

【雑木】 ザフキ 建築用材・工芸用材などに用ひられない粗末な木。

「雑」は粗末な意を表す接頭語。雑巾・雑兵・雑煮などこの類。

【駄目なのださうな】 「さうな」の「な」は指示の助動詞「なり」の下略。「さうだ」と同じ。

【萩】 ハギ 荻科・萩属の多年生亜灌木。秋日紅紫色又は白色の小蝶形花を房状につける。(二・明治神宮・一七頁九行既出。)

【深い萩の原】 よく茂つた萩の原。

「深い」はこゝでは「草深い」の「深い」と同じくよく茂つてゐるの意。

【今考へれば殆ど萩だつたらしい。ほんとに深い萩の原であつた】

回顧的な情調に溢れた文趣である。

「萩だつたらしい」と作者の回想は臆氣である。併し臆氣な回想を辿つて行く中に、作者の記憶の中に展開されるものは「ほんとに深い萩の原であつた。」のである。そ

して回想はやがて雑木の中に、灌木の傍にと無限に展開して、作者の回顧の中には、一面の萩の原がくりひろげられ、「そこらに咲きしだれてゐるこの薄紅の花びら」(同頁七行)が、眼前に髣髴として浮かんで来るのであつた。

【そこら】 その邊。そのあたり。そのくらゐ。

【咲きしだれる】 咲き垂れる。たれ下つて咲いてゐる。

「しだる」は垂れさがる。下に垂れるの意。

【毬】 イガ 栗の實の外方を包む刺の密生したもので、小苞の變形である。

「毬」は別に「マリ」とも讀む。

【稍から下を見ると、萩が茂つてゐてそこに待ち受けてゐる友達の姿など見えはせぬ。いいか、落すぞ!」と呼びながら、力一ぱい枝を揺ると、その茂みの中へ、ばらばらと音を立てて青い毬が落ちて行つた】

「ほんとに深い萩の原であつた」(六九頁三行)といひ「しだれて咲いてゐるのですら、子供の私達よりも遙かに丈が高かつた。」といふその回想が、こゝでは山の子の生活に結びついて、記憶の中に蘇つて來たのである。その經驗と實感とを底に持つ描寫は、茫々たる深い萩の原を髣髴として眼に描かせる。實に野趣の充溢した實感的描寫といふ他はない。

【茸】 タケ・キノコ 「菌」草とも書く、高等菌類の俗稱。

歩いた】

孤獨を愛し楽しんだ歌人牧水の少年時代の俳である。人里を離れた深い雑木原の中に、たつた一人の自分を見出すことは、この孤獨好の少年にはどんなに楽しみであつたらう。「ひつそりと」は如何にも幽閑な情趣を言ひ得てよく利いてゐる。

【女郎花】 ヲミナヘシ 敗醬科の多年生草本。莖の高さ一米内外。葉は羽状複葉で對生、夏秋の交複聚繖花序に淡黄色の小花を開く。嫩葉は食用とし、花は觀賞用とする。秋の七草の一。

【高々と】 タカダカと (一)目立つて高く。高く上つて。(二)つま立てて望むさま。こゝは(一)の意。

【萩のほかに女郎花が最も多かつた。林が伐り開かれて明るくなつてゐる草原などには、この花が高々と茂つて咲いてゐた】

深い雑木の中を屈み歩いてゐる間に、何時かぱつと眼前の明るい草原に出る。澄んだ秋の陽光が一面に溢れてゐる。あの淡黄色の女郎花の花がその陽光の中に高々と咲いてゐる。少年の心にも忘れ難い清秀な初秋の一情景であつたのであらう。

【淀み】 ヨドミ (一)水流が滞ること。又その所。よど。(二)物事が滞り滞ること。こゝは(一)の意。

山野の樹陰・朽木等に生じ、多くは傘状をなし、裏に多數の胞子が著生する。松茸・初茸・椎茸の如く食用となるものもあるが有毒のものも少くない。

【手籠】 テカゴ 下げて持つ小さい籠。

【しめぢ】 菌類科の食用茸。普通のもの白色又は灰色で、傘の徑五種位。柄の高さ九種位。多數塊状をなし、莖部で癒着して一株となつて發生することが多いので、一名「千本しめぢ」ともいふ。松茸に遅れて發生し、香氣は劣るが味は遙かに勝れてゐる。煮食又は乾晒・醃藏して食用に供する。

【ねず茸】 擔子菌類、擔茸科の食用茸。下部は太い一個の幹をなし、上部は分岐して末端細裂し、淡紫色を呈する。高さ幅とも約二〇種。多くは秋季闊葉樹林中に發生する。別名「はきたけ」

【範圍】 ハンキ (一)かこひの中に入れこむこと。(二)かこひ。區域。かぎり。こゝは(二)の意。

【乃至】 ナイシ 「接續詞」(一)數・階級・種類等の上と下とを擧げて中間を略すに用ひる語。(二)あるひは。またかつ。こゝは(二)の意。

【それに私は、友達大勢とかういふことをするのが嫌ひで、大抵は自分一人か、乃至は母と一緒にゐてあつたので、いつもひつそりと、その廣い雑木の原を屈みながら探して

【鯪】 ハエ 鯪科の淡水魚。原名「おひかは」本種は琵琶湖では、雄を原名のまま「おひかは」と呼び、雌は「白はえ」と呼ばれてゐる。川の上流、又は下流に於て清流を好んで棲息する。長さ一七・八寸を普通とし、雌は産卵期に至ると腹部に紅色の横線が現れてくる。幼魚及び雄は色彩蒼白である。食用に供する。はい・はや等の方言が多い。

【あぶらめ】 (一)「いたちうを」の別名。軟鰭類の魚。體長く頭大きく、尾部に至るに従つて狭長。體色褐色で細鱗を有する。體長約五〇厘。(二)「あゆなめ」の異稱。棘鰭目鮎科の海産硬骨魚。長さ二五・六厘。緑褐色で黒の斑がある。鱗は多くは微黄色。

これは何れも海産魚で體もかなり大きい。併しこゝは溪流に棲む淡水魚であり、而も「小魚(七二頁一行)」とあるから右の何れにも當らない。恐らく此の地方の方言でかく稱する小魚があるのであらう。

【蟹】 カニ 甲殻類の短尾類に屬する。腹・背に堅い殼を持ち體扁平で一對の蟹と四對の足を持ち横走ることが速であり、眼には柄があつて、甲殻の小窩の中に横に伏すことが出来る。種類は非常に多く形狀色彩も甚だ變化多く、水中又は水邊に棲息する。

【鰻】 ウナギ 「鱺」とも書く。喉鰻類の魚。淡水に産する。

形は圓筒状で長く、背は蒼黒色で腹部は白い。皮膚は厚く粘液に富み、鱗なく體は滑かである。身長約六〇厘に達するものもある。蒲焼として賞味される。

【どうかすると蟹や鰻などの出てゐることもあつた】

「人といふものを知らぬ魚なのでなかなかよく釣れた。」(前頁十行)と言ふ。全く此の人間界を遠く離れた溪流は實に魚にとつて自由な平和な天地であつた。石の下や草の蔭から蟹や鰻が淀に出て遊んでゐるといふのである。淡々たる報告的な敘述に近いこの語句の中に、實は別天地の如き野趣が語られてゐることを見逃してはならぬ。

【さつとふこともなかつた】

魚釣をしたのは春・夏・秋に亘つて、いつと決つてはゐなかつた。

【記憶】 キオク (一)一旦知覺したことを忘れぬこと。心に留めておいて忘れぬこと。(二)心理學上、過去の知覺經驗の表象が、意識中に再現して把住せられる作用。こゝは(一)の意。

【係る】 カカる 關係する。

【しつとり】 (一)落ちついて静かなさま。(二)濕氣をふくんださま。こゝは(一)の意。

【思ひがけぬ見ごとな栗がその淀みの中に落ち溜つてゐる】

ことなどもあつた。折々眼を上げると、その流の上には例の萩の花がしつとりと咲き垂れてゐる】

懐しく思ひ出される栗拾ひに結びついて、また視野の限り咲きしだれた萩の原を背景にして浮かび上る魚釣の記憶である。作者は魚釣そのものよりも、寧ろ秋草の原に無限の興趣をそゝられ、懷慕を感じてゐるのではなからうか。それが「この釣の記憶も必ず秋の季節に係つてゐる」(同頁二行)所以である。

【野兎】 ノウサギ 野生の兎。體色は灰色を帯びた茶褐色で、頭上に小白點を有する。作物や幼樹を食害する。

【聴しい】 サカしい かしこい。さとい。

【眸】 ヒトミ 「瞳孔」のこと。眼球の虹彩の中央にあつて、光線の眼球内に入る門戸をなす圓形の小孔。光線の強弱に應じ、虹彩が伸縮して瞳を或は狭め、或は擴めて調節をする。

【ほがらかな秋の日は背に流れて、どうかすると、その溪間の空にはほの白い晝の月の懸つてゐるのを見ることもあつた。水でも飲みに来てゐたのか、野兎の子の聴しい眸が、不思議さうに岩の蔭からこちらを覗いてゐたこともあつた】
晝ひなか、野兎の子が岩蔭から覗くといふ別天地である。この人遠い草原にあつて、清々しい秋の陽光は背に流れ、仰げば、澄み透つた蒼空には白い晝の月が懸つてゐるの

である。何といふ清朗高明な、そしてまた幽寂閑雅な情趣であらう。淡々として水の如く透徹した歌人秋水の描寫は、この初秋の情趣をその行間に溢れさせてゐる。

【私は十歳の時限り、殆ど離れ切りにこの故郷を離れたといつてもいい】

明治二十九年坪谷尋常小學校を卒業し延岡の町に出で、同町の高等小學校に入學。その修了後延岡中學に入學、更に上京して早稲田大學に入學して、爾來東京その他に居住して郷里に歸り住む事がなかつた。これを言つたのである。「離れたといつてもいい」といふのは「稀には歸る事があつた」からである。

【似もつかぬ】 全然似てゐない。全く似つかはしくない。

【も】は強意の助詞。

【稔る】 ミノる 熟する。

「稔」はもと「穀物の熟する」に用ひた文字であるが、後に一般草木の實の熟するに轉用した。一般に草木の實の熟するには普通「實る」の文字を用ひる。

【有明月】 アリアケツキ 略して單に「有明」ともいふ。明方まで残つてゐる月。残月。

【實在】 ジツザイ 哲學上の用語 Realityの譯語。(一)すべて思惟せられ得るもの。(二)思惟せられ得るのみならず、吾人の思惟認識を離れて存在するもの。即ち主觀以

外に存在するもの。(三)精神の對象たる自然、又は現實。客觀的存在。(四)常住不變で生滅變化のない實體。ここは(二)の意。

【心のなかの記憶の原は、行けども行けども果しない広い原で、到る處に萩が咲き、栗が稔り、水が流れ、有明月が懸つてゐる。さうした原であらねばならぬ。不思議とまたさうした原の實在が信ぜられてならぬのである】

故郷から一步も踏みだしたことの無い世界の狭い少年にとつては、狭苦しい原も「行けども行けども果しない広い原」であり、また悲しみも悩みも知らぬ少年の心には、唯樂しさと美しさとの記憶のみが残されるのである。それは空想的な少年時代の心を培ひ、少年の日の夢のくりひろげられた天地だからである。時に少年達は童話的な創造を附與した故郷の山河を記憶に留めてゐることすらあらう。成人した眼に映る現實は「似もつかぬ狭苦しい原」(同頁四行)であらうとも、記憶の中の原はさうした廣く美しい原である。作者は「さうした原であらねばならぬ」といひ、また「さうした原の實在が信ぜられてならぬ」といふ。嘗に作者だけではない。生徒達は、各自の回顧の中に、自分の育まれたさうした故郷の山河を思ひ描かないであらうか。そしてその實在を信ぜずにはゐられないといふ氣持が起らないであらうか。生徒の反

省に訴へその實感を呼び覺すべき所であらう。

【綻びる】 ホコロびる (一)縫目がほどける。ほぐれる。

(二)蕾がややひらく。花が咲きそめる。(三)口を開いて笑ふ。(四)かくし事があらはれる。こゝは(二)の意。

【まぼろし】 (一)幻影。無いものの姿があるやうに見えて、程經て消えうせるもの。(二)魔法使ひ。幻術をつかふ人。こゝは(一)の意。

【心に新にす】 ココロにアラタにす 新しく思ひ出す。思ひ起こす。

【夏も末、萩の花の綻びかける頃になると、私は必ずのやうに、この原のまぼろしを心に新にするのである】

無心な少年時代を育み培つてくれた山河、それは何人にとつても生涯忘れぬ心の故郷である。悲しみにつけ、喜びにつけ、また寂しい時、四季折々の移り變りに、人は心の奥からその思ひ出をひきだして、無限の慰みと魂の安息を其處に求めようとし、また温かな勵ましを其處から汲みとらうとする。萩の花が咲きそめる頃になると「必ずのやうに」思ひ出す作者の感慨は、郷土を離れない生徒には直接味到し得ないかも知れない。たゞ故郷に對する自らの現實の感懷を推し廣めることによつて、こゝまで到達せしめるやう導くべきであらう。

2 文の構成

第一節 初―六七頁二行 「私」の生家の位置・地形。

第二節 六七頁三行―六八頁八行 裏の小山の彼方、溪沿ひの開墾地の間に残る荒れた灌木林風の平地。

第三節 六八頁九行―七〇頁四行 栗拾ひに出かけた灌木林が見廻す限り萩原であつたこと。

第四節 七〇頁五行―七一頁三行 獨りひつそりと茸を探して歩くその萩原に高々と女郎花の咲いてゐたこと。

第五節 七一頁四行―七二頁末行 萩原の溪川で魚釣に樂んでゐる時見出した初秋の情趣。

第六節 七三頁一行―終 記憶の中の秋草の原によせる懷慕。

3 文意

故山の山川にかかる幼時の記憶である。時は秋、栗拾ひに茸狩に、また魚釣に、無心な少年の心を慰め培うた記憶の中の故郷の原は、果しくなく廣く、限りなく美しい秋草の原であつた。それは今現實に見る故山の姿とは似もつかぬ「記憶の原」ではあるが、併し秋毎に思ひを新にする作者は、この原にその實在を信ぜずにはゐられない程の強い思慕をよせてゐるのである。

4 鑑賞批評

孤獨な少年牧水の心を育み培つた故山の自然、それは牧水の遠い日の記憶に残る、一種空想的な山河ではあらう、併し自ら、その實在を信ぜずにはゐられないと言つてゐる、その果しない廣野も、咲きつゞく萩の花も、人といふものを知らぬ魚の棲む溪流も、さてはまた有明の月が懸り、野兎の岩蔭から覗きたとしへない情趣も、それはすべて實在を離れた單なる空想世界ではない。深く自然に親しみ、自然の中に潜み入つて自然の生命と相觸れ、相抱擁し合つてゐる自然詩人牧水の、醇乎たる眞實性がこれを裏づけてゐるからであり、且其の眞實性の底に流れる盡きせぬ思慕の熱情がこれを買いて

みるからである。けれど作者の情熱は内にひそやかに燃えて、強い鋭い一つの語句も用ひては居らない。寧ろ淡々として水の如き清澄平明なその筆致は、思郷の純情を湛へつゝ、而も歌人らしい鋭敏新鮮な感覚は、全文に一種言ひ難い高雅な詩情を漂はせてゐる。靜かに魂が物語るともいふべき情緒に溢れた此の文は、清秀な初秋に最適の讀物である。

三 備 考

1 指導研究

(一) 歌に於けると同様此の作者の文は常にその情熱を深く内に燃して、一見淡々たる表現敘述の間に詩情を漂はせ、全體としてある情調を醸成するといふ風な獨特な味を持つてゐる。従つて本課に於てさうである如く、強い表現・感激的な語句などのそれを手がかりにして深く突込んで行くといふやうな點はない。特に反復低誦の必要な所以で、その反讀の間に此の文の持つ夢幻的ともいふべき一種淡々とした情調の中に渾融せしめることがまづ第一に考へられねばならない。

(二) 描かれてゐる草に木に溪流に、すべて作者の生命が通つてゐる。自然歌人としての作者の態度の表で、深く自然に親しみ、自然の眞生命と相觸れ相抱いてこれと融合一如の境地に至り得た爲である。自然觀照の深さが此の文を生かしてゐることを讀みとらせて行くべきであらう。

(三) 更にその底に流れるものは止み難い思郷の心である。一語一句の端々に滿ち溢れるこの作者の純情に觸れしめることは、この文の情趣を味はふ上に更に有力な手がかりである。讀みは終にそこまで深められねばならない。

2 参 考

(一) 挿繪 山の村。

岡本東洋撮著「美術寫眞大成」の「冬一部」所載のものを採つた。元の題名は「とりいれ」といひ、洛北の秋景を撮影したもので、秋陽の照り溢れる靜かな秋の情調は、本課の文趣にふさはしいものである。

「美術寫眞大成」は昭和十一年平凡社發行。

(二) 作者の文「おもひでの記」の中から「坪谷村」母の事」の二章を左に採録する。

坪 谷 村

私の生れた村、詳しくいへば日向國宮崎縣東臼杵郡東郷村大字坪谷村は、山と山との間に挟まれた細長い峡谷である。ことに南には附近第一の高山である尾鈴山がけはしい断崖面を露はして眼上にそびえてゐるので、一層峡谷らしい感じを興へてゐる。村の長さは東西に延びて四五里もあるだらうか。戸数は僅か二百か三百足らずのものであると思ふ。私の家はその一番戸であつた。(今は三番地とよぶ事になつてゐる相だ) つまり村の東の入口に當つてゐる。此處に新たに家を建てた事に就いても、私は祖父を輩ならぬ人の一つに思はざるを得ぬのである。それはその場所が附近でも際立つて優れた好位置にあるからである。或は他に理由があつたか、若しくは偶然であつたかも知れぬが、私には矢張それが彼に山川を見る眼があつた故だとのみ思はれてならない。家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、眞下は溪に臨んでゐる。そして恰度その溪はそこまで長い瀧の様になつて落ちて来た長い瀧が、急にそこで屈折して居るために、そこだけ豊かな瀧となり、やがてまた瀧となつて下に走り、斜め右と左とに末遠くその上下の溪を展望する事が出来る地位にある。——中略——そして村の眺望の基調をなしてゐる尾鈴山をば殆ど正面に、而してまた斜めにその全體を眺め得る様な地位に當つてゐる。——中略——元來この尾鈴山はその南面の太平洋に臨んだ方は極めてなだらかな傾斜で高まつて来て四千尺近い頂上となり、急に北に面して削り落した様に岩骨を露はしながら鋭しく切れてゐるのである。

常に陰影の多いその山の北面には晴れた日でもよく雲を宿してゐるが、一朝雨降るとなると、山全體が、いや峡谷全體が眞白な雲で閉ざされてしまふ。そしてその雲の徂徠によつて到るところ雲の多いその峻山が恰も靈魂をおびたかのやうに躍動して見えるのである。

私はものごころのつく頃から痛くこの溪と山の雨を愛した。で、歌の眞似などを始め出して雅號といふものを使ふ様になるとまづ雨水と稱したものであつた。白雨ともいつた。現に使つてゐる牧水といふものも當時最も愛してゐたもの名二つをつなぎ合せたものである。牧はまさ即ち母の名である。水はこの溪や雨から来たものであつた。

溪は尾鈴山の裾に沿うて白々と流れてゐる。そして人家は大抵みなその浴に沿うて作られてゐる。そこに五月、ここに十月と長さ四五里の間に三百戸足らずの家が散在してゐると言へば、その寒村の面影は自ら彷彿するであらう。——下略

母の事

私は五つ位から齒を病んだ。右も左も齧齧だらけで、痛み始めると果してどの齒が痛むのだから解らなくなり、まるで顔から頭全體が痛むかの様に痛んで来た。そんな場合、おおい泣きわめいてゐる私を抱いて、一緒に涙を流してゐるのは必ず母であつた。私は母の涙を見ると一層悲しくなり尙さらに泣き上げたが、いつ知らずそれも痛みを忘れて泣き勞れながら眠ることが多かつた。私の家から十町ほど川上の方に柿の木淵といふ深い淵があつた。此處も何やらの主が居ると呼ばれた大きな淵で、一方は高い岩の斷崖となつて居り、その上の密林中に水神の社があつた。母は私だけをひそかこ起して背負ひながら、幾日とか日をきめて、そこへ丑の時詣りといふことをした。眞夜中にこつそりと家を出て田圃路からやがて淵の頭の淺瀬を選んで徒渡り、とうとうといふ水音をききながらその林中へ入りこむ時には、私はもう泣くにも聲が出なかつた。さうして小さな祠の前で初めて火を點じて燈明をあげ、落葉の積つた土の上私をひざまづかせ、彼女もさうして共に齒の痛まぬ様にと、祈願をこめたのであつた。——中略——

私は前に断えず山に入りこんで遊んでゐたと書いた。この癖を私に植ゑたのはまさしく私の母であつた。彼女は實にさうした山に入つて蕨を摘み、筍をもぎ、栗を拾ふことを喜んだ。蕨汁や栗飯を焚くといふ以外に、摘むこと拾ふことが面白かつたのである。父と言ひ合をした後など、彼女は必ず籠を提げて山へ入つて行つた。そしてその時必ず私はそのあとを追つたのである。さわりさわりと微かな音を立てながら深い藪の中で前かがみになつて筍を探して行く彼女の姿を私は今でもありありと眼の前に描くことが出来る。

(三)作者若山牧水の歌を歌集「山櫻の歌」より抄録する。

秋 近し

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり。
圓の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの日のしげかりけり。
うす青み射しわたりたる土用明けの陽ざしは深し窓下の草に。
秋づきしものはひに人のいふ土用なかばの風は吹くなり。
愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏のをはりと思ふ。
明け方の山の根にわく眞白雲わびしきかなやとびとびに湧く。

枯野の落栗

夕日さす枯野が原のひとつ路わがいそぐ路に散れる栗の實。
音さやぐおち葉が下に散りてをるこの栗の實の色よろしき。
柴栗の柴の枯葉のなかばだに如かぬちひさな栗の味よさ。
おのづから干てから栗となりてをる野の落栗の味よろしき。
この枯野猪も出でぬか猿もぬか栗うつくしう落ちみだれたり。
かりそめにひとつ拾ひつ二つ三つひろひやめられぬ栗にしありけり。

10 良寛さま

北原 白 秋

一 解 題

1 作 者

北原白秋 キタハラハクシウ 本名は隆吉。明治十八年一月福岡縣山門郡沖端村（今まくと）に生まれた。中學修學後、同二十六年上京、早稻田大學英文科に入り、中途退學した。所謂氏の略歴なるものはこれだけである。少年時代から既に詩歌に親み、三十七年二十歳の時「林下の黙想」「繪草紙店」等の詩を雑誌「文庫」に寄せて漸く詩壇の注目する所となり、ついで三十九年與謝野寛等の新詩社に入り「明星」「スバル」等に盛にその詩を發表した。四十一年頃からは好んで象徴詩を作り、四十二年詩集「邪宗門」を出すに及んで氏の詩壇的位置は確立し、殊に四十四年刊行の詩集「思ひ出」は全詩壇の推賞を受けて、詩壇の寵を獨占するに至つた。當時又和歌を盛んに發表し、大正二年には歌集「桐の花」を刊行してゐる。大正七年頃から童謡の創作をはじめ「蜻蛉の目玉」を第一として多くの童謡集を刊行し、又「白秋小唄集」を刊行して野口雨情・西條八十と並んで昭和期に於ける童謡及び民謡勃興の機運を促進し、その功績大なるものがあつた。まことに大正期から昭和の初に至る氏の活躍は素晴らしいものであつて、或は「朱槿」「地上巡禮」「ARS」等詩歌雜誌から、短歌雜誌「日光」或は「詩と音楽」「近代風景」「曼陀羅」或は童謡民謡等の諸雜誌に至るまで氏の詩的才幹は遺憾なき光彩をはなつた。現在は武藏野砧村に閑居し、自然を友として昭和良寛の生活を楽しみながら尙詩作をつゞけ、詩壇の元老として重きをなしてゐる。

著書は八十餘種の多きに上り、その重なるものは前記の他に、詩集に「東京景物詩」「白金の獨樂」「白秋詩集」「水墨集」「海豹と雲」等、歌集に「雲母集」「雀の卵」等、童謡に「兎の電報」「祭の笛」「白秋童謡集」等、民謡に「日本の笛」「あしの葉」等があり、文集に「白秋小品」「雀の生活」「季節の窓」「洗心雑話」等の好著がある。尙詩論、歌話等にも聴くべきものが多し。

2 出 典

「洗心雑話」から採つた。「洗心雑話」は作者北原白秋が、大正六年から七年に亘つて短歌雜誌「珊瑚礁」に載せた詩話・歌話を集め、これを「その一」から「その十」に至る十章に分けて編纂したもので、大正十年七月アルス社から出版された。

3 主眼及び採擇の趣旨
本課の文は「その三」「聖心は童の心である」と書き出して良寛の童心に關する逸話を敘した中の一部を抄録した。

無心な少年の日の思ひ出を述べた前課の發展として、こゝに聖心的童心者良寛の逸話を配した。その誠の篤さ・正直さ・あどけなさ・明さは正にこれ純眞無垢、天真爛漫な童心のそのまゝなる發露である。而も作者はこの題材を盛るにふさはしいやさしく素直な表現形式を以てした。その詩趣溢るゝ文章はこの題材と全く渾然として融合し、無韻の詩とも言ふべき藝術的作品を構成してゐる。その藝術的境地への味到を目標とする文藝的教材として、同時に童心が聖心の源たる所以を知らしめて、自らの中にある童心を生涯保持せしむる契機たらしめん爲の人間の教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【良寛さま】 リヤウクワンさま 北越の地方的稱呼をその

「まゝ用ひてゐるのであるが、併しこれはまた作者の良寛観を具體的に表明する一語として注意せらるべきであらう。従つて作者は「待ち受けてをられる」(七四頁三行)「待つてをられる」(七五頁三行)「おどおどしてをられた」(七五頁九行)「御存じない」(七六頁初行)「もぐつてをられる」(七六頁六行)などすべて敬語的敘述を以て全篇を貫いてをるのであつて、この作者の「良寛さま」に對する同情と敬慕と深い理解とが、此の文を極めて嚴肅な眞面目なものにしてゐることは否み難い。

【良寛】は次課「手廻つきつゝ」の作者欄参照。

【目を瞑つて】メをツブつて 目をふさいで。目を閉ぢて。【もういゝよ】といふかはいゝ聲を一心にまち受けてをられる。】

作者の描かんとする良寛さまを知る一つの手がかりの得られる敘述である。眞實、目をつぶつて、子供達の「かはいゝ聲」を「一心」に待ち受けてをられる良寛の姿も亦その童心もはつきりと浮かんで来る。

【何がな欲しくなる】 何物かが欲しくなる。

「がな」は(一)願望の意を表す助辭。(二)「だに」の意に似た助詞。それなりとも。(三)轉じておほかた。でも。にても。(四)名詞の下に添へて「あるかぎり」の意を表す接尾語。日がな一日。間がなすぎがな」の類。こ

こは(三)で「何がな欲しい」は「何でもいゝ、何か欲しい」の意。

【子供心の何がな欲しくなる時である】

遊び呆けて吾を忘れてゐた子供が、家々に灯のちらつくのを見て初めてふと氣が附く。腹もすいてゐる。両親も戀しくなる。身も心も何か空しいたよりない一種の寂しさを感じて、何かしら物欲しくなる。簡潔にこの子供の心理を巧に描いてゐる。勿論「何がな」の「何」は「物」だけではない。肉體的に、精神的に、ひぐれ時の空しさを満たす「何か」である。

【點き出す】 ツキダす ともり始める。「點」は「トモル」とも訓ずる。

【家々の燈がちらちらと點き出すと】

子供心に印象されてゐるたそがれの情景が實によく表されてゐる。洗煉醇化された美しい表現である。

【うつちやらかし】 うつちやつておくこと。うち捨てておくこと。

「うつちやらかす」は「うつちやる」(打遣るの音便)の俗語。(一)投げ捨てる。(二)なげやりにする。打ち捨てておく。放置する。こゝは(二)の意より轉化した名詞。

【そこは子供だから、良寛さまも何もうつちやらかしであ

る】

家々の燈を見るとただ無性に家が戀しくなる。良寛さまも何もうつちやらかしで黙つて歸つてしまふ所、如何にも子供の子供らしさを示してゐる。

【一所懸命】 イツシヨウケンメイ (一)賜つた一箇所の知所の地を命にかけて頼とする義。(二)轉じて一事をなすに専心すること。命がけで事をなすこと。今「一生懸命」と書くはこの轉訛である。

【そのうちに日が暮れ、長い夜が來た、さうして、とうとう夜が明けてしまつた】

「長い夜が」といひ「さうしてとうとう夜が明けて」といふ。「とうとう」といふ副詞が實によく利いて、夜の長さを極めて印象的に實感せしめる時間的描寫であり、良寛さまはそれでも一所懸命だといふ言葉の前提として効果的にはたらいてゐる。

【良寛さまはそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてをられる】

「かはいい聲を一心に待ち受けてをられる」の發展である。勿論「同じ處に同じ姿をしたまゝ」が眼目をなすのであるが、長い夜通しさうして一所懸命に子供の呼び聲を待ち受けられる良寛さまの本氣さには驚かされる。原

文にはこの後に「その心の素直さ、さうしてその誠の篤

さ正直さ」と作者の説明が附加してあるが、實に純乎たるこの聖者の童心には自ら頭の下がるものが感ぜられるではないか。作者が「聖心は童の心である」(出典欄参照)と言つてゐる意味はここにある。

【田圃】 タンポ 田畑のある土地。主として田のある土地をいふ。(二)岡に立つて(二〇頁四行既出)。

【稻叢】 イナムラ 刈り稻を積み重ねたもの。その形によつて稻城(いなぎ)稲塚・堆(には)稻堆・稻懸等がある。こゝは「稻束をやにはにはづす」(七六頁四行)とあるから、刈り稻を掛けならべて乾燥させる装置の「稻懸」であらう。

【まるで】 全く、全然、すべて、そつくり。

【二十日鼠】 ハツカネズミ 「鼯鼠」とも書く。齧齒目・鼠科に屬する小鼠。鼯鼠の義とも、又生後二十日位の大きな鼠の義とも言はれ、頭胴の長さは五・六糎に過ぎない。尾は七・八糎、頭は短く、吻端は尖り、耳は略三角形をなして直立し細毛を密生する。背面は淡黒褐色、腹面は純白で、體側との境界が鮮明である。屋内又は人家に近い土中に穴居し、妊娠期間は四週間で、一産に五・六匹を産む。我が國固有の種類で、本州・四國・九州に産し、あまみちねずみ・きしり等の異名がある。愛玩用、

實驗用のこまねすみ・なんきんねすみはこの變種とされてゐる。

【稻藁】 イナワラ 稻のわら。稻の藁を乾したものを。「藁」は印刷の誤であるから訂正されたい。

【おどおど】 「おづおづ」の轉訛。おそれて心の落ちつかぬこと。

【それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おどおどしてをられた】

鬼にみつかるとの心を心からおそれて一所懸命である。天衣無縫と言ひ、純真無垢といふ。その清らかな童心がその姿にありありと現れてゐる。貴くもありがたい姿には頭の下がる思がする。

【御存じない】 ゴゾンじない 御知りにならない。

【存ずる】は(一)思ふ。考へる。(二)知る。心得る。こゝは(一)の意。

【また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた】

「また日が」といひ、「また夜が」と「また」を繰返し、且「夜が来て」「夜が明けた」と「夜」を重複し、その語調の中に時の経過と、同時に夜の長さを克明に表してゐる。さすがに詩人の周到巧妙な描寫である。

【稻藁には霜がまつしるに置き、朝の日のぼり始めると】 其の場の光景を如何にも具象的に印象せしめると同時に

に、この情景を背景に、時の経過にも氣附かず、霜夜の寒ささへ忘れて、本氣にかくれてをられた良寛さまの姿を、そしてその純真無垢の心持を、一層はつきりと浮かび上らせる。

【百姓】 ヒヤクシヤウ 農夫。農民。(三)岡に立つて(二)頁一行既出)

【稻束】 イナタバ 稻を一まとめにして束ねたもの。

【やにはに】 「矢庭に」と書く。ただちに。たちどころに。即座に。少しの猶豫もなく。

【「おや、良寛さまが」といふと、慌てて「そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける」】

實に奇妙な光景である。呆氣にとられてぼかんとしてゐる百姓の顔と、二十日鼠のやうに小さくなり、聲を殺し手を振つて百姓を制止してゐる良寛さまの姿とがありありと目に浮かぶ。殊に會話で結んで、餘計な説明を施さなかつた所は却つて暗示的で、讀者の反省思索に訴へるものがある。それにしても「そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」は何といふあどけない言葉であらう。この話の終に説明を加へて、作者は「その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。」と言つてゐるが、その生一本な至純な姿には神に近いものすら感ぜられるではないか。

【熟れて】 ウれて 熟して。みのつて。

【鈴なり】 スズなり 「鈴生」又は「鈴成」と書く。果實などが、神樂鈴のやうに群つて生り下つて居ること。

【赤々と實が熟れて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供がひとり泣いてゐた】

秋の田園にいくらかもある一景物である。併しこの作者の醇化された筆を以て描き出された時、それはまた俳味を帯びた一副の繪である。

【やつとこさ】 (一)力を勞する時に發する感動詞。やつとこせ。うんとこせ。(二)「やつと」に同じ副詞。やうやく。からうじて。こゝは(一)と(二)と兩方の意味を兼ねて用ひられてゐる。

【それは】 勿論「柿」を指示する代名詞ではあるが、單にそれだけではなく、咏歎の意が含まれてゐる。次行「それはおもしろ。」の「それは」も同じ。

【おもしろいなんの】 おもしろいおもしろくないのつて、何ともうへない程おもしろい。

【の】は對等の語を並列するに用ひる助詞。「なん」は「なに」の音便で、「おもしろ」と「おもしろくない」と兩方の意を含んでゐる。

【齧るは齧るは】 カジるはカジるは 盛に齧るさまの感歎的形容。「かじることかじること」など解すればよい。

「齧る」は堅い物などの片端からかむ。(二)物事の一部分だけ知る。こゝは(一)の意。

【は】は咏歎の助詞。

【猿蟹合戦】 サルカニカツセン 我が國に傳誦される五大童話(桃太郎・舌切雀・かちかち山・花咲爺・猿蟹合戦)の一。猿の爲に苦しめられた蟹に同情し、石臼・鶏卵・蜂・栗等がこれに加勢してその仇を報ずるといふ噺で、筋は生徒の熟知する所である。

古く口碑に傳誦せられ、原文とすべきものは傳らず、その作者及び著作年代も未詳であるが、徳川初期の赤本「さるかに合戦」に「さるかに」黒本「猿蟹夢物語」等に作られて刊行されて居ること、及び復讐を主題としてゐる點とから考へて、恐らくその成立は足利室町の時代であらう。古いものでは「握飯」は「焼飯」となつて居り、又加勢のものも庖丁・荒布・栗・蛇・牛糞などになつて居る。従來佛敎説話その他の物語がそのまゝ兒童に物語られたのであるが、これらは初めて兒童を對象として製作せられたものである點を特徴とする。

【食べほれてゐる】 我を忘れて食べてゐる。食べる事に全く心が奪はれてゐる。

【ほれる】は「恍れる」又は「惚れる」と書く。(一)「ぼんやりする。うつとりする。ぼける。(二)「一寸ち」思を

かける。戀ひ慕ふ。こゝは(一)の意。

【良寛さまは夢中になつて、齧るは齧るは、まるで猿蟹合戦のお猿のやうに、むしやむしやと食べほれてゐる】

「よしよし、それではわしが取つてあげる」と言つて、はひ上つた良寛さまである。その良寛さまが下の子供も打忘れて無我夢中で柿を食べ惚れて居られるのだ。「馬鹿げた」と笑つてしまへない貴い童の姿であり、成心ある者の到底至り得ない境地である。

【火のやうに】普通激しく怒るさまの形容に用ひ、また羞恥に顔を赤くするさまを譬へる語。

こゝは「火のついたやうに」と同意に用ひてゐる。

2 文の構成

第一話 初―七五頁四行 子供たちとかくれんぼして置去りにされたのも知らず、翌朝まで、子供の聲を待つてゐた良寛さまの誠の篤さと正直さ。

第二話 七五頁五行―七六頁八行 今度はかくれる番になつた良寛さまが、寒い霜夜が明けて、翌朝になつても尙本氣に隠れてゐた純真さ。

第三話 七六頁九行―終 泣いてほしがつてゐる子供に柿を取つてやる爲に木にはひ上つた良寛さまが、柿のうまさについ夢中になつて自ら食べ惚れてしまつた無邪氣さ。

3 文意

童心の發露といふべき良寛さまの逸話三つを、如何にも此の内容にふさはしい言葉で物語つてゐる。この話を通して作

者の物語らんとする意圖は、勿論童心の貴さであり有難さである。まことの篤さ、正直さあどけなさ、ありがたさ――さういふ聖心の源ともなる清らかな童心が三つの話の中に盛られた内容である。

4 鑑賞批評

「わかりやすい言葉でわかりやすいやうに」とは作者が原本の表紙にも記し、またその序にも述べてゐる所であるが、然しこの「わかりやすい言葉」は實は詩人白秋の感情と靈筆を通して流れ出た豊かな潤ひと、無限の餘韻とを持つた珠玉の文章であつて、それは玉のやうな良寛の童心を盛るに最適の器であつた。勿論良寛のこの童心はその天性に根ざしてはゐるが、更に禪の修業によつて至り得た境地であつたらしい。併し作者の詩眼に映じ詩心に觸れた良寛の童心は既に至純なる聖心であつた。作者の敬慕と傾倒とは、洗煉醇化された表現力と相俟つて、或はそこに觀念的な美を附與してゐるかも知れない。併し此の素材に對するこの珠玉の表現は、この一篇を無韻の詩とも言ふべき作品たらしめてゐる根據であると言ふも過言ではないであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 原著「洗心雑話」の序にはこの中の詩や歌そのもの話といふよりも、もつと大切な「詩や歌をつくるだけの心の据ゑ方感じ方物の見方といふ方に重きを置いてお話してある」とあつて、良寛のこの逸話も、實は良寛の詩や歌がこの童心から生れたものであることを言はんが爲に物語られてゐるものやうである。本課ではその立場を異にして、主眼を他に置いたのであるが、教授者は此の意圖の存する所を一應心得て置くべきであらうし、特に次課「手毬つきつつ」への連絡といふ點から、時に生徒に對してもこの作意について多少の説明が與へられてもいゝのではないかと思ふ。

(二) 逸事・逸話の意義はその人物に對する精しい知識を背景としてのみ正しく理解し得られるものである。殊に逸話を傳記的史實の一部分の中に置いて考へ易い此の時代の生徒にとつては、その人の傳記についての正しい知識を授けることが、その逸話を正しく定位させる最良の手段である。従つて豫備として良寛傳の要點、即ち本課と關係を持つて來る禪僧としての苦行や道徳自戒の深かつた一面など相當解説して置きたい。

(三) 併しこれは勿論豫備的段階であり、指導の中心目標は童心の尊ぶべき所以の自覺を高める事である。殊に形式的に留意すべき個所の殆どない本課に於ては、その爲に却つて安易に表面的に流れ勝な生徒をして一語一句をも忽にしない態度で讀み碎かせねばならない。かくてこそ初めて作者の「良寛さま」と呼んでゐる氣持も自證せられ、その童心がやがて聖心の源である事も理解せられるであらう。

(四) これはまた同時に生徒への反省の機會でもある。日々成人して童心を失つて行く彼等に對しては、この話の眞實性が疑はれないであらうか。併し疑ふ心そのものが既に呪はれた凡愚の成心である。今童心の尊ぶべき所以を知つた彼等をして、自らの中に残る童心を生涯に亘つて持ちつづけて行かせたい。本課はその爲に反省に資すべき絶好の機會として取扱はるべきである。

2 參考

(一) 原著「洗心雜話その三」には本課の他に左の冒頭の一節と逸話二つが載せられてゐる。

1 聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男・童女、二に手鞠、三にお彈き。これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供達と遊ぶことが、またどんなに嬉しかつたかが思ひやられる。

その良寛様も、子供たちには随分ばかにされて盛んになぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一生懸命に遊びほれてゐた良寛様が有難い。

(此の次に本課「ある時——」の話がつづく。

2 本課第二話の次

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒たちとお彈きをして居られた。沙門良寛全傳に、「禪師頗る大勝を博して賭物のいり豆を多く得。」と書いてあるから、よほどのり氣であつたらしい。ちやうどその時誰かが入つて來た。そして、

「おや、良寛様、なか／＼あなた様はお彈きが御上手で。」

と、褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと面を赤くすると、まるで少女のやうに、さもさも恥づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源とする。

3 本課第三話の次

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも替難い、二つとない尊い天稟である。まだ榮坊が八才か九才の頃だつたといふ。或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたまた叩かれた。

「親を睨むやうな奴は鏝になるぞ。」

これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配であちらこちらと捜し索めると或濱邊の岩の上に悄然と佇んで沖の方ばかり眺めてゐた。

「榮坊どうした。」

といふと、榮坊はいはく、

一〇 良寛さま

「おらまだ黙にならねえか。」

黙になるといはれたので、ほんたうに黙になると思つて、一心に海を視つめて顧へてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

二 手毬つきつつ

良 寛

一 解 題

1 作者

良 寛 リヤウカン 俗姓は山本氏、幼名を榮藏といひ後文孝と改め、字を曲まがといつた。寶曆八年越後國三島郡出雲崎町の名主、俳人山本以南の長子として生まれた。以南は諱を伊織と言ひ、嘗て京師に遊び朝廷の式微を慨いて「天事録」を著し、悲憤水に投じて死んだ人である。良寛また幼にして穎異、流俗の事を好まず、長じて寡欲恬澹、十八歳(安永四年)の時家を弟由之に譲り、尼瀬町(今出雲崎町の一部)の漕洞宗光照寺住職玄乘破良和尚に隨つて剃髮し、自ら良寛と稱し大愚と號した。二十二歳(安永八年)北越に行化した備中國玉島圓通寺の國仙和尚の徳を慕ひ、伴なはれて玉島に赴き、留ること十七年、刻苦具に嘗め、修道研鑽につとめた。天明八年國仙隱居の後、玉島を根據として飄蓬の旅を重ね、遍く天下の大徳碩學を訪うて其の心情を磨いた。師國仙示寂の後、寛政七年玉島の地を去り、京都で父以南追善の法要に列し、高野に詣で近江路より北陸を経て歸國した。尙郷里出雲崎には歸らず、郷本(寺泊町の中)の空庵、中山村の草庵、寺泊町照明寺の密藏院、野積村の西方寺、國上村の本覺院など轉々不住、更に海内の行脚をつゞけた。四十七歳(文化元年)郷里國上山に五合庵を結んで起臥すること十餘年、老軀病弱薪水の煩の爲に山を下り、山麓乙子洞畔の小庵に移つた。時に文化十三年五十九歳であつた。ここに留る事十年、病弱愈々加はり、六十九歳(文政九年)島崎村木村元右衛門の好意によつて、その裏庭の小舎に移り、住すること六年、天保二年正月病歿した。享年七十四。

一一 手毬つきつつ

性澹如、弊衣垢軀を厭はず、奇行の甚だ多かつた事は前課にその一二の例を示す通りである。また萬葉風を喜んで良寛獨特の歌を読み、寒山の詩風を好んで平易枯淡な詩を作り、草書に秀でて滑脱圓滿な氣韻に満ちた獨自作を遺してゐる。自ら書を著すことはしなかつたが、後人の編纂になる詩集・歌集・傳記の類が頗る多い。

2 出典

良寛の詩歌を編輯したものは「良寛全集」(大島花束編)、「良寛全集」(良寛會編)、「良寛歌集」(小林二郎編)、「良寛詩集」(大宮季貞編)、「良寛和尚詩歌集」(相馬御風編)等頗る多い。

本課は大島花束編「良寛全集」に據つた。本書は詩歌・文章・書簡・逸話・傳記等全般に互つて輯録し、良寛集としては最もよくまとまつたものであらう。昭和四年岩波書店發行。

尙本課の長短歌は國歌大系第十七卷「良寛歌集」にも採録されてゐる。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課に連絡して、良寛の聖心的童心のおのづからなる流露とも言ふべき歌を採録した。前課の逸話を素地にして萬葉張と言はれるその眞素樸なる歌境に味到せしめ、併せて短歌に對する親しみの機會を與へ、且その鑑賞力の伸長に資せん爲の文藝的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【冬ごもり 春さり來れば云々】

この歌は「手毬をよめる」と題した長歌であり、設立つ

長き春日を子供らと手まりつきつゝ今日もくらしつといふ反歌が添へられてゐる。

【冬ごもり】(一)冬ごもること。冬季、家・巢または土中

などにこもつて外へ出ないこと。(二)「春」にかゝる枕詞。生物はすべて冬はこもつてゐて、春になると張り出るので、「はる」に言ひかけたのだといふ。こゝは(二)の意。

【春さり來れば】「春になつたので」の意。

【さり來れば】「しあり來れば」の約音で、「し」は指示する意のある助詞であると言はれてゐる。「夕さり」(日暮方・黄昏)はこれと同類の語。要するに「さる」は「來る」「至る」等の意で、「春さる」「夕さる」などと熟して用ひられると「……に成りゆく」の意となる。

【飯乞ふと】イヒコふと 食物を貰つて歩かうと思つて。即ち「托鉢してまはらうと思つて」の意。良寛が絶えず托鉢して歩いた事は周知の事、彼の歌の中には飯乞ふ歌がかなり多くある。参考欄に摘出して置いたから就いて看らねたい。

【と】は、こゝでは、「とて」「として」「と思つて」などの意を表す助詞。

【草のいほり】草庵。草葺の小屋。

【いほり】は、「いほ」ともいふ。草木などを結んで造つた小さい家。又僧の假家。草屋。

【里にい行けば】「村里に行く」との意。

【行く】の「い」は發語の辭。「行く」と同意。

【玉ぼこの】「玉鉾の」「玉杵の」「玉矛の」など書く。「道」にかゝる枕詞。

「玉ぼこ」は玉の飾ある美しいほこ又はほこの美稱で「玉ぼこの」が道にかゝるのは、古出征の將に矛を賜うたに因るのであるといふ。後に節刀を賜つたのはこの遺風であらう。

【道のちまた】道のわかれる處・つち。

「ちまた」は(一)「ち」は道の意で道の「また」(股)となつた所。わかれみち。つち。(二)往來。往還。(三)水路の分岐點。(四)所。場所。こゝは(一)の意。

【春べ】春と同意。「べ」は「方」に當り、頃・方向などの意を表す接尾語。

【今を春べと】「と」は「飯乞ふと」の「と」と同じく指し定める機能を有する助詞。

【手毬】テマリ「手鞠」とも書く。玩具の一種。まるめた綿を心とし、上を彩絲で縫ひかがつて飾つた毬。掌で地に打ちかへして弄ぶ爲に手毬といひ、かく弄ぶことを「手毬つく」といふ。今は大概護謨製の毬を用ひる。

【ひふみよいむな】「一二三四五六七」

【汝がつけば】お前が手毬をつけば……の意。前には「子供等が」と客觀的に述べられてゐたが、こゝではその子供が既に對稱の位置に近づいてゐる。

【吾はうたひ】 子供が手毬をついて遊ぶ時には唄をうたふ。これを「毬つき唄」といふ。子供が手毬をつく時良寛がその唄をうたつたのである。こゝでは「毬つき」を介して良寛の境地は全く子供のそれに融合してゐる。

【吾がつけば汝はうたひ】 これは前の「汝がつけば吾はうたひ」をうけて良寛が子供の世界に融合した姿を一層緊密に表現してゐる。

【つきてうたひて】 こゝではもう誰がつき誰がうたふといふ區別がない。子供と良寛とは全く融合してゐる。

【暮しつるかも】 暮してしまつたことよ。

【つる】 は完了の助動詞「つ」の連體形。

【かも】 は感動を表す助詞。感動の助詞「か」と「も」との合した語で、主として奈良朝以前に用ひられ、平安朝に至つては、専ら「かな」が用ひられた。

歌意は「草庵に閉ぢ籠められた永い冬が去つて、春が来たのでまた托鉢にまはらんものと、いほりを立ちいでて里に下つて行くと、道のちまたに集つて今こそ我等が春とばかりに子供らが手毬をついて遊び興じてゐる。子供好きの自分は、行脚のことも忘れて仲間入りしてしまふ。子供がつけば吾が歌ひ、吾がつけば子供が歌ふ。歌つてはつき、ついでに歌ひ、霞たなびく永い春日を終日手毬をついて暮してしまつたことよ。」といふのである。

「一に童男童女、二に手毬、三におはじき」と三好に數へられた、その好きでたまらぬ童男・童女と手毬遊びに興ずる良寛の歡喜の姿である。その喜びは手毬のそのやうにはずんで、自ら浮き浮きとした輕快な律動が全體に流れて、全く子供になり切つてゐるあどけない良寛の姿を髣髴させるものがある。細かく言へば、初め五七調で續けられた前奏的な調子の中に、既に春を讀へて心は輕く浮いてゐるのであるが、それが「汝がつけば」で一轉して「五五」の圓滑輕快な韻律的な調子に變り、良寛の我を忘れて歌ひつき惚れる無邪氣さと、その喜びが躍動してゐる。「つきてうたひて」の七音からまた一轉し七五調の一句を隔てて咏歎的な「暮しつるかも」の七音で歌ひ收められた結句は、日暮れて子供等の散り去つた後に残された良寛の甘い追想の表現で、今までの樂しさを尙心に抱いて、それに何時までも浸りつゞけてゐるかのやうな餘韻が籠つてゐる。まことに良寛の面目躍如たる童心の溢れたなつかしい歌境が示されたものである。尙この長歌の未定稿と思はれる作品を次に採録する。比較してみると興味深いものがあらう。

梓弓、春さり來れば飯乞ふと 里にい行けば
里子ども 道の巷に手毬つく 我れも交じりぬ
そが中に ひふみよいむな 汝がつけば

吾は歌ひ 我が歌へば 汝はつきて つきて
歌ひて 霞立つ 長き春日を 暮しつるかも
霞立つ長き春日を子供らと手毬つきつゝ此の日
暮らしつ

【我が待ちし秋は來ぬらしをちこちの草むらごとと蟲の聲する】

次の歌と共に「秋」の部より採つた。良寛の心境に秋が最も親しみ深かつた事は當然であり、従つて秋の歌には殊に優れた作が多いのであるが、中にも秋を待つ心を歌つた歌はかなり多く見出すことが出来る。(參考欄参照)

【來ぬらし】 來たらしい。

【ぬ】 は完了の助動詞。「らし」は推量の助動詞。輕く推し測り定める意を表す。即ちさだかには解らないが、十中八九はさうであらうの意。

【をちこち】 (一) あちらこちら。こゝかしこ。そちこち。

(二) 昔と今。現在と將來。こゝは(一)の意。
歌意は「心をとめて聞けば、こゝかしこの草むらに蟲の聲がする。待ちに待つた秋が愈々やつて來たらしい」といふので、耳を澄まして聞く蟲の音に、秋の到來を感じた驚と喜びとの咏歎である。如何にも清純閑雅な心境から滲み出たといふ風な歌境を示してゐる。まづ打ちつけに「我が待ちし」と秋への期待を詠ひいで、その期待が

「秋は來ぬらし」といふ靜かな満足感に續いて行く。五七の調がよく利いてしつかりと坐つてゐる上に、「待ちし」と「來ぬらし」との清澄な感じを表す「し」音に終る句の連續から受ける感じは、其の喜を内に湛へて靜かに澄んだ境地である。良寛はその靜けさの中にをちこちに耳を傾けてゐる。「草むらごとと」は初めてきく蟲の音に驚く良寛の感情の高まりを稍強く表現した一句ではあるが、こゝでもその感情は靜かに内に燃焼して「蟲の聲する」と流れるやうになだやかな調で歌ひ收められてゐる。一讀極めて平凡な一首が、實は秋の情趣を映す良寛の心境をそのまま現して、沁々と胸に沁み入るものがある。

【いざ歌へわれ立ち舞はむぬば玉のこよひの月にいねらるべしや】
秋の部より採つた。

【いざ】 人を誘ひ、又は事を始めようとする時に用ひる感動詞。さあ。どれ。いで。

【ぬば玉の】 轉訛して「うばたまの」「むばたまの」とも言ふ。もと「黒き」にかゝる枕詞。轉じて「夜」「月」「夢」「暗」「寝」などにもかゝる。「ぬばたま」は射干カサネの實で、圓く黒いので「黒き」にかゝる枕詞となつたのだといふ。「からすあふぎ」は、一名「ひおふぎ」と言ひ、鳶尾科の多年生草本。山野に自生し、高さ一米内外。葉は廣い劍

狀に密生し、檜扇を開いた形に似てゐる。夏日葉間から長い花莖を抜き、梢に多くの小枝を分ち、黄褐色の斑點ある六瓣花を開く。蒴果は長さ三厘内外、内部の黒色の種子が即ち「ぬばたま」である。

【寝ねらるべしや】 文法上、寝ね（動詞ナ行下二段活用）らる（可能の助動詞終止形）べし（推量の助動詞終止形）や（疑問の助詞）

月夜友と酒汲み交すうたげの席でもあつたのであらうか。「この明月の夜をどうして惜しげもなしに寝られよう。さあ歌ひなさい。私が舞ひませう。」といふのである。如何にも調子が濺瀾として、感情の卒直に表現された歌である。「いざ歌へ」と誘ひ、「われ立ち舞はむ」と續く、浮き浮きと弾んだ調べは、良寛の蔽ふ所なき、純眞な心のさながらなる流露で生々とした喜びが溢れてゐる。「ぬば玉の」の枕詞も極めて自然であり、「こよひの月に」はまた實によく利いた一句であつた。月の明さを言はずして、照り溢れる月光を眼に描かしめ、「いねらるべしや」の主觀的表現も此の一句に生かされてゐるかに思はれる。これはまた靜寂に住した良寛にみる明るく懐しい一面である。童男・童女を最愛の友として遊び過した童心者良寛は、またあらゆる人に接して春風の如きやはらぎをもたらし、常に幼兒の如く無邪氣に純眞に振舞

ふのであつた。尙これと同様の心境を吐露した歌には参考欄に載録したやうな作がある。ついで見られたい。

【又も來よ柴の庵をいとはずばすすき尾花の露をわけつ

2】 良寛の晩年の友、若き尼僧貞心との贈答の歌で、貞心尼の手録「蓮の露」にも見えてをる。（参考欄参照）

「貞心尼」は越後國長岡の藩士奥村某の女で、同國の醫師小出某に嫁したが、幾歳ならずして夫に死別し、深く人生の無常を感じて柏崎洞雲寺の泰禪和尚に従つて剃髮し、同地の不求庵に住し、明治二十五年二月、七十五歳の長壽を保つて歿した。

良寛との交りは、良寛が七十、貞心尼二十九の時以來で、この若き尼僧は、當時既に考弱の身を島崎村木村氏の裏庭の小舎に寄せてゐた良寛を訪れてはその心を慰めたのであつた。良寛の歿するに至るまで僅か五年間に過ぎなかつたが、併しその交情の如何に清く温かであつたかは、その手録「蓮の露」の贈答歌によつて窺ひ知ることが出来る。（参考欄参照）

此の歌は、嘗つて良寛を訪れ、物語に夜を更しての歸るさに、貞心尼が詠んだ次の歌の「返し」である。

立ちかへり又もとひ來む玉鉾の道のしば草たどりたどりて

【柴の庵】 シバのイホリ (一) 柴葎の粗末な家。むさくろしい家。(二) 我が家の謙稱。こゝは(一)(二) 兩方の意味を併せ持つてゐる。

「柴」は、山野に生える小さい雑木。そだ。しばき。「芝」と混同せざるやう注意すること。

【こゝとはすば】 いやでないならば。

「こゝとはすば」は「厭ふ」と書く。(一) いやに思ふ。きらぶ。いやがる。(二) 此の世をきらぶ。(三) いたはる。かばふ。こゝは(一)の意。

【すすき】 「薄」「芒」とも書く。禾本科の多年生草本。毎年宿根より新芽を生じ、高さ二米に達する。葉は線狀で尖り、縁邊は極めて粗糙、葉鞘は莖を抱く。秋莖頂に多くの花莖を出し、各花莖の各節に披針形、黄褐色の小穂を總狀花序に配列する。總苞は毛が多く生じ、白色を呈し、絹絲狀をなす。護穎は披針形で先端に長芒を有する。秋の七草の一。莖葉は屋根を葺くに用ひる。

【尾花】 ヲバナ すすきの花穂。はなすすき。その様子が獸の尾に似てゐるのでいふ。

【すすき尾花の露】 「すすきや尾花に置く露」又は「すすき

の花に置く露」などと解されさうな所だが、此處は簡單に「すすきの原に置く露」位に解した方がよからう。「尾花」は語調を整へる爲に添へられたのであらうが、併し「すすきが原に」では味はない。秋草の野の味は「すすき尾花」であらう。

歌意は解するまでもなく明瞭で、要するに若き尼僧貞心への温い心づかひの吐露である。うら若い身でみすばらしい草廬に而も老ひさらばうた自分を訪ふ貞心の心根が、堪らなく嬉しかつたと同時に、良寛らしい氣はづかしさや寂しさがあつたであらう。「又も來よ」と強く歌ひ起しながら、すぐ「柴の庵をいとはずば」と、吐息を漏らすかの如き低調に沈んでしまつたのはその爲である。それが下句の「すすき尾花の露をわけつつ」といふ心遣ひとなつて現れたのであつた。

この歌はかうした二人の温い交情を背景にして味はふ時、言ひ知れぬ興趣があるのだが、併しそれを措いて朗誦しても、何處か民謡風な素朴な眞實性が籠つてゐる、平凡なやうで捨て難い魅力を持つた歌である。

三 備 考

1 指導研究

(一)前課良寛の逸話が、實は良寛の作詩作歌の精神の根柢を明にせん爲に物語られたものである事は既に述べた通りであるが(前課指導研究欄参考)誠に、良寛の歌は、そのあどけなさ、正直さ、無邪氣さ、まことの篤さの自らなる流露であつて、それは淨業の餘事ではあつたかも知れないが、併し決して遊びではなく、生活そのものであり内なる魂のまことの聲であつたのである。

前課の逸話を此處ではその觀點を變へて作者の意圖のままに取上げ、良寛の歌がその聖心的童心の所産である事を明確にすることは、本課鑑賞の根柢を確立することになるであらう。

(二)良寛の歌は萬葉張りであると言はれてゐる。その素朴さ・卒直さ・純眞さには、誠に萬葉人の風格を偲ばしめるものがある。併しそれは萬葉の模倣ではなく、永い禪的修業といふ熔爐の中で洗煉され、醇化され、淨化され還元された素樸さと眞實性とであつて、良寛の境地は萬葉人の心と相通ふものだったのである。従つてその措辭は平明であり、その調は淡々として、一讀極めて平凡である。此處に良寛の歌の鑑賞上の戒心の必要が存するのである。淺く讀めば單なる即興的な面白味に終り、深く讀めば、それが童心の發露であり、素樸眞實なる姿であり、内なる魂の歌である。此の點特に注意して、反復朗誦多少なりとも良寛の歌の眞實に觸れしめたいものである。

(三)便宜上僅かに長歌一、短歌三を採録するに止めた。併しこれだけでは全く良寛の歌の片鱗を窺ふに足るだけであつて、この少數の歌の慎重且徹底的な取扱を基礎にして、時間の許す限り補材を加へてより多くの歌を鑑賞せしめたい。それは勿論良寛の歌の眞實に觸れる爲ではあるが、同時に良寛の歌の平明さは、此の年齢の生徒にとつては比較的理解し易く、短歌鑑賞力を伸ばす上にも、適當であると思はれる。此の爲には参考欄採録の和歌などを利用せられたい。

2 参考

(一)良寛の歌を次に採録する。

(イ)飯乞ふ歌

飯こふと我來にければこの園の萩の盛にあひにけるかも
飯乞うてわれこのやどに過ぎしかばはぎのさかりにあひにけらしも
飯乞ふとわれ來て見れば萩の花みぎりしみみに咲きにけらしも
飯乞はむ眞柴まにまにやらむ昔清水時雨のあめのふらぬそのまに

(ロ)秋待つ歌

わがまちし秋は來にけり月草のやすの河原に咲き行くみれば
わが待ちしあきは來ぬらしこよひしも絲引虫のなきそめにけり
わが待ちし秋は來にけり高砂の尾上にひびく日ぐらしの聲
わが待ちし秋や來ぬらしこの夕くさむら毎に蟲のこゑする
この夕秋は來ぬらし我が宿のくさのまがきにむしのなくなる

(ハ)月の夜の歌

思ふどち門田のくろに圓居して夜は明かしなむ月の清きに
かぜはすゞし月はさやけしいざこども踊りあかさむ老のなごりに
月雪はいつは有れどもぬば玉の今日こよひのこよひになほしかずけり

(二)貞心尼の「蓮の露」より良寛との贈答歌の一部を抄録する。

初めてあひ見奉りて

君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かとぞおもふ

一一 手紙つきつ

貞心尼

御返し

ゆめの世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまに

真寛

いとねもごろなる道の物語に夜も更けぬれば

白たへの衣手さむし秋の夜の月なからにすみわたるかも

貞心尼

されどなほあかぬ心地して

向ひて千代も八千代も見てしがな空ゆく月のことはずとも

貞心尼

御かへし

心さへかはらざりせばはふ葛のたえず向はむ千代も八千代も

真寛

いざかへりなむとて

立ちかへり又もとひ來む玉銚の道のしは草たどりたどりに

貞心尼

御かへし

またもこよしばの庵をいとはずば薄尾花のつゆをわけつつ

真寛

ほどへてみせうそこたまはりける中に

君や忘る道やかくるゝこのごろは待てどくらせど言づれのなき

真寛

御かへしたてまつるとて

事しげきむぐらのいほにとぢられて身をば心にまかせざりけり

貞心尼

(三)大島花束編「良寛全集」より「良寛の藝術」の一章を次に採録する。

藝術がある限られた人々によつてのみ味ははれ又守られる時代でもあるならば、又さうした本質のものであるならば、それが如何に尊いものであつても世の常の人々には關りのない又無用な、しかも碍けである。

之を味はうとさへ思へば心の品によつての相違はとにかく、誰しも味はひ得るもの、創作し得るもので寧ろ本質的に生活と密接するものであるならば、更に生活そのものが藝術であるならば心の生活の豊かな句は、藝術の様式に潤となつて匂ふに到るであらう。かうあつてこそ藝術も人生に意義があり、それ自身にも價値があるものとなつて來る。

真寛の藝術は淨業の餘事であつたかも知れぬけれども生活そのものであつた。遊戯でなくて眞剣であつた。人の生活から取り放した藝術も宗教もない。宗教も藝術も皆人の生活に依つて來た、同じい生活の様式でなければならぬ。特に真寛の藝術も宗教もさうであつた。

形式は魂の表現の方便でさへない。それに拘つて、これでなければならぬあれでなければならぬとやうに思ふものは、この自然の示す深い意味靈妙な人事の奥に潛む大きな意義を自分の小さな貧しい心ではかるものであつて、影のみを追つて益々眞相に遠ざかり一隅を見て全體と誤り見るものである。眞に自己を知り自己を愛し、人を知り人を敬し、自然の惠を思うて之に憧るゝ人であるならば、形式は自ら其人に具つて來るのである。真寛のとつた形式は即ちこれであつた。

かれの修養が廣かつたからでもあらう、その心が豊かなせひもあらう。その思想と感情との表現は、其の盛られた内容によつて或は漢詩となり或は和歌俳句となり狂歌俗謡となつて、くさんくの色どりをなしてゐる。

かれの漢詩は彼だけの漢詩である。これを形の上からのみ見たならば可なりの悪詩もあるであらう。しかしそれは彼の詩としての碍ではない。

歌も所謂萬葉張りであつた。しかも大きな溶爐によつて洗煉された真寛の萬葉張りであつた。萬葉の遺響ではなくて萬葉詩人の心と真寛の心と一つであつた。措辭は山もなくかけ引きもない平淡であつた。大河の物言はずして流るゝやうに、高山の黙つて物を蔽するやうな趣をなした。よく禪門の坊さんたちが詠んだといふ歌などには、何だか自分獨り悟つたやうな、あまりびつたりもしない寓意をほめかした下手な教訓歌が多い。これといふのもさうした人は唯自分の守る教又自分の見た心の姿、其の心で見た世間の相ばかりを見て廣く深く深く人生の在りのまゝの生活の有様に思を潛めないからであらう。それが即ち藝術味のないものとなつたのであ

る。良寛の歌はさうではなかつた。多く作は残らなかつたが俗謡にも彼は非凡の作者であつた。そしてそれは人の心を揺り動かすやうな、盆踊をする若い人たちの口の端にかゝつて歌はれてもおもしろいものであつた。盆踊の好きな彼は踊りながら口ずさんだかも知れぬやうなものであつた。

以南を父とした彼の俳句には可なりよいものがあるやうであるが、即興を主とした作が多くて打ち込んだ所が足りないやうに思はれる。敘情詩人としての彼の性格は、俳句の方ではその長足を伸ばすことが出来なかつたらしい。

詩や歌は皆彼の眞生活をじつと見つめて書いたものであるが、彼の心そのものに運動を興へたやうに見えるものは書である。のんびりとして拘りのない、すんなりとして滞りのない點と形と位置と飛び動いて止まない勢、住まつて走らんとする姿、良寛の豊かな人格と明かな心性と深い思索とが彷彿として眼の前に現れて来るのを覺える。彼の書が正書より草書に更に假名書に於いてその妙を極めてゐるはその人格にふさはしいものである。

彼の書は幾度かの變遷はあつたであらう。王羲之についた時代、道風の秋萩帖を摹した時代、懷素の自敘帖を習つた時代もあつたであらうけれども、それは何も自分がそれ等の人を眞似るためではなかつた。それ等の人の心をかりて自分を伸ばさうとしたものであつた。彼の遺墨を見るものは捉へられない彼獨特の終始一貫の書體を見ることが出来る。

彼は繪も描いた。好んで綱體を書いた。その繪には脂粉の氣はなく頗る枯淡なものではあるが、しかしすぐれたものではない。彼のような簡素な生活には繪といふやうなものは適しなかつたものであらう。

三野 猿

長尾 宏也

一 解 題

1 作者

長尾宏也 ナガヲヒロヤ 明治三十七年一月十日岡山縣川上郡吹屋町に生まれた。後上京して東京青山學院高等科人文科に學び、更に、私塾百姓愛道場に學んだ。そして、昭和七年に長野縣霧ヶ峯(標高一六〇〇米)に、高地農業研究所を創設して、現在に到つてゐる。著述としては、昭和九年「山郷風物誌」を、昭和十年「山の隣人」を出版し、昭和九年には此の他に、ボンセルスの長篇童話「蜜蜂マアヤの遍歴」を翻譯出版してゐる。特殊な風格を備へた作者の姿は、これ等の著述からも十分に汲み取り得るものがある。旅行と炭焼きがその趣味であると氏は述べてゐる。

2 出典

「山の隣人」から採つた。「山の隣人」は昭和十年十月出版せられた作者の山郷風物誌である。「無人の牧場」「山の隣人」「鳥獸理性譜」「山のたより」などの十五篇に分れ、更に各篇はそれぞれ二三の小話からなつてゐる。本課は「山のたより」の中「えんこの川干し」の殆ど全文を採録したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

人煙を絶した深い秋の山に展開される原始さながらの不思議な景趣である。山を住家とし、山を友とし、山を愛する作者は、この特異な風物を描いて、詩趣溢るる一篇の山郷の賦をなしてゐる。清新な句高い山の讃歌とも言ひ得よう。この

點を鑑賞味到すべき文藝的趣味的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【野猿】 エンコ・(或はヤエン) 猿猴類の一種。我が國北青森から本州・四國・九州に達し、南は屋久島に至り、深山の密林中に群居棲息する。體長九〇乃至一二五種、一様に暗褐色で、尾は甚だ短く、顔は裸出して赤く、赤い髯がある。五指を備へ、前肢は後肢より長く、眼は左右相接し、鼻は扁平で頬に食物を一時蓄へておく頰囊を有する。性伶俐狡猾、巧に模倣をなし、よく木に上る。えて・ましらの異名がある。

本課では「エンコ」の讀假名がつけてある。これは「猿猴」の約訛で、「野猿」をよぶ地方的呼稱である。(參考欄参照)

【猿猴】は哺乳類・靈長目、猿猴類の總稱で、さる・しやうじやうの類をいふ。

【漂泊者】 ワタリモノ 所定めずさすらひ歩く者。

「ワタリモノ」は、もと「渡者」と書き、「わたりん」又は略して「わたり」ともいふ。往時、若黨・仲間・小者などの年時を定め轉々として、主家を變へて奉公する者、

即ち渡奉公をする者の謂であつたが、後轉じて本課のやうな意味に用ひられるやうになつた。本課「漂泊者」に讀假名を附したのはこの意の宛字の故である。

【あさる】 (一)探しもとめる。(二)魚介類をとる。(三)餌をさがしてあるく。こゝは(三)の意。

【流して歩く】 ナガしてアルク さまよひ歩く。めぐり歩く。

「流す」はもと藝人が三味線を弾き、按摩が笛を吹きながら客を求める爲に巡行することを言ひ、轉じてさまよふ。巡り歩くなどの意となつたもの。

【野猿は山の漂泊者だといふ。二三匹から、大きいものになると百も百五十もつらなつて、群をなして餌をあさつて山を流して歩くからだ】

「えんこ」と呼び「わたりもの」といふ地方的呼稱を提示して、先づ別天地的氣分をほのめかし、その言葉の意味する異様な山の光景を説明して、讀者の興味をそゝつてゐる。巧妙な起筆である。

【晩夏】 パンカ (一)夏の末頃。(二)陰曆六月の異稱。こ

こは(一)の意。

【初秋】 シヨシウ (一)秋のはじめ。(二)陰曆七月の異稱。こゝは(一)の意。

【歌を失つてゐた】 「歌」とは「鳥の聲」をさす。盛夏酷暑の頃は鳥も鳴かずひつそりと静まりかへつてゐた山の状態をかく形容した。

【奥地】 オクチ 奥深く入つた地。海邊から遠く隔つた地。こゝは山の奥を指してゐる。

【叢林】 ソウリン (一)樹林のむらがり立つ林。(二)佛語として僧侶の集まり住む所。檀林。僧林。禪林。こゝは(一)の意。

【奥地の叢林に、流れ入る明るさが晴れ晴れとなつてくる】 秋になつて木々の下葉が枯れ落ちてすきすきとして來る時、空氣は沓え、陽光は澄んで、夏の間鬱蒼として暗かつた叢林の中が晴れ晴れと明るくなる。これを「流れ入る明るさが晴れ晴れとなつてくる」と言つた。巧妙な表現である。

【つぐみ】 「鶉」と書く。燕雀目鶉科の小鳥。アジアの北東部を繁殖地とし、秋我が國に飛來して春はまた歸つて行く渡り鳥であるから「北方のつぐみ」と言つた。(三・岡に立つて・二七頁四行既出)

【北方のつぐみが、木の葉の黄金色になつてやがて舞ひ落ち

るのを見にやつて來る】

つぐみを擬人化して、その「渡り」を落葉を見物に來るのだと言つてゐる。簡潔な言葉の底に親愛の情が溢へられて、言ひ知れぬなつかしさをそゝるものがある。

【雉鳩】 キジバト 鳩類に屬する鳥。頭頸は葡萄酒色で、頸側には黒灰青色の鱗狀斑紋がある。肩と雨覆羽の大部分は黒と赤茶色。腰は灰黒色で、尾は黒褐色を呈し、末端は灰白色。胸以下の面は赤茶色、嘴は褐色で脚は赤い。常に雙棲し、粗糲な巢を樹上に營む。容姿可憐、鳴聲に特異性があるから飼鳥として愛養される。所謂本邦普通の山鳩である。

【山しぎ】 「山鶉」と書く。鶉型目鶉科に屬する大型の鳥。翼長約二十種。嘴は柔軟で著しく長く、體の上面は大體赤褐色で斑紋が多い。主として林中に棲み、肉が佳味なため獵鳥として貴ばれる。

【谿】 タニ 水なきを「谷」といひ、水あるを「谿」といふ。また一説に水が山より出でて川に入るを「谿」といふ。

【山郷】 サンキヤウ 山里。山邑。

【秋の歌聲】 アキのウタゴエ 秋なく鳥の囀りをいふ。前に「ひと時歌を失つてゐた」とあるのに應ずる。

【活氣づける】 クワツキづける 生き生きと元氣づける。

威勢よくさせる。活氣づけられるのは山郷、活氣づけるのは鳥の歌。

【つぐみにつづいて、雉鳩だの山しぎの群が峯を渡り谿にありて、山郷はここに秋の歌聲がひびき活氣づけられる】
山を住家とし、山を友とし、山の風物に限りない愛を傾けてゐる作者にとつては、つぐみも雉鳩も、山しぎもここに去來する鳥や獸のすべてが同じ山の住民たちである。その氣持が「山郷」といふ言葉に現れてゐる。この奥地を山郷と呼ぶ作者は、鳥の囀りを私の歌聲ときく。作者の心からなる喜びの溢れた章句である。「峯を渡り谿に下りて」といふいひ方もうまい。

【雁】 カリ「鴈」とも書く。游禽類の鳥。嘴と脚とは黄色、體の上部は茶褐色、下面殊に胸部に黒斑を有する。頭長く、嘴は軟皮を被り末端のみ硬く、脚は短く、前一趾間に蹠を張り、後趾は小さい。秋北國から來て、海邊・池沼に棲息し、春また北國へ去る。其の聲は悲哀の情を催すから、古來多く詩歌に詠まれてゐる。がん。かりがねの異名がある。

【飛翔】 ヒシヤウ 空中をとびかけること。(四・渡り鳥・三五頁一行既出)
【雁の飛翔が蒼い天空に浮き出す】
勿論「飛翔する雁」が天空に浮き出すのであるが、飛翔

【瑠璃色に澄んだ高い天空の風の流の中へと、身をゆだねるために舞ひのぼる小鳥たち】

舞ひ上つては風に流され、また飽くことなく舞ひのぼる小鳥たちの飛翔を、「風の中に身をゆだねるために舞ひのぼる」のだと眺めてゐる。山の讚美に満たされた作者の心の自らなる反映で、恰も滑り臺に飽くことも知らずかけ上る子供等のあの無心にして楽しみに満ちた嬉戲の姿を、小鳥の飛翔に感じてゐるのである。

【あとり】 「鴉子鳥」「花鷄」など書く。燕雀目雀科の小鳥。ほほじろに似て、頭から背にかけて青黒色を呈し、頸・嘴は樺色。ヨーロッパ・アジアの温寒帯に産し、秋季大群をなして我が國に渡る。「あつどり」ともいふ。

【まひわ】 「眞彌」と書く。「ひわ」のこと。燕雀類の小鳥。(三・岡に立つて・二八頁五行既出)

【森の住民】 上の「小鳥たち」をさす。かういふ擬人法がこの文章には多い。これは小鳥の世界・動物の世界に同化してゐる氣持の自然の表現であらう。

【それは】 「樹の葉」を指す指示代名詞であることは勿論だが、同時に咏歎的な氣持を含んでゐる。

【お祭の着物のやうにひらひらする樹の葉】
紅・紫・黄とどりに色を變へて秋の微風にそよぐ樹の葉を、お祭の着物にたとへた。今日を晴れと一張羅を装

する雁の動的な姿を、その語の顛倒によつて靜止的にし、それが「浮き出す」といふ表現に結びついて、高く澄んだ青空を渡る雁行が、浮彫のやうにじつと動かす、一種深遠な感じを與へてゐる。

【莊嚴】 サウゴン たふとくおごそかなこと。

【金茶色】 キンチャイロ 金色を帯びた茶色。

【林はしんと深く靜まり、かゞやかしい美しさに樹の葉は打ちふるへて、莊嚴な金茶色の宮殿の中のやうになる】
燦々と照りそゞろ清澄な陽光の中に靜まりかへつた奥地の黄金色に紅葉した叢林の美しさである。空氣の冴え、日の光の輝しさ、莊嚴なまでの靜けさなど、深山の特異性を遺憾なく現してゐる。作者の筆力もさる事ながら、想像の及び難い美しさには心を奪はれるものがある。

【瑠璃色】 ルリイロ 紫色をおびた紺色。
「瑠璃」は、(一)美しい青色を呈し、黄金色の微點の散在する礦物。中央アジアに産し裝飾に用ひられる。(二)佛教で Vaidurya(梵語)の譯。七寶(金・銀・瑪瑙・瑠璃・硨磲・眞珠・玫瑰)の法華經。金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・瑠璃・瑪瑙(無量壽經)の一。(三)ガラスの古名。こゝは(一)の意。

【ゆだねる】 「委ねる」と書く。一切の處置を人にまかす。委任する。

ふ田舎祭の日の、華やかではあるが、矢張りなびてゐて、而もそれはそれはしい歡喜の中につゝんでゐるやうなあの美しさは、此の山の美觀にふさはしい譬喩であつた。

【深々】 フカフカ はなはだ深いこと。

「深々とした落葉」は、堆高く落ちつもつた落葉。

【苔】 コケ 植物學上、蘚類(すきこけの類)苔類(せにこけ・じやこけの類)の隱花植物の總稱。古木・石・濕地に生じ葉・莖の區別が判然しない。

「苔の敷物」は敷物をしきつめたやうに一面に地肌を蔽つた苔の隱喩。

【夢の國】 ユメのクニ 夢の中に現はれる國。夢に見るだけで現實にはあり得ない國。

冴々と明るく美しい、併しそこには不思議に物音といふもののないひつそりと物靜かな世界さういつた自然世界を我々は屢々夢の中に描くものである。

【山の幸の實】 ヤマのサチのミ 山の獲物である木の實。

「山の幸」「山幸」は「海の幸」「海幸」に對し、もと狩獵によつて得た鳥獸をいひ、こゝは轉じて、單に山で得られる獲物の意に用ひた。

【野猿たちは柔かく深々とした落葉や苔の敷物を踏み、夢の國のやうに靜かな技を渡つて、山の幸の實をあさつて流してゆく】

山郷に秋の歌はこだまし、樹の葉は金茶色の宮殿のやうに輝き、飛來する小鳥たちは自由に嬉々として遊びほける。この秋の山を背景にして野猿は登場して来る。野趣などといふは及ばない。人寰を離れた、まこと夢の國そのものの如きこの光景は、作者の澄徹した筆致と共に、山の奥地の不思議な情調に讀者を誘ひ入れずにはおかならぬ。

【回想】 クワイサウ 過去の事を思ひめぐらすこと。思ひ出にふけること。

【息づく】 イキづく ためいきをつく。歎息する。

【金紫色】 キンシシヨク 黄金色を帯びた紫色。

【野葡萄】 ノブダウ 葡萄科の多年生攀緣藤木。全株に細毛を散生する。葉は長柄を有し、圓い心臟形で、三乃至五裂し、更に凹刻を有し、縁邊に鈍鋸齒がある。卷鬚は二分する。夏日小形淡黄綠色の五瓣花を聚繖花序に配列し、花後球形の漿果を結び、熟すと紅白紫碧等混交し、濃色の斑點を有する。食用にはならない。へびぶどう・うまぶどう等の異名がある。

【夏の回想にしばしば息づいてゐるやうな金紫色をした野葡萄の葉かけ】

濃紫色の上に金粉を散らしたやうな黄葉しかけたあの野葡萄の葉の色彩感と、その廣葉の落す陰翳からうける感開く。雌雄同株。柔荑花序をなして下垂し、果實は堅果で二枚の翅を有する。材は黄白色の光澤を有し、下駄・燐寸の軸木・經木等に製せられる。かはぐるみ・こぐるみ・かるめ等の異名がある。

【嵐】 アラシ 普通、荒い風、吹き荒ぶ風の意で、轉じて「暴風雨」の意に用ひられる事もある。併し文選の註に「嵐山風也」とあるをみれば、もと山を吹く風の意と解されてをり、こゝはこの意で用ひられてゐる。

【はじける】 成熟してわれる はぜる。

【愉しみ】 タノしみ 心のやはらぎたのしみ。たのしみよろこぶ。

「樂」は「苦」の反對語で、心に苦惱のない状態。

【山柿】 ヤマガキ 「猿柿」又は「信濃柿」ともいふ。柿の原種とも言ふべきもので、樹葉は常の柿のやうで、實の大きさは金柑の如く、やゝ長いのもあり、圓いものもある。霜後熟して淡黄黒色となり、甘味が出るが、多くは不熟の實を採つて柿澁をつくり、又皮を去らず乾して食ふ。葉の裏は茶色で細毛を有し、老木は材の中心部が黒色を呈し器具材として珍重される。

【山柿は遠くの峯まで赤い信號を送つてゐる】

勿論柿が赤く熟れて遠い峯々につぶらに見えることをかく言つたのである。この童話風の表現に調子がぐつと一

じを「夏の回想に息づいてゐるやうな」と形容した。幻想的な情緒が一人濃やかに滲みでて、靜かに澄んだ山の情趣の一面が實感的にとらへられてゐる。

【つぶら】 まろくふくらかなこと。まろいこと。

【たわわに】 枝もたわむほどに。たわたわ。とをを。

【熟れて】 ウれて 熟して。みのつて。(一〇・良寛さま・七六頁九行既出)

【芳香】 ハウカウ ヨいにほひ。かんばしいにほひ。

【檜】 ナラ 學名「こなら」殼斗科の落葉喬木。(二・明治神宮・一八頁三行既出)

【栃】 トチ 「櫟」とも書く。七葉樹科の落葉喬木。樹高二〇米乃至三〇米に達する。葉は對生し、大形の掌狀複葉で七枚の小葉から成る。各小葉は倒卵狀長楕圓形で、先は尾狀に尖り、脚部は楔狀をなし、縁邊に鋸齒を有する。春日、枝頂に多數の黄白花を圓錐狀に着け、雌花雄花の別がある。蒴果は圓錐狀形で三裂し、光澤ある褐色の種子を藏し、この種子から澱粉を採り、又栃餅・栃粥等を製する。材は板に挽き、又刳物に用ひる。

【澤ぐるみ】 「澤胡桃」「壽光木」とも書く。胡桃科の落葉喬木。樹高約二〇米、周圍二米以上に達する。樹皮は赭黒色で深い裂目がある。葉は互生し奇數羽狀複葉をなし、小葉は長卵形で鋸齒を有する。初夏淡黄綠色の單性花を

變して、明朗輕快な感じと、立體的な新鮮な印象を與へる。野猿たちの愉しみ―それはとりも直さず作者自らの愉悅であり、その悦びが躍つてゐるやうな行文である。

【あけび】 「通草」「木通」と書く。木通科の蔓性落葉灌木。葉は五葉が一所に着いて掌狀複葉をなし、初夏淡紫又は白色の花を開き、秋、長楕圓形の實が熟して縦に裂ける。肉は白色をなし、食用となる。

【こくわ】 原著には「しらくち」である旨註がついてゐる。「こくわ」は「しらくち」の地方的呼稱であらう。

「しらくち」は一名「ざるなし」とよぶ。獼猴桃科の落葉蔓性灌木。葉は廣楕圓形又は心臟形で先端尖り、質硬く周邊に細鋸齒があり長柄で互生する。雌雄異株。五六月頃綠白色五瓣花を聚繖花序に配列する。花後綠黄色で稍、球形の果を結び、食用に供せられる。樹皮は筏をつなぐに用ひ、蔓の基部に甘味ある醬水液を藏し、俗に之を水蔓といひ、切つて液を飲用する。

【漁り手】 アサリテ あさりとる人。「手」はこゝでは或語に添へてその事を行ふ主體をあらはす接尾語。

【豐樂】 ホウラク 物質が豊かで楽しいこと。

【宴席】 エンセキ さかもりの席。

【豐樂な宴席を谿から谿にひろげてゆく】
豐熟な山の幸の木の實を群り集り嬉々として食べほうけ

るさまを、「豐樂な宴席」と擬人化し、その宴席を谿から谿へひろげてゆくといふ。怖を知らぬ自由な別天地の享樂の姿を想像させる敘述である。

【澤】 サハ (一)地理學上、水が溜り、草の生ひしげつた低地。水草の交り生えた地。(二)多いこと、澤山(古語)。こゝは(一)の意。

【峯の七八合目】 ミネのシチハチガフメ 山の七八合目。「峯」は(一)山嶺。山頂。(二)轉じて山嶽殊に直上して鋭峻な山を指す。こゝは(二)の意。

【合】 は山を十區分した一。麓から一合二合と數へ、十合にして頂上に達する。

【笹原】 ササハラ 熊笹などの生えた原。

【笹】 は矮小な竹類の總稱。熊笹などの類。

【山人】 ヤマビト・ヤマウド (一)仙人。(二)山に住む人。又山に働く人。こゝは(二)の意で、甲信地方では一般に「ヤマウド」「ヤマビトの音便」と呼ぶ。

【高み】 タカみ 高い處。高い部分。

【祝福】 シュクフク (一)前途の幸福を祈ること。(二)キリスト教で神の恩恵を祈り求めること。(三)轉じて慶事・幸福などを祝ふこと。こゝは(三)の意。

【蒼い大空に日の光が波打ちふるへてゐるやうな静かな秋の日、高みからやえん場を見下すと、祝福の叫をあげる無

なしてたまつてゐる」程限りないのである。「たまつてゐる」は人里遠い此の溪流に游泳する、漁り手を知らぬ無数の魚を思ひ描かしめ、従つて山の深さをはつきりと印象せしめる。

【それを見つけた仔猿たちが、親猿を引つばつて流に這入る】
我々は動物園などで、親猿仔猿のあの奇矯滑稽な振舞を見馴れてゐる。この大自然の中では、それがもつと放膽に自由に振舞はれてゐる事勿論である。作者はそれを極めて簡単に略叙してゐるのであるが、その爲に却つて岩魚をみつけた仔猿の喜びの奇聲や、親猿を引つばつて行く滑稽な姿態が自由に想像されて、微笑を誘はれるものがある。

【寄干】 ヨセボシ 身體を寄せ合つて流を堰止めて川を干すのでかく呼ぶのであらう。

【川原】 カハラ 「河原」とも書く。川邊の水がなくて砂石の多い處。

【岩魚がつぎつき寄つてゐる】
「寄つてゐる」は、流に残る水溜りに寄り集つてゐるのである。「列をなしてたまつてゐる(前頁九行)と共にこの魚を漁る人のない奥地の溪流を思はせるものがある。
【はなやか】 はなばなしいこと。きらびやかなこと。

數の生きものが動いてゐる】

幽邃清澄な静けさを湛へて、燦々とふり注ぐ秋の陽光が、大氣の中に淀み打ちふるへてゐるさまは此の世ならぬ奥地の清々しい明さである。その陽光の中に、遠く原始の祝福の叫がきこえて來、そこに嬉々たる無数の生きものの宴席が望まれるのである。太古さながらの静けさと、原始の喜びの姿を見るの思ひではないか。

【饗宴】 キヤウエン 饗應のさかもり。

饗應するのは山の自然であり、饗應されるのは野猿たちであるといふこの語の持つ内容から、野猿たちが全く秋の山の自然の豐樂な宴席に我を忘れて楽しんでゐる氣持がそれとなく託されてゐる。

【掬つて】 スクつて

【仔猿】 コザル 「仔」は音シ・ジ たふ(任) かつ(克)と訓じ、俗に「子」に通じて用ひられる。

【岩魚】 イハナ 鮭科の淡水産硬骨魚。形は鱒に似て小さく、鱗は細かく、背部は暗色、腹部は淡黄紅色。體側には瞳孔大の數多の淡色點がある。體長約三〇釐。内地の山間の諸溪流に産し、肉は淡白美味である。

【岩魚がしづしづと列をなしてたまつてゐる】

溪流の瀬に逆つて泳ぎ上らうとする岩魚が、急流におされてじつと一とところに留まつて動かない。それが「列を

「はなやか」は本來視覺的表現であるが、その意味内容をとつて、こゝでは「その叫は」といふ聲の形容に用ひた。「浮き浮きと明るく歡喜に満ちてゐる」といつたやうな意味にとつたらよい。

【物見高い】 モノミダカイ 見る價值のないものを珍しがつて見る。

【キヤツキヤツといふその叫は、はなやかにまた無遠慮で、まるで小學校の遊び時間のやうに、お祭り日の山の子たちのやうに、うきうきと物見高い】

何れも巧妙適切な譬喩である。併し「小學校の遊び時間のやうに」では作者の氣持はまだ満たされないで、「お祭り日の山の子のやうに」と譬喩を重ねてゐる。慰樂に乏しい山の子たちの最大の祝福であるお祭りの日、見世物が來、樂隊がひびき、凡てが珍しく楽しく浮き浮きとする。流石に山に住む作者の視點は確かであつた。

【野はうづ】 「野放圖」と書く。ふしだらなこと。不謹慎にふるまふこと。

【ハナザル】 「端猿」の意であらうか。一群の先頭に立つて其の群を率ゐる猿をこの地方でかく呼ぶのであらう。

【守護】 シュゴ まもること。

【警戒】 ケイカイ 注意していましめること。ぬかりなく用意すること。

【足踏み】 アシブミ (一)あしどり。あし拍子。(二)足を交互に踏みつける動作。(三)轉じて出かけて行くこと。踏査すること。こゝは(三)の意。

【視察】 シサツ 事情を實地について見きはめること。

【たけなは】 「關」又は「酣」と書く。(一)物事の一番盛な時。さいちゆう。もなか。(二)少し盛を過ぎた時。衰へかけた時。こゝは(一)の意。

【僚友】 レウイウ (一)同役の友人。(二)轉じて一般友人。仲間^の意に用ひる。

【犬は綱で引とめて出さない】 獲物を発見した獵犬はその方向へ馳けて行かうとするが適當な時になるまで牽制しておくのである。

【遊び呆けてゐる】 アンビホ(ホウ)けてゐる。遊びに夢中になつてゐる。遊びに我を忘れてゐる。

【呆ける】は「惚ける」とも書く。知覺がにぶくなる。ぼんやりする。うつとりする。

【ケース】 Case。藥莢。金屬で筒のやうな形に作り、内に火薬をつめ、銃砲に装填して發射するに用ひるもの。空の藥莢を吹くと空びんの口を吹くと同じく一種笛のやうな音を發する。

【彈の空ケースを取出して吹いてみる】 次行に「劫たけた親猿は口笛を吹いて合圖をする」とある

(參考欄参照)

【待機】 タイキ (一)機會の來るのを待つこと。(二)戦場で準備をととのへて命令の下るのを待つこと。こゝは(一)の意

【一せう】 「一齊」と書く。(一)同時。(二)平等。こゝは(一)の意。

【闖入者】 チンニフシヤ 突然入りこむ者。

【驚愕】 キヤウガク おどろくこと。おどろきあわてること。

「愕」は、あわておどろくさま。

【水ぶるひ】 身ぶるひして水をふり落すこと。

【よしと、獵犬を八九頭も一せいに綱から放す。野猿は不意の闖入者のために驚愕して、水ぶるひする間もなく梢に上つてゆく。それは火事場騒ぎのやうである】

きほひ立つ出鼻を抑へられてゐた獵犬八九頭が、一齊に吠え猛る凄じさ、驚愕に右往左往して叫聲をあげる親猿仔猿、この擾亂を作者はあつさり「火事場騒ぎのやうである」といふ形容に止め、他は讀者の自由の想像に任せてゐる。この部分は次頁二行「獵犬の叫云々」以下と呼應し、その前奏的役割に立つのであるから、此の省筆はこの場合當を得たものであつた。

【親猿は手を額にかざして闖入者をうかがひ、或は枝をたわ

るから、恐らく空ケースの音が猿の口笛に似てゐるのではなからうか。恰もこちらのやえん場から眼下のやえん場に合圖の口笛を送るが如くまねて、彼等の安心しきつて遊び呆けてゐる度合など試す爲であらう。

【反響】 ハンキヤウ (一)音響が障壁にあたり、反射して再び吾人の耳に達する現象。こだま。やまびこ。(二)或事の影響によつて他にもそれに關係ある事態が起ること。こゝは(一)の意をとり、こちらで吹いた空ケースの音に對して「劫たけた親猿の口笛」(下文)の音を、その「反響」といつた。

【劫たけた】 コフたけた 「劫を経た」と同じ。長い年月を経た。年功をつんだ。
「劫」は佛語、Karma(梵語)の漢譯「劫難」の略。極めて長い年月。「たける」は(一)十分になる。(二)たけなはになる。(三)さかりを過ぎる。こゝは(三)の意。八六頁初行「遊びたける」の「たける」は(二)の意。

【劫たけた親猿は……相圖をするものがある】 正しくは「劫たけた親猿の中には相圖をするものがある」とすべきである。こゝは作者の筆癖とみたらよい。

【親猿は口笛を吹いて】 この地方に住む猿の中には、人に眞似て極めてたくみに口笛を吹くものがあると作者は原著の中で書いてゐる。

め引き寄せておのが體をかくしなど】

手を額にかざし、或は枝をたわめて身をかくすなど誠に小さかしい。かうした場合の猿の動作姿態が如何にもよく把へられてゐる。觀察の周到さと、これを裏づける實感との賜である。

【見すます】 心を落ちつけてよく見る。

【ぶつばなす】 「ぶつ」は「うつ」と同じ。「うち放す」は銃を發射することを強くいつた形。

【騒然】 サウゼン さわがしいさま。がやがやと。

【巨體】 キョタイ 大きな身體。

【もんどり打つ】 とんぼがへりをする。身を倒にしてひっくりかへる。

【統一】 トウイツ (一)一つにすべること。(二)箇々のものを一定の組織系統の下において一體を形成すること。こゝは(二)の意。

【てんでに】 「手に手に」の音便。めいめいに。思ひ思ひに。
【四散】 シサン 四方に散亂すること。ちりぢりばらばらになること。

【あわてふためく】 うろたへて立騒ぐ。
「ふためく」は(一)ばたばたと音をたてる。(二)轉じてさわぎたてる。こゝは(二)の意。

【易々】 ヤスヤス 「イイ」ともいふ。たやすいさま。「易」

を「エキ」と読む時は、かはる・變化する・改まるなどの意となる。

【撃ちとめる】(一)うち殺す。(二)戦つて殺す。こゝは(一)の意。

【ハナザルを失つた野猿の群は、もう何等の統一も指揮もなくてんで四散してあわてふためく。これをねらふ狩人は易々と撃ちとめる】

「狩人は易々と撃ちとめる」といふ事實が、統一指揮を失つてあわてふためく野猿の、騷擾混亂のさまを具象的に浮かび上らせる。軽く要點をおさへたといふ風なよく利いた一句であつた。

【手負ひ】テオひ (一)戦つて傷を負ふこと。またその者。(二)失敗者。失敗者。こゝは(一)の意。手は創傷の義、痛手の手と同じ。

【精悍】セイカン 舉動が鋭く勇敢なこと。

【一騎打】イツキウチ (一)一騎づつ並んで進むこと。

(二)敵味方の一人づつの騎士が鋒を交へて勝負を争ふこと。(三)轉じて騎乗の有無を問はず一人づつ勝負を争ふこと。こゝは(三)の意。

【血なまぐさい】(一)鮮血のにほひがする。血ぐさい。(二)戦亂の爲に死傷者が多い。世が亂れて戦争が多い。こゝは(一)の意。

るのである。従つて「秋風の韻に和して」は狩人たちの凱歌が颯々たる秋風の奏でる音楽に調和して聞えるのである。

【肌身】ハダミ はだ。からだ。

【壯絶】サウゼツ すぐれて壯大なこと。最も壯烈なこと。【獵犬の叫。手負ひ猿を包圍して精悍にも一騎打をするもの。ここに平和な山郷には血なまぐさい戦の騷亂が展開される。山と積まれた親猿仔猿、しばしつゞく犬の戦捷の喚聲。かくて二十三十、猿の骸をかついで山を下る狩人たちの凱歌は、紫紺に煙る秋風の韻に和して、肌身に沁みる壯絶なものがある】

2 文の構成

第一節 初―八〇頁三行 野猿が山の漂泊者といはれる理由を略説して全篇の序とする。

第二節 八〇頁四行―八一頁九行 野猿が流して来る頃の奥地の叢林の美しく賑やかな情景。

第三節 八一頁一〇行―八二頁六行 又その頃の豊樂な山の幸。

第四節 八二頁七行―八三頁一行 やえん場の位置とこれを遠望した様子。

第五節 八三頁二行―八四頁一〇行 寄干に遊び呆ける野猿達の様子。

第六節 八四頁末行―終 狩人たちがやえん場を襲ふ慎重な用意と、その狩獵の壯絶な情景。

3 文意

晩夏の一時歌を失つてゐた山が、秋になつて再び明るく美しく活氣づいて来る頃、そして木の實の熟れる頃野猿はやつ

【騷亂】サウラン 事變が起つて世の中が騒ぎ亂れること。騷亂。禍亂。

【展陣】テンカイ (一)のべひらくこと。のびひらくこと。(二)軍隊用語として密集部隊の散兵となること。こゝは(一)の意。

【戦捷】センセフ 勝ちいくさ。戦争に勝つこと。「捷」は戦にかつこと。「勝」は「負」に對し全般に通じて用ひられる。

【喚聲】クワンセイ さげび聲。

【骸】カバネ・ムクロ 骨「ガイ」

【凱歌】 戦に勝つて歸る時に歌ふ歌。凱旋の歌。

【紫紺】 シヨン 紫色を帯びた紺色。

【煙る】 ケブル (一)煙がたつ。(二)かすんで見える。(三)美しくほやかに見える。こゝは(二)の意。

【紫紺に煙る秋風】 紫紺の夕靄につままれた山を渡つて、秋のさわやかな風が吹きわたる情景である。勿論紫紺に煙るものは山肌であり、叢林であるが、併し作者は爽涼な秋風にその色を感じてゐる。言葉の論理を超越したこの直觀的表現は既にこれ詩の世界である。

【韻】 ヒビキ 特に「韻」の字を用ひてゐる所に注意させたい。これは單なる風の「響」ではなく、作者は秋風を音楽と聞きなしてゐる。風の中に音楽的韻律を感じてゐる。平和な山郷が一瞬にして化する血なまぐさい修羅場を描くに「獵犬の叫」「一騎打をするもの」「山と積まれた親猿仔猿」「戦捷の喚聲」の如き名詞止の雄勁な調子を以てして、そこに息もつがせぬ切迫した氣分を盛上げてゐるのであるが、それが「かくて―」から急轉して、極めて豊かな情感を湛へた抒情的な調子に變り、波めどもつきぬ山郷の詩趣を高揚して文を結んでゐる。騷亂の情景と、その後ひびきわたる凱歌の聲が何時までも長い餘韻の尾を引いて、讀者の感銘の中に残るといふ風な、詩情豊かな結尾である。

て来る。そして谿々に豐樂な宴席をひろげ、谿流に下りては寄干をして原始の享樂に遊び呆ける。併し山の狩人はやがてこのやえん場を見つけてこれを襲撃し、平和な山郷が一大修羅場に化し去るのである。

4 鑑賞批評

谿から谿に秋の山の豐樂な宴席をひろげ、溪流に下つて寄干に打興しては歡樂の叫をあげる。原始さながらなる野猿の奇異な生活と、山の狩人たちがこれを襲つて打とめる壯絶な情景と、この山の驚異に對する盡きざる興味が作意の中心の主題であることは勿論ではあるが、同時にこれが背景をなす自然の情趣に對しても作者はこれに劣らぬ靈感をそそられて居るのではなからうか。野猿の訪れを待つ山の景觀の描寫に表れた容易ならぬ作者の苦心はそれを示すものである。明るく晴々と輝く奥地の叢林が渡り鳥に賑ふ時、そこに自然の音楽をきき、季節と共に静もり輝く樹林に金茶色の宮殿を思ひ描く作者は、また豐饒な山の幸の木の實に讚歎の思をよせてゐる。この部分だけを切離してすら、十分に獨立した自然の讚歌であり、明るくも華やかな山郷賦とも言ふべきものを構成してゐる。山の自然に牽かれる作者の強い興味がその底に流れてゐるからであらう。

この自然を背景に展開される野猿の生活は、これこそ全く此の世ならぬ別天地の景物であり、太古の歡喜と自由と平和との姿を眼のあたり見る思ひがある。更に山の狩人がこれを狩する壯絶な光景に至つては、吾・人共に驚異の眼を眩らざるを得ない。平和に始まり騒亂に終る一篇は、かのスコットの敘事詩を思はせる詩情を湛へ、殊に狩人が凱歌をあげて引上げて行く結尾の如き、人と山との美しい交響樂で、嫺々たるその餘韻は谿を渡り山を越えて何時までもたえぬものの如くである。元々この作者は文學を専門としてゐないだけに、反つて些細な文法的法則等に拘束される事がなく、その筆は自由に伸び伸びとして、それが此の特異な素材とびつたりと渾融し、極めて效果的に働いてゐるのではあるが、全體にこの美しい詩趣を湛へたものは、作者の胸奥に潜む詩魂もさる事ながら、山の住人として人寰を遠ざかつた山小屋の生活に

甘んじ、心から山の生活を樂しむ作者の、山に對する底深い親愛の情が基調をなしてゐる事に歸せらるべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 素材が新奇な點はかなり生徒の興味をひくであらうと思はれる。併し素材への興味は屢々素材的低調さに止まる恐が多分にあるのであつて、本課取扱に於てもこの點相當戒心してかゝるべきであらう。

(二) それ相當の背景があつてその事件は生彩生動を帯びて来る。殊に本課の如き奇異な事實には、その背景は極めて重要な位置に立つのみならず、既述の如くこの背景として描かれた山の景觀は、その部分だけで美しい山の讚歌でさへあり得るのであるから、この部分の取扱には相當な力が傾けらるべきであらう。清新な感情、自由な表現、更に周到な觀察など多面的な検討から、深くその基底をなす山に注がれた作者の純粹な親愛の情にまで掘り下げて行くといふ風な取扱が要求せられる所である。

(三) やえん場の雰圍氣や狩の情景を眼のあたり如實に表現し得てゐるのは、勿論體驗實感を土臺にした強みもあるのはあるが、突きつめれば前記山に對する讚美の情がすべてを裏づけてゐる根據である。單なる素材的興味に終らしめず、これを止揚して、この山獨特の情趣を十分味到せしめると共に、更にそこに醸されてゐる詩情のよつて来る所を検討して深く根柢に流れる作者の心情にふれしめたい。

2 参 考

(一) 挿繪 群猿(森狙仙筆)

國華第四十六號から轉載した。伊達伯珍藏のものである。次に「國華」からその説明を抄録する。

「深山老木烟霧瀟浮の間に在て、群猴攀援飛走優遊自適す。一老猴王巖上に踞踞し、衆猴奴之に朝宗するが如く、太平鼓腹の乾坤は實に人間に在らずして、山遂谷幽の中に在らんか。三峽の哀鳴遠客の腸を斷つべしと雖も、蕙帳の幽伴は移文の德璋を歎ぜしむ。狙仙の猴を畫く、抑も托して以て逃るる所以なるか。此の圖の如きは其の筆墨の妙獨り猴のみならず、山泉樹石の描法、濃淡の趣、大に味ふべきものあり。

狙仙嘗て瓊浦に在るや、一猴を畜養し寫生眞に逼る。之を人に示せば是れ山中自在の趣に非ずと。是に於て遂に山中に入り研精すること二三年なりしと」

「狙仙」名は守象、字は叔牙、初め祖仙、また靈明庵・如寒齋とも號した。肥前長崎の人、のち大阪に住した。最も猿を得意とし、ついで鹿を能くした。文政四年歿。年七十三。

(二)原著「山の隣人」から「えんこの群」と題する一文を次に採録する。補材として課しても興味深いものがある。

一口に日本猿といつても、本土の猿と四國或は九州のそれとは、習性から姿態に至るまで、細かく觀察してゆくとそこにはいろいろな相違を見出す。叫び聲などもそれぞれ特色のある表現を持つてゐて簡単に観てごす事が出来ない。ここでは私の永年觀察をつゞけてゐる三河信濃境ひの野猿の事を少ししるして見よう。

三信國境千頭の御料林から赤崩峠、大倉山の山稜ぎは、野猿のことを「えんこ」と呼ぶ。伊那側の本曾山でも亦えんこといつてゐるが、ここ三信國境の山林中には三十四のえんこの群は珍しくない。山人は人さし指と親指とで輪をつくり、その輪からのぞいて一杯位の見當なる群を一かけ百匹といつてゐるが、雪どけ頃、雨の來る前の夕宵などは二かけ三かけのえんこの群が里近くの林に降りてくる。彼等は岩鹿と同じく寄り場があつて、冬季は山尾根南面の七八合目の陽當りのいゝ灌木の生ひ繁り、溪に通ずる岩柳いはなに寄り場をため、夏季は北の斜面に移りゆく。

そゝり立つ岩壁のわれ目の欄に群なす彼等は、東の空のほの赤く明けゆくを待つて溪に降り顔を清めてわれ先にと忙しく脱糞をす

る。その場所も必ずめいめい決つてゐて他所へはしないのが原則である。脱糞を了へるやじゆずつなぎに岩を匍ひ峠を渡つて紅染まる未明の山野を馳せめぐる。里人が苗代かく峠に立つ頃は、ひと通り餌を漁り、またじゆずつなぎになつて岩欄の寄り場に歸つてゆく。晝日中は靜かに穩かな樹蔭や岩のわれ目などに休らひ身づくろひするなど、彼等相當のたしなみにふけるのである。

手傷を負つたものをお互に見つてやる。時には傷の癒えかけてかさぶたになつた所を寄つてたかつて剥ぎとるので傷口が却つて大きくなるなど、彼等朋輩に抱く關心はなかなか篤い。群れなす彼等が、獵人にねらはれ運拙く朋輩が斃されると、彼等は斃れた友の死體に落葉をかけて埋めてゆく。山のしづまつたところで、先に斃れた友を皆でかつぎ、寄り場に運んで看護するなどその心遣りには心情的あふるるものがある。彈丸に傷つた朋輩を看護する彼等は、その彈痕に木の葉または苔などはつて治療の眞似をする爲に、却つて彈口の傷口を痛めるやうなことになる。

獵人の山に落したる手拭を首に巻いてゐるのをみつければ、却つてねらひまとなつて斃されたえんこの傷ましき。

餘程原始性に富む深い山のえんこでも何時の間にか里人のならはしを覚えゆく。彼等の巧智には鋭さはないが驚歎に値するものがある。口笛を眞似るえんこに獵犬が迷はされて闘志をくぢかれるなどは他地方ではないことであるが、この國境のえんこにはすぐれた口笛の名手がゐる。(下略)

(三)深田久彌の原著「山の隣人」の序文を次に採録する。本課鑑賞の上に参考となるであらう。

長尾君に逢ふ毎にいつもこの人こそ眞に軀にも魂にも山の氣の沁みこんだ人だと思ふ。誰もみない山のまん中ではどんなだらう。敏感で輕捷でつかれを知らなくて毛物の匂さへしさうだ。けれども火をかこんで遅くまで話を更かす時の君はつゝましく繊細な感情を持つた近代人だ。無口な君がポツリポツリたぐり出すやうにする話を僕は幾度かきいた。おやそんなこともあつたのかと、おどろくほど君の經驗は廣く知識は豊かだつた。凝り性で謙遜な君はこれだけしか文章にしてゐないけれど、君の知つてゐる話をみんな本にし

たら幾冊あつて足りることだらう。

のやうな精到敏感な觀察が出来るのだ。そしてその根氣のいゝ追究心も倦くことを知らぬ歩き廻りも偏へに山の隣人たちに對して君のやうな優しい愛情を持てばこそ出来ることなのだ。

補材

初時雨猿も小蓑をほしげなり

芭蕉七部集の中「猿蓑」の巻頭に出て居る句で、集の名「猿蓑」は此の句によつたものであるといふ。其角の序に「我翁行脚の頃伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて俳諧の神を入れ給ひければ云々」とあり、芭蕉が奥の細道の旅を終へて後、郷里伊賀へ歸る途次、伊賀越山中で詠んだものだといはれてゐる。

【初時雨】 ハツシグレ 其の年に初めて降る時雨。

【時雨】 は秋冬の交に陰晴定めなく、時々降る雨。

【小蓑】 コミノ 小さな蓑。「蓑」は茅・菅・藁などで編んだ雨具。

「小蓑」と「小」をつけたのは猿の身に合ふやうな小さな

句意は、猿が木の上で小さくなつて慄へてゐる。その猿の寒さうな恹しさを對して、猿も蓑を欲しさうにしてゐるといつたのである。初めての時雨は特に身に堪へる厳しい寒さを感じさせる。行脚に疲れた身を此の雨に濡れそぼつ芭蕉の寒々しく恹しげな心が「初時雨」の起句に滲み出てゐる。此の時此の雨にびしょぬれた猿を見つけた芭蕉は、その猿のあはれな姿に自分自身の映像を感じてゐるのではなからうか。猿に限りない同情を寄せてゐるといふより、寧ろ自分の感じてゐる恹しさを猿に投入してゐる。その境地から「小蓑をほしげなり」と自ら口をついて出た。「ほしげなり」は實に自他あつて自他なき境地を示す結句である。同じく「猿」を素材とし、これに深い親愛の心を寄せてゐる點、本課補材として興味深いものである。

な蓑の意たることは勿論、感情の濃やかさが此の「小」をよびだし、句に細みを與へてゐると評されてゐる。それは別としてもすぐ「小蓑」と口をついて出た所から推して、山越する芭蕉が自ら蓑をつけてゐた事は想像されるであらう。

【作者 芭蕉】 バセヲ(バセウ) 江戸時代の俳人。蕉風俳諧の始祖。姓は松尾、名は宗房、通稱忠左衛門。芭蕉の

他、桃青・風羅坊等の俳號がある。正保元年(二三〇四)伊賀國(三重縣)に生まれた。初め伊賀上野城代藤堂良精に仕へ、その子良忠の近侍であつた。二十三歳の時良忠の早世に遇ひ、感ずる所があつて間もなく主家を脱出した。暫く京都に住んだらしいが、二十九歳の時江戸に下り、漂泊の後三十七歳杉風の別墅に入り、庭内に芭蕉を植ゑて楽しんだ。世にこれを芭蕉庵と呼ぶ。在來滑稽諧謔の遊戯的世界に安住してゐた俳諧に慄らず、その革

新に任じ、西行・宗祇・李杜の風を汲み、蕉風俳諧の基を開いてその藝術的地位を確立したのは芭蕉の四十一歳の頃であつた。その後前後四回にわたり旅行を試み、最後の旅に於て元祿七年大阪御堂筋花屋で長逝した。

彼は豊かな詩人的素質を有すると共に、極めて恬淡高潔な人格者で、十哲以下門下數千全國に普く、後代の文學に影響する所が大きかつた。句集としては「俳諧七部集」が代表的なものであり、紀行は「野晒紀行」「笈の小文」「奥の細道」など何れも傑作とせられてゐる。

二三 落葉

島崎藤村

一 解題

1 作者

島崎藤村 シマザキトウソン 名は春樹。明治詩壇に於ける抒情詩の建設者として不朽の光輝を放つ詩人であり、又明治末期の自然主義小説の先蹤者であり今日に至るまで小説の重鎮である。明治五年二月長野縣西筑摩郡神坂村馬籠に生まれた。父は平田篤胤の息の鐵胤に師事した國學研究者である。十三年上京、三田英學校、神田共立學校を経て、二十四年明治學院を卒業した。卒業後明治女學校に教鞭をとり、二十七年北村透谷等の雜誌「文學界」の創刊に參畫し文學生活に入つた。二十九年東北學院の教授となり、此の頃から新體詩人として土井晚翠・薄田泣菫等と相並んで詩壇に頭角を現した。仙臺に在ること約一年、翌年東京に歸り、三十二年長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、約七年間を此處に送つた。この間まづ三十年處女詩集「若菜集」を上梓し、以來次々に「一葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行し、その清新な聲調と優婉な姿態とを以て若々しい情感をうたひ、明治浪漫主義の輝ける記念塔たらしめた。三十五年頃から詩作を捨てて小説創作に轉換、轉換後第一回の作品「舊主人」は發賣禁止を命ぜられたが、ついで「水彩畫家」を書いて小説家としてデビューし、三十九年、一年有半の苦心になつた「破戒」を携へて上京、これを上梓して自然主義運動の先蹤をなし、小説家として本格的に立つに至つた。當時の自然主義の頭目田山花袋が、外國文學よりこれを採上げて提唱したのに對して、藤村は自己の自然發展の過程によつて浪漫的傾向から現實的傾向への明治文學史上の時代的發展に相應じたものであつた。大正二年

フランスに遊び、彼地に於て歐洲大戰に遭遇した。五年歸朝、歸朝後作風一轉して新現實主義的傾向を帯びた「新生」を發表した。以來不斷に創作に精進し、最近長篇小説「夜明け前」の大作を完成して、氏の文學的生命は未だに健全である。著書は詩集には「若菜集」以下「一葉舟」「夏草」「落梅集」ならびにこれ等全部を合せた「藤村詩集」があり、小説には「破戒」「春」「家」「櫻の實の熟する時」等を第一期作品とし、歸朝後「新生」「ある女の生涯」「仲び仕度」等をはじめ、最近には「嵐」「分配」「夜明け前」等の力篇がある。隨筆集には「千曲川のスケッチ」「佛蘭西だより」「飯倉だより」「春を待ちつつ」等があり、童話集には「幼きものへ」「ふるさと」をさなものがたり」等がある。藤村全集十二巻はこれ等作品の大部分を收載し、またこの他藤村讀本六巻も刊行されてゐる。

2 出典

「千曲川のスケッチ」から採つた。

「千曲川のスケッチ」は藤村が明治三十二年小諸義塾に赴任して後、三十四年から三十八年まで、即ち此の地を去つて上京するまでの五年間になつた小品を、大正元年集めて公刊したもので、落梅集と破戒との中間に位し、詩作から創作への轉換期に於ける習作的意義を持つてゐる。

本課の文はその七の中「落葉の一」「落葉の二」「落葉の三」の全文である。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課が華麗神秘な山の風物誌であるのに對し、これは嚴烈な冬の脅威に怯え慄ふ荒涼たる山の自然描寫である。且前者が山を楽しむ全く自由な立場に立つてゐるのに對し、これは科學的研究的ともいふべき眞剣な態度を以つて自然に立向つてゐる。同じく山の文學であるがそこに自ら異なる個性の反映が示されてゐる。

詩人藤村の眞摯な觀察の眼はよく山の自然の特異な真相を把へてゐる事は勿論、深く内へ内へと沈潜し、その詩魂を透

して滲み出た簡素な表現は全體に豊かな詩趣を湛へてゐる。誠にこれは山の哀歌とも稱すべきであらう。これが鑑賞味によつて、觀察の誠實さを學び、人間的教養に資すべきである。

二 解 釋

1 語 釋

【落葉】 オチバ「ラクエフ」と音讀してもよい。(一)木の葉が莖を離脱して地に落ちること。(二)地に落ち散つてゐる木の葉。本課では何れの意味にも用ひられてゐる。
【初霜】 ハツシモ その年になつて初めての霜。陰曆十月を初霜月といふ。

【雜木林】 ザフキバヤシ 雜木の林。(二)明治神宮・一七頁末行既出)

【平坦】 ヘイタン 土地の平かなこと。

「坦」も寛く平かな意。

【耕地】 カウチ 耕作地。耕作し得る土地。

【武藏野】 ムサシノ その範圍については古來定説がなく最も廣義には關東平野全部をさし、やゝ縮少して武藏國平坦部の全域をさす場合もある。併し一般には北は荒川及び其の支流入間川、南は多摩丘陵、東は隅田川、西は關東山地の東南の一部に圍まれた地域、即ち現在の川越市以南、東京府北多摩郡府中町に亘る所謂武藏野臺地を

言つてゐる。この地域は地形上(一)關東山地の南を占める山嶽地帯、(二)その邊緣に發達した丘陵地帯、(三)丘陵地帯の東に連なる臺地地帯、(四)多摩川の本流により臺地の南・西に形成された段丘地帯、(五)多摩川の自由曲流により段丘下に沖積した氾濫地帯の五つに區分される。

本課の武藏野は最も廣義の關東平野一帯を指してゐる。

【淺々とした】 アサアサとした 非常に淺い。非常に薄い。

「淺」は(一)深度が淺い。(二)色が薄い。霜には「淺

」と「深い」と「濃い・薄い」と何れの形容をもする。

【君に】 作者が「千曲川のスケッチ」を呈した吉村樹氏を指す。氏は作者が東京遊學時代寄寓してゐた恩人吉村忠道氏の子息である。「千曲川のスケッチ」のはしがきに、「敬愛する吉村さん―樹さん―(中略) 私は序のかはりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、斯の書の全部を君に宛てて書いた。云々。」とある。

【此の山の上】 「長野縣北佐久郡小諸町」をさす。

「小諸町」(コモロマチ)徳川時代牧野氏(一萬五千石)の城下町で、淺間山の西南麓の傾斜地にあり、千曲川の岸に臨んでゐる。現在信越線の要驛で、農産物・生糸等の取引が盛に行はれ、佐久地方の交通上の中心である。又淺間山の登口に當り、夏期は登山客で賑はふ。町の西南隅にある小諸城跡は武田氏時代、鍋蓋城・穴城などと稱し、要害堅固を以て知られ、後牧野氏の居城となり、今は懷古園と呼ばれる公園となつてゐる。

作者はいつも此の町を「山」の上等と呼んで居り、「千曲川のスケッチ」の三「山莊」にも「一體、此の小諸の町には平地といふものが無い」といつて居るやうに、附近一帯は淺間山の裾野の傾斜地で、全體に山といふ感じのする土地である。

【桑】 クハ 桑科の落葉喬木。高さ八米以上に及ぶものもあるが、年々養蠶の爲に切りとられるので長大なものは稀である。樹皮は淡褐色、葉は尖頂卵形で鋸齒を有し、又種々に分列するものがある。春葉と共に淡黄綠色穂状の花を開く。單性、雌雄異株で稀に同株のものがある。葎に似た小さい實を結び、熟すれば紫黒色となり美味である。材は諸種の用材となり、樹皮の纖維は製紙の原料となり、葉は養蠶用となり、果實は食用釀酒用に供せられる。

【縮み上つて】 すつかり縮んでしまふこと。これは比喻ではない。霜にあふと桑の葉は焼け焦げたやうに黒く縮んでしまふ。

【爛れる】 タダれる 皮肉がやぶれくづれる。くさりやぶれる。腐敗する。腐爛する。

こゝは土が霜柱のために生活力を失つてゆるみ崩れるさまをいふ。

【猛烈】 マウレッツ 猛く烈しいこと。甚だ烈しいこと。

【冬の威力】 フユのキリヨク 冬の持つ恐ろしい力。

「威力」は人を威服せしめる力。畏怖すべき力。
【桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうになり、畠の土はぼろぼろに爛れてしまふ】

「縮み上つて」「焼け焦げたやうに」「爛れて」等のこの激しい言葉によつて示された具體的事例によつて「まことに見ても恐ろしい」と言ふ作者の言葉が實感をもつて迫り「猛烈な冬の威力を示すものはあの霜だ」といふ斷定が無條件に肯定されるのである。

【まだしも】 まだそれでも。よくはないが何れかといへば。

【深い秋雨】 フカイアキサメ しつとりと物靜かな秋雨。秋九・十月頃肅條として降る細雨。もの靜かに、萬物を落ちつかせるやうに降る秋雨を「深い」と形容する。

【柿】 カキ 柿樹科の落葉喬木。高さ約十米に達する。葉

は革質全縁の楕圓形又は卵形、有柄で互生する。雌雄同株で六月頃帯黄白色の花を開き、大形の漿果を結ぶ。果實は食用とし、澁汁を取り、また乾柿とする。材は器具建築用とする。

【深い秋雨のために色づいた柿の葉が、面白いやうに地へ落ちるのを見た】

色づいた葉が誘ふ風もないのにはらはらと落ちる。不思議な自然の姿である。淡々たる筆で敘してゐながら、實は作者は驚異の眼を睜つてゐる。「面白いやうに」はその驚であり、「見た」は單なる過去の敘述ではなくその中に感動がこもつてゐる。「私はそこに立つて茫然と眺めてゐた位だ。」(同頁六行)はこれを物語つてゐる。

【霜のゆるむ頃】 霜がとけはじめる頃。寒氣がゆるんで霜のとけかゝる頃。

【肉の厚い柿の葉は、霜のために焼け損はれたり、縮れたりはしないが、朝日があたつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる】

柿の葉の特長を實によく寫してゐる。作者の觀察的確さを窺ひ知るに足るものがある。

【茫然】 バウゼン (一)廣く遠いさま。(二)ぼんやりとしてとりとめのないこと。(三)氣ぬけがしてぼんやりしたさま。こゝは(三)の意。

【天長節】 テンチャウセツ 今上天皇の御降誕の祝日。當日、宮中三殿の御親拜があり、又宮中では拜賀・參賀・宴會の御儀が行はせられる。「天長」は「老子」の「天長地久」の字面より採り、天地と共に聖壽の限りないことを壽ぎ奉る意である。皇后陛下御降誕の祝日を地久節といふのもこの意味である。支那では唐の天寶八年に天長節の名稱が始まり、我が國では光仁天皇の寶龜六年九月十一日の詔勅に始めてこの名稱が見えてゐる。

【霜が来てゐて】 霜が降つてゐて。「霜」には「降る」「置く」「來る」などいふ。

【天長節の朝、起き出して見ると、一面に霜が来てゐて、桑島も野菜島も家々の屋根もみな白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れるばかりであつた。すこしも風は無い。それでゐて一葉二葉づつ靜かに地へ落ちる】

作者の觀照の深さを示す落ちついた描寫である。一面に白い霜、道も埋れる柿の落葉、風もなくその上に落ち散る一葉二葉、すべて初冬の景趣をありありと思ひ浮かばしめる。

【勝手もと】 カツテもと (一)台所の方。(二)勝手むき。「勝手」は(一)台所。くりや。(二)くらしむき。生計。活計。こゝは(一)の意。

頭上におほふ。頭上にかぶる。こゝは(一)の意で、「焚火に手をかさす」は焚火の上に手をさしおほうてあたためること。

【しみて】 「凍みて」と書く。(一)こぼつて。(二)こゝえて。かじかんで。こゝは(二)の意。

【空はどんよりとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手もとの焚火に凍えた兩手をかさしたくなつた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも恐しい冬の近よつて來ることを感じた】

小説への轉換期の習作的意圖のよく窺へる所である。全篇を殆ど日記風に、日を追うて自然の變化を描いてゐる所が既にそれを示してゐるのであるが、こゝに來ると、作者の眼は空模様はまだ注意深く注がれ、而も季節の變化を人事に結びつけるなど、將來小説を書く爲の周到な準備を示してゐるのである。

【冬籠】 フユゴモリ 冬季、家・巢・土中等にこもつて外に出ないこと。冬中家の中にこもつてゐること。

【木枯】 コガラシ 「風」とも書く。秋季から初冬にかけて吹く風。「木を吹き枯らす」意だといふ。

【中旬】 チュウジュン 一箇月の中の十日。即ち月の十一日から二十日までの十日間。

「旬」は(一)十日、十日間。一箇月を十日づつに三分し、

月の一日から十日までを上旬。十一日から二十日まで中旬、二十一日から月末までを下旬といふのはこの意味である。(二)轉じて十年を一期として年齢を示す語。こゝは(一)の意。

【潮】 ウシホ (一)海水が日月、殊に月の引力によつて、時を定めて高くなり低くなること。高漲するを「上潮」(又は差潮・満潮)といひ、低落するを「下潮」(又は引潮・落潮)といふ。(二)海水。こゝは(一)の意。

【ある朝、私は潮の押しよせて來るやうな音に驚かされて目が覺めた。空を通る風の音だ。時々それが靜まつたかと思ふと、急にまた吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る】

遠退いたと思ふとまた急にごうつと吹きつけて來る木枯の音、それはまことに海に荒れくるふ怒濤の音である。

「潮の押しよせて來るやうな」とは寒い甲信越地方の高原を吹きまくる木枯の特性をよく把へてゐる。「戸も鳴れば障子も鳴る」はその木枯の烈しさである。一言よく風の凄じさを表してゐる。

【千曲川】 チクマガハ 「千阿川」とも書く。犀川と共に信濃川の二大支流の一。長野縣南佐久郡甲武信嶽の溪谷に發源し、佐久平の水を集めて北流し、上田盆地を経て善光寺平に入り、犀川と合流して信濃川となる。佐久・上田・善光寺の三盆地及びこれに連なる溪谷地帯の灌溉・